

# 鶴翔会

令和4年4月1日発行 2022年 132号

岡山医学同窓会報



岡山大学医学部創立150周年記念号





<b>岡山大学医学部創立150周年記念式典</b>	<b>1</b>
岡山大学医学部創立150周年記念事業プログラム	
式辞 豊岡伸一	
挨拶 榎野博史	
祝辞 伊原木隆太氏	
祝辞 大森雅夫氏	
祝辞 増子 宏氏	
祝辞 伊原和人氏	
祝辞 福武總一郎氏	
高額寄付者への名譽団体表彰状贈呈 代表者 謝辞 越宗孝昌氏	
医学部・研究科の歩み 伊達 勲	
岡山大学病院の歩み 前田嘉信	
閉会の辞 吉野 正	
記念講演 濱田博司氏	
<b>山陽新聞 岡山大学医学部創立150周年 特集号</b>	<b>21</b>
<b>寄稿 岡山大学医学部創立150周年に添えて</b>	<b>26</b>
岡山大学医学部創立100周年、140周年、150周年記念式典に参加できた幸福に感謝 松尾信彦	
「150周年記念誌」に寄せて 今井正信	
鶴翔会西播支部（兵庫県）の歩み 瀧谷泰博	
医学部150周年を祝って 野一色泰晴	
150年の歴史の中の一滴の足跡 浅利正二	
「メディカルテクノおかやま」とメディカルテクノバレー構想—16年間の歩みを振り返って— 公文裕巳	
鶴翔会東海支部の35年 井上喜久男	
岡山大学医学部と広島市民病院の歩み 塩崎滋弘	
「地域を守る、組織を守る」さまざまな視点 則安俊昭	
岡山大学医学部150周年に寄せて 谷原真一	
<b>ご挨拶</b>	<b>46</b>
吉野 正教授 ご退任	
岡田裕之教授 ご退任	
山田了士教授 ご退任	
土井原博義教授 ご退任	
岡山大学学術研究院医歯薬学域 薬理学分野教授に細野祥之氏 ご就任	
岡山大学大学院医歯薬学総合研究科周産期医療学講座教授に長尾昌二氏 ご就任	
岡山大学学術研究院保健学域教授に生口俊浩氏 ご就任	
岡山大学学術研究院ヘルスシステム統合科学学域教授に渡邊豊彦氏 ご就任	
自治医科大学医学部小児科教授に嶋田 明氏 ご就任	
島根大学医学部皮膚科学講座教授に山崎修氏 ご就任	
<b>謹 弔</b>	<b>55</b>
白神史雄先生を偲んで 森實祐基	
<b>会員動向</b>	<b>56</b>
人の動き（受賞者、人事異動、役員異動など）	
学位授与	
会員訃報	
<b>クラブ報告</b>	<b>60</b>
鹿田写真部 福田 恵	
医学部男子バスケットボール部 上田悠都	

<b>支部だより</b>	<b>62</b>
令和3年度 鶴翔会 山口県支部総会 青 雅一 東京支部だより 三宅健介	
<b>関連病院だより</b>	<b>64</b>
岡山大学病院で「Club150」始動 前田嘉信	
<b>学生だより</b>	<b>66</b>
解剖実習を終えて 穴見知也 系統解剖実習感想文 末次駿門 解剖実習を終えて 本多真子	
<b>歴史の広場</b>	<b>68</b>
医師養成の歴史と岡山大学医学部—その8 棕野 洋 医学部正門通りの再生フェニックス 小林敏成 ヒポクラテスの木の植樹とフェニックスの植え替え 大学院医歯薬学総合研究科等総務課	
<b>随 想</b>	<b>92</b>
「山本昌知の臨床作法」を読んで 難波正義 岡山大学医学部 1959-1969年 池田重政 合点のいかぬあれこれ 坪井修平 目医者をつぶやき「小児診療」 松尾俊彦	
<b>新聞より</b>	<b>105</b>
岡山大学医学部・岡山大学病院並びに鶴翔会会員に係る新聞記事など（2021.9.1～2022.1.31）	
<b>教室だより</b>	<b>109</b>
海外への留学生一覧	
<b>岡山より</b>	<b>136</b>
ルネッサンス基金募金活動の終了について（お礼とご報告） ご寄付いただきました 令和4年度 岡山医学会・鶴翔会・岡山大学関連病院長会合同総会について 会費納入について（お知らせ） 令和3年度卒年次別会費納入状況 令和3年度 Student Doctor 認定式 令和3年度 岡山大学医学部医学科 学位記授与式 第116回 医師国家試験の結果 事務局からのお知らせ 鶴翔会事務局移転のお知らせ （公財）岡山医学振興会より「つなぐもの」 山田雅夫 岡山大学病院医科系診療科別役付職員一覧 鶴翔会会報 投稿内規	
<b>編集後記</b>	<b>147</b>

今号の格言・名言（選者：読み人知らず）

*A new type of thinking is essential if mankind is to survive and move toward higher levels.*

*Albert Einstein*



## 岡山大学医学部創立150周年記念事業プログラム

と き 令和3年11月3日(水・祝日)  
ところ ホテルグランヴィア岡山 4階「フェニックス」

### 記念式典 13:30~15:00

岡山大学医学部創立150周年に当たり、これまで本学部の発展にご尽力いただいたご来賓の方々、卒業生、大学関係者及び教職員による記念の式典を行います。

- 一 開会の辞
- 一 医学部長式辞 岡山大学医学部長 豊岡 伸一
- 一 学長挨拶 岡山大学長 榎野 博史
- 一 来賓祝辞
  - 岡山県知事 伊原木隆太
  - 岡山市長 大森 雅夫
  - 文部科学省高等教育局長 増子 宏(メッセージ)
  - 厚生労働省医政局長 伊原 和人(メッセージ)
- 一 高額寄付者への名誉団体表彰状贈呈
- 一 医学部・研究科の歩み 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科長 伊達 勲
- 一 岡山大学病院の歩み 岡山大学病院長 前田 嘉信
- 一 閉会の辞

### 記念講演 15:20~16:00

演題：基礎研究に身をおいた一人の卒業生として

講師：理化学研究所 生命機能学研究センター チームリーダー  
濱田 博司 先生(昭和50年卒)

概要：岡山大学医学部をご卒業後、米国・国立衛生研究所(NIH)、ニューファンドランドメモリアル大学、東京大学、大阪大学を歴任され、現在も理化学研究所で、体の左右非対称性が生じる仕組みの研究に取り組まれている濱田先生に、一人の基礎研究者としての歩みと母校への思いについてご講演をいただきます。



岡山大学医学部創立150周年記念事業実行委員会

## 岡山大学医学部創立150周年記念式典 式 辞

岡山大学医学部長  
豊 岡 伸 一



本日ここに岡山県知事伊原木様、岡山市長大森様をはじめ、経済団体、岡山大学本部から多数のご来賓のご臨席を賜り、岡山大学医学部創立150周年記念式典を開催することになりました。医学部を代表いたしまして心より御礼申し上げます。

鶴翔会会員、地元企業、関連病院をはじめ多くの方々に支えていただき、岡山大学医学部は昨年の令和2年に創立150周年の節目を迎えました。本来であればこの式典はこの節目に執り行われる予定でしたが、新型コロナウイルスの影響で残念ながら延期となりました。いまだコロナ禍の影響が残っている中ではございますが、このたび本式典を開催することができ、その喜びを皆様と分かち合う機会を得られましたことは、私どもにとって大変喜ばしいことであり、深く感謝申し上げます次第です。

岡山大学医学部では、創立150周年に向けた10年間をルネッサンス期間と位置づけ、記念事業を実施してまいりました。本日の記念式典と講演会がその大きな区切りとなります。ここで、吉野元医学部長が実行委員長として主導され、多くの方に支えられて実施してきた150周年記念事業を、甚だ簡単で恐縮ではございますが、紹介させていただきます。

本事業は、ソフト面では人材育成、教育事業、その内容として、学内における医学生や研修医の育成、若手研究者の国際交流を支援し、学外に向けては医学部教員による市民公開講座などの医療フェアの実施、中学校や高等学校での授業や交流を推進してまいりました。さらに、ハード面では、昭和7年に建築された旧生化学棟の整備改修、そして岡山大学医学部、病院に関わる全ての方々のアメニティーの向上のため、また岡山大学病院で医療を提供している患者、ご家族の皆様へのさらなるサービスの向上のための病院におけるFloor150の開設など、地域に開かれた岡山大学医学部としてふさわしいキャンパスの整備を行いました。これらの活動は、有志の方々や企業様からご支援いた

いた150周年記念事業ルネッサンス基金により支えられております。改めましてここに厚く御礼申し上げます。

さて、歴史をひもときますと、岡山大学医学部は明治3年に岡山藩が設立した岡山藩医学館を起源としています。その後も岡山の地で医学を学ぶ生徒の学び舎として、明治13年に岡山県医学校、明治21年に第三高等中学校医学部、明治27年に第三高等学校医学部、明治34年に岡山医学専門学校、大正11年には岡山医科大学と校名を変えながら、明治、大正、昭和の医学教育研究を支え続けてきました。この活動の中には、第三高等中学校医学部が設置された翌年の明治22年に設立され、現在も活動を続けている岡山医学会も含まれ、同時に発刊が開始された岡山医学会雑誌によって医療の進歩と医学の向上、これらに資する知見を岡山の地から発信してまいりました。そして、第2次世界大戦後の昭和24年に新制岡山大学の医学部として新たに出発し、今日に至っています。

振り返れば150年の長い歩みの中で、岡山における医学の学び舎は1万2,000名以上の医師、研究者を含む多くの医療人を輩出してまいりました。さらに、国内では中国、四国地方を中心に、近畿西部地域にわたる幅広いホスピタルパートナーシップを構築して地域に貢献し、同時に国際社会においても活躍する医療人、研究者の育成に力を入れてまいりました。

中でも日本で初めて孤児院を設立された石井十次先生、脳神経学の権威として後の昭和天皇にご進講された上坂熊勝先生、難治性の感染症であった梅毒の特効薬サルバルサンの発見者として有名な秦佐八郎先生、日本住血吸虫を発見し、帝国学士院賞を受賞された桂田富士郎先生、昭和に入り、岡山県知事として福祉の心や医療福祉の向上に尽力し、アジアのノーベル賞と言われるマグサイサイ賞を日本人で初めて受賞された三木行治先生、アカタラセミアの発見者で文化功労者の高原滋夫先生等々、多大な功績を上げられた先人のお名前は枚挙にいとまがありません。特に梅毒と日本住血吸虫症は当時恐れられていた感染症であり、くしくも感染症が現代の社会においても大きな問題となることを再認識した私たちにとって、この分野においても岡山大学医学部の多大な貢献があったことは大きな誇りであると同時に、今後に向けての励みにもなっています。

また、多くの卒業生の皆様が岡山大学医学部で学んだ医学、医療に基づき、約150年もの長い間、患者さんお一人お一人の病を癒やし、健康を支援してこられた実績も基盤となり、先進的医療を実施、創出する国

の重要な取組である臨床研究中核病院、橋渡し研究支援拠点等の事業に岡山大学病院と鹿田キャンパスは中国、四国地方の唯一拠点として選定され、今日も発展を続けています。

なお、平成25年に文部科学省との意見交換で整理された岡山大学医学部のミッションを一部抜粋いたしますと、社会から信頼される優れた医学研究者、医師の養成を積極的に推進し、地域社会と国際社会への貢献に邁進すると定義されています。これはまさに先人たちが築いてこられた歴史を一言で表したものだと言えます。

このような中で本年令和3年に岡山大学医学部は151年目の扉を開きました。医療の観点から見た現代の課題としては、思いつくだけでも少子化、人口減、地域医療の崩壊等、また新型コロナウイルス感染症の流行など多くが上げられますが、今後も形を変えて新たな課題が現れ続けるでしょう。これらの様々な社会的課題に対し、世界に伍する研究大学を目指す岡山大学の一員としての医学部、今まで以上の知と人材の集積拠点を形成して、医学の面から解決に導き、新しい価値を創造し、そして人類のための最大たる貢献に資する研究を展開していく覚悟が必要です。

また、これからの高等教育が目指すべき方向性として、国からも提言されているように、大学は教育と研究を一体不可分のものとして人材育成と研究活動を行う機関であるべきです。必然的に優れた研究業績を上げている大学には多くの人材が集まり、人材育成、研究がますます活性化され、大学の発展、地域、世界への持続的な貢献が可能になります。これらをしっかりと実践して達成することができれば、これから50年後、100年後においても岡山大学医学部は地域や世界から必要とされる大学であり続けることができると確信する次第です。

岡山大学医学部の歴史は、応援して下さった社会の皆様方と共に諸先輩方が積み重ねてきた歩みそのものです。これからの時代を担うべき私たちが今この瞬間の取組に全力を尽くし、次世代へと確実にバトンを渡す役割を果たさなければなりません。そのためにも、今日ここに未来に向けた高い志を皆様と共有するとともに、課題を乗り越え、地域、さらには世界の人々に心身の健康という最高の贈物を届ける次世代の育成に邁進する強い決意を表し、150周年記念式典の式辞といたします。

令和3年11月3日、岡山大学医学部長豊岡伸一。

本日は誠にありがとうございました。

## 岡山大学医学部創立150周年記念式典 挨拶

岡山大学 学長  
榎野博史



皆様にはご多忙中のところ、岡山大学医学部創立150周年記念式典にご臨席いただき、誠にありがとうございます。ご来賓の岡山県知事・伊原木様、岡山市長・大森様におかれましては、ご臨席を賜るだけでなく、ご祝辞を頂戴することとなっております、誠に

厚く御礼を申し上げます。

また、文部科学省高等教育局長・増子様並びに厚生労働省医政局長・伊原様からはご祝辞を、ベネッセホールディングスの名誉顧問福武様をはじめ経済界の皆様及び政界の先生方からもそれぞれに温かいメッセージを頂戴し、誠にありがとうございます。医学部150周年に向けた多大なご支援をいただきました医学部創立150周年記念事業後援会会長で山陽新聞社相談役の越宗様をはじめ、副会長の皆様方にも厚く御礼を申し上げます。

本日ご列席の医学部卒業生、そして医学部関係者の皆様にも心からお喜びを申し上げます。併せて、今この時もCOVID-19と勇敢に闘い、多くの方々の生命と安全を守り続けてくださっている岡山大学病院職員を含む全ての医療従事者の皆様方に心から敬意と感謝の意を表したいと思います。

それでは、創立150周年の記念式典に際し、一言ご挨拶を申し上げます。

ウィズ・コロナの経験から私たちがはっきり学んだことの一つとして、「繋がること」の重要性がありま



す。変異をし続け、第4波、第5波と次々に感染拡大を起こしてきた新型コロナウイルスに対し、「個人個人」という「点」で立ち向かうのではなく、私たちはしっかりと手を繋ぎ、声を掛け合い、時には「連携」という「線」で、また時には「協働」という「面」を形成しながら、緩むことなく闘い続けてまいりました。特に今回、市民・県民の生命を守るための諸活動においては、このしなやかなチームワークが、大変効果的かつ効率的に機能することができ、これはまさにこれまでの150年の歳月をかけて私たち先輩方が築いてくださった強い絆のおかげだと感謝しております。

さて、これからの50年を考えると、コロナをはじめとする新興感染症や気候変動・地震等に伴う大規模災害などが、これまでとは比べ物にならないほどの頻度や規模で発生する可能性が懸念されています。これからのヘルスケアを考える時には、人間だけの健康ではなく、人類を含む全ての共同生命体の根源である「地球の健康」、すなわち「プラネタリーヘルス」という観点から人の健康を考え、行動することが求められてくると思います。その意味で本日の創立記念式典は、これまでの150年間にわたって先輩方が築いてくださった強い絆に心から感謝申し上げるとともに、今度是我々が50年後、100年後の後輩たちに向けてどのような良い伝統や環境を残すことができるのか、真剣に考える重要な機会であると、私は考えています。

医療環境もまた激しく変動しつつあり、大学医学部や医療機関に求められる社会的要請も大きく変化をしています。150年間トップランナーとして常に地域の医療を質、量の両面から牽引してきた岡山大学医学部卒業生・関係者の皆様には、今後も時代や社会のニーズを踏まえた先進的な取組を通して地域・世界の方々の生命と健康を守り、地球全体のウェルビーイングの向上に貢献する役割が強く期待されています。そのためにも、先輩方から受け継いだ強い絆としなやかなネットワークを次の50年に向けてさらに発展・拡大させ、岡山大学医療系キャンパスの多様性、包括性、そして国際性を着実に高めていただけたらと思います。

本日の記念講演で講演いただく理化学研究所の濱田博司先生は私の医学部の同級生でありまして、大変ご講演を楽しみにいたしております。

最後に改めて、岡山大学医学部創立150年に際し、学長としてだけでなく、鹿田キャンパスで学んできた卒業生の一人として心から感謝を申し上げますとともに、岡山大学医学部並びに関連病院の益々の発展を祈念いたしまして、私のご挨拶とさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。

令和3年11月3日、岡山大学 学長 槇野 博史

## 岡山大学医学部創立150周年記念式典 祝 辞

岡山県知事

伊原木 隆 太氏



本日ここに岡山大学医学部創立150周年記念式典が盛大に開催されますことを心からお喜び申し上げます。

明治3年に岡山藩医学館として開設されて以来、長きにわたりあまたの優れた人材を世に送り出し、卒業生の皆様が国内外の医療現場の第一線

で病に苦しむ人々を救い、あるいは研究者として世界に先駆けた先端医学、保健学の研究に取り組むなど、医療の充実、発展に大きな貢献をしておられますことに深く敬意を表します。

150年の間には疾病構造はもとより、医療を取り巻く社会情勢や人々の価値観も大きく変化しましたが、その変化に柔軟に対応しつつ、時々の指導者や学生の方々が地域全体のウェルビーイングの追求という崇高な理念と高い目標を共有し、受け継いでこられたことが、様々な分野で大きな成果を上げ、高い評価を受ける岡山大学医学部の礎になっているものと拝察しております。

さて、岡山県にとりまして、今年が明治4年の設置から150年の節目の年に当たります。今はまさに新型コロナウイルス感染症の渦中にありますが、皆様方と力を合わせ、必ずやこの困難を乗り越えるとともに、先人が築いた岡山の財産を受け継ぎ、さらに発展させ





ることができるよう、各種施策を押し進めてまいりたいと考えております。中でも県民が住み慣れた場所で必要な保健医療サービスが受けられる環境を整えることは、すべての県民が明るい笑顔で暮らす生き生き岡山を実現する上で大変重要でございます。岡山大学医学部の皆様方には、従来から医師不足地域での医師確保に向けた地域枠制度の運用や地域医療人材育成講座の設置、女性医師の復職支援等において多大なご協力をいただき、岡山県の医療体制整備に大きな役割を果たしていただいているところでございます。この場をお借りして改めて感謝申し上げますとともに、今後も地域の健康で豊かな生活環境づくりに一層のお力添えをお願いいたします。

終わりに、岡山大学医学部が地域に根差した医療を提供する次世代の医療人の育成、輩出拠点として一層輝きを放ち、また医学、保健学の教育、研究における日本屈指の国際拠点としてますます発展されますことを祈念し、お祝いの言葉といたします。本日は誠にありがとうございます。

## 祝 辞

岡山市長  
大 森 雅 夫 氏



皆さんこんにちは。岡山市長の大森雅夫です。

岡山大学医学部創立150周年、誠にありがとうございます。

皆さん、岡山市、これは政令指定都市なんです、20市日本には政令指定都市があります。その中で幸福度ランキングというのがあるんです。どれだけ生活しやすいか、産業が充実しているか等々を表した指標なんです、岡山市は5位なんです。松本院長がうなずかれましたけれども、思ったよりやはり高いんじゃないかというように思いますが、これは幾つかの要素があるんですが、そのうちの一つが医療なんです。やはり日本各地の中で岡山市の医療資源は非常に発達している。そういうことを表しております。じゃあ、医療資源の中で何が特筆すべきものなんだろうかというふうに見てみると、やはり岡山大学の医学部がその中心にある

んだらうというように思います。

150周年の節目だということで少し岡山大学の医学部の歴史を調べさせていただきました。大きな節目が存在するだろうと思って調べてみたところ、これは医学部の関係者とは意見を異にするかもしれませんが、私は17世紀の中頃に起こった承応の大洪水が一つ大きな意味を持つのではないかというように思います。実は池田光政公の時代でありましたけれども、岡山の河川が大氾濫いたしまして、多くの洪水の犠牲者が出ました。そこで池田藩はお金がない状態の中で徳川幕府にお金を借りてきました。そして、各村に医療、お医者さんを派遣し、また福祉も施したわけでありました。その結果、餓死者は他の地域に比べると非常に少なかったというように聞いております。これが池田光政公が江戸初期の3大名君の一人だと言われたゆえんでもありますけれども、そこからやはり岡山の医療というのが歴代藩主に受け継がれたのではないかなというように思っております。

それから、今回の明治3年の岡山藩の医学館の創立が2つ目の節目だろうというように思います。ちょうど今NHKで大河ドラマ「青天を衝け」という番組、渋沢栄一を中心としたドラマが放送されていますが、ちょうど廃藩置県の前ぐらいであります。これも政府がお金がなくて困っていたとき、各藩が医学館をつくっても廃止せざるを得なかった。こういう状況下に何とか持ちこたえていき、今の岡山大学の医学部まで育てていったということだろうと思います。

節目はほかにもあると思いますが、ただそういう節目一つ一つでありますけれども、それをつないでいく努力、それはすばらしいものがあったというように思います。先ほど学長のほうがウイズコロナの話がされました。岡山の医療資源は非常にすばらしいものがあり、一時期岡山市だけでも1日140人の新規感染者が出たんですけれども、医師、看護師皆さんで本当に一体的に対応していただき、保健所も充実させていただきました。そういうことで乗り切ることができたわけでありました。岡山大学の病院だけじゃなくて、我々市民病院を抱えているところでありましたが、本当に市民病院も岡山大学抜きには一切考えられない、そういう状況下で市民病院も本当によくやっていただいたというように思います。これから第6波が来ないとも限らないわけでありました。これからは槇野学長のおっしゃった面として、チームとして対応していく、そういったことをぜひともお願いを申し上げたいと思います。

そして、岡山大学が今回150周年の記念の行事であ

りますが、200年、そして300年と日本に冠たる医学部として存在し続けることを祈念したいと思います。

最後になりますが、ここにおられる皆様方のご健勝、ご多幸とともに、岡山大学医学部のますますのご発展を祈念して、ご挨拶とさせていただきます。本日はおめでとうございます。

## 祝 辞

文部科学省高等教育局長  
増 子 宏 氏

本日ここに、岡山大学医学部創立百五十周年記念式典が挙行されるに当たりまして、一言お祝いの言葉を申し上げます。

岡山大学医学部は、明治三年に岡山藩医学館として開校し、様々な改組を経て今日まで発展してこられ、令和二年にめでたく百五十周年を迎えられました。

これまで、医学部の発展に尽力された槇野学長、豊岡医学部長を始めとする歴代の学長、学部長並びに教職員の皆さま方のご努力に敬意を表するとともに、地元岡山県をはじめとする関係者各位のご支援に対し、厚く御礼を申し上げます。

岡山大学医学部におかれては、現在までの卒業生は一万二千人以上であり、医師、看護師、保健師、診療放射線技師、臨床検査技師を養成・輩出され、それぞれの人材が中国地方のみならず、全国各地の医療機関を支える役割を担われており、また、医師養成においては、地域枠を設け、積極的に医師の地域偏在解消に貢献されています。

今日、医学・医療が急速に進歩・発展する一方で、新型コロナウイルス感染症など、人類に対する「未知なる脅威との共存」という新たな課題が突き付けられており、医療人の養成機関においては、教育の充実を図るとともに、医学・医療のさらなる発展に尽力していただくことが肝要と思われまます。

そのような中、医学研究インターンシップや先進医学修練コース（ARTプログラム）の導入や、平成

二十六年度には、全学に先んじて医学科で六十分授業制を導入するなど、独自の教育改革に積極的に取り組まれておられます。また、令和二年度から「保健医療分野におけるAI研究加速に向けた人材養成産学協働プロジェクト」に連携校として参画し、AI教育及び研究を進めていただくなど、先進的な医学教育の取り組みにご尽力いただいていることに敬意を表します。

文部科学省といたしましても、国民からのニーズに対応できる優れた医療人が養成されるよう、引き続き教育・研究のための施策を推進してまいります。

最後になりますが、ご臨席の皆様方におかれましては、今後も岡山大学医学部に対し、より一層のご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げますとともに、岡山大学医学部の益々のご発展を心より祈念し、お祝いの言葉とさせていただきます。

## 祝 辞

厚生労働省医政局長  
伊 原 和 人 氏

新型コロナウイルス感染症の影響による延期を経て、本日ここに、岡山大学医学部創立百五十周年記念式典が挙行されますこと、誠に喜ばしく、一言お祝いの言葉を申し上げます。

岡山大学医学部の起源は、明治三年に創設された岡山藩医学館まで遡るものと承知しております。以来、百五十年以上もの長きにわたり、優れた医療人・研究者を輩出し続け、中国四国地域を中心に約二百四十に及ぶ関連病院をはじめ、地域・世界で活躍されています。太平洋戦争末期に医科大学校舎や付属医院を一部焼失するなどの災難にも見舞われつつも、そうした苦勞を乗り越え、今日まで連綿と続く医学への熱意と地域医療への献身に、心からの敬意を表します。

岡山大学医学部は、「医のプロフェッショナルの育成」、「世界に先駆けた研究」を掲げ、人材育成にも積極的に取り組んでおられます。

岡山大学病院が、中国四国地方唯一の「臨床研究中核病院」として、日本発の革新的医薬品・医療機器等の開発を推進し、国際水準の臨床研究等の中心的役割

を担っていること、また、今般の新型コロナウイルス感染症の対応において、地域に多大なる御尽力をいただいていることは、岡山大学医学部のこうした教育方針を象徴する成果であると思います。

今日、国際社会は急激に変化し、医療技術もまた日々目覚ましい進歩を遂げています。さらに、少子高齢化が進展する我が国では、医療のニーズは多様化し、患者一人ひとりに寄り添った医療の重要性が増しています。引き続き、地域に根ざし、世界の持続可能な医療に貢献する存在として、国内外の医療・保健の発展にまい進していただきたいと切に願っております。

また、岡山大学では全学を上げてSDGsに関する取組を積極的に推進されていますが、特に医学部では、災害医学教育の指導者育成、聴覚障害児・者に対する医療・教育連携などを通じて、誰もが医療の恩恵を享受できる社会の実現に向けて、力強いメッセージを発信されています。引き続き、榎野学長、豊岡医学部長のリーダーシップの下、貴学及び貴学部の特徴、強みを活かし、その成果を国際社会、地域に還元いただくことを期待しております。

最後に、本日御臨席の皆様方におかれましても、引き続き、岡山大学医学部に対し、より一層の温かい御支援、御協力を賜りますようお願い申し上げますとともに、岡山大学医学部、並びに御臨席の皆様のご更なる御発展を心から祈念し、お祝いの言葉といたします。

## 祝 辞

株式会社ベネッセホールディングス名誉顧問  
福 武 總一郎氏

岡山大学医学部創立150周年記念、誠にありがとうございます。長きに亘って地域に優秀な人材を輩出し、日本の医療、福祉に多大なご功績・ご貢献をされてこられたことへ、改めて心からの御礼と敬意を表します。

さて、21世紀を境として世界のグローバル化・ボーダーレス化に拍車がかかり、昨今は先行き不透明な時代ともいわれます。その様な中で施行された2004年の国立大学法人化を機に、全国の国立大学は新たな競争時代へと舵を切りました。岡山大学もこの20年余は、国内外からの評価を高めるべく大変なご努力を重

ねてこられた激動の年月だったと思います。そのご成果は、現在、「スーパーグローバル大学創生支援事業」、「研究大学強化促進事業」、日本医療研究開発機構（AMED・エームド）の「革新的医療技術創出拠点」等への選定となって表れており、大変頼もしく思う次第です。

医学部におかれましても2019年4月に日本医学教育評価機構（JACME・ジャクミー）により岡山大学医学部の国際教育が国際基準に適合していると認定され、岡山大学医学部を卒業した学生に米国の医師国家試験受験資格の門戸を開いたこと、大学院教育においては2007年に「がん専門医療人財養成プラン」に採択され、第3期事業の現在も主管校としてがん医療の現場を支える多様な職種のスペシャリスト育成に力を注いでおられること等、教育業界の人間として、学生の可能性を大いに拓く素晴らしい施策と感じております。

また、“地域医療の発展”という点を踏まえて、2006年に岡山大学病院の関連施設として産学官連携で開設した「医療法人岡山画像診断センター」について触れたいと思います。

近年の国家財政の緊縮化の中、「最高レベルの画像診断医療を岡山で提供したい」という当時の岡山大学病院の先生方の夢の実現に、財界人と医学会の先生方とで知恵を出し合い、民設学営という新しいスキームで開設したのが同センターです。私自身も地元の経済人の一人としてお手伝いさせていただきましたが、開設以来、地域の皆様に広くご利用いただいておりますことを誉に思っております。人生100年時代に突入し、今後益々重要性が増す地域医療の在り方を、学生の皆様には在学時分からお考えいただければと思います。

最後に、私の妹で福武教育文化振興財団 前理事長であった故・福武純子が2013年に寄贈した鹿田キャンパス内のJunko Fukutake Hallならびに津島キャンパス内のJテラスを皆様に大変有効にご活用いただいておりますことを、故人に代わって御礼申し上げます。この施設を地域に開かれた学び舎として活用する学生の皆様には、諸先輩方に倣って、高度な知見と豊かな人間性を身に付け、地域社会で大いに活躍いただきたい、それが故人ならびに私の切なる願いであります。目まぐるしい世の中の変化の中で、社会課題が山積している昨今ですが、医療・福祉という領域に新しい価値を創造することへの志を胸に、逞しく生き抜いていただくことを切望して、私からのお祝いの言葉に代えさせていただきます。

# 高額寄付者への 名誉団体表彰状贈呈 代表者 謝辞

株式会社山陽新聞社相談役  
越 宗 孝 昌 氏



ご紹介賜りました越宗でございます。本日は岡山大学医学部創立150周年記念式典が盛大に開催されましたこと、心よりお喜び申し上げます。

またこのたびは名誉団体として表彰いただき、誠にありがとうございます。

いまさら申すまでもありませんが、岡山大学医学部の皆さま方は、長年にわたって先端医療を追求し、常に全国トップレベルの医療を提供してられました。移植医療を国内に定着させるきっかけとなった生体肺移植を始め、がんの遺伝子治療など先駆的な医療への挑戦は多くの患者を勇気づけたに違いありません。

医学教育のトップランナーとしての存在感も際立っています。徹底した現場主義により、高い臨床力、科学的探究心を持った人材の育成に取り組んでいらっしゃいます。各界で活躍する多士済々の卒業生の中には、世界を舞台に治療法や新薬の開発に挑む研究者、高齢化が進む中山間地域に飛び込み、住民と真剣に向き合う医療人らがいます。岡山県を始めとした中四国はもちろん、わが国全体の医療・保健・福祉の発展への貢献は言うまでもありません。

岡山県が「医療先進県」と称されますのも、一人でも多くの命を救うという皆さま方の決意と、それに対

する実績を長年かけて積み上げてこられた賜物だと確信しております。あらためて関係各位の皆様に、心より深く敬意を表する次第です。

私は岡山大学医学部創立150周年記念事業後援会長を仰せつかっております。次の時代に向かってさらに大きく、新たな一步を踏み出していかれようという節目の折、地元経済界や多くの団体の方々から「少しでもお役に立てないか」「応援できないか」という声が上がりに、そうした声に応えようと活動を始めたのが後援会でございます。

本日の式典も記念事業の一環ですが、人材育成や新たな地域医療連携の構築、鹿田会館の改修など、ソフト、ハード両面で各事業に取り組んでられました。後援会がオール岡山で支援させていただいているのも、岡山大学医学部が全国に、そして世界に誇れる大切な財産であり、地域にとってなくてはならない存在だからであります。

昨年来、わが国は新型コロナウイルス感染症の脅威にさらされ、医療現場では岡山大学医学部出身の先生方が日々力を尽くされています。皆様のご奮闘にはただただ頭が下がる思いです。

これから社会は大きく変化していきます。人口減少、少子高齢化といった社会構造の変容に合わせて、医学部に寄せられる期待、ニーズは一層高まるとともに多様化していくはずですが。皆さま方にはそうした声にしっかりと応えていけるだけの素地は十分にお持ちであると私は確信しております。

岡山藩医学館の設立趣意書「医学館永久愚考」には「優秀な生徒を広く集めていく」と開学の精神が明記されています。その理念の下に集まった1万2千人以上の卒業生が脈々と紡いできた伝統を次世代に継承し、次の200年、250年へと輝かしい新たな歴史を切り開いてくださることを期待しております。

終わりにになりましたけれども、岡山大学医学部のさらなるご発展と、本日ここにお集まりの皆さま方の一層のご活躍を祈念いたしまして、簡単ですがご挨拶とさせていただきます。

本日は、本当におめでとうございます。



## 医学部・研究科の歩み

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科長  
伊達 勲



岡山大学大学院医歯薬学総合研究科長の伊達勲でございます。

本日はご多忙のところ、多数ご参加をいただきまして、誠にありがとうございます。

私からは、医学部そして研究科の最近の歩みにつきまして、スライドを使いましてご

説明を申し上げたいと思います。特にルネッサンス期間と呼んでおりました最近の10年間についてご説明申し上げたいと思います。

岡山大学医学部は、1870年に岡山藩医学館としてスタートをいたしました。1922年には岡山医科大学となっております。1949年に岡山大学医学部、そして大学院につきましては1955年に大学院医学研究科となっております。その後、2001年に大学院医歯薬学総合研究科、そして2005年に大学院医歯薬学総合研究科となり、現在に至っております。

過去10年間の教室、講座の新設、名称変更についてご報告を申し上げます。

2011年には2つの外科教室につきまして、それぞれ名称が消化器外科学分野及び呼吸器・乳腺内分泌外科

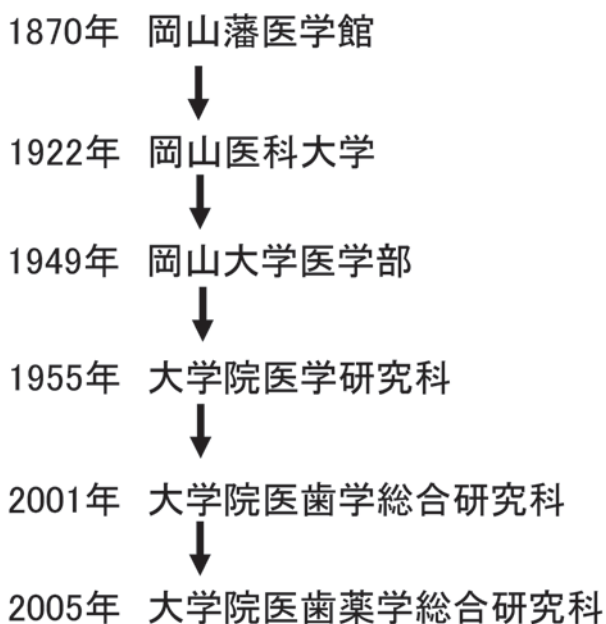
学分野と変更になっております。2013年には新設として臨床遺伝子医療学分野ができました。2015年には発達神経病態学分野が小児医科学分野発達神経病態学領域に、分子遺伝学分野が分子腫瘍学分野に、神経ゲノム学分野が脳神経機構学分野に名称変更になりました。そして同年、神経機構学分野と神経情報学分野の統合がなされております。2016年には組織機能修復学分野が新設され、2018年に救急医学分野が救命救急・災害医学分野、2021年には腫瘍ウイルス学分野が腫瘍微小環境学分野に名称変更となって現在に至っております。

過去10年間の鹿田地区内のハード面につきまして、まず新築の方をご説明申し上げます。2012年にマスカットキューブ、2013年にJunko Fukutake Hall、いわゆるJ-Hallができております。2015年には医歯薬融合型教育研究棟ができました。マスカットキューブは、岡山県の地域医療人材の育成拠点となっております。正式名は地域医療人育成センターおかやまといいますが、鹿田キャンパスの東の端のところに立派な建物ができております。Junko Fukutake Hall、J-Hallでございますけれども、福武教育文化振興財団理事長であられました故福武純子様からのご寄附により竣工したものでございます。これまで学会や式典、あるいは市民公開講座、文化事業などに多数の機会を得て開催をさせていただいております。医歯薬融合型教育研究棟でございますが、医歯薬学の学際的教育施設として竣工したものでございまして、系統解剖、法医学解剖施設、OSCE、CBT、シミュレーション教育の環境整備に大変役立っております。

続きまして、ハード面での改修の方をご説明申し上げます。

2013年に基礎医学講義実習棟が改修になっております。2014年には臨床研究棟、附属図書館鹿田分館、旧栄養学棟、そして2020年に旧生化学棟講堂が改修になりました。旧生化学棟の講堂でございますが、皆様方からいただきましたルネッサンス基金、医学部創立150周年記念事業に対してお寄附により改修ができたものでございます。高精度のレクチャーシステムを導入しておりますが、一番前方にあります黒板など、昔の部分を意図的に残しているところもございます。昔と同様、キャンパスの北西の角のところもございます。

次に鹿田地区のソフト面につきまして、まず医学部について説明します。医学部では医学教育モデル・コア・カリキュラムと医学教育分野別評価基準にのっとり医学教育改革を実施してまいりました。実習では、診療参加型臨床実習の拡充をしてまいりました。



## 旧生化学棟講堂

- ・医学部創立150周年記念事業に対するご寄付により改修を実施
- ・高精度レクチャーシステム導入
- ・黒板など一部のものは以前のものを残す



た。また、全国共用試験への対応、それから先ほどもちょっとお話しがありましたが、全学に先んじて60分授業制の導入等を行ってまいりました。また、低学年より専門科目の履修ができるようにしております。このような取り組みによりまして日本医学教育評価機構による国際基準適合認定をいただきました。本年の医師国家試験につきましては新卒の合格率が98%ということで、全国平均よりかなり高い数字を残すことができいております。現在の医学部医学科のカリキュラムをスライドにお示ししておりますが、低学年である1年、2年のときから基礎専門科目がスタートしておりますし、臨床実習につきましても4年生の後半からスタートするというので、少しずつ前倒しで教育が行われているということでございます。

大学院医歯薬学総合研究科ですが、特徴としてはARTプログラムと呼ばれます卒業後研修1年目から大学院スタートが可能なプログラムがございます。それから、先ほどもお話しがございましたが、がんプロと呼ばれるがん専門医療人材養成プランがございます。医療教育センターは、研究科附属に移行をいたしました。新しいところでは、Clinical AIと呼ばれるグローバル、ローカルな医療課題の解決を目指した最先端のAI研究開発人材育成プログラム、これを東北大学、北海道大学と共同のプログラムとしてスタートしております。

最後に大学院の改組の動きにつきまして簡単にご説明いたします。今後の大学院は、学修者主体のプログ

ラムを目指す方向となっております。全学の大学院をまとめて大きな括りとし、学術研究院と呼ぶようになりました。そして医歯薬学総合研究科はその中で医歯薬学域という名称となり、医学系・歯学系・薬学系の上に存在する大学院、ということになっています。

医学部ならびに研究科がこのような歩み続けることができましたのも、皆様方のルネッサンス基金へのご協力の賜物でございます。改めて御礼を申し上げて、私のご報告とさせていただきます。本日はどうもありがとうございました。

## 岡山大学病院の歩み

岡山大学病院長  
前田 嘉信



本年4月1日で岡山大学病院長を拝命しました前田嘉信です。

それでは、大学病院の歩みにつきまして、医学部、研究科の歩みと同様に、2011年以降の事項につきましてご説明申し上げます。

なお、診療科、中央施設等

の設備変更等につきましては、大変件数が多く、時間の関係上省略をさせていただきますので、あらかじめご承知いただきますようお願い申し上げます。

まず、施設としましては、2012年に総合診療棟の東棟が竣工をいたしております。この東棟では、手術室がそれまでの13室から20室に増えただけではなく、ハイブリッド手術室、術中MRIが行える手術室など、最先端の手術が行える施設が整えられました。次に、2016年に総合診療棟の西棟が竣工いたしております。6床の治験専用病床が設備されました。この東棟と西棟の竣工により、岡山大学の心臓部と言える総合診療棟が完成いたしました。

また、2017年には入院棟11階にFloor150が開設されました。このFloor150は岡山大学医学部150周年記念事業の一環として開設されたものであり、患者様、ご家族の宿泊施設、一般の方が使用するラウンジ、職員専用食堂、病院スタッフの休憩フロアなど施設が整備され、患者様、職員とともにくつろげるスペースとして活用されております。

ここからは、岡山大学病院が各種の拠点病院等として指定、認定された事項についてご説明を申し上げます。

2012年には高度救命救急センターと災害拠点病院に指定されました。この災害拠点病院としての活動としまして、2018年7月の西日本豪雨のときに災害派遣医

療チームDMATの現地への派遣、浸水被害に遭いましたまび記念病院からの患者の受入れ、入院の支援等を行いました。それから、2015年にはてんかん診療拠点病院にも認定されております。また、同年には中四国地区で唯一の造血幹細胞移植の拠点病院として認定されております。

この移植医療に関しましては、岡山大学病院では肺、肝臓、腎臓、心臓、骨移植など多数が行われておりますが、その合計件数は日本でもトップクラスを誇っております。2013年12月には中国、四国地方初となる脳死心臓移植を実施しております。また、2019年2月には10歳未満の女兒への脳死肺移植手術が成功しましたが、これは岡山大学病院で脳死肺移植の100例目となります。その後、同年9月には生体と合わせて200例目の肺移植を達成しております。

2017年3月には医療法上の臨床研究中核病院に認定されました。ご存じの方も多いと思いますが、医療法上の臨床研究中核病院とは、日本初の革新的医薬品、医療機器の開発などに必要となる質の高い臨床研究を推進するために、国際水準の臨床研究や医師主導治験の中心的役割を果たす病院と位置づけられています。認定に至るまでの経緯を振り返りますと、2013年に厚生労働省の臨床研究中核病院整備事業の拠点に採択。また、翌2014年には文部科学省の橋渡し研究加速ネットワークプログラムに採択されました。この2

## 2012年 総合診療棟 東棟竣工



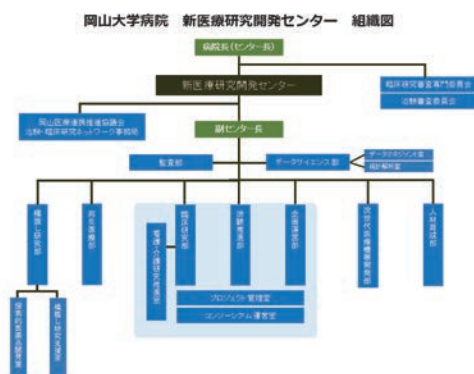
ハイブリッド手術室  
術中MRIが行える手術室



IVRセンター  
最新鋭の血管撮影装置、  
IVR-CT、IVR-MRIが設置

## 2017年3月、医療法上の「臨床研究中核病院」に認定

2009年に新医療研究開発センターを院内に設置



2013年度に厚生労働省の「臨床研究中核病院整備事業」の拠点

2014年度に、文部科学省の「橋渡し研究加速ネットワークプログラム」に採択

中国四国地方で唯一の「革新的医療技術創出拠点」

つの事業の採択によりまして、本学及び岡山大学病院は中国、四国地方で唯一の革新的医療技術創出拠点となりました。また、2015年から申請しまして2年越しで承認要件を満たしまして、2017年3月に医療法上の臨床研究中核病院に認定されたということでございます。

2018年2月には中四国地方で唯一のがんゲノム医療中核病院にも認定されております。がんゲノム医療とは、がん患者の腫瘍部並びに正常部からゲノム療法を用いまして治療の最適化、予後予測、発症予防を行う医療のことございまして、2017年10月に閣議決定されました国の第3期がん対策推進基本計画のがん医療の充実で最重点事項とされているものでございます。選定に至るまでの経緯ですが、まず2015年にバイオバンクを設置し、同年12月には腫瘍センター内に抗がん剤適応遺伝子検査外来を開設いたしました。その後、2017年12月にゲノム医療総合推進センターを設置いたしまして、病院を挙げてゲノム医療に取り組む体制を整備し、2018年2月に選定されたということでございます。

それから、病院の評価等に関することでございますが、2015年4月3日付で岡山大学病院が病院機能評価における一般病院2と認定されました。病院機能評価とは国民が安全で安心な医療を受けられるよう、日本医療機能評価機構が病院の運営並びに提供される医療

について評価する仕組みであり、2019年11月には新設された病院機能一般病院3を受審いたしまして認定されたところでございます。また、2017年5月には外国人患者受入れ医療機関認定制度、略称JMICの認証医療機関に認定されました。これは、岡山大学病院を受診する外国人の方が安心・安全に医療サービスを受けられる体制が整っていると判断されたことを意味します。また、このJMICの認証は、国立大学病院では全国で3番目、中四国地方では初の認定でありました。

最後に、2019年10月に岡山市で開催されましたG20岡山保健大臣会合についてお話しさせていただきます。

このG20岡山保健大臣会合は2019年10月19日、20日の2日間にわたって開催されましたが、参加しました各国の閣僚の方々が閉会後のエクスカージョンで岡山大学病院を訪れました。このときはIVRセンターで機器や治療方法等の説明、バイオバンクの説明、産学連携で共同開発しましたりハビリ機器などの展示を併せて行わせていただきましたが、世界に岡山大学病院の存在をアピールする大変貴重な機会をいただいたというふうに感謝申し上げます。

以上、簡単ではございますが、岡山大学病院の歩みについてご説明を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。



## 閉会の辞

実行委員会委員長  
吉野 正



ただいまご紹介いただきました吉野でございます。

本日は、ご来賓、また後援会の方々、医学部、研究科、大学本部等々、それから関連病院、関連医療施設の皆様には、祝日の大変よい日に、お時間取っていただきご出席いただきまして、誠にありがと

うございました。

閉会に当たりまして、2つのことを申し上げたいというふうに思っております。私は記念事業について松井前委員長から引き継いで、合計で10年ぐらい関わってまいりました。その間、言うまでもなく、医学部、これは医学科、それから保健学研究科、そして病院、そのほかの司々のトップの人たちが、常に同じ方向を向いていろんな活動をして参りました。個々のお名前は、あまり挙げるつもりはございませんが、特に私の後に学部長に就任されました大塚先生とは、2人で毎週のように、いろんな企業に出向いてお話を聞いていただくことをいたしました。これは私どもにとっても非常にいい、社会というものとの接点というか、それを経験する機会になりました。ここで、特に1つご紹介したいと思えますのは、そういう活動が10年にわたってできたことは、これは医学部、研究科、そして病院の事務の方々の非常に大きいご貢献がありました。150年誌、しかりでございます。そして、とくに鶴翔会、これは我々の同窓会でございますが、事務局長は今、田口さんが頑張っておられますが、この6月まで妹尾事務局長がされておられました。妹尾さんは本当に、私を捨てるぐらいの感じで、この事業に取り組んでこられた。このことはぜひご紹介しておきたいというふうに思います。

2つ目は、先ほどご紹介がありましたように、いろんな事業に関しましては豊岡医学部長のほうからご説明もありましたし、今日の山陽新聞にも取り上げていただきましたが、種々の物事をするには、やはり先立つものが必須であるということでございます。先ほど、ちょっと数字のことが出てまいりましたが、実は我々

がこうしたいと思った募金目標に対しまして、90%を超える達成率になりました。このことに関しましては、先ほどもご挨拶いただきました越宗会長、後援会というものの組織自体もそうですし、それから、会長からこういうところにお声をかけたらどうかというふうなご提案もいただいたということで、本当にお世話になり、ここから感謝申し上げます。本日、高額なご寄附をいただいた皆様に深く深く感謝の念を我々示したところでございますけれども、実は一般市民の方、それから企業も非常に広がりを持って、総計139の企業からご寄附をいただき、その総額というものが2億5,000万ぐらいになりました。これは、募金全体の約4割にも達しています。これは、とても我々としては力強い応援であるとともに、我々がどのように評価されているのか、またどのように期待されるのかというふうなことを示している一つの指標ではなかろうかというふうに思っております。

先ほど来、150年は通過点であって、次の200年あるいは300年という話もございしますが、そのような一般市民の方々、もちろん行政も含めて期待が我々にかけられているのだということをこの10年間の間私は切実に感じたところでございます。

最後に、今日ご出席の方々のますますのご発展というのを、祈念いたしますが、医学部の関係者の方々におかれましては、そういうふうな期待があるということをご十分理解して、今後とも、良質な医療人を輩出していきたいというふうに深く希望するところでございます。

本日は誠にありがとうございました。

## 記念講演

理化学研究所生命機能科学研究センター チームリーダー  
濱田博司氏



○司会 皆様お待たせいたしました。これより記念講演会を行います。

記念講演会の座長は、岡山大学病院前田嘉信が行います。マイクを前田病院長へお渡しいたします。よろしくお願いいたします。

○座長(前田嘉信) それでは、記念講演会を始めたいと思います。

座長を務めさせていただきます岡山大学病院の前田です。よろしくお願いいたします。

それでは、早速ですが、記念講演会の講演をお願いしております濱田先生にご登壇いただきたいとします。濱田先生、よろしくお願いいたします。

それでは、まず最初に私から濱田博司先生をご紹介します。

濱田先生は、香川県善通寺市のご出身で、香川県立丸亀高校をご卒業後、岡山大学医学部に入学されております。1975年にご卒業になられまして、岡山大学大学院医学科研究科に入学され、1979年に大学院を修了されております。榎野学長とは大学時代同級生でられました。その後、米国衛生研究所NIH、ニューファンドランドメモリアル大学、東京大学助教授、東京都臨床医学総合研究所化学療法部門部長を経て、1995年から大阪大学細胞生体工学センター教授、2002年から現在の理化学研究所生命機能科学研究センターのチームリーダーにご就任されております。ご専門は、発生生物学ですが、体の左右非対称性が生じる仕組みの研究に取り組みられており、数多くの優れた業績を上げられておられます。それらの業績に対しまして、2000年に第18回大阪科学賞、2002年に第10回日産科学賞、2012年には第43回内藤記念科学振興賞、2014年に紫綬褒章、第19回慶応医学賞を受賞されておられ、現在も第一線で活躍されております。

本日は、「基礎研究に身をおいた一人の卒業生として」と題しまして、一人の基礎研究者としての歩みと母校への思いについてご講演いただきます。

それでは、先生、よろしくお願いいたします。

○講師(濱田博司) 前田先生、大変ご丁寧なご紹介

をいただきましてありがとうございます。それから、創立150周年、大変おめでとうございます。

私は、ご紹介いただきましたように、母校を卒業して以来、ずっと外にいましたので、母校の現状もよく分かっておりません。ですので、このような場所でお話しするのは大変恐縮なんですけど、今日はこんな変わった進路を取った一人の卒業生もいるんだってということでお話しをさせていただきたいと思います。ほとんどは、実際は自分が過ごしてきた研究のお話しになりますが、最後の一、二枚のスライドで母校へのエールらしいものをお伝えしたいと思います。

私が入学したのは昭和44年で、榎野学長と同級生です。当時は、学生運動が大変華やかな頃で、実際に講義が始まったのも半年ぐらい遅れたかと思えます。津島での記憶はほとんどないんですけど、鹿田に移ってから基礎医学の2年間ってというのは大変僕は授業を受けるのが楽しかったです。特に、生化学とか組織学、病理学、中でも生理学が好きでした。人間の体ってなんとなくうまくできてると感激した覚えがあります。野球部でも充実した日々を過ごすことができました。しかし、5年生ぐらいになってからポリクリが始まると落ちこぼれてしまって、どうも自分には臨床の適性がないっていうことを痛感しました。それでも、何とか卒業することができて、卒業後は楽しかった記憶のある基礎医学のほうに進もうと思いました。



それで、どの教室に進もうかと思ったんですけど、縁があって細菌学教室へ行くことになりました。当時は、金政泰弘先生、林英生先生らがいらっしやっ

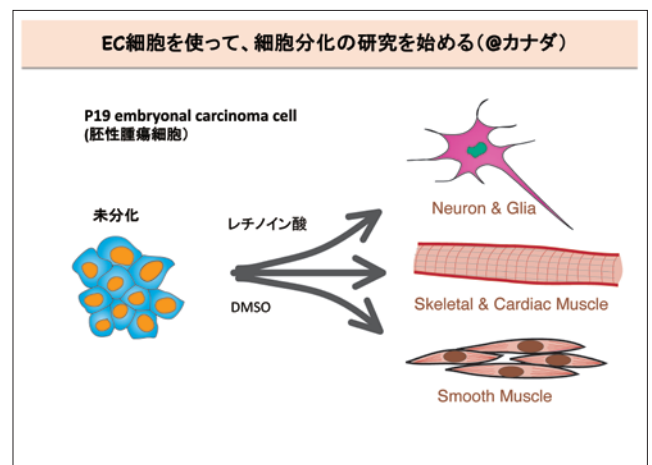
て、大変活気があふれた新しい研究室でした。そこで最初に、黄色ブドウ球菌の膜の脂質の組成について調べなさいと言われて、そんな実験を行ったことがあります。ところが、これは本当に僕は全く不遜なことなんですけど、どうも僕は誤解をしてしまって、『細菌学ってちょっと古いんじゃないの』とってしまいました。もちろんこれは大きな大きな誤解だったんですが、当時の僕には分かりませんでした。その代わり、その頃始まろうとしていた分子生物学に目が行ってしまって、非常識にも金政先生に『僕は高等動物の核酸の研究がしたいです』と申し出たんですけど、そうすると金政先生が徳島大学の先生を紹介してくださり、そこに外向させてくれました。大変非常識で自分勝手な若者に何と寛大な指導をしてくれたんだろうと思います。

それで、すぐに徳島大学医学部におられた村松正實先生のところへ外向させてもらって、マウスの核酸、特にリボソームRNAの研究をしました。このスライドの右側にあるのは当時先端だったSangerのフィンガープリント法ですが、それを使って低分子RNAの塩基配列を決める仕事をしました。ところが、その頃は遺伝子クローニングという新しい技術が世界で始まった頃で、まさに嵐の時代の幕開けでした。その技術のパワーを目の当たりにしたものですから、大学院の修了後は何か面白いこと、面白い生物学、あるいはできれば医学的に重要なその現象っていうのを制御している遺伝子をクローニングしたいと思いました。

その頃まではまだ人の病気のことについてちゃんと興味がありましたから、そこでアメリカのNIHのがん研究所で細胞のがん化の第一人者であった角永武夫先生っていう方がいらっしゃったので、そのラボに留学しました。当初は、細胞のがん化を起こす遺伝子、後で言えばがん遺伝子、そういうものをクローニングをしようっていう狙いだったのですが、それがうまくいかずに横道にそれてしまいました。それでも、論文だけはそれなりに出たので、『自分でも海外でもやっつけていけるんじゃないかね？』と勘違いしてしまって、アメリカで独立できるポジションを探しました。若いときっていうのは向こう見ずなものです。そこで、100通以上の応募書類を書きました。その中から大体6か所ぐらいだったと思いますけど、面接のオファーが来たんですけども、スライドにペケを書いているのが面接に行った場所なんですけど、どこにも採用されませんでした。その頃、1度だけ僕はこれは研究者を辞めるしかないなと思ったことがあって、母校の先輩に相談したことがあります。

ところが、幸いここが最後と思っていたカナダの田舎の大学から採用通知をもらいました。そのときには大変うれしかったですね。ここはすごい田舎で、タイタニックが沈没した海の近くの島なんですけど、カナダ国民でさえ揶揄するような田舎の医学部だったんですけど、私にとっては天国でした。そこで、小さいながら初めて自分のラボを持って研究をしました。そこで、ご覧のような2つの単著論文を出すことができました。僕がひそかに誇りにしてる論文なんですけど、個人的にも、もし戻れるんなら一番戻りたいと思う、すごく頑張っていた時代です。今も精いっぱいやってるんですけど。そんな時に、僕の中でもいろんな転機が訪れてきます。

次の転機っていうのは、こんなふうに遺伝子のクローニングをしてたんですけど、当時はある遺伝子をクローニングして塩基配列を決めればそれだけで立派な論文になるという時代でしたが、もうそんな時代は近々終わるだろうと思ってました。実際、2003年にはヒトゲノムの全部が解読されて、新しいポストゲノムという時代が始まるわけなんですけど、私のような人間、クローニング技術を売りにしてた人間っていうのは、ここで発想をがらっと変えないといけないわけです。それで、何か面白い生物学、面白い生物現象を研究したいっていうふうに思い、学生の頃に興味を持っていたES細胞（実際には、ES細胞に近いEC細胞）、ES細胞っていうのは皆さんご存じのように未分化な状態で保つこともできますけど、いろんな刺激を加えるといろんな細胞に変化、分化することができます。カナダの大学で、この研究をしてみようと思いました。幸いEC細胞を樹立した研究者がちょうど近くの大学にいたので、細胞の扱い方を教えてもらえたという幸運もありました。



それで、ちょうどそんなことをやってるうちにカナダに永住するか帰国するかっていう、またいろんなそ

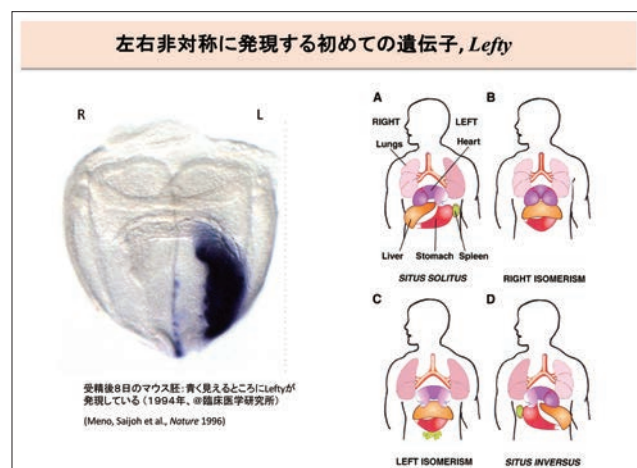
ういう選択に迫られることがあったんですけど、結果的には日本に帰りました。それで、帰国した先は、大学院のときの指導教官だった村松正實先生の研究室で、当時は東大にいらっちゃって、『濱田君、自分の研究をしていいから帰ってきたらどう』とおっしゃっていただいたので、帰国してカナダで行っていた研究を続けることができました。幸い東大の優秀な学生さんが数名そのプロジェクトに参加してくれて、大変研究が進んで、このES細胞の未分化性を維持するために必要な転写因子を見つけることができました。これは、こういうOct 3とか4っていう名前がついてるんですけど、今では山中因子の一つとしても知られてます。一方で、せっかく面白い材料を手にしなが、その後、うまく発展することができませんでした。そういう苦みが残る経験でもありました。

それで、その後もしばらくEC細胞を使った研究をしてたんですけど、そこでまた大きな転機が訪れます。それは、培養細胞を使ってみてる現象が、僕が学生の頃に習った生理学なんだろうかと疑問に思うようになりました。培養細胞は培養細胞なので、本当に生理学をやりたいんだったら生物の個体を使わないと駄目なんじゃないかと思、それでも医学部出身なので、線虫とかショウジョウバエは遠いので、人に近いマウスの個体を使った研究をやろうと考えました。

そうは思っても自分の強みは遺伝子をクローニングすることなので、これまでやってたEC細胞を使って個体の発生に必要な遺伝子を探索しようっていうことをしました。実際には、このEC細胞を使って未分化の状態のときだけオンになってる遺伝子とかある方向に分解誘導するとオンになってくる遺伝子を徹底的にスクリーニングするという戦略ですね。それって、今の時代だったら恐らく1か月もあれば終わるんですけど、当時は竹やり戦法で、同じことを繰り返す泥くさい実験でした。僕はそんな同じ実験の繰り返しているのがそれほど苦にならない性分だったので、膨大なスクリーニングをしました。その結果、目的にしていた遺伝子をたくさんクローニングすることができました。それらの遺伝子の役割、機能を知るには、次はマウスの個体に行こう、培養細胞でなくてマウスの個体へ行くことにしました。

まずは、それぞれの遺伝子が、マウスの赤ちゃん、マウス胚の中でいつどこでオンになってるのかを調べました。たくさん遺伝子について調べました。その中にびっくりするような発現パターンを示す遺伝子がありました。このスライドのちょうど左側に見えるのがその遺伝子の発現パターンですけど、青く染まっ

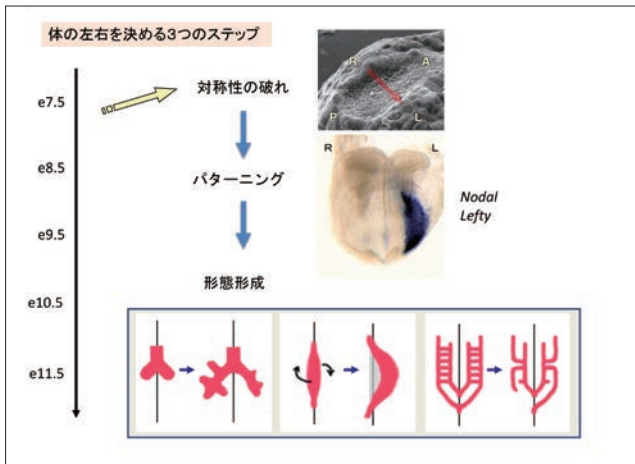
てるのがこの遺伝子がオンになってる場所です。皆さんご覧になってるのは、ちょうどマウスの赤ちゃんを正面から正対してみてると思ってください。頭がまだ2つに別れてますけど、この辺ですね。背中があって、足のほうは後ろ側にくるっと回ってて、エビ反りになってる、そういうものを正対してみてるわけです。そうすると、今この遺伝子がオンになってるのは体の左側だけです。もちろん同じような細胞は右側にもあるんですけど、この遺伝子は左側だけでオンになっているわけです。体の左側を決めてる遺伝子であろうと思、Lefty っていう名前をつけました。



このスクリーニングでたくさんの宝物を手にすることができたので、それを持って大阪大学に異動しました。やりたいことは、単離した遺伝子がマウスの発生の過程でどういう役割をしているのかということなので、それは主に遺伝学を使わないといけません。一つには、例えばノックアウトマウスという方法を使います。もう一つにはトランスジェニックのマウス、外来の遺伝子を挿入したマウスをつくる、そういう遺伝学的手法が必要でしたが、幸い私が異動したところには、この技術の最先端を取り入れていた近藤寿人先生という方がいらっちゃって、近藤先生からそういう技術を教えていただいて、研究を発展させることができました。

しばらく研究することで、体の左右を決めてる仕組みの全体像がかなり分かってきました。大きく分けて、ここでは体の左右っていうのは3つのステップによって決められます。まず最初は、それまでずっと左右は対称なんですけど、ある仕組みで対称性が破れます。その次は、さっきのLefty っていう遺伝子が左側だけでオンになるように左右非対称に発現する遺伝子が出てきます。その中で重要なのは、NodalとLefty、この2つの遺伝子なんですけど、こういう遺伝子が左側で発現することで右側の細胞と左側の細胞を区別してパ

ターニングされます。最後のステップでは、それぞれの臓器が、形とか大きさにおいて非対称になります。だから、全部で3つのステップですね。



最初の10年は、後半の2つのステップ、パターンニングと臓器形成の研究を行い、だいたいのがわかるようになりました。その後の10年は、最初のステップ、対称性の破れ、の仕組みについて研究をしました。対称性が破られる場所は、マウス胚だとノードって言われる場所であることが知られてました。このスライドの左側の写真を見ていただきたいんですけど、これは受精後8日目のマウスの赤ちゃんを左側方から見ています。頭があって、胴体が後ろにエビ反りになってるんですけど、ちょうど体の真ん中の辺りにNodeと書いたノードって呼ばれる小さなくぼみがあります。ここで左右対称性が破られるだろうと予測されてましたが、ここをもう少し倍率を上げると、ここにくぼみですね、右下のところにくぼみがあり、そこには200個ぐらいの細胞が底面のほうにあるんですけど、それをもう少し倍率を上げると右上のほうにそれぞれの細胞から1本の突起物が出てます。これは、繊毛って呼ばれる突起物です。驚いたことに、当時の東大医学部の解剖学におられた廣川信隆先生たちがこの繊毛がぐるぐる時計方向に回転していることを見つけられました。これですね、回転してるのが分かると思います。大体200本なんですけど、どれも時計方向にぐるぐる回転してます。それから、回転することによってノードのくぼみにある液体が右側から左のほうに流れてるのがご覧になれると思います。小さな粒が右側から左のほうに流れてます。なので、左向きの液体の流れがあることを廣川先生たちが見つけて、これが左右対称性を破ってるんだらうと提唱されました。

これは重要な発見だと思ったので、じゃあ本当に液体の流れが左右を決めてるんだらうか、この点を明らかにしようと思い、野中茂紀さんという方と一緒に検

証しました。発想は簡単なことです。逆向きの流れを胚に与えたらどうなる、体の左右も逆さまになるかという、そんな実験です。アイデアは簡単です。必要な装置をつくり、まだ左右が決まる少し前のマウスの赤ちゃんを取ってきて、ペリスタポンプ、よく生化学で使うポンプで逆向の流れを与えて培養をしたところ、予想どおり右向きの流れを加えると体の左右が逆転しました。本来左でオンになるべき遺伝子が右でオンになるんですよ。それから、いろんな臓器を見ても、大きさとか位置が逆転してしまう。なので、こういう実験から確かにノードっていう場所にある左向きの液体の流れっていうのが左右を決めてることが分かりました。ちなみにこれは、お金がかからない実験でした。恐らく200万円ぐらいだったと思います。論文を出したときにも珍しくレビューアから褒めてもらいました。何とエレガントな実験だと。そんなことは、これ以外ないんですけど、すごく褒めてもらえた思い出に残る研究です。

じゃあ人ではどうなのかっていうと、もちろん人も同じような仕組みがあると考えられます。人の場合だと恐らく妊娠1か月ころに、繊毛が動いてるんだと思います。さっきのような動画を学生さんに見せると、多くの方は感動してくれるんですけど、中には気持ち悪いって言われたこともあります。人によっては気持ち悪いのかもしれないですね、おなかの中でぐるぐる回るのは。

基礎的にも大変面白い現象ですが、医学的にも重要なことだと思います。左右の非対称性が異常になると左右逆位とか、いろんな臓器の位置が乱れるヘテロタキシーが起こります。いろんな臓器が影響されますが、一番体にとって困るのは心臓です。心臓が一番左右の影響を受けやすい臓器ですね。マウスの研究ですが、先天性の心奇形の約30%は左右の異常が原因だと報告されています。特に大動脈と肺動脈が転位とか心房中隔欠損を伴うケースは左右の異常が疑われます。それから、ヒトではprimary ciliary dyskinesiaという症候群があります。これは、本来動くべき繊毛が動けなくなってしまうために、気道上皮とか精子がうまく機能できなくなり、男性不妊になったり、慢性の気管支炎になります。それに加えて左右の異常を伴い、臓器錯位を示すことになります。現在40ほどの原因遺伝子が知られております。

実際に臓器の形とか位置が非対称性になる仕組みについても、世の中では研究が進みます。私のラボでいえば少し前になるんですけど、大動脈弓がどうして左側にアーチするんだらうという疑問に取り組みまし

た。大動脈弓の基になるのは鯉弓動脈ですが、それはもともと対称に作られますが、ここの赤い部分が必ず途中でなくなってしまう。特に、第6番の鯉弓動脈を見ると右側が無くなります。その結果として大動脈弓が左側へアーチするわけです。このことを証明するために発生の途中で鯉弓動脈の左側を結紮すると、見事に大動脈弓が反対の方向へアーチしてしまいます。そんな細かい実験をやったのは、今京都府立医科大学の解剖学にいる八代健太さんで、もともとは小児科循環器の出身の方です。

これは、ちょうど2001年頃の研究室のメンバーです。思うに、自分と違う考えとか知識とか技術を持つ人がラボの中にたくさんいるといいなと思います。私のラボには、工学部、理学部生物、理学部化学、薬学部、農学部、獣医学部、医学部と、いろんな出身のスタッフとか学生さんがいてくれました。そのおかげでいろんな研究を進めることができました。

そうこうしているうちに大阪大学を定年退官して、2016年から神戸にある理化学研究所に移り、幸いなことにそこで研究を続けることができました。ポートアイランドの中にある、素晴らしい研究所です。設備も人材も素晴らしい職場です。そこで研究していることは、水流の働きは何なんだろという疑問です。そもそも廣川先生たちがこの水流を見つけたときから未解決な問題ですが、一番考えやすいのは何か分子を左側に運んでいるという可能性です。ところが、そういう分子を探してもないんですね。そこで、もう一つの可能性として出てきたのは、分子を運んでるんじゃないか、水流が作り出す力学的な刺激を細胞が感知してるんじゃないかという可能性です。大きく分けてその2つが可能性がありますが、まだ解決していません。しかし、理研で行ってきた研究で、どうやら力学刺激だろうということが分かりました。

マウス胚が水流を感知する仕組みを、このスライドにまとめています。これはノードのくぼみを断面にして見ていますが、右から左方向に水流がやってくると、それを感知するのはノードの脇に位置する動かない繊毛です。左向きの水流を作る動く繊毛は、ノードの真ん中であって時計方向に回転して左向きの流れをつくりますが、水流を感知するのはノードの脇にある動かない繊毛です。不動繊毛が水流を感知すると、カルシウムが流入しますが、そのときにはPkd2-Pkd111と呼ばれるカルシウムチャンネルが必要です。それを介してカルシウムが入ってる。その結果、下流で働くあるRNA結合タンパク質が標的的mRNAに結合して、そのmRNAを壊します。このmRNAを壊すことは、ノ-

ドの左側の細胞だけで行われます、右では行われません。なので、結果的にここでノードの右と左で分子レベルでの非対称性ができるわけです。それが引き金となって、最初にお話しした左側特異的な遺伝子発現につながっていきます。ですので、これはたいへん重要なイベントなわけです。そんな研究を神戸の理化学研究所で行っています。

今ずっとお話ししたことはマウスを使った研究ですが、もう少し広く地球上のいろんな動物を見ると、彼らもちゃんと左右非対称な体を持っています。ショウジョウバエも巻き貝も非対称です。もちろん、脊椎動物は全部非対称です。彼らの仕組みを見てみると、かなり違うことが分かりました。一番違うのはショウジョウバエで、全然違う遺伝子を使います。それから、巻き貝とかカタツムリでは、3つのステップのうちの後のほうの2つのステップは同じですが、一番最初の対称性を破る仕組みが全然違います。それから、脊椎動物の中を見てみても実は多様性があるんです。いろんな脊椎動物を見てみると、3つのステップのうちの2つは一緒ですが、一番最初の対称性を破る仕組みは違います。哺乳類や魚類や両生類は繊毛を使います。僕らと同じような仕組みなんですけど、鳥類とか爬虫類は繊毛を使わないんです。では、鳥類とか爬虫類は、繊毛を使わずにどのようにして対称性を破るのかということ、今研究しているところです。

もうそろそろ最後です。僕は、卒業以来、岡山大学を離れてからいろんなところを渡り歩きました。最初は徳島に行って、その後、東京に行って、その後はアメリカでポスドクをやって、カナダでアシスタントプロフェッサーをやって、東京に戻って、大阪で、大阪が一番長く21年いて、それで今神戸にいて、そんな流れです。いろんな場所を渡り歩いてよかったなという点があります。今の若い人はなかなか海外へ留学することを尻込みします。僕らの頃はチョイスがなかったんですね。職もないから、取りあえず留学っていうのが決められた路線だったのですが、今の若い人はなかなか留学しないですね。海外留学するっていうことが絶対必須ではないとは思いますが、確実に視野を広げてくれます。個人的に一番よかったのは、学生の頃なんかは英語もしゃべれんし、言葉の問題から少し劣等感がありました。でも実際に彼らをよく知ると、結局みんな一緒だということが分かります。中には優秀な人もいますけど、僕らと同じぐらい平均レベルの人もおるし、いろんな人がいます。だから、結局どこの国でも同じなんだと分かったのが、僕が留学して一番よかったことです。そのおかげでいろんな海

外の人とも肩の力が抜けて自然体で話すことができるようになりました。

それで、地理的な移動もそうなんですけど、研究の材料も随分変わりました。大学院、最初するときには短期間ですけど細菌を材料にした頃もあります。その後は、ES細胞を材料にして、残りの25年ぐらひはマウスを使って発生生物学の研究をしました。その間の研究を通して私なりに感じたこと、基礎研究の中で感じたことというのが幾つかあります。大したことじゃないんですけど、ここで皆さんにお伝えし、こんなことを考えながら研究をしていたことを分かっていただければと思います。

#### 基礎研究を通して感じたこと

- \* 研究: “一灯をさげて闇夜に行く(佐藤一斎)”  
“遠くの一灯を目指して闇夜に行く”  
迷った時も“一灯を頼め:遠くの目標を見失うな”
- \* いろいろな学問が必要:時代に対応しつつ、流行に惑わされない
- \* 異分野を取り入れること:時間を要するが必要
- \* 大局を観る
- \* 大学のよさ:若い学生と一緒に学び、育つを見る楽しさがある
- \* 医学を学んでおいて良かった!
- \* もっと医学に役立つ研究ができていればよかった(少しの後悔)。

僕にとって研究は、遠くにある光を、明かりを目指して暗闇を歩いていくことです。足元は全然見えません。そんな感じだったかなと思います。佐藤一斎先生は、「一灯をさげて闇夜に行く」ということを言われましたが、僕の場合はちょっと違います。もちろん研究をやっていると迷ったこと、転機っていうのがたくさんありますが、取りあえずは遠くに見える光を頼むこと、遠くの目標を見失うなということだったと思います。それから、いろいろな学問が必要なんだっていうことは感じます。もちろん僕らは時代に対応しないといけませんが、一方で流行に惑わされてはいけません。

それから、研究を進めるためには異分野を取り入れるということも重要です。言葉で言うのは簡単なんですけど、これを何とか時間を要しても取り入れていかないとはいけません。もちろん大局を見るっていうことも重要です。

それから、僕は大学にいた後、理研に移ったんですけど、理研っていうのは学生があまりなくて、主要な戦力がポストドクです。それは研究を進めるためには良いですが、一方で、大学のよさは若い学生さんと一緒に仕事ができることです。若い学生さんが最初入っ

てきたときは本当に自信なさそうに、教授とかを見ると神みたいな感じで見てるんですけど、卒業する頃になると彼らのほうが僕を見下ろしています。すごく育てるっていうのを見ることができます。そういうことが、僕にとって楽しいことでした。

それから、個人的には医学を学んでよかったと思います。医学なので、僕はヒト以外の生物をよく知りません。理学部の方はいろんな生物のことを知ってます。僕は、何も知らんですけど、それでも医学はヒトという一つの生物についてありとあらゆる角度から研究するわけです。そういう意味では僕は医学を学んでよかった。最後は、後悔ですけど、もう少し医学に役立つ研究ができてればよかったなと、後悔の念があります。

最後のスライドです。

これは、私のような臨床経験のない一人の卒業生から母校への勝手なエールです。

まず最初は、これは榎野学長もどこかに書いておられました。Act Locally, Think Globally、アクションはローカルな場所で、考えるときは世界全体を広く考えよってということですね。それから、本学のホームページを見てみますと、豊岡医学部長もよく似たことを書かれてました。『地域を見詰めつつ世界を目指す』、恐らく同じことなんじゃないかと思います。すばらしい考えだと思います。

それから2番目は、これは私の勝手なお願いですけど、臨床の現場っていうのは大変忙しいんだと思います。でも、生理学とか病理学を考えることができるようなお医者さん、医者を育ててくださってというお願いをしたいと思います。それは、基礎の人間の勝手なお願いでもあるんですけど、でもこれも本学、前田病院長のホームページを見てみますと、『優れた臨床医は研究者である』とお書きになってます。これもすばらしい、と思いました。

それから、難しいことですが3番目は、どんな組織でも変えるべきものと変えてはいけないものがあるんだと思います。医学の教育とか研究の場も恐らくそうだと思います。私が学生だった頃は寄生虫学がありました、講座がちゃんとあって、サナダ虫のスケッチをした覚えがあります。でも、今はほとんどの日本の大学では寄生虫学という講座はなくなったと思います。二、三の大学ではまだあるようですが。確かに日本の中で寄生虫病は少なくはなりませんが、世界的に見ればまだ寄生虫病は大きな脅威です。全部の医学部が同じことをやる必要はないんでしょうけど、それぞれの大学がそれぞれの強みを持って、個性を持って、特徴

を持ってやっていけばいいのかと思います。

それから4番目は、これは伊達先生もご紹介していただきましたけど、本学の研究科っていうのは医歯薬を統合したユニークな研究科ですよ。何かそのメリットを生かせるんじゃないでしょうか。研究の面では、異なる分野を融合することは大変重要です。地理的にも離れているし、運営も大変だっていうことは想像はつきますけど、何とかそのメリットを生かせることができないかと思います。

それから、これは本当の最後です。

私は、研究の世界でいると、『面白い研究だね、それって挑戦的な試みだね』と言われるのが最高の褒め言葉です。論文がどこに出たとかということじゃなくて、面白いねって言われることが最高の褒め言葉です、挑戦的だっていう。それがうまくいくかどうか分からないけど、あんたのやってることは挑戦的だねって言われることはすごい褒め言葉です。これからの岡山大学の医学部を担う方々には歴史の長さを誇りにしつつも、挑戦する姿勢を忘れないでいてほしいと思います。

以上、誠に勝手なお話をいたしました、ご清聴ありがとうございました。

○座長（前田嘉信） 濱田先生、150周年記念にふさわしい大変素晴らしいご講演をいただきまして誠にありがとうございました。

先生、NIHのひげの様子は先生ですね。

○講師（濱田博司） はい。若気の至りです。

○座長（前田嘉信） いやいや。先生、長い研究歴もご紹介いただきました。先生の学問に対する尽きない興味というものが伺えたかなと思います。

先生には、最後岡山大学病院にエールも送っていただきましたけども、挑戦する気持ちも忘れずというお言葉をいただきました。先生、長い研究生生活の中でたくさん研究もされてこられましたけども、先生にとって長い研究歴の中で非常に興味深いといひましようか、先生に思い出深いという期間といひましようか、研究内容をもし一つ挙げるとすれば何か挙げていただければと思いますけど、いかがでしょうか。

○講師（濱田博司） 個人的に一番いい時代だったと思うのは、自分が初めて小さなラボを持って独立したときです。すごく田舎の大学でしたが、やりがいがあった、もう一度戻れるとしたらその頃に戻りたいなと思います。

それから、一番思い入れのある研究データと言われると、途中で出てきましたLeftyの発現パターンです。あれが僕のその後の研究をがらっと変えましたから、一番の思い出深いデータです。

○座長（前田嘉信） ありがとうございます。

それでは、お時間になりましたので本公演を閉じたいと思います。

150周年にふさわしい大変素晴らしいご講演を濱田先生ありがとうございました。

○司会 以上をもちまして岡山大学医学部創立150周年記念式典記念講演会を終了いたします。皆様長時間にわたるご臨席、誠にありがとうございました。





# 山陽新聞 医学部創立150周年 特集号

## 岡山大学医学部創立150周年



### 医学部のあゆみ

- 1870年 岡山藩は医学の進歩を図るため、岡山藩医学館を設置し大病院を併設（医学館は岡山県医学校、第三高等学校医学科を経て1901年、岡山高等専門学校となる）
- 1922年 岡山医学専門学校を廃止し、岡山医科大学を設置（写真）
- 1949年 岡山大学医学部となる
- 1955年 大学院医学研究科（博士課程）を設置
- 1970年 医学部創立100周年記念式典を挙げる
- 1998年 医学部に保健学科を設置  
医学部附属病院、日本初の生体部分肺移植手術に成功（写真）
- 2005年 大学院医歯薬学総合研究科を設置
- 2009年 医学部・歯学部附属病院を大学附属病院とし、岡山大学病院に改称
- 2014年 岡山大学が「構造研究加速ネットワークプログラム」事業に選定される
- 2017年 岡山大学病院が「医療法上の臨床研究中核病院」に選定される
- 2018年 岡山大学病院が「がんゲノム医療中核拠点病院」に認定される
- 2019年 脳死肺移植100例達成
- 2020年 医学部創立150周年



# 伝統の力を、

# 未来の力へ

明治初期の岡山藩医学館を起源とする岡山大学医学部（岡山市北区鹿田町）が昨年、創立150周年の節目を迎え、世界を視野に教育、研究、診療を深化させている。きょう3日、新型コロナウイルス感染拡大の影響で昨年延期していた記念式典を同市内で行い、大学関係者がさならる発展を誓う。



岡山大学学長  
横野 博史氏

### 岡山から「地球の健康」実現

今夏は、コロナ禍に加えて、世界各地で記録的な猛暑や豪雨・洪水などの気象変動による大規模災害が頻発しました。真鍋（a）と「ネット・ヘルシー・Heart（b）」をキーワードに掲げ、動の時であると思います。これまで皆と共に関連

「地球の健康」の実現を目指します。そのトピックとして、岡山大学医学部は、2020年（令和2）年に創立150周年を迎え、150年の歴史を踏まえた岡山大学医学部の新たな挑戦に「注目」すべき。

「地球の健康」の実現を目指します。そのトピックとして、岡山大学医学部は、2020年（令和2）年に創立150周年を迎え、150年の歴史を踏まえた岡山大学医学部の新たな挑戦に「注目」すべき。

提唱のSDGs（持続可能な開発目標）達成を推進してきた岡山大は、2050年を新たなターゲットとして、「地球と地球の未来を共に創し、世界を革新に導く」という研究大学としての新たな長期ビジョンの下、これらから私たちが、地域の皆さまから贈られた温かい支援を次世代の医療人につなぐ、多様性と包摂性に富む持続可能な社会の実現に向けて、「医療・福祉・環境」における「ありたい未来の姿」を、おやま地域から世界に発信してまいります。150年の歴史を踏まえた岡山大学医学部の新たな挑戦に「注目」すべき。

### 地域に寄り添い前進を

創立150周年記念事業後援会長（山陽新聞社相談役） 越宗 孝昌氏



岡山大学医学部の創立150周年を心よりお祝い申し上げます。長年にわたり優秀な人材を数多く輩出し、医療・保健の発展に貢献されてきた関係各位に深く敬意を表します。

先進的な高度医療への挑戦、地域医療の維持・充実に加え、新型コロナウイルスのような未知の脅威への対応、社会情勢の変化に伴う医療人・研究者の全人教育など、医学部に求められる役割はますます多様化しています。

後援会として、人材育成や学外連携の強化といった記念事業を支援しているのをはじめ、その一つが安心して暮らせる社会の構築につながると思います。既に、地域に寄り添いながら新たな歩みを刻まれることを大いに期待しています。

### 医療の発展に大きな貢献

岡山県知事 伊原木 隆太氏



岡山大学医学部が創立150周年を迎えられましたこと、心からお喜び申し上げます。創立以来、輩出された数多くの医療人材が、国内外の医療現場の第一線で苦闘し、人々の救済、医療の発展に大きな貢献をされています。心より深く敬意を表します。

新型コロナウイルス感染症などへの対応はもとより、高齢化や人口減少が進む将来を見据えた良質な持続的な医療の確保には、優れた医療人材の確保が欠かせません。

今後も、地域に根ざしつつ、革新的医療技術などを分野で我が国の医療をけん引する岡山大学病院をはじめとする各地の医療現場において、必要な医療を提供する次世代の医療人の育成・輩出拠点として輝きを放ち、ますます発展されることをお祈りいたします。

岡山大学医学部創立150周年

創立150周年を迎えた岡山大学医学部は、これまでに臨床医や研究者ら約1万2000人に上る多彩な人材を輩出し、地域、そして日本の医療、福祉の発展に貢献してきた。新薬・治療法の開

発に果敢に挑み、臓器移植といった高度な手術を次々と成功させてきたのも、岡大病院（岡山市北区鹿田町）を核にした「臨床」、新たな治療法の確立を目指す「研究」、そして社会の求

める医療人を育てる「教育」という三つの使命を着実に果たしてきたからだろう。伝統を受け継ぎ、新たな未来を切り開こうと各分野で奮闘する医師や学生たちの姿を紹介する。

臨床 最後のとりで

コロナ・アフターケア外来 後遺症の原因探る



高齡化が急進している中、あつて、体によさしい治療をどう進めていくかは大きな課題となつていく。その解決策の一つとして期待されているのが、針やカテーテルなど特殊な器具を体内に挿入して行う治療だ。岡山大学では最先端の医療機器を備えた「IVRセンター」が拠点となり、患者を受け入れている。

IVRセンター 体によさしい治療挑む

「IVR」とは、イターベンション（介入）を意味する。Z-scanやE-beamなど、離れた場所から治療を施すための装置。高齡化が進む中で、体によさしい治療の重要性が高まっている。岡山大学IVRセンターは、この分野で最先端の研究を行っている。

昨年春から猛威を振るう新型コロナウイルスの感染拡大で、岡大病院は重症患者を受け入れるなど「最後のとりで」としての役割を担ってきた。そうした豊富な経験と高い臨床力を生かし、2021年2月に全国でも珍しい「コロナ・アフターケア外来」を開院、後遺症に悩む人たちの治療に挑んでいる。



大塚文男科長(53)は「外来の開院当初は後遺症の原因はよく分かっていなかったが、最近では心身の疲労や免疫暴走などが関与していることが分かってきている。病院を挙げて正確な診断、適切な治療を行ってきたい」と話している。(西平亮)

エクモ搭載ドクターカー 救命率向上目指す



中国東部地方で初めて導入されたエクモが搭載できるドクターカー（岡山大学病院提供）

岡山大学病院は、新型コロナウイルスの重症者の治療などに用いる人工心肺装置（ECMO）が搭載できる大型の救急車を導入した。2022年4月から本運用を開始する。2トントラックをベースに改良し、エクモのほか、自動心臓マッサージシステム、人工呼吸器などの装置を搭載し、ドクターカーとして運用する。救命率の向上に貢献する。

岡山大学医学部創立150周年

不可能を可能に 研究

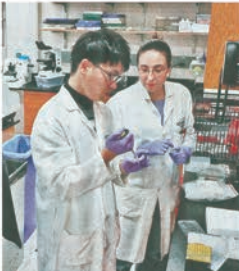
光免疫療法 「第5」の選択肢へ期待



頭頸部に光を当てた野鳥助動(左)と安藤教授(岡山大提供)

がんに対する手術、放射線、化学療法（抗がん剤）、免疫療法に次ぐ「第5の治療」として、「がん免疫療法」が注目を集めている。岡山大では耳鼻咽喉・頭頸部外科が7月、中国初となる治療を開始。今後症例数を重ねるとともに、研究にも力を入れ、治療法を確立していく。

活躍する出身者 世界舞台に研さん積む



スクリプス研究所に留学する岡山大学出身の中道亮(左)と米サンディエゴの研さん(右)

岡山大学出身の研究者が、世界舞台で活躍している。スクリプス研究所に留学する中道亮氏や、米サンディエゴで研究する米国籍の出身者中道亮氏など、岡山大学出身の研究者が、最先端の研究に貢献している。

がんゲノム医療 次世代治療法の「本命」

10月下旬、岡山大学病院の一室に医師や薬剤師、遺伝カウンセラーら約20人分集まり、「エキスパートパネル会議」が開かれた。がんゲノム医療の推進を目的とした。岡山大学は、がんゲノム医療の推進に力を入れている。



患者の遺伝子変異の情報を基に、治療法などについて話し合うエキスパートパネル会議（岡山大学病院（田村文明撮影））

岡山大学は、がんゲノム医療の推進に力を入れている。エキスパートパネル会議を開催し、患者の遺伝子変異の情報を基に、治療法などについて話し合う。がんゲノム医療は、次世代治療法の「本命」と期待されている。



記念座談会

世界へ情報発信

岡山大学医学部は、創立150周年を迎え、地域医療を支える優れた医療人を育成しながら、医学・保健学の教育・研究における国際拠点となることを目指している。

「知と人材の集積拠点」へ



岡山大学医学部長 豊岡伸一氏

とよおか・しんいち 1994年岡山大学医学部。2013年岡山大学医歯薬学総合研究科教授。21年4月から現職。専門は呼吸器外科学。玉野市出身。52歳。



岡山大学大学院 医歯薬学総合研究科長 伊達 勲氏

だて・いさお 1982年岡山大学医学部卒。2003年岡山大学医歯薬学総合研究科(現・岡山大学医歯薬学総合研究科)教授。21年4月から現職。専門は脳神経外科学。兵庫県西宮市出身。岡山県青島市。64歳。

基礎研究と臨床の“二刀流”

岡山大学医学部は、創立150周年を迎え、地域医療を支える優れた医療人を育成しながら、医学・保健学の教育・研究における国際拠点となることを目指している。



岡山大学・農田会館(旧生化学棟) 講堂

「あなたのそばに先進医療」をモットーとする岡山大学医学部。創立150周年を迎えた今、地域医療を支える優れた医療人を育成しながら、医学・保健学の教育・研究における国際拠点となることを目指している。

岡山大学医学部は、創立150周年を迎え、地域医療を支える優れた医療人を育成しながら、医学・保健学の教育・研究における国際拠点となることを目指している。

岡山大学医学部は、創立150周年を迎え、地域医療を支える優れた医療人を育成しながら、医学・保健学の教育・研究における国際拠点となることを目指している。

岡山大学医学部は、創立150周年を迎え、地域医療を支える優れた医療人を育成しながら、医学・保健学の教育・研究における国際拠点となることを目指している。

岡山大学医学部は、創立150周年を迎え、地域医療を支える優れた医療人を育成しながら、医学・保健学の教育・研究における国際拠点となることを目指している。

岡山大学医学部創立150周年



地域医療に貢献し

岡山大学医学部は、創立150周年を迎え、地域医療を支える優れた医療人を育成しながら、医学・保健学の教育・研究における国際拠点となることを目指している。

岡山大学医学部は、創立150周年を迎え、地域医療を支える優れた医療人を育成しながら、医学・保健学の教育・研究における国際拠点となることを目指している。

岡山大学医学部は、創立150周年を迎え、地域医療を支える優れた医療人を育成しながら、医学・保健学の教育・研究における国際拠点となることを目指している。



医学研究インターンシップ



1年次から地域医療の現場で実習



岡山大学農田キャンパスで開かれた記念座談会



岡山大学 副学長 高倉 範尚氏

たかかほり たかし 1973年岡山大学医学部卒。兵庫県三木市市長官邸副議長などを経て2010年福山市長官邸副議長。14年から岡山大学副学長。専門は消化器がんの外科治療。京都府京丹後市出身。74歳。



岡山大学 学長 前田 嘉信氏

まえだ よしひこ 1992年岡山大学医学部卒。2017年岡山大学医歯薬学総合研究科教授。21年4月から現職。専門は皮膚病。兵庫県三木市出身。53歳。

岡山大学医学部は、創立150周年を迎え、地域医療を支える優れた医療人を育成しながら、医学・保健学の教育・研究における国際拠点となることを目指している。

岡山大学医学部は、創立150周年を迎え、地域医療を支える優れた医療人を育成しながら、医学・保健学の教育・研究における国際拠点となることを目指している。

# 伝統の力を、未来の力へ

岡山の地から医学・医療を探求し続けた岡山大学医学部は、  
2020年に創立150周年を迎えました。

時代ごとに教育・研究における先進的で高度な取り組みを取り入れながら、1万2千人以上の医師や多くの医療人を輩出してきました。

ひとえに地域の方々からのお力添えや卒業生、関係各位のご支援の賜物と心より感謝申し上げます。

これからも地域に支えられ地域に貢献する医学部であり続け、一人でも多くの人たちを助けることができるよう、

「新たな時代をリードできる医療人」育成に取り組んで参ります。



岡山大学病院 外来棟



岡山大学病院 入院棟



医学部正門



【創立150周年記念事業】旧生化学棟 講堂(改修)



【創立150周年記念事業】Floor150 開設



# 150<sup>th</sup> ANNIVERSARY

岡山大学医学部 創立150周年



岡山大学医学部創立150周年記念事業事務局 〒700-8558 岡山市北区鹿前町2-5-1

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 総務課  
TEL: 086-235-7004 FAX: 086-235-7046

総務部  
TEL: 086-235-7060 FAX: 086-235-7032

岡山大学医学部創立150周年WEB  
<https://www.whc.okayama-u.ac.jp/med150th/>



# 岡山大学医学部創立100周年、140周年、 150周年記念式典に参加できた幸福に感謝

昭30 松尾信彦

## (1) 岡山大学医学部創立100周年記念式典

本記念式典については昭和42年(1967年)頃から計画、検討されていたが、昭和43年(1968年)2月期成会常任委員会で、医学部長を会長、附属病院長を副会長として昭和44年(1969年)10月19日に挙行すると決定された。

私は昭和42年(1967年)頃から米国留学希望を依頼していた米国ニューヨーク市コロンビア大学眼科のスメルサー教授から、米国のFight for Sightから研究費が出るので、昭和43年(1968年)10月にニューヨーク市に到着するようにとの連絡を頂いたので、昭和43年10月6日午前9時半、岡山を出発、10月7日午後5時羽田発、ニューヨーク時間10月7日午後7時45分ニューヨーク市ケネディ空港着、スメルサー教授夫妻と九大眼科の猪俣君の出迎えを受け、当夜は猪俣君宅に宿泊させて頂き、翌10月8日朝、コロンビア大学医学部眼科へ出校した。以後2年間、目の電子顕微鏡の研究、ことに瞳孔膜血管の消失過程を、超薄連続切片を作って観察した。そして昭和45年(1970年)9月29日に総社市に帰宅した。昭和45年10月1日から岡山大学医学部附属病院眼科講師に復職した。

当時、日本全国に勃発した学園紛争は昭和44年になって高まりをみせ、岡山大学も五項目要求に端を發し、学内紛争が激化していた。この状況下での式典挙行は、祝典の意義を失うこととなり、また暦年からも翌年が創立満100周年となることも併せて考えた上で、昭和45年に延期することになり、学園紛争が次第に平静になった昭和45年3月6日の常任委員会で昭和45年10月25日、岡山市民会館での式典開催が決定したことを知った。そして私は100周年記念式典に出席できることになったのである。以下、本式典の様子を記載しておく。

全国各地から1,000名の出席で、開式は午前10時、荘重な「越天楽」の奏楽に合わせて入場着席、山陽放送・森脇アナウンサーの司会により開会した。

西田 勇記念会会長(医学部長)の開会挨拶があり、その後、坂田道太文部大臣代理・文部省大学学術局吉田大学課長、加藤武徳岡山県知事、岡崎平夫岡山市長、岡山県医師会長代理永瀬正巳様、谷口澄夫岡山大学長

から祝辞を頂きました。

その後、祝電披露の後、100周年記念事業に対する多額寄付者に内閣より授与される褒状を学長より伝達、記念会館等の建築を担当した松本組に期成会会長加藤知事より感謝状贈呈、25年以上の永年勤続者48名(教官11名を含む)に対する表彰。午前11時過ぎに奥田観士記念会副会長(附属病院長)が閉会の辞を述べられた。

式典の途中、10数人の一部学生が開会挨拶や祝辞に野次をとぼしたり、紙テープを投げたりしたが、会長名で退去命令が出され、警備員に連れ出されることもあった。

閉会后、記念講演として、茅 誠司東京大学名誉教授の「繁栄から調和へ」と文化映画「吉備路」を上映鑑賞して、12時45分散会、キャバレー「アジア」で午後2時から2時間懇親会が開かれた。

尚、「岡山大学医学部百年史」は昭和36年2月18日開催の100周年記念会発起人総会で記念事業の1つとして編集刊行が決まっていたが、実際には昭和47年3月31日発行となった。更に100周年記念事業として、医学図書館、記念会館、体育館と武道館が完成した。

## (2) 岡山大学医学部創立140周年記念式典

平成22年(2010年)11月3日、ホテルグランヴィア岡山で、約400名出席のもと開催された。以下、式次第を記載しておきます。

岡山大学男声合唱団医学部OBによる岡山大学医学部学生歌合唱の後、許 南浩医学部長からの式辞、千葉喬三岡山大学長からの挨拶があり、その後、新木一弘文部省高等教育局医学教育課長、石井正弘岡山県知事、高谷茂男岡山市長、秋葉忠利広島市長代理沖宗正明様から、来賓祝辞を頂きました。

その後、「岡山大学医学部の輝かしい歴史と未来像」と題しての講演では、まず榎野博史岡山大学大学院医歯薬総合研究科長が「医学部・研究科の歴史」を、森田 潔岡山大学病院長が「岡山大学法人化後の岡山大学病院の歴史」を、許 南浩岡山大学医学部長が、「2020年の岡山大学医学部に向かってー伝統の力を未来の力へー岡山大学医学部の150周年に向けて10年ルネッサ

ンス」を担当されました。以上の講演のなかで榎野博史研究科長は岡山医科大学学生歌を取り上げ、歌詞、楽譜（五線譜）、作詞者、作曲者、学生歌制定の歴史まで述べられております。許医学部長は「150周年に向けた10年ルネッサンス」設立を提案され、更に、10年ルネッサンスを実践するための具体的な取り組み方を詳細に示され、本計画通りに進行すれば、岡山大学医学部150周年記念会は必ず素晴らしい会になると確信しました。

記念式典閉会後には、江草安彦社会福祉法人旭川荘名誉理事長から、「医療福祉の祖、岡山大学の先人達」と題する素晴らしい記念講演があり、その後は祝賀会（懇親会）に移り、歌や演奏などが披露された後、解散となりました。

### （3）岡山大学医学部創立150周年記念式典

平成21年（2009年）11月3日開催の岡山大学医学部ホームカミングデーに於いて令和2年（2020年）に医学部創立150周年を迎えるにあたり、許南浩医学部長と松井秀樹前医学部長を中心に準備の進め方が議論となりました。その結果、平成22年（2010年）に140周年記念会を行い、その後の10年間をルネッサンス期間として、令和2年にそなえた運動を展開することにする。そうすると140周年が練習会となり、150周年を本番の会として臨むことになる。本案に興味を感じた私は、平成22年11月3日に開催された創立140周年記念会式典に出席し、許先生の「岡山大学医学部の150周年に向けた10年ルネッサンス」ご講演を熱心に拝聴し、更にその資料も拝読して、資料通りに進めば、すべてOKであると感心しました。

岡山大学医学部創立150周年記念式典及び祝賀会は令和2年11月3日開催予定でしたが、新型コロナウイルス感染症対策のため一年延期されて、令和3年11月3日開催となり、しかも出席者は岡山県内在住者に限定されることになりました。しかし会は荘厳な雰囲気の中で執り行われました。万端の準備をされお世話下さった方々に御礼申し上げます。

以下に式次第を記載しておきます。

日時 令和3年11月3日(水・祝)13:30~15:10  
会場 ホテルグランヴィア岡山

開会の辞の後、豊岡伸一岡山大学医学部長式辞、榎野博史岡山大学長挨拶があり、その後、伊原木隆太岡山県知事、大森雅夫岡山市長から祝辞を頂きました。増子宏文部科学省高等教育局長と伊原和人厚生労働省医政局長からメッセージを頂いた後、高額寄付者への名誉団体表彰状贈呈がありました。

その後、伊達勲岡山大学大学院医歯薬総合研究科長の「医学部・研究科の最近の歩み」と題した講演と前田嘉信岡山大学病院長の「岡山大学病院の最近の歩み」と題する講演との後、吉野正岡山大学医学部創立150周年記念事業実行委員長が閉会の辞を述べられました。15分の休憩後、岡山大学医学部・昭和50年卒の濱田博司理化学研究所・生命機能学研究センターチームリーダーが「基礎研究に身をおいた一人の卒業生として」と題して記念講演をされ、16時に解散となりました。

尚、「岡山大学医学部百五十年記念誌」は令和2年（2020年）11月3日に発行されました。また記念事業として、鹿田会館（旧生化学棟）整備改修、150周年記念ホールの建設、FLOOR150開設、融合型教育研究棟新営、医学部資料室の改修等が行われました。

擲筆にあたり、150周年記念事業実行委員会と同記念事業後援会の皆様に厚く御礼申し上げます。

## 「150周年記念誌」に寄せて

三豊総合病院 名誉院長  
昭34 今井正信

岡山大学医学部創立150周年おめでとうございます。  
私が岡山大学医学部同窓会香川県支部の幹事役を故高尾秀一先生より受け継いだときは会長が故松岡健雄先生であったと記憶している。

松岡健雄先生は非常に闊達な行動力にとんだ人であり、又色々と多彩な才能に恵まれて非常に愉快的会の運営であった。

先ず先んずるのが「料亭二蝶」に於ける最も日本情調豊かな宴会であった。私が記憶している会の運営は主体が奇麗処の日本舞踊から始まり、最後に松岡会長の日本舞踊における「切られの与三郎」が出てくる歌舞伎の一場面が終わる。

会は和気あいあいとなって全員が満足して終了することに成っていた。そのような会であったので、特に何の問題もなく非常に良い会の雰囲気であった。

しかし、その後の形見、森下会長は非常に真面目な方であり、とくに会の運営は厳粛なムードで進行する

ことに成って来ていた。

矢張り時代的に旧来の日本の情調的な雰囲気はなくなり真面目な雰囲気ので終了する方向に変化していったのである。

何方が良いかはそれぞれ各人の意見はまちまちで何とも言えないが、私の様な古い人間には何となく昔の情調ある雰囲気のでの運営が懐かしい気がしている。こんな事を岡大医学部創設150周年史に残すには気が引けることではあるが、今の気持ちからすると矢張り書いておきたいことである。

取り急ぎ原稿を書いたけれどこれでいいのかどうかは読む人にお任せする。

又、同封の記念写真は平成28年2月28日 高松市料亭二蝶にて岡大医学同窓会香川支部総会」の時のものであり現在故人となった方もおられます。以上取り急ぎ報告といたします。



岡山医学同窓会香川支部総会 平成28年2月28日 於 料亭二蝶



# 鶴翔会西播支部（兵庫県）の歩み

昭34 瀧谷泰博

兵庫県鶴翔会は阪神、神戸、西播の3地区で構成され、各々が毎年、学術交換会、情報交換会など開催している。更に、3年毎の持ち回りで、兵庫県鶴翔会総会など開催しているが、2年前からCOVID-19の流行により休眠中である。本稿は昭和20年代から始まった「姫路15日会」から「西播支部」の歴史を振り返ってみた。

## 1. 姫路15日会の誕生

終戦後、医院の経営が安定してくると、税務署の取り立てが始まった。昭和20年代は医師会が会員の営業状態から納税額を決定していた。納税額を決めるため、旧ヤマトヤシキデパートの隣にあった料亭の「三光亭」に集合して話し合ったという。毎月、定期的に三光亭を会場とする岡山大学医学部同窓会「姫路15日会」の誕生である。私が昭和39年代に姫路へ赴任した時、医師会長が中田富士雄（昭7卒）で、宴席の新米は先輩たちの御高説を伺っていた。昭和50年代の会長は神宝定吾（昭15卒）で、時には会場を藤森春樹（昭28卒）の御自宅に移し、春は6畳間大に広がるツツジや秋のお月見を開いた。この時は神宝先生のご指導により俳句大会となった。昭和50年5月で184回の例会が記録され（15日会記第3号）、昭和63年1月の例会は再編成を決定し、会長は神宝定吾、例会を年3回とした。平成4年5月から17年10月の会記は井上敏雄（昭29卒）を幹事として記録され、14年間に54回の例会、平均年

4回となっている。

## 2. 15日会ゴルフ

第2次世界大戦後の1957年、ゴルフのワールドカップ（カナダカップ）がわが国で開催され、一気にゴルフブームが始まった。各地にゴルフ場が建設され、姫路の近郊に開場したゴルフ場の会員になる医師たちが増加した。昭和50年料亭「幡籠」で開催された「15日会忘年会」の席上、ゴルフコンペを開催する話が持ち上がった。翌昭和50年3月の「15日例会」で会長の石川正次（昭5卒）より優勝カップが贈呈され、世話役を土井源次郎（昭16卒）、井上敏雄（昭29卒）、瀧谷泰博（昭34卒）、高木明一郎（昭37卒）が担当した。コンペ大会は春、秋、師走の年3回である。登録ドクターは29人、毎回11人から19人の参加がある。手元に残した記録を見ると、昭和51年から昭和55年12月迄の5年間に計14回のコンペがあり、第1回は昭和51年6月に千草カントリークラブで開催されている。参加したゴルファーは13人、優勝は加藤博久（昭39卒）で42-42の84、ハンデ-24、ネット60の断トツである。この時、須賀木一（昭12卒）はホールインワンをしている。ちなみに、瀧谷泰博の14回の平均スコアは82.3である。その後、昭和56年夏までのメモがあるが、詳細は不明である。写真は昭和61年4月相生ゴルフカントリークラブで開催された時の一枚である。



15日会ゴルフ

### 3. 西播支部へ

平成18年8月28日の役員会で、名称を「岡山医学鶴翔会兵庫県西播支部」として、井上敏雄、松浦梅春（昭31卒）から引き継ぎ、平成19年3月24日の役員会は新しい理事を選定し、会則の作成、年会費の徴収、会員名簿の充実などに取り組んだ。そして、平成19年3月24日、市民講座「ガンなんか怖くない」をテーマに、関連病院の先生を講師として講演会を開催した。

兵庫県は北から東周りに、但馬、丹波、摂津、淡路、播州の五つの国から構成される。播州は西播と東播の二つの地域である。開業医は新陳代謝を含めながら100人、姫路赤十字病院、姫路聖マリア病院、赤穂中央病院をはじめ、大学関連病院の勤務医は150人となっている。会長は河田謙二（昭23卒）、東 徹（昭29卒）、瀧谷泰博と続き、令和4年4月から林 充（昭56卒）が就任する。定例会は毎年の初春に総会、医学講演会、情報交換会で構成される。学術講演会は2部構成で、関連病院の勤務医による講演並びに大学から招聘された講師による講演が行われる。この講演会は一般の医師会員に開放され、病院群の情報公開や医師の生涯教育並びに日本医師会生涯教育講座として単位習得に繋がるよう企画している。しかし、新型コロナの影響で令和元年を最後に休会中である。林 充副会長の定期通信により、支部の運営が確保されているのが現状である。

注：文中の敬称は省略しました。

多くの先生がお亡くなりになって居られますが、その記録は省略しました。



# 医学部150周年を祝って

横浜市立大学医学部特任教授

日本人工臓器学会名誉会長

昭43 野一色 泰 晴

昨年、岡田奏二先生から手紙が来た。ベルリン大学でパウル・ランゲルハンスの書いた論文“膀胱の顕微鏡的解剖”の原著版を見つけた、と、その感動をつづっていた。岡田先生は私と同じく1962年に岡山大学医学部に入学し、現在は岡山市内でクリニックを開いているが、医学史探求の情熱と感動性は80歳を前にしても全く衰えていない。

膀胱組織の中の特殊な細胞群（のちにランゲルハンス島と呼ばれるようになった細胞群）発見の論文がある。ベルリン大学が卒業一年目の若い医師の書いた1869年の論文を原著版のまま残しているのは、大学が自己の歴史・伝統を大切にしている証拠だ。

岡山大学では、当時どこの医局も研究室も同様であったと思われるが、私が入局した砂田外科講座でも最先端医療の研究が行われ、術後代謝の緻密な研究や人工心肺装置の開発が精力的に進められていた。今にして思えば当時の血液酸素化装置の開発は新型コロナの重症例に使用されている現在のECMO酸素化装置に繋がる素晴らしい研究であった。連日医局員たちは喧々諤々の議論をしていたのを思い出す。しかし一歩廊下に出ると廊下いっばいに続く巨大な書棚には毛筆で書かれた古い診療記録（カルテ）が整理され、いつでも閲覧できる状態にあり、温故知新そのものであった。

医学部には自由で柔軟性あふれる雰囲気があった。授業は楽しく、質問も多く、講義室は熱気に満ちていた。「先生の言っておられることがさっぱりわかりませんが」と手を挙げる学生もいたし、授業とは関係のない質問、例えば「聖書には、貧しきものは幸せなり、と書いてあるのですが、先生はどう思われますか」と、小児科の浜本教授に質問を投げかける学生もいて、これが医学部の講義かと思えるような場面が多くあった。一方、クラブ活動も活発であり、私が在籍した6年間は西日本医学生体育大会において岡山大学医学部は総合優勝を連続して勝ち得ていた。そして岡田先生のように卒後に医学史に造詣が深くなっていった人や、お寺に下宿しAMDAを立ち上げ、主宰する先生、医学とはかけ離れた道に進む先生たち、時には奇人変人と思える風変わりな人もおられた。今にして

思えば個人個人の個性を尊重した大学の特性であり、温故知新の雰囲気がただよ岡山大学にはベルリン大学に劣らない伝統と気概があった。

当時の指導教官の先生方へはご自分の研究内容を学生達によく話して下さっていたので、学生たちも先生方をとて尊敬していた。福原生理学研究室では動物の腹部にガラス窓を作り、腸管の動きを16ミリ映画撮影し、アウエルバッハ神経叢と腸蠕動の研究を行っていた。ウイルス学講座が新設され、米国ペイラー大で学んだ矢部教授が最先端のアメリカ的研究手法を導入されたのも印象的であった。第3解剖学講座の新設と相前後して麻酔学講座も新設され、超エリート校であった海軍兵学校卒の小坂教授が就任し、極めて厳格に麻酔法を指導して下さった。小坂教授は手術時に麻酔医の位置と術者とを区切る布をエーテルのガスが術者側に流れないようにきちんと張り、その幕をイーター（エーテル）カーテンと呼んでおられたので、学生たちは「イーターのお兄さん」と先生のことを呼んでいた。今にして思えば無礼なことであった。脳神経外科も新設され西本先生が初代教授になられた。当時ベン・ケーシーというキザな脳外科医の連続テレビ放送があったが、西本教授にはキザな感じは全くなく、理論に基づく精緻な手術をなさり、尊敬を集めておられた。第三内科学講座も新設され、重病の池田厚子さまの主治医をされていた大藤先生が初代教授に就任され、医学部全体には日の出の勢いがあった。

教授たちは異領域にも造詣の深い先生が多く、例えば生化学の水原教授は学生と共に昼休みには教授室で座禅を組み、産婦人科の田中助教授は尺八を吹き、初代整形外科教授の児玉先生は人類愛を語り学生たちに感動を与えていた。耳鼻科の高原教授はアカタラセミアの研究から日本人のルーツ解明、そして人類遺伝学へ研究を進めておられた。森永ヒ素ミルク集団中毒事件を解明し、ビタミンBの研究で高名な小児科の浜本教授は温厚でありながら古武士の風格を持ち、人生哲学を熱く語っておられた。第一内科の小坂教授は弓道に親しみ、授業にはいつも羽のつかない棒矢を持参しポインターとされていた。

当時インターン制度が問題となって激しい学生運動

が起こっていたが、廃止を訴える学生たちの主張に先生方は理解を示して下さった。(結局インターン制度は学生たちの主張が認められ、私共の卒業時に政府は廃止を決定した。)

学内の授業では、学生の意見や要望も先生方は良く聞いて下さった。例えば我々学生が「病理解剖を見学したいけど、いつ解剖をやっているかわからないので何か秘密のサインでも出してほしい」とお願いしたところ、すぐに病理の小川教授と妹尾教授及び法医学の三上教授が話し合っ、解剖室の外に赤ランプを設置し、ランプが点灯している時には解剖が行われているので学生は見学に来て良い、と便宜をはかって下さった。

当時、医学部では「岡大方式」と呼ばれる特殊な small group teaching を行っていた。80人の1学年の学生を8人ずつの10グループに分け、小児科、眼科、皮膚科、泌尿器科、整形外科、耳鼻科といった科にそれぞれ分かれて3週間ずつ、朝から晩まで研究室と病棟に入りびたりになって指導を受け、3週間目の終わりの土曜日に卒業試験を行う、という方式である。少人数のface to face授業だ。先生方は大変だったに違いない。なぜなら1年間に10回も同じ講義をせねばならない。それ以上に大変だったのは学生の試験成績の結果だった。例えば産婦人科において、ある助手の先生はホルモン系を教え、ある講師の先生は妊娠の生理を教え、ある助教授の先生は子宮がんを教え、というように、テーマ別に分けて助手・講師・助教授陣が総出で学生を指導し教える。そして3週間後に行われる科ごとの卒業試験では教授がそれぞれの項目について問題を出す。もしも学生がホルモン系のことで悪い点を取るようなら、教授はそれを教えた先生を呼びつけて「教え方が悪い!!」と叱る。だから教える方も真剣。「これは絶対に理解して」と、本気で教えてくださった。一人一人の目と目を見ながらの授業だから、有難かった。

大学の授業で一貫していたのは、本質を見なさい、原理を理解しなさい、考え方を身に着けなさい、薬の名前など覚える必要は全くない、本質を理解すれば治療法の工夫も開発も改良も、応用も転用もできる、と度々言われていたことだ。本質を理解することで自由に柔軟に考えるトレーニングがなされていた。

私共の卒業時謝恩パーティーの席で、なぜか私は卒業生を代表して先生方に謝辞を述べる役を仰せつかった。この時私は「今はまだ 小さきイグサの葉にも似し(私共ではあるが) 緑輝く 夏の日を待て」と、即興で自分たちの気概を表す詩を披露してお礼の言葉

とした。実におこがましい話であるが、きっちり教育をして下さったおかげで、物おじしない医師のスタートを切ることができた。

私が専門1年になって鹿田地区で授業を受けるようになった時、大学の事務室の入り口付近で生理学の西田教授と立ち話をしたことがあった。その時、瘦身の西田教授が「僕の体重は高等学校時代からほとんど変わっていない」とお話しになられた。そこで私は「先生の足底部には極めて敏感な体重センサーがあるかもしれませんね」と冗談を言ったことがあった。そのようなことがあって10年以上経過の後、ある学術財団からの授賞式の席で審査委員長を務められた西田教授が「君が学生時代に面白いことを言ったのを今でも覚えているよ。受賞、おめでとう。」とお褒めのお言葉を下さったことがある(恥ずかしい事でした)。

自分の事ばかり述べて恐縮ですが、私は鳥取県にある岡山大学温泉研究所・医学部附属三朝分院に赴任し、大学助手を21年間勤めた(おそらく医師で21年間助手を勤めた人は後にも先にもいないと思う)。その間にシイタケの研究で名高い日本きのこセンター(鳥取市)の菌茸研究所に通って電子顕微鏡の技術を磨き、その技術でもって人工臓器に多用される高分子材料が如何なる機序で生体に受け入れられ、異物反応も受けずにステルス性を獲得するのか、といった謎を解くことができて、ハーバード大学やスタンフォード大学など世界中の主な大学やNIH等からセミナーの依頼や招聘講演講師として度々呼ばれるようになった。医学のみにとらわれない発想で研究できたのは、学生時代の教育のおかげと感謝している。

1991年に私は横浜市立大学医学部に呼ばれ、2008年に教授職を辞し、現在も外部資金を得て特任教授として横浜市立大学に残り自分の目指すオリジナルな仕事を続けている。この間、アメリカやヨーロッパで教鞭をとる機会に恵まれ、外部から岡山大学医学部の特徴を見ることができるようになった。

150周年を過ぎ、200年に向かう今日、既に故人となられた先輩の先生方や同僚及び後輩たち、共に祝うことはできませんが「母校は力強く歩み続けています」とご報告申し上げるとともに、幸運にもまだ活動できている自分が母校にお世話になったことに感謝し、そして在籍していたことを、私は誇りに感じております。

# 150年の歴史の中の一滴の足跡

鶴翔会副会長

岡山医療専門職大学学長

昭45 浅利 正二

岡山大学医学部（以下、医学部）は、明治3年設立の岡山藩医学館にその源を発し、以後脈々たる輝かしい歴史を刻み、令和2年をもって創立150周年という記念すべき年を迎えました。一卒業生としてまた鶴翔会の一員として心よりお慶びを申し上げます。

医学部は、創立以来、基礎医学や臨床医学および社会医学の領域さらには医学教育の領域等多岐に亘る領域において幾多の有為な人材を世に輩出し、地域はもとより日本及び世界に貢献してきています。地域に、日本に、そして世界に貢献された、あるいはされている卒業生の一人ひとりが医学部の宝であり、卒業生一人ひとりの歴史が医学部の歴史を創って今に至っていると思います。

そして医学部を支えてきた組織として鶴翔会があります。鶴翔会は1932年設立の岡山医学同窓会を母体とし、途中戦争により一時活動の中断を余儀なくされましたが、1964年に再スタートし、そして2006年にその名を鶴翔会と改め現在に至っています。その歴史は90年にも及びます<sup>1)</sup>。鶴翔会も卒業生の一人ひとりによりその歴史が創られたと言えましょう。

医学部が、そして鶴翔会がここまで長い歴史を積み重ねてこれたのは、ひとえに卒業生一人ひとりがもつ医学部（鹿田キャンパス）への熱い想い、そして鶴翔会への熱い想いによるものではないでしょうか。この想いこそが医学部を、そして鶴翔会を発展させてきた源流ではないかと思えます。創立150年が過ぎた今、医学部には、これからに向けてこの想いを学生時代に学生一人ひとりに芽生えさせ、また鶴翔会には、芽生えたこの想いを卒業生一人ひとりにさらに育み成熟させる責があると思えます。

一方では、医学部にしても鶴翔会にしても大きな組織であるが故にともすればそれらへの想いが薄れがちになることも否めません。医学部および鶴翔会が、いつも、そしていつまでも学生や卒業生の一人ひとりに想いをもたれ続けるためにはどのような存在であるべきか…私なりにその姿を考えてみました。その答えは、学生や卒業生の一人ひとりにとって、その存在が「身近」であり、その存在に「絆」を感じ「誇り」がもて、そして「夢」が語られ「心の故郷」として胸に刻まれ

る、このような姿になるのかな、と思う次第です。今こそ繋がることの大切さが認識される時代ではないかと思えます。「同じ釜の飯を食った仲間」…この古い言葉が思い出されます。

前述いたしましたように、卒業生の一人ひとりの想いがあるからこそ150年および90年かと思えます。私にも鹿田キャンパスには一方ならぬ熱い想いがあります。私は1964年に入学し6年間の学生時代を経て1970年に卒業し、その後は、約27年間を岡山大学で（脳神経外科16年、保健学科・保健学研究科11年）、約22年間をいくつかの関連病院で過ごし、直近の2年間は新設大学に勤めています。鶴翔会には定年退職後から役員としてお世話になり、2017年からは副会長を務めさせて頂いております。医学部および鶴翔会とのかかわりは足掛け57年程になります。時代により鹿田キャンパスへの想いはそれぞれですが、母校に対する感謝の気持ちを忘れたことは片時もありません。改めまして深く感謝の意を表したいと思えます。

様々な鹿田キャンパスへの想いは走馬灯のように頭の中を駆け巡りますが、中でもやはり青春を謳歌した学生時代が真っ先に頭に浮かびます。学生時代のひとは人生の中でまた格別のような気がいたします。多分皆様もそうではないでしょうか。ボート部へ入部し長期の合宿生活等でボートに明け暮れた日々、医学部学友会会長として西日本医科学学生総合体育大会（西医体）での4年連続総合優勝、それを受けて鹿田キャンパスへの体育館建設に向けて奔走した日々、紆余曲折の末、完成した体育館を目の当たりにした時の感動…西医体や体育館建設に捧げた若き情熱が今でも鮮やかに蘇ります。中でも鹿田体育館の建設にかけた情熱は青春そのものであったように思います。そして体育館は、私たち学友会を中心とした学生からの強い要望が実を結び1969年3月に竣工いたしました。続いて同年12月には武道館が併設されました<sup>2) 3)</sup>。この体育館や武道館はその後の改修を経て現在に至っています。創立150周年記念DVD「大河なる軌跡」の中にも体育館や武道館でスポーツに励む学生の姿が収録されていますが、このように学生たちが喜々として課外活動に励んでいる姿を見るにつけ、これらの施設が、学生たち

にとって将来の医療人としてのより深い人間性を培ってくれる場となればこれほど嬉しいことはありません。当時の私たち学友会の熱い想いが、医学部150年の歴史の中にほんの一滴ではありますが体育館と武道館の建設という足跡を刻んだと言えるのではないかとも思う次第です。

建設当時の体育館と武道館の雄姿を末尾に写真で示します。

稿を終えるにあたり、岡山大学医学部創立150周年を重ねてお祝い申し上げますと共に、輝く未来に向けて、今後ますますのご発展を心より祈念いたします。

- 1) 第6章 同窓会等の歩み、岡山大学医学部百五十年記念誌、p254～261、2020年
- 2) 岡山大学医学部創立99年目の軌跡—鹿田体育館建設への熱き情熱が今蘇る—、鶴翔会、110号、p33～38、2011年
- 3) 六. 体育館と武道館の建設、岡山大学医学部百年史、p804～805、1972年



建設後間もない頃の体育館（右）と武道館（左）

# 「メディカルテクノおかやま」とメディカルテクノバレー構想 - 16年間の歩みを振り返って -

NPO法人メディカルテクノおかやま元理事長  
新見公立大学学長  
昭49 公文 裕 巳

## 【1】はじめに

平成17年（2005年）4月に設立された「メディカルテクノおかやま（MTO）」は、令和3年（2021年）3月末をもって法人を解散して活動を終了しました。150周年記念号によせて、岡山県と岡山大学医学部が本格的に連携して医療産業クラスターの構築を目指してきた取り組みとして、16年間の産学官連携の歩みを振り返ってみたいと思います。

バブルの崩壊にともなう平成の不況が一段落し、その回復基調にあった平成15年（2003年）前後は、国のレベルでは、国立大学の法人化を前に、大学の研究成果を知的財産権として確保し、その活用により日本の産業界を活性化するための施策が矢継ぎ早に展開されていました。岡山県では、最終的に4期を務められた

石井正弘前岡山知事が、3期目に向けての新おかやま夢づくりプランの一環として、岡山の特徴を活かしたライフサイエンス分野の産業化を目指すクラスター構想を具体化されました。福祉機器開発を目指す「ハートフルビジネスおかやま」（2003年）、岡山TLOの設立（2004年）、「マイクロものづくり岡山推進協議会」（2004年）と「マイクロものづくりセンター」の開設（2005年）につづいて、おかやま医療産業クラスターの推進と情報発信の司令塔を担うためにMTOが誕生しました。

## 【2】メディカルテクノバレー構想

MTOは、2005年から法人化する2011年まで、現・公益財団法人岡山医学振興会内の組織として活動しました（図1）。岡山県ならびに岡山大学と川崎医科

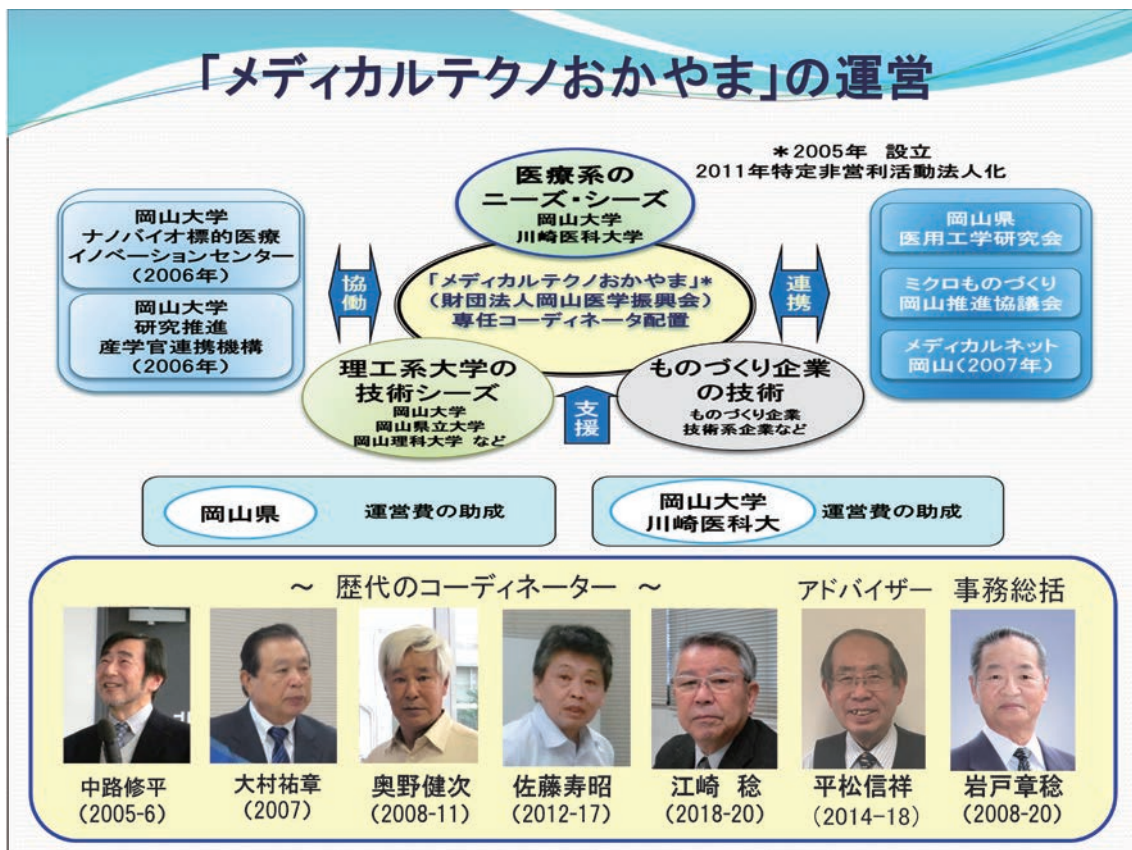


図1. メディカルテクノの運営と歴代の運営メンバー

大学からの助成と岡山県からの委託事業費を運営費として、県内の医療系大学の医療ニーズ・シーズ、理工系大学の技術シーズ、ものづくり企業の技術を連携・融合して、新たな医療産業や医療系ベンチャーを創出し、岡山県ならではの医療産業クラスターの形成を目指す「メディカルテクノバレー構想」の設計とその実現に向けて活動を開始しました。翌年、文部科学省・平成18年度科学技術振興調整費『先端融合領域イノベーション創出拠点の形成』プログラム、ならびに総務省Scope-Cの「少子・高齢化時代のいのちと健康を護る遠隔医療事業」に採択され、幸先の良いスタートを切ることができました。2007年には各クラスター創成事業と関連機関との有機的な連携関係が構築され、大学発ベンチャー企業の設立も続き、2008年3月にメディカルテクノバレー構想の概要を冊子としてまとめ、医療産業クラスター構築へのロードマップを公表しました(図2)。

### 【3】おかやまメディカルイノベーションセンター(OMIC)の提案

2009年9月にタイミングよく、科学技術振興機構(JST)の平成21年度地域産学官共同研究拠点整備事業の公募があり、「おかやまメディカルイノベーションセンター(OMIC)の整備」の題目で、岡山県を主

体として、岡山大学、岡山県経済団体連絡協議会ならびに島津製作所とともに応募しました(図3)。

岡山は、医療先進県として、優れた医療提供体制が構築されているものの、医療産業の育成は必ずしも進展していないという状況を踏まえ、医療先進県岡山にふさわしい中四国の医療産業拠点の形成を目指すメディカルテクノバレー構想をテーマとして提案しました。MTOの活動がスタートしていたこと、日本ステントテクノロジーや桃太郎源などの新しい医療系ベンチャー11社が始動していたこと、岡山大学ナノバイオ標的医療イノベーションセンターが設立されていたこと、岡山理科大学での人材育成事業が開始されていたこと、ならびに先端医療開発特区「スーパー特区」として、ナカシマメディカルと日本ステントテクノロジーが採択されていたことなどが、提案の実現可能性を示す要素となりました(図2)。

提案は、歴史と伝統のある岡山大学医療系キャンパス内に、研究・臨床の現場と直結した産学官共同研究・インキュベーション棟(地下1階、地上5階)を現在のJホールの位置に建設し、クラスター構築の拠点とする総事業費約29億円の構想でした。具体的には、先端医療を推進する医療系キャンパスに設置する日本初の本格的アニマル分子イメージング施設を核とする

## メディカルテクノおかやま と メディカルテクノバレー構想

### メディカルテクノおかやま

- ・ H17.4設立 会員数:288 (産:82 学:176 官、その他:30)
- ・ 情報の収集、発信、会員の交流
- ・ 共同研究の支援等 ・メディカルテクノバレー構想の推進(H19~)



### 《メディカルテクノバレー構想》

県内の医療技術の高度化を進めながら、新たな医療産業及び医療系ベンチャーの創出を進め、岡山県ならではの医療産業クラスターの形成を図る。

#### 医療系ベンチャー企業の育成

- ・ 県内大学発ベンチャー企業33社設立のうち、11社が医療系ベンチャー企業  
...日本ステントテクノロジー(株)、桃太郎源(株)、(株)NeoCel

#### 産学共同研究の推進

- ・ 県内企業と大学研究者の共同研究に対する支援(H17~H20 20件)

#### 岡山大学ナノバイオ標的医療イノベーションセンター(ICONTE)

- ・ がん医療を主たるターゲットとした「ヒトに優しい標的医療」の実現を目指した取組(H18~)

#### 人材育成

- ・ おかやま医療機器開発プロフェッショナル(H20~H24):岡山理科大学による人材育成

#### 先端医療開発特区「スーパー特区」の採択(H20)

- ・ 「生体融合を可能とする人工関節」...ナカシマメディカル(株)
- ・ 「先端的循環器系治療機器(冠動脈ステント等)の開発」...日本ステントテクノロジー(株)



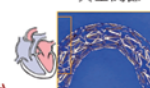
岡山リサーチパーク  
インキュベーションセンター



岡山大インキュベータ



人工関節



冠動脈ステント

図2. メディカルテクノおかやま と メディカルテクノバレー構想



### おokayamaメディカルイノベーションセンター(OMIC)の提案概要

JST 科学技術振興機構  
 平成21年度地域産学官共同研究拠点整備事業

**おokayamaメディカルイノベーションセンターの整備**  
 平成21年9月5日

岡山県産業労働部      〇三宅 昇      木村俊之  
 国立大学法人岡山大学      曾良達生  
 メディカルテクノおokayama      大村祐章      〇公文裕巳  
 岡山県経済団体連絡協議会      中島 博  
 株式会社島津製作所      吉田佳一

**岡山大学医療系キャンパスに整備することで、スムーズなイノベーションの創出が可能**

**おokayamaメディカルイノベーションセンター**  
 (地下1階、地上5階)  
 (総事業費:約29億円)

- インキュベーション部門 5F**  
 ●産学官交流スペース
- インキュベーション部門 3F, 4F**  
 ●インキュベーション施設
- 分子イメージング部門 1F, 2F**  
 (世界最先端の分子イメージング産学官共同研究の拠点)  
 ・がんをはじめとする治療薬、診断薬の研究開発に向けた共同研究設備

図3. 平成21年度地域産学官共同研究拠点整備事業への提案概要

### OMICの拠点構想

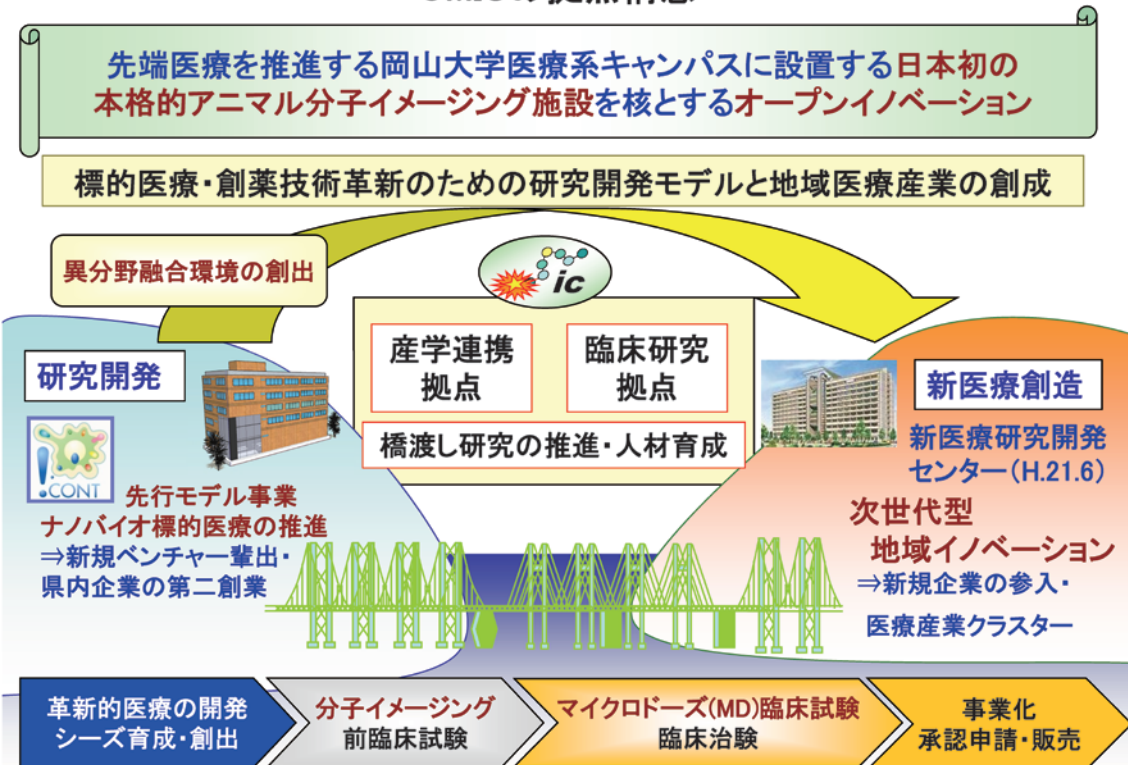


図4. OMICの拠点構想

オープンイノベーションの場の構築でした（図4）。先行モデル事業であるナノバイオ標的医療の推進とともに、メディカルテクノバレー構想の実現に向けて、2009年6月に病院内に設置されていた新医療研究開発センターを活用して、マイクロドーズ臨床試験の導入による標的医療、創薬技術革新のための研究開発モデルを構築して、次世代型地域イノベーションの実現を目指す提案は高く評価され、無事採択されました。なお、提案では岡山県の主導でMTOがOMICの運営管理を担当し、分子イメージング部門はA社に運営委託する計画であり、MTOは2011年4月に特定非営利活動法人になりました。

#### 【4】OMIC採択後の展開

OMICの採択が決定した2009年9月に民主党鳩山内閣が誕生し、民主党政権による事業仕分けで箱物予算は撤回され、分子イメージング部門は自然生命科学支援センター光・放射線情報解析部門に、インキュベーション施設は総合教育研究棟内に設置することになりました。運営組織体制も変更となり、新たに岡山大学OMIC事業推進本部が設置され、医歯薬学総合研究科産学官連携センター（初代センター長：公文裕巳、2015年3月まで）が担当することになりました。以

後、MTOは、OMICの後方支援の立場となりましたが、サイクロトロンをはじめとする分子イメージング関連の設備費846百万円、施設改修工事費334百万円、総額11億8千万円の事業費を用いて2011年4月27日にOMICは開設されました。

分子イメージング部門の機器が分散して設置されることになりましたが（図5）、単なるアニマル分子イメージング施設ではなく、分子イメージングを活用した創薬支援や治験薬評価のためにマイクロドーズ臨床試験を目指して新規PETプローブのGMP製造が出来る特色のある施設として整備されました。抗体のPETプローブ化技術を最重要課題として研究・開発を進め、2013年度には文部科学省の「先端研究基盤共用・プラットフォーム形成事業」を担う日本の34施設の一つに選ばれました（図6）。また、OMICが掲げた理化学研究所との連携大学院協定に基づく研究教育支援、学外研究機関との協働によるオールジャパンのオープンイノベーション拠点構想は、2013年度の岡山大学病院の臨床研究中核病院の基盤要素の一つとしてその採択に繋がりました。2014年に岡山大学病院は三度目の挑戦で橋渡し研究支援拠点となり、その後、2017年からは、AMEDの橋渡し研究支援拠点と医療法上の臨床研究中核病院として、名実ともに中国四国地区の医療機関



図5. OMICの分子イメージング部門

の核として臨床研究の支援を実施する施設となりました。

2013年度の岡山大学病院の臨床研究中核病院採択の際、マイクロドーズ臨床試験のために、当時新設予定であった中央診療棟にPET施設を設置する計画でしたが、なぜか実現されませんでした。OMICの高いポテンシャルと可能性を将来に活かすことが出来なかった残念な出来事であったと思っています。一方、OMICは、副センター長である松浦栄次教授のリーダーシップの下に、自立的運営に向けて稼働率の向上を目指し、2013年度よりは企業の利用も進み、2019年にはサイクロトロン・PET利用も学外企業の割合が52%となりました。

**【5】 交流と情報発信事業**

16年間のMTOの活動において、歴代のコーディネーターは企業・研究室訪問に精力的に取り組み、研究者のシーズを収集して多数のマッチング事例を積み上げるとともに、研究費獲得支援（JSTシーズ発掘など）を実施してきました（図1）。会員間の交流と情報発信事業にも注力し、会員（2020年度末の会員数:752人）に向けて377回のメールマガジンを発行し、86回の交流サロンを開催してきました。同時に、ベンチャーの

育成を支援するグローバルメディカルベンチャーサロンを27回、日本の大手製薬会社を会員として25回の遺伝子治療産学懇話会、ならびにOMIC推進事業としての19回のセミナーを開催してきました。また、医療系技術の高度化に寄与する団体の活動を支援する事業として、岡山県医用工学研究会の事務局を担当するとともに、2016年より、川崎医科大学大槻剛巳教授（MTO副理事長）の尽力で同大学でのKMSメディカルアークの開催を支援することができました。

**【6】 おわりに**

岡山ならではの医療産業クラスターの構築を目指すメディカルテクノバレー構想の実現を目指してきたMTOは、未だ道半ばではありましたが、16年間の活動を終了しました。向後は、構想の実現に向けて提案し、2009年に開設され、時代の流れとともに著しい発展を遂げ、次世代医療橋渡し研究支援拠点（ARO）としての充実した支援体制と連携・協働体制を確立した新医療研究開発センターが、岡山ならではの医療産業クラスター構築の新しい未来を拓いてくれるものと期待しています（図7）。

最後に、16年間の長きに亘りご支援をいただきました多くの皆様に心より御礼を申し上げます。



図6. OMICの研究展開

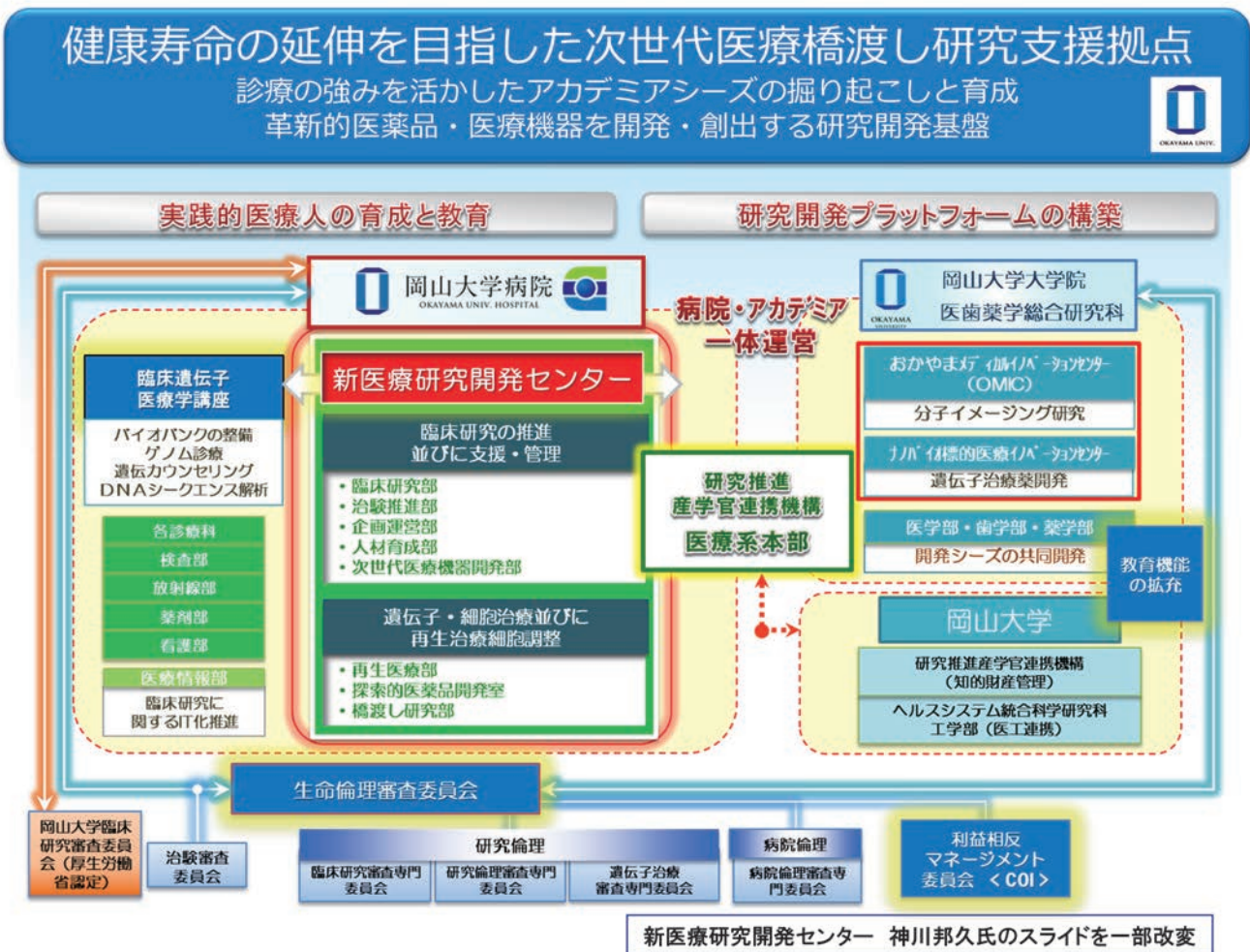


図7. 岡山大学病院橋渡し研究支援拠点の概要

## 鶴翔会東海支部の35年

鶴翔会東海支部会長  
昭50 井上喜久男

令和4年の元旦が過ぎたころ、鶴翔会から150周年記念号への寄稿のお誘いの手紙を頂きました。東海支部の歴史を辿ってみるよい機会と考え、本部から頂いた資料と私が所有している岡山医学同窓会報を参考にしてこれを書いております。

東海支部の結成は昭和61年、菊の花薫る10月18日、名鉄グランドホテルで結成総会が開催されました。それまで東海地域（愛知、静岡、岐阜の3県）には支部が無かったのですが、卒業生の強い希望があり、兼松武雄先生（昭22）が代表発起人となり発足いたしました。榊原渉先生（昭8）（在任1986～1997）が支部長に選出され、以後難波益之先生（昭26）（1997～2001）、井谷徹先生（昭47）（2001～2009）、その後は井上喜久男（昭50）（2009～）が担当しております。

会員数は支部が設立された昭和61年には79名、現在は120名前後でしょうか。この35年で随分会員数は増えておりますが、総会に参加される先生方の数はそれほど増加はないようです。残念ながらここに掲載できませんでしたが、結成総会の写真を拝見しておりますと懐かしさがこみあげてまいります。この時の出席者の大半は昭和20年代ご卒業で、若造であった私とは二回りも年上の方々でした。その後ほぼ毎回総会に出席し、諸先輩との交流から多くの事を学ばせて頂きました。

鶴翔会総会は、同窓の幅広い年代の先生方が分け隔てなく一堂に会し、旧交を温めることが出来る2年に一度の楽しい機会です。令和元年以後は総会も幹事会も開くことが出来ませんが、心休まる時が参りましたら、再び集まり楽しい時を過ごしたいと考えております。

地理的には東海地方は母校のある岡山県とはずいぶん離れており、また3県で6つの医科大学があります。会員の皆様も地元医科系大学とそれぞれ強い繋がりがあり、そして多くの先生方が東海地方の医科系大学や研究所でご活躍されております。令和元年11月の総会の際は、若い先生方が数多く参加され、ご近況や現在取り組まれているお仕事の内容を伺い心強く感じました。今後とも、総会に多くの会員のご出席を願い、鶴翔会東海支部の発展を祈願する次第です。

最後になりましたが、岡山大学医学部創立150周年、

おめでとうございます。卒業生の一人として、青空の中に富士山を見上げるような誇らしさを感じております。

これを書くに当たってご協力頂いた鶴翔会事務局の方々に感謝いたします。



## 岡山大学医学部と広島市民病院の歩み

広島市立広島市民病院 特任病院長  
昭57 塩崎 滋 弘

岡山大学医学部創立150周年、誠におめでとうございます。このような節目の機会に、鶴翔会会報記念号に寄稿させていただけることを光栄に思います。

私、1982年（昭和57年）に岡山大学を卒業し、折田薫三教授が主宰されていました第一外科に入局しました。その後帰局し、大学院を経て、1991年（平成3年）2月現在所属している広島市立広島市民病院（当時は社会保険広島市民病院；2003年に改称）に赴任しました。赴任後、消化器外科、主に肝胆膵外科の診療を行い、2022年までで31年間勤務させていただきました。肝胆膵外科に携わった頃は、まだ症例も少ない状況でしたが、その後手術症例も増え、日本肝胆膵外科学会高度技能専門医修練施設Aに認定され維持していますが、関係していただいた多くの先生方のおかげと感謝しています。

広島市民病院は、多くの臓器のがん診療や心臓・血管手術などの循環器疾患、総合周産期母子医療など高度先進的医療と、北米型ERを目指した救急医療を2本の柱として、中四国のみならず全国有数の病院に発

展してきました。その歴史の中で当院と岡山大学とは切っても切れない非常に密接な関係があります。

当院は、まだ原爆の惨禍の跡が強く残る広島市の西練兵場の一隅に、1952年（昭和27年）8月に誕生しました。開院当時は、内科、外科、産婦人科、小児科の4科で僅か89床、医師8名という小さな病院であり、そこからのスタートでした。現在病院の周辺は、広島市の中心となる官庁街と賑やかな商業地域となっていますが、当時は何もない廃墟の中に、新しい病院がポツンと建っている状態だったようです（図1）。病院の開設に大きく関与されたのが、私の所属する第一外科の大先輩で当院の初代病院長の甲斐太郎先生（昭和11年卒）でした（図2）。甲斐先生は、岡山大学付属医専教授、国立岩国病院長心得を歴任されたのち、広島に着任され、当院開設から1982年（昭和57年）3月までの30年間という長い間、病院長ならびに広島市民病院事業管理者として当院を牽引されました。僅か89床から743床の総合病院という発展は、甲斐先生なくしては、全く語れないほどの重要な影響を与えた方で

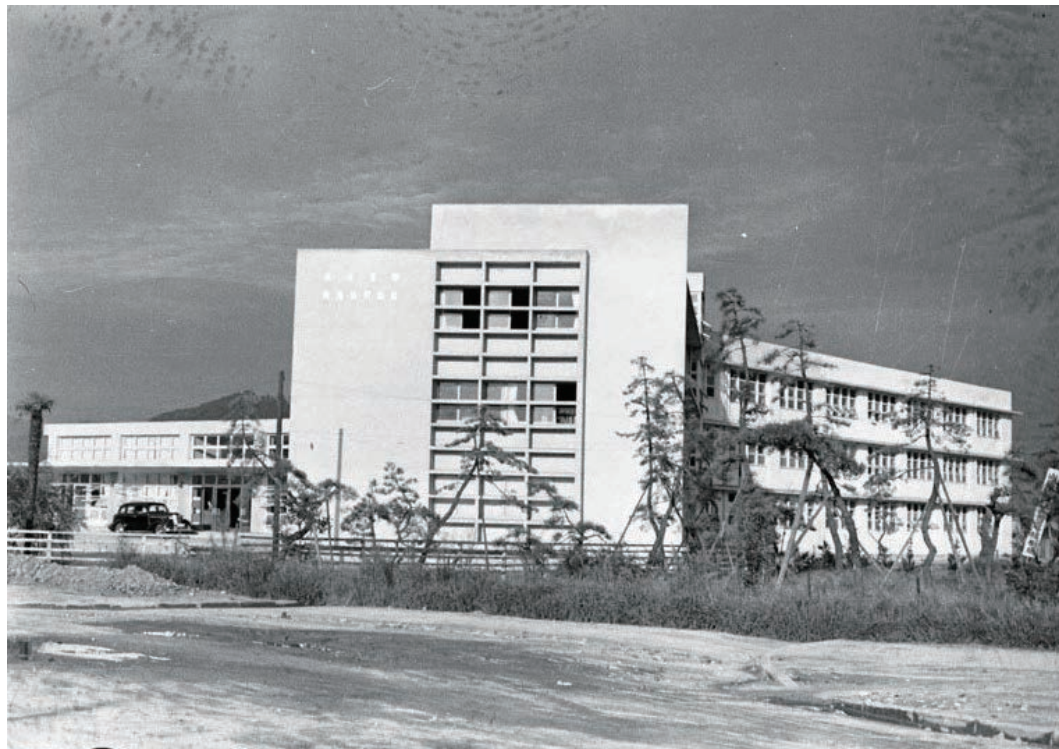


図1 開院当時の広島市民病院（広島市民病院ホームページより）



図2 甲斐太郎先生  
（病院三十年誌より）

す。医療においても、病院経営においても、誰もが認め誰もが慕うスーパースターであったようです。

その甲斐先生のもとに、多くの若い優れた先生方が集まり、病院の基盤を築いていきました。1953年（昭和28年）には、耳鼻咽喉科、眼科、歯科、1954年（昭和29年）には皮膚泌尿器科が新設され、総合病院に向けて急速に発展していきました。1959年（昭和34年）4月には、甲斐病院長の肝いりで心臓外科が開設され、のちに広島大学の教授として転任される田口一美先生が第二外科から着任され、心臓外科が発足しました。その後も全国有数の心臓・血管外科として大いに発展を遂げています。1977年（昭和52年）には救命救急センターを開設しましたが、当時は当院を入れて全国でわずか4施設のための認定でした。救命救急センターは、その後も広島の救急医療を支える中心の施設となっています。その後内科、外科、小児科が細分化されたことや、麻酔科、精神科、脳神経外科、病理診断科など多くの科が新設されたことで、1992年（平成4年）には、当院過去最大の820床を有する総合病院となりました。現在は743床、37科で運営していますが、広島市民、県民の信頼を最も得ながら、広島県で最多の患者を診療する病院として機能しています。

病院長は、初代が前述の甲斐太郎先生、第2代は開院時に小児科を開設された村上基千代先生、その後佐々木甲子郎先生（内科）、畠山哲朗先生（外科）、赤木笑入先生（内科）、吉田彦太郎先生（皮膚科）、柴田醇先生（内科）、岡崎富男先生（小児科）、大庭 治先生（心臓血管外科）、荒木康之先生（内科）と引き継がれてきました。2021年には広島大学から秀 道広先生が病院長に就任しましたが、同時に私が特任病院長に就き、110名を超える医師を派遣していただいている岡山大学の窓口となっています。

広島市民病院は、この広島の地でこれからも岡山大学医学部に支えていただきながら、さらに発展していきたいと思えます。今後とも岡山大学の各教室および諸先生方のご指導ご鞭撻を何卒よろしく願います。



## 「地域を守る、組織を守る」さまざまな視点

岡山県保健福祉部 保健医療統括監

昭61 則安俊昭

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が令和元年末から世界中に急速に拡がりました。感染者は令和4年1月までに、国内で累計約200万人、致死率約1%、岡山県では累計約17,000人、致死率約0.8%となっています。令和2年の時点では、致死率が2~3%と非常に高く、放置すれば戦争に匹敵する災禍になり得るものでしたが、ワクチン接種の普及と治療法の進歩等により、罹患時のリスクは大きく低下してきています。令和4年1月からオミクロン株の感染がこれまでになく急激に拡大し、その感染力の強さが恐れられています。ほとんどは軽症で、重症者の割合は低くなっています。今後、致死率が低いまま維持されれば、この感染症が新型インフルエンザから、季節性インフルエンザ等と同じ5類感染症に見直されるのではないかと淡い期待を抱いています。

私は、病院で放射線科医として10年間勤務した後に転身し、その後四半世紀、行政の中で仕事をしています。その間、このたびのコロナ禍をはじめ、岡山大学病院や岡山大学関係の多くの医療機関の皆様、多くの同窓の先生方に多大にお力添えをいただきました。岡山大学医学部同窓会の一員であることの有難さが身に沁みています。

岡山大学医学部同窓会におかれましても、10年以上も前から周到に準備を進めてこられた150周年記念行事が、このCOVID-19の蔓延により縮小を余儀なくされたことは誠に残念ではありますが、この未曾有の災禍に対して同窓会関係者が力を集結して克服した年となれば、この150周年が今後の発展につながる節目になると信じています。

さて、今後、コロナ禍がひと段落すれば、国の財政支出は従前どおりの抑制方向に振れると予測される所です。医療機関の開設者や管理者の方々は、健全経営を維持するために、法令・制度に基づく規制、診療報酬改定、働き方改革などについて現状のルールを理解しておくことは元より、これまで以上に感度を高めて情報を収集し的確に解釈して、社会が向かうであろう方向を見通して経営方針を決める必要があるように思います。

人口の高齢化による社会保障費の増大と、少子化・人口減少による社会の支え手・財源の不足が現実視される中、世界に冠たる日本の国民皆保険制度を継続性のあるものにするために、効率の良い医療提供体制の構築を目的とする地域医療構想の実現、また、住民一人一人が要介護状態になっても住みたいところで暮ら

すことが出来る地域包括ケアシステムの構築などが、社会の大きな課題になっています。

こうした流れの中で、診療報酬は厳しい改定が続き、また、介護保険施設や自宅での看取りなども増える傾向にあり、こうしたことに適応して行くことが求められています。地域住民へ良質な医療を提供し続けるためには健全経営が欠かせません。「鳥の目、人の目、蟻の目」など、物事・課題に多様な視点をもって対処することの大切さがしばしば語られます。診療上の課題、医療連携上の課題、経営収支や労務管理上の課題、地域に求められる役割を果たす上での課題など、それぞれ視点や解決手段が異なります。これらを総合して最適の方針を決定し、組織を挙げて、そして地域の関係者とも協調しながら、力を集結して進むことが必要になっています。

このたびのCOVID-19への対応についても、職員一丸となって感染防止対策を整え、地域のニーズに的確に応えるべく柔軟に対応した医療機関と、そうしたことをしなかった医療機関では、その影響は全く違ったのではないのでしょうか。

さて、COVID-19との戦いが続く中で、岡山県では、県行政に従事する公衆衛生医師が不足しており、常時、医師を募集しています。

公衆衛生医師として真摯に業務と住民に向き合えば、多職種に囲まれ楽しく仕事ができ、達成感、遣り甲斐を十分に感じられます。また、勤務を通じて得られた知識や技術、経験、人脈は、たとえば臨床に復帰しても必ず役に立ちます。

県職員として勤務する中で、社会医学系専門医研修プログラムの専攻医として地域社会の状況や流れを俯瞰しながら専門的な知識と技術を身につければ、将来、行政組織の幹部職員として、あるいは、医療機関等の幹部職員としてなど様々な分野で、培った能力を十分に発揮し社会に貢献していただくことができます。また、岡山大学大学院での学位の取得、あるいは、勤務時間外に職務上の権限の及ばない病院等で有償での兼業を可能にするなど、将来の可能性を広げられる体制も整えているところです。

社会の情勢も短期間に大きく変化する時代が到来しており、働く場所や働き方についても柔軟な発想を持って自ら積極的に選ぶ時代に入ったと感じています。興味を持たれた方は是非ともご一報ください。医療・保健・福祉という幅広い領域を制度・システムの側から支える仲間になってもらえると嬉しいです。



# 岡山大学医学部150周年に寄せて

鶴翔会福岡支部長

平4 谷 原 真 一

岡山大学医学部同窓会会員の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。縁あって鶴翔会福岡支部長を令和2年度（2020年度）より拝命いたしております。個人的なことではありますが、岡山大学医学部医学科を卒業後、大学院医学研究科に進み、衛生学講座（当時、現在は疫学・衛生学分野）にて学位を取得した後は自治医科大学公衆衛生学講座、島根医科大学（当時、現在は島根大学医学部）、福岡大学、帝京大学大学院公衆衛生学研究科を経て、現在の勤務地である久留米大学まで、母校を離れて様々な大学を渡り歩いてまいりました。いずれも岡山とは離れておりましたが、随所に岡山大学医学部同窓会の関係者がおられ、色々な面で支えていただきました。この場を借りてお礼申し上げます。

さて、2020年に岡山大学医学部は創立150周年を迎えました。現在のわが国には医学部を有する大学が82校ありますが、これだけの歴史を有する医学部はごく限られております。岡山大学医学部は明治3年（1870年）設立の岡山藩医学館を礎としております。その当時はまだ医師に関する資格制度はありませんでしたが、明治7年（1874年）の「医制」公布により免許制度が導入されました。明治10年（1877年）時点では藩が設置した医学校を母体とする公立医学校が各地に設置されており、また医制により導入された医術開業試験を受験するための予備校的な私立の医学校が多数設置されました。

しかし、明治19年（1886年）に東京大学医学部が帝国大学医科大学となった時より、当時の公立医学校の多くが廃校となり、私立の医学校も急速に数を減らしました。明治21年（1888年）時点では官立（帝国大学医科大学（東京））1校、官立（高等中学医学部）に移管された5校（千葉、仙台、岡山、金沢、長崎）、公立医学校として存続した3校（京都、大阪、愛知（名古屋））、私立医学校4校の合計13校に絞られました。官立（高等中学医学部）の一つである第三高等中学校医学部が岡山大学医学部の前身となります。

わが国の医学部について検討する際に、旧帝（旧制帝国大学）、旧六（旧制医科大学）、旧医専（旧医学専門学校）、新設医科大学のようなカテゴリを用いた分類が行われることがあります。しばしば、このカテゴ

リの順に医学部の歴史があるかのような印象を持つ方が多いと思います。しかし、わが国の大学制度の歴史と医学教育制度の歴史は深く関係していますが必ずしも一致しているわけではありません。

例えば、京都の公立医学校は京都府立医科大学の前身であり、現在の京都大学医学部の前身となる京都帝国大学医科大学が設立されたのは明治32年（1899年）となります。九州大学の前身である京都帝国大学福岡医科大学は明治36年（1903年）に設立されました。北海道大学の前身である北海道帝国大学は大正7年（1918年）に農科大学として設立され、医学部が設置されたのは大正8年（1919年）となります。旧制帝国大学以外にも、藩立の医学校を母体とする公立医学校が廃校となった際に附属病院のみが存続し、しばらく経った後に病院を母体とした医学校が改めて設置された例があります。そのため、岡山大学医学部のように明治時代初期に設立されてから医師養成機関としての役割を途切れることなく継続してきた医学部はごく限られています。

今回、母校である岡山大学医学部の歴史を振り返り、全国に82ある医学部の中でも屈指の歴史の長さを有していることを改めて認識することができました。恥ずかしながら、岡山大学医学部卒業当時は、この歴史の価値を十分認識することができておりませんでした。卒業後母校を離れてから長い時間が経過しましたが、こうして鶴翔会に関わる機会を得ることができました。岡山から離れた福岡の地にありますが、母校の歴史を次世代につなげられるような活動に今後取り組んでいきたいと考えております。岡山大学医学部同窓会会員の皆様の今後ますますのご発展を祈念いたします。

## ご挨拶

### 吉野 正教授 ご退任



#### ご挨拶

2022年3月末日をもって退任しました。1975年に本学に入学後47年経ったこととなります。この期間、恩師、先輩、同僚、後輩、教室スタッフ、大学院生、学内外の多数の共同研究者に大変お世話になりました。すべての方々に深く感謝申し上げます。とりわけ入局時の故小川名誉教授はドイツ留学でホジキンリンパ腫の研究をされ、先代の赤木忠厚名誉教授は成人T細胞白血病リンパ腫の研究を主導され、わたくしがリンパ腫を専門にしたのはそのような縁を感じるところです。2003年に教授に就任し、20年弱になりますが、幸いなことに主として病理医を目指すひとが60名入局し、大学院は博士号取得が52名、修士号が26名で、各種専門医取得者が61名となりました。彼らの積み上げてくれた業績が第二病理（腫瘍病理）のすべてを支えてくれました。学会等の受賞がのべ22件というのも誇りとするところです。退任時に6名の大学院生が残っており、この方たちのことを後に託すこととなります。リンパ腫では世界で20名余りのトップ研究グループの一員として活動することができ、2018年にはその会議を岡山大で開催しました。教授になってから修士専攻長、学科長、学部長、副学長として約10年間アドミニストレーターとして活動できたのも、教室の諸君がしっかりと運営をしてくれたおかげで、重ねて御礼申し上げます。

学部長時代には多数の新築、改修工事が同時並行でなされ、最大10件以上になりました。頭を痛めたのは駐車場問題で、これについては事務方とタッグを組んだことにより乗り切ることができました。文科省から「ミッション再定義」ということで本学医学部の立ち位置を示すよう求められ、学内のいろいろな先生方に変にお世話になりました。文科省の評価はかなり高く、途中経過では一部旧帝をはじき出すようなことになっていましたが、結果的にいつもと同じような位置づけにされてしまったのは残念でした。しかし、その後には研究大学、臨床研究中核病院、橋渡し研究拠点などの

成果により影響を与えてくれたものと信じています。また、2021年まで約10年間にわたって医学部創立150周年記念事業に携わることとなりました。これは140周年のあたりからスタートしたもので松井前委員長から引き継いで種々の試みをしました。いろいろな事業を行うには先立つものが必要で、関連施設同窓生はもちろんのこと、山陽新聞社越宗会長が後援会を組織くださり、一般企業へも依頼申し上げました。学長を始めとする医学部、保健学研究科の執行部教授陣、研究科病院の事務方、鶴翔会事務局の方々に大変お世話になりました。結果として7億円の目標に対して90%以上の募金を集めることに成功しました。学内の方々、学外の関連施設の方々から約6割、そして一般市民企業から約4割のご寄付をいただいたことは特記すべきことです。支出としては人材育成に1億円以上、旧生化学棟と講堂の大規模改修、病院11階のフロア150の一部、また、故福武純子様が私財8億円を投じて建設くださったJunko Fukutake Hallにも一部拠出しました。後者は150周年事業と同一ではありませんが、不可分の存在となりました。

退任にあたって、いろいろなことが思いだされます。後を託するみなさまには150周年の歴史の重みを十分に感じて世界に冠たる存在になっていただきたいと思います。大変にお世話になりました。

#### 略歴

- 1981年3月 岡山大学医学部医学科卒業
- 1985年3月 岡山大学医学部医学研究科修了
- 1985年4月 岡山大学医学部附属病院病理部医員
- 1985年10月 高知医科大学助手（病理学第二講座）
- 1986年4月 岡山大学助手（病理学第二講座）
- 1990年8月 米国Stanford大学病理学教室
- 2001年4月 岡山大学大学院医歯学総合研究科講師（病理・病態学講座）
- 2003年4月 岡山大学大学院医歯学総合研究科教授（病理・病態学講座）
- 2005年4月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科教授（病理・病態学講座）
- 2007年4月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科医歯学（修士課程）専攻長
- 2008年4月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科教授（病理学（腫瘍/第二）講座）
- 2009年4月 岡山大学医学部医学科長
- 2011年4月 岡山大学医学部医学部長
- 2014年4月 岡山大学副学長（2017年4月まで）
- 2018年6月 日本病理学賞受賞
- 2022年3月 定年退職

## 岡田裕之教授 ご退任



### ご挨拶

令和4年3月末日をもちまして岡山大学を退任するにあたり、鶴翔会の先生方をはじめお世話になったすべての方々に心より御礼申し上げます。

私は昭和59年に岡山大学を卒業後、岡山大学第一内科に入局し（長島秀夫教授）、平成6年6月から教官として岡山大学に在職させていただきました（辻孝夫教授）。以来28年間にわたり、医師としての診療、教官として学生、大学院生、若手医師の指導、そして研究において母校で携わってこれましたことを大変幸せに感じますと共に深く感謝いたしております。

平成22年12月には岡山大学病院光学医療診療部教授・光学医療診療部部長を拝命し、消化器内視鏡診断・治療をさらに発展させるべく務めてまいりました。平成27年6月に山本和秀教授の後任として消化器・肝臓内科学教授に就任いたしました。そして目指すものとして～①地域の最後の砦病院としての役割を果たす。②消化器病のエビデンスを岡山から世界へ発信し、実臨床にフィードバックする。③適材適所の人材配置でそれぞれがプレゼンスを示す～を掲げてきました。医局員もみんなモチベーションが高く、お互い切磋琢磨して取り組んでくれました。消化管、肝、胆・膵疾患いずれも他院での治療困難例や重篤な合併症を有した患者さんの紹介例が多いのが特徴ですが、地域あるいは全国的にも有数の診療実績を挙げています。臨床研究では中四国そして兵庫県に広がる関連病院の先生方と連携して多施設共同研究を進め、多くの英論文発表に仕上げることができ、また、国内外の様々な受賞にも繋がりました。基礎研究においても海外留学経験者を中心に指導者が育成され、大学院生も含め層が厚くなってきており、実績が形となって現れてきております。また、在任期間（平成27年～令和3年）に101名の先生方が入局してくれました。これからの岡山大学、そして関連病院の診療・研究を担ってくれるものと期待しております。

消化器・肝臓内科学教授就任後も引き続き光学医療診療部部長を併任させていただきました。ご存知のとおり消化器内視鏡の領域は機器の発達とそれを用いる技術や新たなデバイスの改良により目覚ましく進歩いた

しております。一方で保険診療点数、経費率の面からも病院経営上、大きな採算部門であり、その診療機能の充実は岡山大学病院の経営、経済的基盤の向上に寄与するものと考えます。平成22年度7800件だった内視鏡件数も平成30年には12000件を超える件数に増加しました。国立大学ではベスト3に入る件数です。その間、中央診療棟4階（平成21年）および総合診療棟2階（平成29年）への移転に際し、2回にわたって内視鏡室の設計を任せられ、他大学や他病院の内視鏡室の見学も経て携われたことは非常に良い経験をさせていただいたと思っています。

平成25年には胃癌予防を目指したヘリコバクター・ピロリ除菌療法の保険適用が拡大されましたが、それに先駆けて平成22年に中四国の大学病院では初の自由診療でのピロリ菌専門外来を開設しました。保険適用のない三次以降の除菌やペニシリンアレルギーのある人の除菌の紹介例が中心となっており、7次除菌成功例も含め現在まで500例を超える除菌に関わることができました。そして細菌学教室との連携により硝酸塩還元菌などピロリ菌以外の細菌の胃癌発症への関わりについて等々の研究を進めています。また病理学教室との連携で組織学的胃炎を評価し、除菌後胃癌発症のリスクを考慮したサーベイランスを行っております。また、萎縮性胃炎が進行していない若い世代での除菌が胃癌予防により有効であると考えられ平成26年からは岡山大学新入生の健康診断時の余剰血清を用いて保健管理センターのご協力のもとピロリ菌感染検診を行い、陽性者には内視鏡検査を行い除菌治療を行っております。我々と細菌学教室の研究費とマンパワーの関係で鹿田キャンパスの学生だけになりましたが、2500人以上の検診を行うことができました。さらに除菌前後の腸内細菌叢の変動について研究を進めているところです。ちなみに新入生の最終的な現感染者は5.8%でした。また、消化器外科と共同での腹腔鏡・内視鏡共同手術や食道癌の遺伝子治療にも関わることができました。一方、近年本邦においても潰瘍性大腸炎、クローン病患者が増加しており、大学病院へ難治例の紹介が増えてきていました。他診療科、メディカルスタッフとの協力体制によるチーム医療が重要な領域であり、平成28年9月大学病院に炎症性腸疾患センターを設立いただきました（平岡佐規子センター長）。病病連携、病診連携も実践しながら、新薬も次々と誕生しているなか多くの治験にも積極的に参加しています。

平成31年4月には消化管癌内視鏡治療における国内有数のハイボリュームセンターである大阪国際がんセンターと連携大学院を提携し、大学院生を派遣し、ス

キルアップだけでなく臨床研究の手法も磨いて帰局してフィードバックしてくれています。

令和元年4月、内視鏡AIの開発、岡山市東部の消化器領域の地域医療の啓蒙を目指す実践地域内視鏡学講座（寄付講座）（河原祥朗教授）の設立、そして令和4年4月には肝・腎疾患連携推進講座（共同研究講座）（高木章乃夫教授）が開設予定であり、岡山大学関連の地域の病院と連携して研究と地域医療の充実を目指しています。

後輩たちがそれぞれの領域でさらなる発展を遂げてくれるのを期待すると共に、岡山大学全体として診療、研究、教育がさらに充実して益々躍進していくことを祈念いたします。

最後になりましたが、この職責を全うするにあたり共に歩んだ医局の先生方、ご支援、ご指導いただいた同門、そして学内外の同窓の先生方、本当にありがとうございました。

#### 略 歴

- 1984年3月 岡山大学医学部医学科卒業
- 1984年4月 岡山大学医学部第一内科学教室入局
- 1984年10月 市立備前病院内科
- 1988年8月 岡山大学医学部附属病院第一内科研究生
- 1991年11月 岡山大学医学部附属病院第一内科医員
- 1993年1月 赤磐郡医師会病院内科医長
- 1994年6月 岡山大学医学部附属病院第一内科助手
- 2002年6月 岡山大学医学部附属病院第一内科病棟医長
- 2004年4月 岡山大学医学部・歯学部附属病院消化器内科講師、同光学医療診療部副部長（併任）
- 2005年8月 岡山大学医学部・歯学部附属病院消化器内科医局長
- 2008年4月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科消化器・肝臓内科学准教授
- 2010年12月 岡山大学病院光学医療診療部教授
- 2015年6月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科消化器・肝臓内科学教授  
岡山大学病院光学医療診療部長（併任）
- 2016年9月 岡山大学病院炎症性腸疾患センター長（併任）（～2018年3月）
- 2021年4月 岡山大学学術研究院医歯薬学域消化器・肝臓内科学教授

## 山田了士教授 ご退任



#### ご挨拶

延々と続くコロナ禍、第一線で対応しておられる会員の皆様に感謝いたします。2022年3月末日をもって岡山大学での定年退職を迎えるにあたり、ご挨拶申し上げます。

入学以来途切れることなく、岡山大学のお世話になって参りました。他学や海外で働いていた時も含め、直接間接を問わず本学と繋がりがあことは常に心の支えになっていました。本学の教授としては、在任期間も7年とやや短めでしたし、また誇れるような業績は何も残せませんでした。しかしこの間、教室員の皆さんが診療、研究、教育のそれぞれにおいて数々の素晴らしい業績を挙げ、かつてないほど多くの学会賞や臨床活動の受賞の栄に輝きました。こうした活躍によって、岡山大学の力を内外にアピールすることに貢献できたことを何より誇りに思っております。

私たちの教室と同門は、互いに自由に考えを言えること、様々な意見が尊重されることにおいて優れた気風があります。私はこの伝統を大切にすることを銘じて参りました。もちろん私の至らなきのために反省すべき点も多々ありましたが、それでも年々風通しは良くなってきたように思います。これも、医学部、大学院、病院の皆様方から、寛容なご理解とご支援を頂いたおかげであると心より感謝いたしております。

いま国内ではパンデミックの中を、格差の増大や国力の減衰といった我々の世代が経験したことのない現実が覆っており、精神疾患を持つ人々にはますます生きづらい世の中になってきています。しかし、こうした不穏な状況を単に不幸と捉えるのではなく、新しい世界への変化の予兆と考えて、今後に備えるべきかと思えます。これからの世代の方々に穏やかで生き生きとした未来が訪れることを願ってやみません。

最後になりましたが、鶴翔会会員の皆様に幸多きことを願って、御礼のご挨拶といたします。

#### 略 歴

- 1975年3月 香川県立高松高等学校卒業
- 〃 4月 岡山大学医学部医学科入学
- 1983年3月 同 卒業
- 〃 5月 岡山大学病院精神科神経科 研修医

1984年4月 広島市民病院精神科神経科 研修医  
 1986年4月 岡山大学病院精神科神経科 医員  
 1988年10月 南和会みどり病院神経科 医師  
 1989年2月 ニュージーランド・オタゴ大学心理学部  
 研究員  
 1991年3月 岡山大学病院精神科神経科 助手  
 1998年7月 同 講師  
 2007年11月 川崎医科大学精神科学教室 准教授  
 〃 12月 川崎医療福祉大学臨床心理学科 教授  
 (兼担)  
 2010年8月 川崎医科大学精神科学教室 教授  
 2015年4月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科精神  
 神経病態学 教授  
 2021年4月 岡山大学学術研究院医歯薬学域精神神経  
 病態学 教授

建術のニーズが増え始めた時期で様々な再建術が可能な当院形成外科とのタイアップにより、手術件数が飛躍的に増加しました。それに伴って多くの臨床試験や学会発表を行い、またリハビリとの連携やプレストカウンセラーの任用などさらに充実した乳がんチーム医療が行えるようになりました。2010年には若手乳腺外科医の育成や乳腺専門医取得のための教育を目標にNPO瀬戸内乳腺事業包括的支援機構を設立しました。このNPOは中四国地区で乳腺外科を目指す若手医師の発表や論文の読み方の指導、ハンズオンセミナー、看護師・薬剤師とともにチーム研修会、ピンクリボン運動などを行ってまいりました。また国際貢献といたしまして岡田 茂名誉教授からのご依頼もあり、ミャンマーにて乳がん検診システムを構築いたしました。これまで数回ヤンゴン、マンダレーを訪問し、視察とともに乳がんの教育をしてまいりましたが、乳がん検診は年々円滑に行われるようになるとともに乳がん発見率は上昇し、また岡山大学で外科トレーニングを受けた先生がミャンマーでトップクラスの乳腺外科医になっていることを知りまして大変嬉しく思っております。

以上のように大学病院の生活27年間、長くもあり、あっという間に過ぎた感じもありますが、昨年9月山陽新聞社会事業団より「松岡良明賞」を受賞することができましたのは私がこれまで地道に行ってきた仕事が報われたように思い、大変光栄に存じております。

最後になりますが、これまで支えていただきました乳腺・内分泌外科の医局員ならびに鶴翔会の先生方に感謝申し上げますとともに益々の発展を祈念いたします。

## 土井原博義教授 ご退任



### ご挨拶

このたび2022年3月をもって岡山大学を退任するにあたり、これまでご支援を賜りました鶴翔会、同窓の先生方にご挨拶を申し上げます。

私は1982年岡山大学医学部卒業後、外科医として尊敬しております寺本 滋教授が統括されております第二外科に入局いたしました。入局後松山の国立病院四国がんセンターで高嶋成光先生（現名誉院長）のもと10年間腫瘍外科の基礎、手術および腫瘍病理学、特に乳癌について研鑽を積んだ後、1994年岡山大学第二外科（現呼吸器・乳腺内分泌外科）に助教として帰局いたしました。四国がんセンターでの経験をふまえ大学病院では患者、家族の皆様の満足を得るためにチーム医療の充実や関連他科とのシームレスな診療を目指すべくいくつかのセンターを立ち上げました。2006年内分泌内科の大塚文男先生（現総合内科教授）とともに内分泌センターを設立、内分泌疾患、特に甲状腺、副甲状腺疾患について共同で診療、データの共有、基礎研究などを開始しました。また2008年にはエビデンスに基づいた乳癌診療、整容性を求めた手術を目標として形成外科学の木股敬裕教授をはじめ看護師や精神腫瘍やリハビリを担当する先生とともに乳がん治療・再建センターを設立しました。当時乳房再

### 略 歴

1982年3月 岡山大学医学部 卒業  
 1982年4月 岡山大学医学部第二外科 入局  
 1982年9月 総合病院岡山市立市民病院外科  
 1984年6月 国立病院四国がんセンター  
 1990年3月 学位取得  
 1994年8月 岡山大学医学部第二外科助手  
 1997年4月 同上 講師  
 2003年10月 岡山大学病院 乳腺・内分泌外科 診療科長  
 2006年9月 岡山大学内分泌センター 外科部門長  
 2006年10月 岡山大学腫瘍センター 外来化学療法部門長  
 2007年4月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科腫瘍・胸部外科 准教授

2008年5月 岡山大学乳がん治療・再建センター 設立 センター長  
 2010年3月 NPO法人瀬戸内乳腺事業包括的支援機構 理事長  
 2010年12月 岡山大学病院 乳腺・内分泌外科 教授  
 2021年9月 松岡良明賞 受賞

## 岡山大学学術研究院医歯薬学域 薬理学分野教授に 細野祥之氏 ご就任



### ご挨拶

鶴翔会の先生方におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

この度、西堀正洋教授の後任として2021年10月1日付で、岡山大学学術研究院医歯薬学域・薬理学分野の教授を拝命いたしました細野祥之と申します。

私は2003年に名古屋大学医学部を卒業し、4年間の外科修練後に、名古屋大学大学院医学系研究科・分子腫瘍学分野（高橋隆教授）に大学院生として入学し、主にかん領域を中心とする基礎研究者の道を歩み始めました。2013年からはミシガン大学病理部に留学して、博士研究員としてArul Chinnaiyan博士の研究室でさらなる研鑽を積みました。Chinnaiyan研究室では、精巢・がん特異的で進化的に保存された長鎖ノンコーディングRNA (lncRNA) の網羅的な解析から新規lncRNAであるTHOR遺伝子を同定・命名し、その分子機能とがん化における役割を解明しましたが、その過程で次世代シーケンス技術とゼブラフィッシュに出会い、現在も両者を組み合わせた生物種・領域横断的な研究を行っております。

研究の方向性として「大規模データの統合的解析を研究の入り口に、紐解いたがん関連遺伝子の作動メカニズムと分子機構を標的とし、様々な動物モデルを用いて創薬に繋げる」を掲げています。このような生物種・領域横断的な創薬研究を展開しながら、並行してゼブラフィッシュと次世代シーケンス技術を組み合わせた、多次元全細胞解析による挑戦的な基礎研究を継続していきたいと考えています。

最後になりましたが、諸先生方のご健勝と益々のご

発展をお祈りするとともに、引き続きご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

### 略 歴

2003年3月 名古屋大学医学部医学科 卒業  
 2003年4月 虎の門病院 外科レジデント  
 2010年4月 日本学術振興会 特別研究員DC2  
 2011年12月 名古屋大学大学院医学系研究科 博士課程修了  
 2013年1月 ミシガン大学 病理部 博士研究員  
 2018年4月 愛知県がんセンター研究所 がん標的治療TR分野 ユニット長  
 2021年10月 岡山大学 学術研究院医歯薬学域 薬理学分野 教授

## 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科周産期医療学講座教授に長尾昌二氏 ご就任



### ご挨拶

鶴翔会の先生方におかれましては、いよいよご清祥にお越しのこととお喜び申し上げます。このたび令和3年10月1日付けで岡山大学大学院医歯薬学総合研究科周産期医療学講座教授を拝命し、18年半ぶりに帰局いたしましたのでご挨拶を申し

上げます。

本講座は、福山市の要請に基づいて設置された寄付講座で、福山・府中二次保健医療圏および井笠圏域において、将来に亘って持続可能な周産期および産婦人科医療体制の構築に寄与することを目的としております。講座の活動として、福山市民病院を中心とした地域の診療支援、産婦人科医師の育成、公開講座などによる地域住民への啓蒙活動などに取り組み、同地区の周産期および産婦人科医療の発展に尽したいと思っております。

一方、私の専門は婦人科悪性腫瘍、遺伝性腫瘍、鏡視下手術の3領域です。最近16年は婦人科悪性腫瘍の症例数が国内2位、3位のハイボリュームのがんセンターで診療、研究に取り組んでまいりました。専門領域の中でも国際共同試験をベースとした新規薬物療法の開発試験が主要な活動領域です。今後も学内での診

療、研究活動は婦人科悪性腫瘍を中心に行なっております。産科婦人科学教室内の婦人科悪性腫瘍の診療をリードするとともに、後進の指導、臨床試験実施の基盤整備に尽力する所存です。岡山の地域医療、岡山大学医学部の輝かしい伝統の一端を担えることは存外の喜びです。微力ではありますが、私を育ててくださった岡山大学、地域への感謝の気持ちを胸に、精一杯の恩返しに努めてまいります。

鶴翔会の先生方には、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

### 略 歴

- 1993年3月 岡山大学医学部医学科卒業
- 1993年4月 岡山大学産科婦人科学教室入局
- 1993年9月 姫路赤十字病院産婦人科 研修医
- 1994年9月 鳥取市立病院産婦人科 医員
- 1995年4月 津山中央病院産婦人科 医員
- 1995年9月 岡山大学医学部附属病院手術部 医員
- 1996年4月 愛媛県立中央病院産婦人科 医員
- 1999年4月 土庄中央病院産婦人科 医長
- 1999年9月 岡山大学医学部附属病院 産婦人科 医員
- 2002年4月 岡山大学医学部附属病院 産婦人科 助手
- 2004年4月 川崎医科大学産婦人科 助手
- 2006年8月 埼玉医科大学産婦人科 講師
- 2007年4月 埼玉医科大学国際医療センター  
包括的がんセンター婦人科腫瘍科 講師
- 2009年10月 埼玉医科大学国際医療センター  
包括的がんセンター婦人科腫瘍科 准教授
- 2013年4月 兵庫県立がんセンター婦人科 部長
- 2015年4月 埼玉医科大学国際医療センター  
包括的がんセンター婦人科腫瘍科 客員教授（兼任）
- 2021年10月 岡山大学大学院医歯薬総合研究科 周産期医療学講座 教授

## 岡山大学学術研究院保健学域 教授に生口俊浩氏 ご就任



### ご挨拶

鶴翔会の先生方におかれましては、益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。このたび、令和3年10月1日付けで、岡山大学学術研究院保健学域教授を拝命いたしました。これもひとえに関連の先生方のご支援のたまものと心より感謝申し上げます。

す。

私は平成10年（1998年）に高知医科大学を卒業後、平木祥夫現名誉教授の主宰する岡山大学放射線医学教室に入局いたしました。福山市民病院をはじめとする関連病院、愛知県がんセンターで研鑽を積んだのち平成25年4月より岡山大学病院で勤務いたしました。入局後は岡山大学大学院に進学し肝臓核医学をテーマに博士号を取得させていただき、また平成29年度には6ヶ月間フランスに留学させていただきました。岡山大学病院では金澤 右前教授のもと放射線科外来医長、医局長をつとめ多くの診療他科の先生方と交流する機会にも恵まれました。私の専門は画像下治療（Interventional Radiology, IVR）といい、通常画像検査を行う際の技術と知識を用いて行う患者さんに優しい治療であります。ご存じのかたもいらっしゃると思いますが、岡山大学放射線科はIVRにおいて国内有数の件数を誇っており、日本中から我々の治療を求めて患者さんが受診されます。CTなど画像をみながら特殊な針を標的病変に穿刺し主にごんを対象に腫瘍を完全壊死させるアブレーション治療においては世界を席卷しており、私もグループの一員として研究業績が認められ現職に至ったと思っております。

現在は、保健学科学生の教育、研究にくわえて引き続き岡山大学病院での放射線科診療も平木隆夫教授のもと行っております。令和3年12月からは廣畑 聡保健学研究科長より国家試験対策、グローバル担当として研究科長補佐を仰せつかっており、岡山大学のさらなる発展に貢献していきたいと考えております。同窓の先生方には、今後とも何卒、御指導、御鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

### 略 歴

1998年3月 高知医科大学医学部医学科卒業

2003年9月 岡山大学大学院医学研究科修了  
 2013年4月 岡山大学病院放射線部 助教  
 2015年4月 岡山大学病院放射線科 講師  
 2017年9月 - 2018年2月 仏国 Institut Gustave Roussy  
 2019年4月 岡山大学病院放射線部 副部長・准教授  
 2021年10月 岡山大学学術研究院保健学域 教授（放射線技術科学分野）

## 岡山大学学術研究院ヘルスシステム統合科学学域教授に 渡邊豊彦氏 ご就任



### ご挨拶

鶴翔会の先生方におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。令和3年10月1日付けで岡山大学学術研究院ヘルスシステム統合科学学域教授を拝命しましたので、謹んでご挨拶申し上げます。

私は岡山大学を卒業後、岡山大学医学部泌尿器科学教室（大森弘之教授）に入局しました。大森弘之名誉教授、公文裕巳名誉教授（現新見公立大学学長）、那須保友教授、ピッツバーグ大学 Michael B Chancellor 教授の薫陶を受け、尿路感染症、排尿生理の基礎・臨床研究を通じて医学アカデミアとしてあるべき姿を学びました。6年間の関連病院勤務を経て、帰局後は、病棟医長、医局長、准教授、泌尿器科診療科長を務めました。岡山大学理事・副学長である那須保友教授を補佐し、泌尿器科における人事をはじめとする教室運営、また複数の全国学会の事務局長を務め、組織マネジメントやリーダーシップの重要性を痛感しました。その経験から、医師のように自律志向性が強く、組織へのコミットメントが相対的に弱いとされるプロフェッショナルや専門職がどのようにしてマネジメントスキルやリーダーシップを獲得するのかについて問題意識を抱き、神戸大学大学院経営学研究科に進みました。神戸大学では金井壽宏教授、鈴木竜太教授に師事し、アカデミア創薬に関する研究でMBA、さらに医療組織におけるリーダーシップに関する研究で経営学博士を取得しました。

担当するヘルスシステムマネジメント学分野では、医療の臨床実践や新規治療法開発において、有限の人

材、資源、資金を有効に利用し配分しながら、組織を構築し、戦略を立て、人材を動機づけていくための理論構築を目指しています。もとより微力ではございますが、医学と経営学を接続し融合する研究と教育の発展に貢献すべく努力精進致す所存でございます。鶴翔会の先生方のさらなるご発展をお祈りするとともに、今後とも一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

### 略歴

1991年 岡山大学医学部卒業  
 1995年 岡山大学大学院医学研究科（泌尿器科学専攻）修了 医学博士  
 1995年 トーマスジェファーソン大学 神経泌尿器科学フェロー  
 1997年 ピッツバーグ大学 神経泌尿器科学フェロー  
 2000年 香川県立中央病院泌尿器科 医長  
 2004年 岡山済生会総合病院泌尿器科 医長  
 2006年 岡山大学医学部歯学部附属病院 助教  
 2008年 岡山大学医学部歯学部附属病院 講師  
 2011年 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科泌尿器病態学 准教授  
 2013年 神戸大学大学院経営学研究科現代経営学修了 MBA（経営学修士）  
 2019年 岡山大学病院泌尿器科 診療科長  
 2020年 神戸大学大学院経営学研究科博士課程後期課程修了 経営学博士  
 2021年 岡山大学学術研究院ヘルスシステム統合科学学域 教授

## 自治医科大学医学部小児科教授に嶋田 明氏 ご就任



### ご挨拶

岡山大学医学部同窓の先生方におかれましては益々ご清祥のことと存じます。この度2021年6月1日より自治医科大学医学部小児科教授、とちぎ子ども医療センター小児科教授を兼務しております。岡山大学には2012年以来9年間在籍させていただきました。岡山大学に赴任したきっかけは、そもそも私が鳥取、妻が兵庫県の北部（但馬）の出身で、義



理の父がGWの時に農作業中脳卒中で倒れ、ドクターヘリで病院搬送になったのですが、その当時名古屋大学に在籍しており、名古屋からだと遠かったというのがきっかけでした。従いまして、岡山に在住中は実家にたまに帰ることも可能で、その後義理の母が自己炎症の難病に罹患し、岡山大学の膠原病内科で診ていただき、家族の立場からも岡山大学の医療レベルの高さを実感したという次第です。

岡山大学に在籍中は専門とします血液・腫瘍の患者数も増加し、移植などの四国からの患者さんを受けるという状況でした。また患者会が発足し、患者さんやその家族と交流できたことも医師として大きな財産となりました。

自治医科大学は小児医療センターが大学付属で独立した建物にあり、子どもさん向けの内装になっています。このため小児に関する専門職は小児科のみならず、小児外科、移植外科、脳外科、整形外科、麻酔科、こどもの心の診療科など幅広くカバーされており、特に岡山大学御出身の麻酔科の竹内教授、多賀准教授にはPICUで重症患者さんを診ていただき、大変お世話になっています。

小児科教室としても各班が活発に臨床、研究と頑張っておられますが、特に神経難病に対する遺伝子治療などは世界的にも特筆すべきところです。血液班として小児の血液・腫瘍・免疫疾患患者さんの治療のみならず、今後は長期フォローアップや再発難治白血病に対するCAR-T療法などにも取り組んでいこうと考えています。

同門会の先生方にはコロナで、自粛が続いておりますが、御自愛いただき、今を上手に乗り切ってもらいましょう。今後ともご指導ご鞭撻のほどをどうぞよろしくお願い申し上げます。

## 略 歴

- 1992年3月 鳥取大学医学部卒業、関連病院勤務
- 1995年4月 鳥取大学大学院医学研究科博士課程入学
- 1999年3月 鳥取大学大学院医学研究科博士課程修了
- 1999年4月 埼玉県立小児医療センター血液腫瘍科勤務、レジデント
- 2001年4月 群馬県立小児医療センター血液腫瘍科勤務、医長（2001年4月～）、部長（2003年4月～）
- 2007年7月 米国St. Jude Children's Research Hospital, Department Pharmaceutical SciencesにてPost Doc Fellow
- 2009年10月 名古屋大学医学部附属病院小児科勤務、

病院助教

- 2012年4月 岡山大学病院小児科勤務、講師
- 2016年7月 岡山大学病院小児血液・腫瘍科、准教授
- 2021年6月 自治医科大学小児科・小児医療センター、教授

## 島根大学医学部皮膚科学講座 教授に山崎修氏 ご就任



### ご挨拶

鶴翔会会員の先生方におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。令和4年2月1日付けで島根大学医学部皮膚科学講座教授を拝命いたしましたので、ご挨拶申し上げます。

私は平成5年に島根医科大学（現島根大学）を卒業し、故荒

田次郎先生の主宰する岡山大学医学部皮膚科学講座に入局しました。臨床に従事しながら、教室のテーマである皮膚細菌感染症の研究を行い、抗バイオフィルム効果の研究で学位を取得しました。さらに岩月啓氏先生のご尽力によりリヨン大学細菌学教室で黄色ブドウ球菌の毒素の研究を行う機会をいただきました。その後、皮膚がんの診療に長年従事し、平成29年より岩月先生が全国にさがかけて開設されましたメラノーマセンターのセンター長を拝命し、中四国の窓口として多くの関連部門と連携させていただき、集学的治療を提供することができました。さらに森実真教授のご配慮により免疫学、細胞生理学、腫瘍微環境学、中性子医療研究センターと共同研究させていただき、当初の構想にありました教育・研究の向上と人材育成に繋げることができました。また教育企画委員として診療参加型臨床実習の拡充に携わり、教育の重要性を再認識しました。多くの同門の先生方に研修医の頃から診療や研究においてご指導、ご支援いただき、研鑽を積んでいくことができました。厚く御礼を申し上げます。

岡山大学で学んだ知識と経験を生かし、母校であります島根大学皮膚科の発展と島根県の患者さんのために診療・研究・教育に全力で取り組んでいく所存でございます。

末筆にはなりますが、私が事務局として携わりました100周年記念事業、教授退任・就任式典など皮膚科学教室の記念事業にご尽力、ご出席賜りました先生方

に感謝申し上げます。同窓の先生方の更なるご発展をお祈りするとともに、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、何卒宜しく願い申し上げます。

### 略 歴

- 1993年3月 島根医科大学（現島根大学）医学部卒業
- 1993年4月 岡山大学医学部皮膚科入局
- 1995年4月 呉共済病院皮膚科 医師
- 1996年4月 広島市民病院皮膚科 医師
- 1997年4月 岡山大学医学部附属病院皮膚科 医員／助手
- 2003～4年 仏国リヨン大学細菌学教室
- 2007年4月 岡山赤十字病院皮膚科 医師
- 2008年4月 岡山医療センター皮膚科 医師／医長
- 2009年10月 岡山大学病院皮膚科 講師
- 2015年4月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科皮膚科学 講師
- 2017年6月 岡山大学病院 メラノーマセンター長
- 2018年4月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科皮膚科学 准教授
- 2022年2月 島根大学医学部皮膚科学講座 教授



# 謹 弔

## 白神史雄先生を偲んで

平8 森 實 祐 基



岡山大学眼科学第14代教授を務められた白神史雄名誉教授が令和4年1月22日に満66歳でご逝去されました。告別式は故人ならびにご遺族のご意志により、家族葬にて執り行われました。ご生前をお偲びし、ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

白神先生は、昭和55年に岡山大学をご卒業後、同大学眼科学教室に入局され、第12代教授松尾信彦先生、第13代教授大月洋先生のもとで研鑽を積まれました。平成10年に文部科学省在外研究員として米国にご留学された後、平成14年に香川医科大学眼科学教授に就任、そして平成25年に岡山大学眼科学第14代教授に就任されました。

臨床では網膜硝子体疾患の診断と治療をご専門にされ、黎明期にあった網膜硝子体手術のパイオニアとして国際的に活躍されると共に、多くの網膜硝子体術者を育成されました。特筆すべきは、平成5年に、眼科領域でも岡山大学病院でも初となる高度先進医療「黄斑下手術」を主導されたことです。これまで触れることができなかった網膜の中心（黄斑）に対する難易度の高い手術を全国に先駆けて実施され、今日の黄斑手術の礎を築かれました。研究では、網脈絡膜疾患の病態を動物モデルや先進的な画像検査技術を用いて解明され、その成果から数多くの術式を考案されました。

学会活動としては、平成19年に第24回日本眼循環学会、平成22年に第49回日本網膜硝子体学会、平成26年に第68回日本臨床眼科学会を主催されました。また、平成28年に日本網膜硝子体学会盛賞、平成29年に日本眼科学会賞および日本眼循環学会松山賞を受賞されました。

ご退官後は、川崎医科大学総合医療センターの特任教授として、眼科診療を続けながら後進の指導を行っておられました。白神先生は誰とでも分け隔てなく接するお人柄で、特に国際学会では“Mood enhancer”

と呼ばれ、多くの先生から慕われる存在でした。また、学会のレセプションではプロ顔負けのジャズ・ピアノ演奏で私達を楽しませてくださいました。

白神先生の偉大なご業績と、眼科学教室員に対する愛情あふれるご指導に心より感謝いたします。私達は、白神先生のお教えを受け継ぎ、日々研鑽を重ねてまいります。

白神史雄先生、安らかにやすみください。合掌。

# 会 員 動 向



## 受 章

旭日双光章 (会員) 寺 島 直 之  
 瑞宝双光章 (昭51) 徳 弘 昭 博  
 瑞宝中綬章 (昭43) 高 嶋 成 光  
 令和3年度産科医療功労者厚生労働大臣表彰  
 (昭58) 多 田 克 彦  
 国民健康保険関係功労者厚生労働大臣表彰  
 (会員) 早 川 信 彦  
 臓器移植対策推進功労者厚生労働大臣表彰  
 (昭41) 岡 部 史 朗  
 令和3年度公衆衛生事業功労者厚生労働大臣表彰  
 (昭41) 國 富 泰 二  
 “ (昭56) 西 井 研 治  
 “ (昭40) 西 下 明  
 令和3年度学校保健および学校安全功労者文部科学大臣表彰  
 (会員) 星 島 昭  
 令和3年度救急功労者総務大臣表彰  
 (昭60) 實 金 健  
 令和3年度公衆衛生事業功労者日本公衆衛生協会会長表彰  
 (昭62) 福 永 一 郎  
 令和3年度学校保健・学校医功労者日本医師会長表彰  
 (昭41) 山 岡 秀 樹  
 2021年日本禁煙科学会 学会賞  
 (昭41) 清 水 信 義  
 第4回金光功労賞 (昭39) 糸 島 達 也  
 第80回山陽新聞賞社会功労表彰  
 (昭36) 山 本 昌 知  
 令和3年度岡山県教育関係功労者  
 岡山県教育委員会表彰 (旧教員) 藤 本 政 明  
 “ (昭61) 永 井 宏  
 “ (会員) 松 野 繁  
 “ (会員) 武 田 正 彦  
 “ (平9院) 江 澤 和 彦

岡山県教育委員会表彰 (会員) 油 原 章  
 “ (昭39) 遠 藤 洋 一  
 “ (平2) 福 島 邦 博

令和3年度岡山県保健福祉功労者表彰  
 岡山県知事表彰  
 (心身障害者福祉) (会員) 太 田 隆 正  
 令和3年度岡山県保健衛生功労者表彰

岡山県知事表彰  
 (公衆衛生事業) (昭47) 天 野 康 生  
 “ (会員) 石 原 基 正  
 “ (昭51) 松 香 陽 子  
 “ (昭48) 安 原 高 士  
 “ (会員) 大 野 敦 史  
 “ (昭51) 外 間 朝 夫  
 (地域医療事業) (昭46) 太 田 知 雅  
 “ (会員) 中 務 治 重  
 (救急医療事業) (昭59) 久 保 俊 英  
 “ (会員) 三 村 卓 司

岡山県保健福祉部長表彰  
 (公衆衛生事業) (昭61) 岡 野 和 美  
 “ (会員) 藤 原 寛 太 一  
 “ (平2) 田 嶋 憲 一  
 “ (会員) 木 村 和 陽  
 “ (昭45) 竹 内 宣 昭

令和3年度公衆衛生事業功労者岡山県美作保健所長表彰  
 (昭47) 三 谷 健  
 “ (昭47) 石 井 伸 江

令和3年度岡山県医師会学術奨励賞  
 (大学院生) 小 原 隆 史  
 “ (平24) 市 川 啓 之  
 “ (大学院生) 津 高 慎 平

天晴れジョイボスアワード奨励賞  
 (平23院) 小比賀 美香子

令和3年度がん征圧事業功労者岡山市長表彰  
 (昭56) 西 井 研 治

このたびの受賞に対し、会員一同心からお喜び申し上げますとともに、今後益々の御健勝をお祈り致します。

※会員の方が各賞を受賞された場合は事務局にご連絡ください。

## 医学部・病院関係

定年退職  
 病理学 (腫瘍病理) 吉 野 正

消化器・肝臓内科学 岡田 裕之  
 精神神経病態学 山田 了士  
 乳腺・内分泌外科 土井原 博義

教授就任

周産期医療学 長尾 昌二  
 放射線健康支援学 生口 俊浩  
 ヘルスシステム統合科学研究科 渡邊 豊彦

准教授就任

泌尿器病態学 荒木 元朗  
 呼吸器・乳腺内分泌外科学 岡崎 幹生

講師就任

地域救急・災害医療学 湯本 哲也  
 肝・胆・膵外科 吉田 龍一  
 呼吸器外科 山本 寛齊

学位授与

博士

令和3年9月24日 (医歯薬学総合研究科)

荒木 恒太 呼吸器・乳腺内分泌外科学  
 I Putu Bayu Mayura 病原細菌学  
 依田 尚之 産科・婦人科学  
 伊藤 雅典 消化器外科学  
 井上 博文 臨床遺伝子医療学  
 今村 麻理子 腎・免疫・内分泌代謝内科学  
 畝田 篤仁 脳神経外科学  
 大宮 浩揮 麻酔・蘇生学  
 大森 敏規 整形外科学  
 岡村 朋香 小児医科学  
 岡本 雄貴 消化器・肝臓内科学  
 香川 哲也 消化器外科学  
 勝部 亮一 消化器外科学  
 河合 毅 消化器外科学  
 國富 俊輝 消化器外科学  
 黒江 泰利 麻酔・蘇生学  
 桑原 研 脳神経外科学  
 谷 焯琳 腫瘍ウイルス学  
 里見 拓也 消化器・肝臓内科学  
 塩谷 俊雄 呼吸器・乳腺内分泌外科学  
 杉生 和久 整形外科学  
 杉浦 弘幸 血液・腫瘍・呼吸器内科学  
 桑 藝禎 腎・免疫・内分泌代謝内科学  
 孫 翠明 病理学 (免疫病理)  
 谷 和祐 産科・婦人科学  
 唐 劭莹 分子医化学

鳴坂 徹 消化器外科学  
 西村 碧フィリーズ 病理・病態学  
 布上 朋和 腎・免疫・内分泌代謝内科学  
 鳩野 みなみ 呼吸器・乳腺内分泌外科学  
 樋口 洋介 小児医科学  
 平井 麻美 消化器・肝臓内科学  
 馮 田 脳神経内科学  
 賀 芳 腎・免疫・内分泌代謝内科学  
 黄 荣生 細胞生理学  
 前原 貴典 泌尿器病態学  
 松尾 直昭 循環器内科学  
 松三 雄騎 消化器外科学  
 眞部 恵子 皮膚科学  
 丸山 雄樹 泌尿器病態学  
 宮原 一彰 呼吸器・乳腺内分泌外科学  
 村岡 聡介 整形外科学  
 MELISSA LIM SIAW HAN 細胞化学  
 森末 遼 消化器外科学  
 山本 峻平 消化器・肝臓内科学  
 横尾 賢 整形外科学  
 渡邊 洋美 血液・腫瘍・呼吸器内科学  
 王 晨 システム生理学

令和4年3月25日 (医歯薬学総合研究科)

青景 聡之 救命救急・災害医学  
 有吉 真季子 疫学・衛生学  
 伊勢 真人 整形外科学  
 岩田 健宏 泌尿器病態学  
 岩野 貴之 循環器内科学  
 上田 英次郎 消化器・肝臓内科学  
 馬越 通有 脳神経外科学  
 大河 啓介 循環器内科学  
 大塚 勇輝 総合内科学  
 大西 康博 腎・免疫・内分泌代謝内科学  
 大橋 秀基 整形外科学  
 大平 安希子 産科・婦人科学  
 岡本 聡一郎 放射線医学  
 小川 泰司 消化器・肝臓内科学  
 小坂田 陽介 脳神経内科学  
 小田 晋輔 病理学 (免疫病理)  
 垣内 慶彦 消化器外科学  
 梶木 裕矢 整形外科学  
 梶田 聡一郎 放射線医学  
 檜野 千明 産科・婦人科学  
 狩野 裕久 血液・腫瘍・呼吸器内科学  
 河村 涌志 整形外科学

金 一 徹 脳神経外科学  
 久 保 光太郎 産科・婦人科学  
 近 藤 匠 血液・腫瘍・呼吸器内科学  
 重 歳 正 尚 循環器内科学  
 張 曦 明 整形外科科学  
 張 冬 曉 腎・免疫・内分泌代謝内科学  
 駿 河 宗 城 循環器内科学  
 妹 尾 賢 血液・腫瘍・呼吸器内科学  
 高 瀬 了 輔 総合内科学  
 高 橋 謙 作 腎・免疫・内分泌代謝内科学  
 竹 下 步 整形外科科学  
 武 本 梨 佳 腎・免疫・内分泌代謝内科学  
 立 花 宏 太 皮膚科学  
 谷 口 文 崇 消化器外科学  
 玉 井 圭 小児医科学  
 天 田 雅 文 腎・免疫・内分泌代謝内科学  
 富 田 陽 介 脳神経外科学  
 中 川 裕 貴 皮膚科学  
 中 田 憲 太郎 呼吸器・乳腺内分泌外科学  
 中 塚 洸 輔 麻酔・蘇生学  
 中 村 真 血液・腫瘍・呼吸器内科学  
 難 波 貴 弘 小児医科学  
 西 村 健 救急医学  
 西 脇 麻里子 腎・免疫・内分泌代謝内科学  
 任 琬 旭 麻酔・蘇生学  
 根 津 智 史 整形外科科学  
 橋 本 好 平 呼吸器・乳腺内分泌外科学  
 土生田 宗 憲 細胞組織学  
 原 田 遼 三 整形外科科学  
 平 田 裕 二 耳鼻咽喉・頭頸部外科学  
 福 島 伸 乃 介 総合内科学  
 福 安 悠 介 腎・免疫・内分泌代謝内科学  
 藤 澤 郁 耳鼻咽喉・頭頸部外科学  
 藤 田 茉 奈 美 総合内科学  
 升 田 智 也 消化器外科学  
 松 三 明 宏 消化器・肝臓内科学  
 松 本 森 作 麻酔・蘇生学  
 宮 本 和 也 消化器・肝臓内科学  
 森 澤 伸 眼科学  
 山 口 隆 廣 病理学（免疫病理）  
 山 口 哲 志 腎・免疫・内分泌代謝内科学  
 山 崎 辰 洋 消化器・肝臓内科学  
 山 本 浩 継 救急医学  
 楊 光 病理学（腫瘍病理）  
 吉 田 将 平 血液・腫瘍・呼吸器内科学  
 吉 永 香 澄 泌尿器病態学

李 建 振 生化学  
 林 文 鋒 泌尿器病態学  
 和田里 章 悟 泌尿器病態学

修士

令和4年3月25日（医歯薬学総合研究科）

三 宅 優 星 精神神経病態学  
 久保田 温 和 細胞組織学  
 前 川 明日華 分子医化学  
 浅 賀 裕 太 朗 細胞生理学  
 小 村 彩 可 細胞生理学  
 田 原 史 也 生化学  
 安 岡 宏 樹 生化学  
 藪 彩 夏 生化学  
 山 川 敦 子 細胞生物学  
 米 田 晴 香 細胞生物学  
 ZHANG Yanshuo 細胞化学  
 FITHRONI Abdul Basith 細胞化学  
 三 好 諒 病原細菌学  
 胡 梟 脳神経内科学  
 浜 田 祐 輔 病理学（免疫病理）  
 有 安 祥 訓 疫学・衛生学  
 岡 本 貴 幸 疫学・衛生学  
 中 村 奈 保 子 疫学・衛生学  
 橋 本 千 明 疫学・衛生学  
 山 内 優 輔 疫学・衛生学  
 中 井 結 希 組織機能修復学  
 MING Lu 組織機能修復学

令和3年度（令和4年3月）  
 岡山大学医学部医学科卒業生

青景 珠実 赤嶺オリビア 秋田 浩貴 アサモア アビ  
 新居 麗 飯田幸太郎 伊賀健一郎 池田 拳人  
 石城戸輪也 石崎 章禎 岩岡 将太 岩渕 愛央  
 内田 菜緒 遠藤 優輝 大内 智貴 大後戸智也  
 大武 春香 大谷 武史 大元 航暉 岡 智彦  
 小笠原菜月 岡田 倫英 岡野 宏哉 岡野 義也  
 岡本 茉子 小川 慧祐 奥山 涼香 斧田 尚樹  
 籠田 正幸 兼森 玄 河田 宗大 川端 彬義  
 菅 健太 神原 晴樹 北野 統己 北野 風香  
 衣笠 凌平 久佐 耕大 國上 純生 国田 一孔  
 久保雄之介 栗原 侑生 呉 昊霖 上里 祐賀  
 古島裕次郎 近藤 聖之 齋藤 光希 佐伯夏都乃  
 佐々木太一 佐田 奎吾 貞廣あり紗 白羽 範昭  
 代谷 元 進藤 歩 末次 駿一 末長 理恵

瀬尾 里奈 十川 裕士 園部 奏生 高木 悠芽  
 高野 珠衣 高橋 朝香 高谷 優 武川 真也  
 立花 和典 立上 大紘 伊達裕美子 田中 愛也  
 田中 泰斗 谷口 もこ 田村 遼 常 路  
 辻井 彰之 土田 彩加 槌田 健太 中田 征希  
 永谷 莉緒 中西 一秀 中村 将志 成本 耕平  
 難波 和昌 新居 宗真 西浦 義雄 西原 千尋  
 根岸 茉以 能宗 亨 野畑 寛志 延永 裕太  
 畠 昂大 花宮 祥太 濱口 侑永 浜田健太郎  
 林 理香 原 諒一 久次 康樹 菱池 政展  
 日野 浩輔 深澤 茉祐 福坂 尊之 藤井 郁成  
 藤森 信昭 古川 雄三 前田 雛乃 前田 聖和  
 増田 千夏 増田みなみ 松尾 公太 松尾 知明  
 三上 薫子 宮原 知之 宮本 紗英 向田夏伽理  
 村上 世紀 村田 憲郁 村山 昇平 元植 彩乃  
 森信 裕太 山口 望 山本倫太郎 横堀アリア  
 若山 太一 和田 晃一

会 員 訃 報

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

旧教員	新 島 端 夫	2021. 12. 18
昭20	児 子 卓	
昭24	山 本 彰	2021. 10. 24
昭25	林 秀 一	2021. 8. 29
昭25	水 落 理	2021. 11. 9
昭25専	北 川 昭 三	2021. 11. 22
昭25専	角 殖 雄	2022. 3. 4
昭26	杉 山 敏 郎	2021. 9. 4
昭26	石 井 洋 治	2021. 12. 31
昭27	岡 田 康 男	2022. 1. 28
昭28	喜多村 勇	2021. 12. 13
昭29	太 田 善 介	2022. 2. 22
昭32	佐久本 卓哉	2020. 2. 14
昭32	鈴 木 朗 夫	2021. 10. 4
昭32	藤 綱 徹 也	2022. 3. 28
昭35	深 津 栄 一	2021. 3. 31
昭36	前 原 毅	2021. 10. 17
昭37	藤 田 慎 一	2021. 11. 17
昭41	大 森 鍾 一	2021. 12. 26
昭42	谷 崎 眞 行	2021. 9. 25
昭45院	橋 本 威 郎	2022. 1. 27
昭50	渡 邊 誠	2021. 7. 16
昭55	白 神 史 雄	2022. 1. 22
昭57	高 塚 忠 茂	2022. 2. 9
昭57	前 田 昌 則	2021. 12. 6
平 6	村 尾 純 子	2021. 5
平 8 院	井 上 高 明	2021. 12. 17
平11院	白 神 千 恵 子	2021. 11. 10
会 員	平 川 弘 泰	2021. 9. 9
会 員	帆 秋 孝 幸	2021. 6
会 員	篠 原 徹	2021. 12. 13
会 員	太 田 純 二	2021. 7. 25
会 員	西 風 潤	2020. 5. 4

# クラブ報告

## 鹿田写真部

部長 福田 恵

新型コロナウイルスの影響で大変な状況ではございますが、鶴翔会の皆様におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

鹿田写真部には現在、医学科20人、保健学科15人、歯学部8人、薬学部2人の計45人が在籍しています。週1回の部活では、カメラの基礎知識や写真の撮り方の紹介を行ったり、写論会を行ったりしています。写論会ではそれぞれの部員が撮った写真を見せ合い、どの写真のどの部分が良いと思ったのかを伝えあったり、もっと良い写真にするにはどうしたら良いかアドバイスをもらったりすることができます。そして、参加者それぞれが出された写真の中で一番好きな写真を選んで投票し、一番多くの票が入った写真をツイッターに投稿しています。下の1枚目の写真は写論会で

選ばれたことのある作品です。

また、写真部では不定期に撮影会を行っています。撮影会では、上級生が下級生に撮り方のコツを教えたり、お互いに写真を撮り合ったりして、撮影技術の向上を目指しながら、和気あいあいとした雰囲気の中で活動を行っています。下の2枚目の写真は桜を撮影に行ったときのものです。

そして、撮った写真は岡山大学病院の廊下に飾らせてもらっています。撮った写真をいろいろな方々から見ていただき、ご感想をいただくということは、部員にとっての大きな喜びとなっています。新型コロナウイルスが蔓延する前までは、学外展や鹿田芸術祭で写真を展示させてもらっていたのですが、現在は行えていない状況です。その代わりにInstagramに部員が撮った写真を投稿し、多くの方々にそれらを見ていただくことができました。今後も感染症対策を徹底しながら活動を行い、写真を撮ることを通して表現力や感性を磨いていきたいと思ひます。

最後になりますが、皆様のご健勝とご多幸をお祈り申し上げますとともに、今後とも鹿田写真部の活動を温かく見守っていただければ幸いに存じます。何卒よろしくお願ひ申し上げます。



## 医学部男子バスケットボール部

部長 上田 悠都

時下、鶴翔会の皆様におかれましては、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。医学部男子バスケットボール部の主将を務めさせていただいております、医学部医学科4年の上田悠都と申します。

現在、医学部男子バスケットボール部は、医学科17人（内マネージャー2人）、保健学科11人（内マネージャー7人）、工学部1人の計29人で活動しております。週3回の練習では、体力作りとなるフットワークやパス、ドリブルといった基礎練習と、フォーメーションの確認やゲーム形式といった実践的な練習を行っています。各練習メニューの前に集合し、そのメニューの目的や意識すべきことを共有します。各メニューの後にも集合し、良かった点や改善点などを気づいた部員が共有し、全体の反省としています。また、ゲーム形式などは動画を撮影し、後から何度も見返して丁寧に反省しています。このように、部員一人ひとりが主体的に考えながら、PDCAサイクルをチームで形成し



ています。

2020年から約2年間、新型コロナウイルスの感染拡大のために、公式戦および練習試合といった対外試合に参加することができませんでした。加えて、例年行っていた夏合宿や会食などのイベントも開催することができませんでした。特に、部員の半数以上を占める1、2年生は入学してから一度も対外試合を経験していません。しかし、モチベーションを保つことが難しい中でも、常に部員どうしで切磋琢磨し、チーム全体でのレベルアップを図っています。2022年は新型コロナウイルスの流行が徐々に収束し、対外試合を行う機会が少しずつでも増えていくことを願って、部員一同、日々の練習により一層打ち込んで参ります。

今後とも医学部男子バスケットボール部の活動を温



かく見守っていただければ幸いです。最後に改めまして、鶴翔会の皆様のみますますのご健勝とご多幸を心よりお祈り申し上げます。



※2019年10月撮影

## 支部だより

### 令和3年度 鶴翔会 山口県支部総会

支部長 岩国医療センター  
青 雅 一 (昭56)

2年ぶりとなる鶴翔会山口県支部総会が、令和3年10月31日に岩国医療センター看護学校において開催されました。昨年度の総会はコロナ禍のため中止となりましたが、今年度は昨年よりお願いしていた岡山大学CKD・CVD地域連携包括医療学講座の内田治仁教授と鶴翔会新事務局長の田口博之様をお招きして、県内各地から30名余りが集い、総会に続き講演を拝聴いたしました。

支部長挨拶に続き、庶務報告では会員の動向と物故会員の報告がありました。また今年度も、井出愛邦先生(昭22)、岡谷照太先生(昭33)の2名の先輩方のご逝去なさいましたので、黙祷を捧げ御冥福をお祈りしました。このあと会計報告と監査報告が行われました。令和2年度の会費納入率は93%と、これまで以上に高い結果となっていました。

総会に続き特別講演に移り、内田治仁教授より「withコロナ時代のCKD医療連携について考える」と題してご講演いただきました。続いて事務局長田口博之様より「岡山大学の現状」と題した岡山大学の近況報告を拝聴しました。

総会の最後に新入会員の紹介があり、岩国医療センターの初期研修医の先生方から自己紹介がありました。

総会に続いて別室に移って写真撮影のあと、残念ながら今年度はコロナ対策のため、懇親会なしで解散となりました。最後に山口宇部医療センター院長の亀井治人先生(昭59)から閉会のご挨拶と来年度の総会のアナウンスを頂き、2年ぶりの総会を盛会裏に終えることができました。

内田治仁教授と田口博之事務局長様には電車の時間までの間、三井 清先生(昭36)、当院副院長田中屋宏爾先生(昭63)、支部長とともにかなり距離をとった3テーブルに分かれて座り、アクリル板で仕切られたマスク会食とさせていただきました。なんとも寂しい話ですが、このご時世ですので、大変失礼ながら医療者の基準で対処させていただきました。懇親会取り止めのせめてものお詫びのしるしに、支部長セレクトの「雁木」と「五橋」の季節限定品をお土産にお持ちいただきました。岩国の酒をご堪能いただけたかと思えます。



## 東京支部だより

鶴翔会東京支部長

### 三宅健介(昭59)

新型コロナウイルス感染症の影響が続く中、一昨年令和2年鶴翔会東京支部 役員会・総会は開催中止としましたが、昨年令和3年は安全を考慮し、11月6日(土)にオンライン形式で開催いたしました。参加者数はオンラインにもかかわらず例年通りで、20名を超えました。特に、新潟や秋田など遠方からご参加の先生方が少なからず見受けられましたのは、オンライン開催の長所と思われます。総会では、東京医科大学医学部 教授 横山詩子先生(平6卒)より「血管の分化発達、病態から再生へ」、国際医療福祉大学医学部教授(岡山大学医学部客員教授)矢野晴美先生(平5卒)より「Society 5.0の感染症教育」と題する講演が行われました。横山先生は血管についての基礎的な解析から循環器疾患の病態理解まで分かりやすくお話ししてくださいました。また、矢野先生は、ご自身の米国やオランダでのご活躍も交えながら、感染症教育の重要性をお話ししてくださいました。講演会終了後、例年通り参加者の近況報告などをおして親睦を深めることができ、お開きとなりました。オンライン開催のため、残念ながら写真撮影はできませんでした。来年はオンサイト開催ができるよう、パンデミックの収束を祈るばかりです。



## 関連病院だより

### 岡山大学病院で「Club150」始動

岡山大学病院長  
前田 嘉信

#### ご挨拶

岡山大学病院は、その理念として、「高度な医療をやさしく提供し、優れた医療人材を育て、社会・地域の持続的な健康増進に貢献する」ことを掲げています。私達は、これまでも、そしてこれからも患者さんに最良な医療を実践し、温かく優しい心を



を育む病院環境づくりに努めてまいります。

令和3年10月から岡山大学病院の理念・活動にご賛同いただき、「想い虹基金」に一定額以上の寄付をしていただいた方のうち「Club150会員」へ入会された方を対象に、頂いたご寄付に対する心こもった謝意を提供させていただいています。ご賛同頂いた寄付金は、診療・研究等の助成として、先進医療や革新的な研究を推進する事業、患者さんの療養環境や医療従事者の環境を整備する事業、さらに、医療人材を育成する事業などのために大切に活用させていただきます。鶴翔会会員の皆様におかれましても、どうか多数の方のご賛同を賜りますようお願い申し上げます。

#### Club150会員とは

「想い虹」基金に150万円以上の寄付をしていただいた方のうち、病院長が入会資格を満たしていると判断した方が対象です。会員期間は2年間です。

250万円以上の寄付をしていただいた方については、150万円を超える額に応じて100万円につき1名の方を家族会員とすることができ、個人会員同様の謝意を提供いたします。

#### 想い虹とは…

みなさまがたの“想い”の一つ一つが紡がれて“虹の架け橋”となり、これから治療を受けられる患者の皆様への“助け”となりますように… という願いが込められています。



#### 想い虹基金の活用について

岡山大学病院での診療・研究等への助成として

- ・ 先進的な高度医療の推進
- ・ 療養環境の改善
- ・ 医療従事環境の整備
- ・ 革新的研究等の推進
- ・ 医療人材育成事業

などのために大切に活用させていただきます。

#### 謝意の概要

##### 診療に関すること

- 1 優先外来予約  
医師・歯科医師の診療時間内の通常外来診療とは別に、1時間以内の診療を予約受付いたします。
- 2 予約日事前連絡  
予約の1週間前に、指定された電話・メール宛てに診療日の予約をご案内いたします。
- 3 処方箋対応  
処方箋をご指定の薬局に送付し、待ち時間なくお受け取りいただけます。

##### 高度医療に関すること

- 1 Club150 Doctor  
各診療科のスペシャルドクターによる医療の提供



- 2 がんと遺伝に関する相談  
臨床遺伝専門医と認定遺伝カウンセラーによる初回無料カウンセリングを実施いたします。  
(遺伝学的検査は有償にて実施)



### ホスピタリティー

- 1 専属コンシェルジュ  
来院時のお迎え、診療場所へのご案内をいたします。
- 2 特別ラウンジの利用 (予約制)  
休憩、フリードリンク、フードコートからの出前対応ができる会員専用特別ラウンジをご準備いたします。
- 3 Club150会員カード  
特別ラウンジの入室カードでセキュリティを確保いたします。
- 4 キャッシュレス決済  
事前登録したクレジットカードで当日の医療費を決済 (医療費以外はクレジットカードの使用は不可)  
領収書はコンシェルジュより当日手渡し、もしくは後日自宅へ郵送します。
- 5 入院棟11階に設置した特別フロア「Floor150」内の個室の一時的利用 (有償)  
空室のある場合に限り、1時間ごとに有償にて利用可能です。また個室での食事利用も可能です。
- 6 仕出し料理の出前 (有償)  
事前予約制でご準備いたします。
- 7 協賛企業による情報提供  
協賛企業より会員向け情報を提供いたします。

### フロア紹介 (内観)

#### Lounge A (待合室)



#### Lounge B (待合室)



#### 個室 (有償：会議等にも利用可能)



### 連絡先

〒700-8558 岡山市北区鹿田町2丁目5番1号  
岡山大学病院総務課内 Club150事務局  
Tel : 086-235-7075  
Fax : 086-235-7636

## 学生だより

### 解剖実習を終えて

医学科3年 穴見知也

まず、この度の解剖実習を行うにあたり、献体に応じてくださった故人の方々、並びにご遺族の方々そして、実習がスムーズに進むことができるよう、準備や指導をしていただいた先生方に対して感謝を申し上げます。

医師を目指すためには、人体の正常構造を正確に理解する必要がある。これは本学医学部に入学する以前から心得ており、実際、人体の構成や内部構造について自分の目で理解することに心から興味を持っていたので、解剖実習が待ち遠しく思っておりました。この実習でまた一つ医師としての道を進むことができ、意義のある三ヶ月となったように思います。

実習が始まる以前は、人体構造は教科書の知識として蓄えられており、立体的な理解には及んでいませんでした。実際に人の体にメスを入れて血管や神経を同定していくうちに、平面的理解が次第に立体的理解に変化していきました。実習全体を振り返ってみると、いかに人体の構造が精密であるかに驚かされていました。個人個人の構造に関しては教科書や参考書に記載されている情報とは違う部分もありましたが、総じておおまかな人間としての構造はほとんど一致しておりました。ただでさえ複雑な構造であるのに、これほどまでに一致していることに対して感動さえ覚えました。

また、四人一組となって実習を進めるにはコミュニケーション能力が必要であると感じました。実習を円滑に進めるには全員が同じ方向に向かっていくことが必要で、自分が後れをとることは全体の進度を遅らせることになるので慎重に行いました。班員との血管や神経の同定に関する意見の食い違いはありましたが、それでも試行錯誤を繰り返した結果、正しい理解に至ることもありました。医師になるということは患者さんとのコミュニケーションを通じて最も適切な治療を施すことが必要であるから、医師として必要なことは何なのかということに常に意識しながら今後の学生生活を過ごしていきたいと思えます。

最後になりましたが、献体に応じてくださった故人

の方々のご冥福をお祈りいたしますとともに、御遺族の方々並びに我々を指導してくださった先生方に対して改めてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

### 系統解剖実習感想文

医学科3年 末次駿門

今回の解剖実習を通して私は、医学生としての責任を強く感じた。人体解剖は誰しも経験できるものではなく、一般の学生とは全く違ったことをしていると再自覚する機会ともなった。

実習の初めは、ご献体と対面し、私はとても緊張していたのを覚えている。実際に自分でメスを人体に入れるということがあまりにも自分には衝撃的であったが、実習が進むにつれ、やらなくてはならないことが増え忙しくなっていくにつれて、この衝撃は薄れていってしまった。始まって1か月の納棺の日、ご献体を丁寧に納棺していくときに、私が今まで行ってきた解剖実習ということの重さや責任が、一気にこみ上げてきた。そしてその時、今まで真剣に向き合ってきたことがなかった死というものが、とても近いものとして感じた。将来の医学生、そして医学の発展に大いなる期待を寄せてくださったご献体された皆様に、恥じない、また感謝の気持ちを忘れず、ご期待に全力で応えることができる医学生になろうと改めて強く思った。

実習を始める前は人体の構造をただ見て覚えればよいと考えていたが、実際は、解剖実習が一つ一つの作業が新鮮かつ刺激的であったので、見るとともに頭に強く印象的に記憶し、今しか体験できないこの貴重な実習を大切にしながら学ぶという意識が強くなっていったように思う。よく先輩方が「もう一度解剖実習をやってみよう」と口にするが、この言葉が身に染みて分かった。一般の大学生であれば決して経験できないことを、今自分はやっているのだと自覚し、班のメンバーと実習内容をあれこれ議論することで、多くのことを深く学ぶことが出来た。

最後に、ご献体の皆様並びにご遺族の方には多大なる感謝の念を示し申し上げたい。皆様の協力があってこそ解剖実習が成り立ち、我々医学生は将来のための様々なことを学び、糧とすることが出来る。この解剖実習で学んだことや感じたことを決して忘れることなく、社会に恩返しでき、貢献できる立派な医者になる

うと思う。

## 解剖実習を終えて

医学科3年 本多真子

2か月以上に及ぶ解剖実習を通して、人体についてより詳しく多くのことを学ぶことができた。また、命について改めて考え直す良い機会となった。

実習が始まったばかりの頃は、知識があまりない中で初めての解剖を行うということに対して非常に戸惑っていた。実際、慎重に行いすぎて時間が足りなくなったり、相方の人との連携がうまく取れず見たい部分が見られなかったりと、苦戦することも多くあった。しかし実習が進むにつれて、予習復習もスムーズに行うことができるようになり、実習中に知識が増えていくのを感じるようになった。特に大腿前面のレポートを書いた際には、すべての神経と筋を同定するのは大変だったが、確実に知識を身に付けることができた。

解剖実習期間中には、ともしび会の方や産婦人科医の先生からお話を聞く機会もあった。お話を聞く前は献体に対する知識もなく、身近なこととして認識ができていなかった。しかし、献体に関する現状や解剖実習の重要性についてのお話を聞くことで、医学生としてもっと身近なこととして深く考える必要があると思うようになった。解剖実習中には、2人の方のご献体によって多くのことを学ばせていただき、善意によって行われる献体に対して改めて深く感謝の気持ちを持った。医学生として、今後は家族や周囲の方々にも献体について深く知って頂けるように意識していきたいと思う。

教科書やインターネットで見る人体に関する絵や図は見られるものが限られているが、実際の人体を自分の手で解剖すると、平面の図では見えないものをたくさん見ることができた。人によって臓器の形や大きさが違っていたり、神経や血管の分岐の位置がずれている方がいたり、個人によってそれぞれ多くの特徴があると目で見て感じることもできた。また、病変と思われるものを実際に見たのは初めてであったので、将来医師として病変を見つける際の難しさを知ることができた。

今回の解剖実習で身に付けた知識を生かして今後の勉学に励んでいきたい。そして、ご献体いただいたすべての方に感謝と尊敬の意を表したいと思う。



# 歴史の広場

## 医師養成の歴史と岡山大学医学部 —その8

昭41 棕野 洋

### (1) 国立大学法人化

戦後の大学改革の中で最大のものは、法人化であり、現在尚その変化の渦中にあると言われている。国立大学の法人化は、明治時代の大学創設以来、何度か検討されてきたが、その検討理由は時代により大きく異なっていた。

### 明治時代の帝国大学法人化案

大学の法人化が最初に検討されたのは、帝国大学(東京大学)が明治19年(1886)に発足する時に、明治23年(1890)の帝国議会開設に際して、帝国大学の予算が議会で審議されるとなれば、財政的な面だけでなく、学問の自由とか大学の自治の面で問題ではないかという懸念が大学サイドから出た時であった。これに対して、①国が一定の基本財産を提供して、その利子収入で大学を運営するという「基本財産案」、②法人格を認め、政府予算から一定額の経常経費を保障することによって、議会の議論次第で、研究費など必要な経費が左右されることにはならないようにするという「法人案」、③帝国大学という名の如く、皇室がその財産から経費を負担するという「皇室費案」の3案が出た時であったが、森有礼により、帝国大学は、「国家ノ須要ニ応スル」ことが第一の目的であって、国家の大学、国家富強に奉仕する大学としての大学像を持つものとされ、いずれの案も採用されず、以後問題になることはなかった。しかし、国威も守らねばならない為政者と大学人との間に存在する学問の自由とか大学の自治に対する微妙な隔たりは、埋まることなく、現在に至る迄根強く存続し続けており、インターン闘争とそれに続く東大紛争後の入試中止とか、大学法人化問題、菅政権での日本学術会議推薦の6人の新会員候補任命拒否等、時折その姿は国民の前に流露している。

### 昭和時代の国立大学法人化案

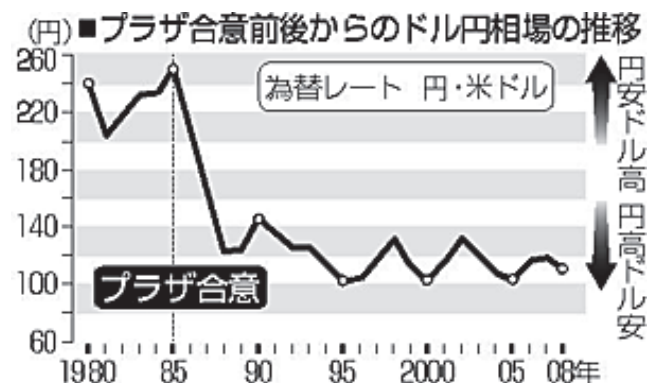
戦後の大学改革の流れの中で生まれた法人化案は、ミスター中教審と言われた森戸辰男会長による、昭和46年(1971)の中教審の「四六答申」の中でであった。この答申は、インターン闘争に続く大学紛争の時から4年間をかけて審議し、昭和44年(1969)に紛争が収まった後の、昭和46年(1971)に発表されたもので、今後このような紛争を起こさぬためには、大学改革が必要だが、一般的に自主的な組織だけがその内部から自己改革のエネルギーを生み出せるものだから、大学改革の為には、国立大学の設置形態を変え、自主的な法人格にする必要があるというものであった。戦後初めて国立大学の法人化の必要性が述べられ、以後様々な検討が行われてきたが、法人化への進展はなかった。

### 平成時代の国立大学法人化

#### 昭和から平成に至る政治と経済問題

我が国は、戦後急速な経済発展を遂げ、1980年代前半には円安の影響もあって、大幅な貿易黒字国となっていた。主として日・独に対するアメリカの貿易赤字を解消する為、昭和60年(1985)9月、ニューヨークのプラザホテルでG5(米・英・独・仏・日)の先進5カ国蔵相・中央銀行総裁会議が開かれ、世界経済への悪影響を懸念して、通貨を各国一律で10%から12%の幅で切り上げる所謂プラザ合意がなされた。その結果、円は1ドル240円から1年が経つ頃には150円台まで下降し、輸出産業は大きな打撃を受け、円高不況となった。

我が国は、内需経済の拡大による経済成長促進を目指し、公共投資の拡大を行った他、日銀が公定歩合(民間銀行への貸付金利)を下げることで対応した。この為、融資を受けやすくなった企業や個人は設備投資、土地購入を行ったので、地価の値上がりが起こり、借りたお金で土地や株への投資を行う「財テク」が盛ん





となり、利益を得た企業、個人の消費が拡大して、昭和61年（1986）からバブル景気が到来し、地価や株価は異常な高騰を示してきた。

平成2年（1990）に政府、日銀は、不動産向け融資の伸び率を総貸出の伸び率以下に抑える総量規制と、公定歩合を2.5%から6%台まで引き上げて、融資を受け難くする金融政策を行った。土地や株は一気に売られ、地価や株価は大暴落し、資金を借りていた企業の倒産により不良債権を抱えた銀行の経営も悪化する事態となった。

平成10年（1998）、日銀はバブル崩壊による経済の悪化に対して、金利を史上最低の0.15%とする「ゼロ金利政策」を打ち出した。この低金利時代が現在も続いている。

平成8年（1996）1月に総理大臣となった橋本龍太郎は、行政改革、中でも「官邸機能の強化」に取り組んだ。具体策は首相の権限強化と経済財政諮問会議の設置であった。中央官庁を1府22省庁から1府12省庁に再編し、首相がトップの内閣府を新設し、首相の指示によって法定の事務を担当する「特命担当大臣」を置き、首相の諮問に応じて、首相が任命する有識者からなる諮問会議を開き、各省大臣に意見を述べる事が出来るようにして、内閣機能の強化を図ったので、首相のリーダーシップによって、政策作りに於いて、大胆な転換が出来るようになった。

橋本政権の1年目に当たる平成8年（1996）年10月に初めて小選挙区制での総選挙が行われた。1つの選挙区に複数の自民党候補が立候補していた、それまでの中選挙区制時代は、党の政策より、個人の政策や人気など、個人中心の選挙と言われていたが、小選挙区制では一変し、党の政策が大きく影響し、総裁の立場が大幅に強くなり、総裁として、党内がまとめやすくなった。

### 橋本内閣

- 中央省庁再編（1府12省へスリム化）
- 副大臣、大臣政務官制度の導入
- 内閣の機能強化
  - 内閣総理大臣の首長性を明記（内閣法2条）
  - 閣議における首相の発議権限を明記（内閣法4条2項）
  - 内閣官房の強化（危機管理監、官房副長官、広報室、補佐官）

### 東大病院有志の行動から始まった国立大学法人化

こんな中、平成8年（1996）から平成10年（1998）にかけて、橋本首相を会長とする行政改革会議が開かれ、行財政面の効率化の面から、法人化が論議されていた。東大病院では、責任者は病院長であるのに、実務上では文部省から派遣されている事務部の力が強く、文部省病院と言われる状態になっていることと、

経理が単年度会計であることが、改革の弊害になっているとして、東大病院の有志が平成9年（1997）3月、① 単年度会計の廃止、② 国家公務員（文部省）からの離脱、③ 病院の自己責任の確立、④ 事務組織への専門性導入、という四点の実現を国に求めていた。当時の行政改革会議事務局長水野清は、東大病院の話が、国立大の独立行政法人化を考えるきっかけになったと言う。同年8月、東大医学部から正式な改革案を受けた彼は、同年10月東大と京大を先行して独立行政法人化（独法化）する案を出したが、行革会議で合意に至らず、同年12月には「大学の自主性を尊重しつつ、研究・教育の質的向上を図るという長期的視野に立った検討を行うべき」だとして、国立大学を独法化の検討対象から外すことになった。「長期的視野に立った検討を行う」とは「やらない」ことを意味していた。

### 小淵内閣で独法化の検討対象に

ところが、平成10年（1998）夏、小淵恵三内閣となつて、それまで10年間で1割の目標であった国家公務員削減目標が、就任の所信演説で「我が国経済の危機的状況乗り越える為に」として、突如10年間で2割削減にかさ上げされた。平成10年（1998）12月から平成11年（1999）1月にかけて、太田誠一総務庁長官は有馬朗人文部大臣（元東大総長）と、官僚を交えず3回会談し、有馬に国立大学を独法化させるよう迫った。平成11年（1999）1月には、国家公務員削減目標が自民、自由両党の合意で25%にまで積み上げられていた。当初の10%以外は独法化による削減分とされ、12万5千人の定員を抱える国立大学は、こうして小淵内閣で独法化の検討対象となった。「決定権は自分にある」と、強引に迫る太田と守りの有馬の二人の大臣は、それでも平成15年（2003）迄に法人化についての結論を出すことで合意し、以後文部省での独法化の具体的な検討が始まった。

### 国大協の動き

平成11年（1999）3月、文部省佐々木高等教育局長ら3幹部と、国立大学協会（国大協）の蓮実会長（東大総長）ら4幹部が文部省で密かに会談し、席上「25%の国家公務員の定員削減に関連して、国立大学として設置形態や独法化について検討を始めてはどうか。定員削減は平成13年（2001）から始まるので、平成12年（2000）夏までに対応を決める必要がある。」と伝えられた国大協幹部は、抵抗し難い政治の流れを感じて、松尾稔名大学長に検討を委ねた。松尾はメンバーを4人選び、極秘裏に4月から日本の教育・研究の将来がどうなるべきか、何度も話し合い、国立大学のあり方や独法化の問題点をまとめた「松尾レポート」を作成

した。蓮実会長は、平成11年（1999）6月の国大協の総会で独法化問題の検討を提案し、副会長の阿部東北大学長を委員長とする委員会が担当することが決まった後、松尾レポートの存在を明かし、全国の国立大学に配布した。

有馬文相が、総会に参加している国立大の学長達に、新しい自主・自律体制の確立と大学にふさわしい設置形態のあり方を、教育・研究の質の向上を図る観点に立って、真剣にできる限り速やかに行うべき時期に来ているとして、独法化の検討開始を公式に伝えたのはその翌日のことであった。

しかし、政治の進行に合わせて、着々と検討を進めていった文部省に比し、国大協の動きは遅かった。

平成11年（1999）7月16日に、独立行政法人の運営やその他の制度の基本となる、共通の事項を定めた、「独立行政法人通則法」が国会で成立した。

文部省は平成11年（1999）8月から9月にかけて、独法化に関する5回の識者懇談会を開いた。江崎玲於奈、井村裕夫、吉川弘之、石川忠雄、梅原猛その他の識者の中で、独法化に強く反対する意見は少なく、むしろ、独法化は、大学に自主性を与え、競争的な環境をつくり、教育研究の質の向上を図ると受け取る意見が多かった。

9月、東京に集まった99の国立大学の学長に、有馬は初めて公式に独法化について、「大学自らが教育研究の制度設計をし、実現するという大学の特性を踏まえたものでないので、独立行政法人通則法には反対だが、大学が自主性・自律性を高め、自己責任を果たすためには法人格を持つべきだ。組織の変更や予算の使い道が自由になり、各大学の個性化が進んで、互いにしのぎを削る環境が生まれる。定員削減は平成13年（2001）から始まるので、平成12年（2000）のできるだけ早い時期に結論を得たい」と伝えた後、佐々木高等教育局長の詳しい説明があり、学長達は独法化は既定路線だと受け止めた。

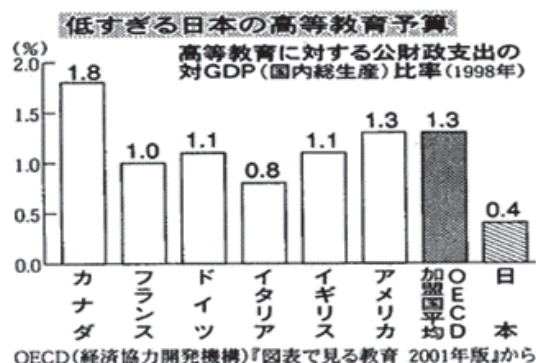
文部省は平成11年（1999）10月から11月にかけて、国立大学をブロックごとに分けて説明会を開催した。旧7帝大のような研究に強い大学と、地元で産業基盤のない、小規模な地方大学では影響が違う。国からの資金が減少するのが心配等の意見が出たことと、文系では反対、理系では賛成の傾向にあった。同年11月の国大協総会では温度差のある議論が白熱し、11月下旬に全国99の国立大学長へのアンケートで、「中期目標」を大臣が各法人に指示する点など、独法化の基本構造を問題視する意見が多く、学長から寄せられていたが、幹部は国大協の分裂を恐れ、平成12年（2000）に

なっても新たな動きは取れずにいた。

平成12年（2000）7月、国立大学及び大学共同利用機関を法人化する場合の、制度の具体的な内容について調査検討を行うことを目標に、文部省の「国立大学等の独立行政法人化に関する調査検討会議」が、国立大学関係者、大学共同利用機関の他、公私立大学、経済界、言論界等の有識者の協力を得て開かれ、議論を重ねた。この調査検討会議が始まって、1年にならない平成13年（2001）4月に小泉内閣に替わった。

### 遠山プラン3本の柱

6月の小泉内閣経済財政諮問会議に、民間からの就任2か月目の遠山 敦子文科大臣（平成13年（2001）1月6日中央省庁再編により文部科学省発足）から、「大学（国立大学）の構造改革の方針」（いわゆる遠山プラン）が提出された。「構造改革なくして景気回復なし」と唱える小泉首相とそれを推進する竹中平蔵経済財政・金融担当相の強引さの影響であったのだろうが、当時まだ検討中のこれまでの流れの結論を先取りした、急進的な感じのプランであった。① 国立大学に民間的経営の手法を導入する——新しい国立大学法人に早期移行、② 99の国立大学の再編統合を大胆に進め、活性化を図る、③ 大学に第三者評価による競争原理を導入し、国公立のトップ30大学（5%）を重点的に、世界最高水準に育成する、という3本の柱からなっていた。①と②は行財政改革の立場、③は限りある資金を有効利用するには、全体にひろく浅く配分するよりも、一部の有力大学にしぼって重点投資する方が、政府にとっては合理的、効率的だからというもので、多くの人に批判的に受け取られた。しかし、遠山プランで示された、単科大学は統合の主要な対象とするという文部省の考えは、その後実際に、商科大学や新設医大などの単科大学の統合を中心に、国立大学の数を大幅に削減し、行政単位としての府県は、もはや国立大学の設置の基本単位ではないということが、一県一大学の原則にとられることなく、教員養成系の大学・学部の再編・統合が行われたことで示さ



れた。③の30大学は公立私立も含むもので、世界的に見ても高等教育にかかる予算が低い我が国の大学予算の抜本的な増額を求める声も出るようになった。

平成13年（2001）に国立大学最初の統合として、10月に筑波大学（図書館情報大学+筑波大学）及び山梨大学（山梨大学+山梨医科大学）の統合があり、国立大学は101大学から、99大学となった。

### 国大協の了承

平成12年（2000）7月以来検討中であった、「国立大学等の独立行政法人化に関する調査検討会議」は、平成13年（2001）9月には中間報告を公表し、それに対する各界からの意見を参考に検討を加え、約1年8か月後の平成14年（2002）3月、最終報告をまとめた。

最終報告の中で、大学の運営組織は、教学面担当の評議会とともに、経営面の運営協議会（学外者を含む）を設置し、学長が問題点の最終決定をし、特定の重要事項については、役員会（同）の議決を経ることとし、教学・経営の完全な分離を図ったものとなった。

国大協は、平成14年（2002）4月の「臨時理事会」において、「21世紀の国際的な競争環境下での国立大学の制度設計として同意できる。この報告をもとに法人化準備に入る」とする「会長談話案」を確認し、1週間後の「臨時総会」で、反対意見の多い中、全会一致が原則の国大協としては異例の、挙手による多数決で賛成多数として、「会長談話」を採択し、最終報告の容認を決定し、国立大学法人への移行を国大協として了承した。このままでは大学が衰退するという、現状に対する強い危機感が、改革支持派にはあった。

### 国立大学法人法成立

その後、国会での審議を経て「国立大学法人法」が平成15年（2003）7月に小泉内閣の時に成立し、同年10月1日に施行された。この法律は、我が国の高等教育及び学術研究の水準の向上と均衡ある発展を図るため、国立大学を設置して教育研究を行う国立大学法人と、大学の共同利用に供するため、大学共同利用機関を設置する大学共同利用機関法人の、組織及び運営について定めることを目的としており、平成16年（2004）の春には、統廃合により、99から89に減少した国立大学における国立大学法人が、一斉に発足することになった。そして、平成17年（2005）10月には、富山大学（富山大学+富山医科薬科大学+高岡短期大学）の統合により国立大学法人は87になった。

学問の自由とか大学の自治の面から検討された明治初年とか、自主的に大学が変わるためには法人化が必要だという昭和の四六答申の時とは異なり、平成になって実施された法人化は、行財政面の効率化の面か

ら出たものであって、大学の自己責任を拡大しながら、中期目標・計画の提示を求め、それを文科大臣が認可するという、政治的関与が強い点を危惧する声もあった。

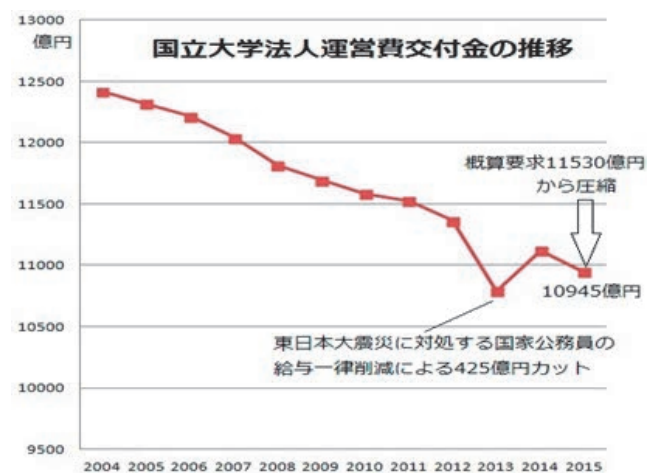
### 運営費交付金の減少

法人化と共に、国立大学の予算は法人毎に個別に計算され、自己収入や外部資金の額を差し引いた金額が、運営費交付金として配分されることになった。国立大学法人化で運営交付金は減らさない約束であったが、法人化されると、その後、毎年1%ずつ運営費交付金が減らされていった。運営費交付金には人件費が入っているので、若手研究者が雇えなくなり、このことが技術大国の日本が没落した要因の一つになっていると、後になって、有馬朗人元文相が反対しなかったことを悔いることになった。国立大学法人化は失敗だったと考えている大学人は結構いるようだ。

国立大学を、① 旧帝大、② 医総大（医学部・付属病院を持つ総合大学）、③ 医無総大（医学部・付属病院を持たない総合大学）、④ 理工大（理工系学部のみ）、⑤ 文科大（文科系学部のみ）、⑥ 医科大（医学部・付属病院のみ）、⑦ 教育大（教員養成系学部のみ）、⑧ 大学院大（大学院のみ）の8グループに分けた、法人化後最初の年である平成16年（2004）度の、経営資源や経営能力の格差を表す財務諸表の分析では、グループ内では競争出来ても、グループ外との競争は難しいと判断されている。

岡大は②グループだが、グループ内では大学病院の優劣が大きな影響を与えられている。法人化後も大学間にヒエラルキーが存在し、医学部、特に大学病院の優劣が、大学全体を押し上げるキーだということである。

平成17年（2005）の大学分科会「高等教育の将来像」



の答申では、これからは「将来像の提示と政策誘導の時代」として、実際に、特定のテーマについて各大学から申請を求め、その内容を評価して競争的に資金を配分するという考え方に基づく予算が増えてきている。

### 21世紀COEプログラム 有力大学への重点的な支援

平成13年（2001）の「大学の構造改革の方針」（遠山プラン）に基づき、平成14年（2002）から新たに開始された文部科学省の研究拠点形成等補助金事業である21世紀COEプログラム（The 21st Century Center Of Excellence Program）は、日本の大学に世界最高水準の研究教育拠点を形成し、研究水準の向上と世界をリードする創造的な人材育成を図るため、重点的な支援を行うことを通じて、国際競争力のある個性輝く大学づくりを推進することを目的としている。

国立大学の法人化を中心とした、実践的な大学改革の問題に携わってきた天野 郁夫氏によると、研究費の大学による格差が大きく、COE予算は旧7帝大+東工大の8大学で67%、13大学で73%に達し、科研費は同じ8大学で66%を占めている。彼は、旧7帝大を中心とした研究大学だけでなく、地方国立大学群の中に、それに準ずる研究大学群を育成していかなければ、旧帝大系の研究大学自身のレベルアップは、望みがたいのではないかと述べている。

旧7帝大以外では、筑波、広島、神戸、千葉、岡山、新潟、熊本、東京医歯、金沢、長崎等有名な医学部を持つ大学が上位に並んでいる。これら大学の研究費は、医学部関係だけでなく、全学部のものだが、どの項目を見ても広島、神戸、岡山の順になっている。岡大がゼロから育てた広大は元より、神大も昭和29年（1954）岡山医大の学長であった遠藤中節が、岡大教授兼務のまま県立神戸医大教授となり、昭和31年（1956）からは第2代の学長となって昭和33年（1958）大学院設置、昭和39年（1964）から昭和43年（1968）の長期間をかけて、難しかった悲願の国立移管を成し遂げた為に、旧制大学（旧神戸商大）の一員として、旧帝大に準じたその後の整備が行われ、急成長を遂げたのだと知る岡大の同窓生として、この順序が大学病院の優劣を反映していると解釈出来ると言われても首肯し難い思いである。

因みに、トップの東大837億円に対し、広島101、神戸87、岡山64億円であった。国立大学法人の経常収入は、文科省から支給される運営費交付金と、入試料、入学料、授業料、病院収入などの自己収入と、文科省からの科学研究費、政府各省からの受託研究費、企業からの寄付金・受託研究費などの「外部資金」がある。

これら外部資金獲得競争で、大学間格差の拡大を生み、初期条件の有利な東大の一人勝ちが続いている。

滋賀大学長の佐和隆光も、「国立大学法人化の功罪を問う」の中で、地方の優れた人材発掘のために、地方の国立大学法人を振興する政策をとるべきという。

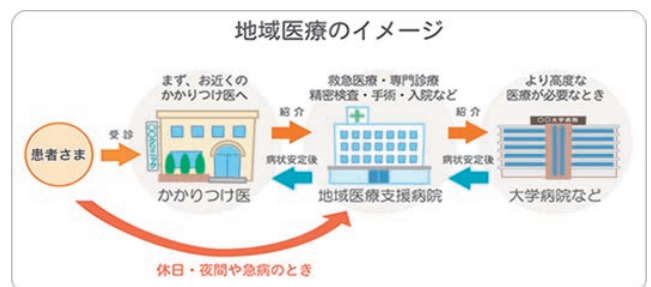
### (2) 法人化後の国立大学の変化と岡山大学（医学部）の立ち位置

#### 法人化前の特定機能病院（診療科の細分化と専門化）制度と地域医療支援病院制度

1990年代になって、多くの大学病院では大学院重点化と共に、診療科の細分化と専門化が進み、それ迄我々には馴染みのある第一、第二、第三と呼ばれた内科や外科が、循環器内科、消化器外科、心臓血管外科等と臓器別に分かれて呼ばれるようになった。

平成5年（1993）第2次医療法の改正により、特定機能病院制度が始まった。大学病院は高度医療の提供、高度な医療技術の開発及び、高度医療の研修を実施する能力を備えた病院となることが求められ、400床以上の病床を有し、16以上の診療科を有する病院で、通常の病院の2倍以上の医師を配置し、入院患者数に対して、1/30（一般は1/70）の薬剤師、1/2（一般は1/3）の看護師配置が最低基準とされ、ICU、無菌室、医薬品情報室設置等、従来とは異なる病院であることが求められ、厚労大臣の承認を要することになった。逆に承認の取り消しもある。他の医療機関から紹介された患者に、医療を提供するのを目的とする病院で、大学病院の他に、がんセンター、循環器病センター等も厚労大臣の承認を受けていて、令和3年（2021）4月1日現在で全国の大学病院を中心に、87病院が承認されている。

平成9年（1997）第3次医療法の改正により、診療所等地域の医療機関からの紹介患者の診療、医療機器等の共同利用や、医療従事者に対する研修、勉強会等の実施等、地域の医療機関を支援するとともに、地域の医療機関の中核を担う200床以上の病院で、① 紹介率80%以上（60%以上で承認後2年以内に80%以上



に達すると見込める施設も含む)、② 紹介率65%以上かつ逆紹介率が40%以上、③ 紹介率が50%以上かつ逆紹介率が70%以上の病院を都道府県知事が承認するもので、二次医療圏ごとに一つ以上あるのが望ましいとする、地域の診療所の後方支援病院制度が出来た。平成30年(2018)12月現在で、607病院が承認を受けている。

### 法人化後の大学病院診療科の更なる細分化

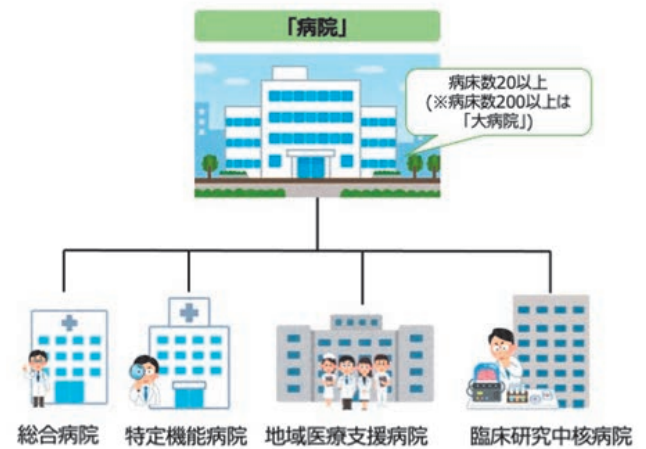
平成16年(2004)に国立大学法人化がスタートし、国立大学に民間的経営手法が導入されたが、医学部では、大学が個々に自主的に国の規制を外し、独自に大学病院を運営することで、予算の枠内での診療から、民間的経営手法を取り入れて、より良い医療、より高度な医療の提供を目指すようになったため、診療実績が上がり、収益も上がるようになった。こうして、大学院重点化の流れと共に、講座の数が増え、大学病院の診療科の細分化と専門化が更に進み、循環器内科、消化器外科、心臓血管外科等と呼ばれる他に、他科との協同、或いは工学等医学以外の学科との協同という新しい診療科が幾つも出現する時代になった。多くの医局員を抱えたかつての大所帯の医局からは想像も出来ない、新しい講座も生まれ、教授ないしは准教授1名、助教1名のような小さな細分化された講座も見られるようになり、標榜される講座名からは診療内容が直ぐには思い浮かばないものが幾つもある時代となった。

### 臨床研究中核病院

平成27年(2015)4月に、10以上の診療科を標榜する400床以上の病院を対象に、過去3年間に自ら企画した医師主導治験が3件以上、査読のある学術誌に掲載された臨床研究に関する学術論文が、15件以上等の実績があり、臨床研究支援・管理部門に所属する医師・歯科医師が常勤換算で5人以上いて、ガバナンス体制の確立が認められる等の他に、臨床研究支援体制、データ管理体制、安全管理体制、倫理審査体制、利益相反管理体制、知的財産管理・技術移転体制、国民への普及・啓発および研究対象者への相談体制等をクリアした病院を、臨床研究中核病院として承認する制度の受付が始まった。

日本発の革新的医薬品・医療機器の開発などに必要となる質の高い臨床研究を推進するため、国際水準の臨床研究や医師主導治験の中心的役割を担う病院を臨床研究中核病院として医療法上に位置づけ、特定臨床研究に関する計画を立案し、実施する能力、他の病院又は診療所と共同して実施する場合には、特定臨床研究の実施の主導的な役割を果たす能力、他の病院又は

## 病院の種類



診療所の特定臨床研究実施の相談に応じ、必要な情報を提供し、助言その他の援助を行う能力、特定臨床研究に関する研修を行う能力を備え、ふさわしい人員配置、構造設備等を有するものについて臨床研究中核病院として承認するものである。

平成27年(2015)度に国立がん研究センター中央病院、東北大学病院、阪大病院 国立がん研究センター東病院、名大病院、九大病院、東大病院、慶大病院が承認され、平成28年(2016)度に千葉大病院、京大病院、岡大病院が承認され、平成29年(2017)度に北大病院が承認され、令和元年(2019)度に順天堂大病院、令和3年(2021)4月7日(令和4年(2022)度)に神戸大病院が承認されて、令和3年(2021)4月現在、14医療機関が承認されている。

岡大は、これまでの事案で蓄積した平成22年(2010)発足の新医療研究開発センターの成果が評価され、中国四国地方で唯一承認されている。

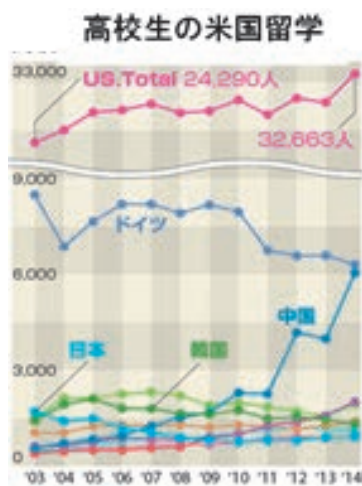
令和3年(2021)12月、厚労省の「外来機能報告等に関するワーキンググループ」(座長:尾形裕也・九大名誉教授)は、令和4年(2022)度に開始する紹介受診重点病院の指定要件を、外来の初診・再診に占める紹介患者の割合が初診40%以上、かつ再診25%以上とすることで大筋合意したと報じられた。大病院と中小病院の外来における機能分化を推進する狙いが一段と強化されることになる。

## 産官学連携のグローバル人材育成

我が国のグローバル化の考えは、トヨタに始まる。平成11年（1999）12月に、トヨタが世界の従業員を、「グローバル人材」と「ローカル人材」に分け、会社の将来を託す人材として、「グローバル人材」を育成する体制を考えた。グローバル人材とは、社会人としての基礎力があり、英語を使ってのコミュニケーション能力があり、異文化の理解と活用能力がある人材と考えられている。日本人だけの経営では企業としての成長に限界があるとの判断であった。これがきっかけで、以後我が国の産官学ではグローバル人材の養成、グローバル化が急速に広まることとなった。2000年代になって、企業が先ずグローバル人材開発部署を設けるようになり、この新しい人材育成が政府の政策として採用され、次いで大学の問題と考えられるようになったものである。



平成19年（2007）経産省、文科省の「産学人材育成パートナーシップ」が創設され、我が国の英語力が世界的に見て低水準であること、20代の若者の出国率が低いことが問題とされ、これが大学の問題であるとされた。日本の大学自体が世界に開かれた大学としてグローバルとなり、外人教師、留学生の受け入れ、日本人学生の海外留学援助、英語の授業の増加等が求められた。



平成20年（2008）文科省の事業として、2020年を目標に30万人の留学生受け入れを目指すグローバル30がスタートし、北大以外の旧帝大、筑波大、早大、慶大、上智大、明治大、同志社大、立命館大等が国際化拠点13大学として選ばれたが、2年で民主党政権下の事業仕分の為一旦廃止となった後、結局これは平成25年（2013）廃止となった。

平成22年（2010）産官学でのグローバル人材育成の検討が始まった。グローバル人材の育成・活用は社会全体の課題であり、企業、大学、政府が各々の役割を果たし、相互に連携する戦略が考えられるようになった。

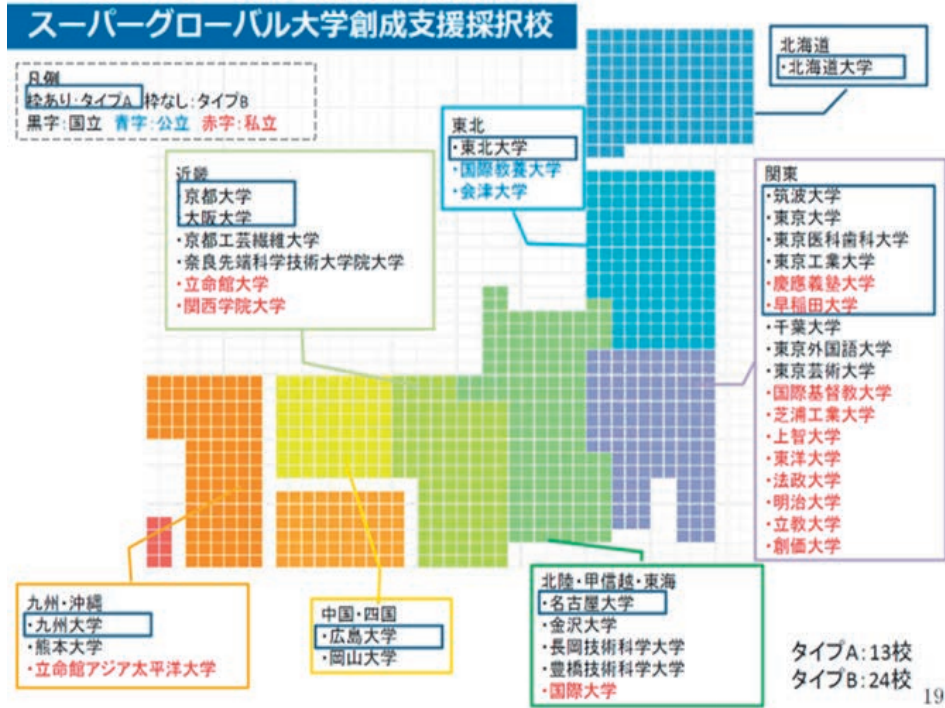
平成23年（2011）6月経団連の発表した「グローバル人材の育成に向けた提言」の中で、① 主体性、コミュニケーション能力、実行力、協調性、課題解決能力等社会人に求められる能力、② 既成概念に捉われず、チャレンジ精神を持ち続ける姿勢、③ 外国語によるコミュニケーション能力、④ 異文化・社会に対する興味、関心、適応力等が、世界と闘う産業界では求められているとし、産業界、大学、政府が連携して、そうした資質・能力を持つ人材の育成に取り組むよう提言した。

平成24年（2012）Go Global Japanと名付けたグローバル人材育成推進事業が文科省で募集される等、大学のグローバル化に向けた戦略、教育課程の国際通用性の向上、教員のグローバル教育力の向上、日本人の留学促進、語学力向上のための卒業までの取り組み等が審査されるようになる等、全国的に大学がグローバル化に向けて、特色ある工夫を凝らして競争する時代になった。こうしてグローバルビジネス学部、総合グローバル学部など新しい学部が登場してきた。

岡大では、平成25年（2013）には卒業後に国際社会で活躍する人材の育成のため、語学教育や教養教育、専門教育を統括する組織としてグローバル人材育成院が設置され、新入生から、グローバル人材育成コース（定員50名）が始まった。入学時のTOEIC-IPテストで一定基準以上の得点を有していることを要件とするが、希望する学生は各学部にも所属しながら、語学教育などの講義や海外留学・海外インターンシップなどグローバル人材育成コースのカリキュラムを履修することが出来る。

## スーパーグローバル大学創成支援事業 トップ型とグローバル化牽引型

平成26年（2014）4月、文科省は、国際競争力の向上及びグローバル人材の育成を図るため、世界トップレベルの大学との交流・連携を実現、加速するための人事・教務システムの改革など国際化を徹底して進める大学や、学生のグローバル対応力育成のための体制強化を進めるグローバル大学を支援することを目的として、スーパーグローバル大学創成支援事業を始めた。世界大学ランキングのトップ100を狙う実力がある、世界レベルの研究を行う「トップ型（タイプA）」と、これまでの実績を基に、新たな取り組みに挑戦し、日本のグローバル化を牽引する大学として、「グローバル化牽引型（タイプB）」の2種類を公募した。トップ型は応募した16大学から13校、グローバル化牽引型は応募した93校から24校の計37校が指定されて10年間



支援を受けることになった。

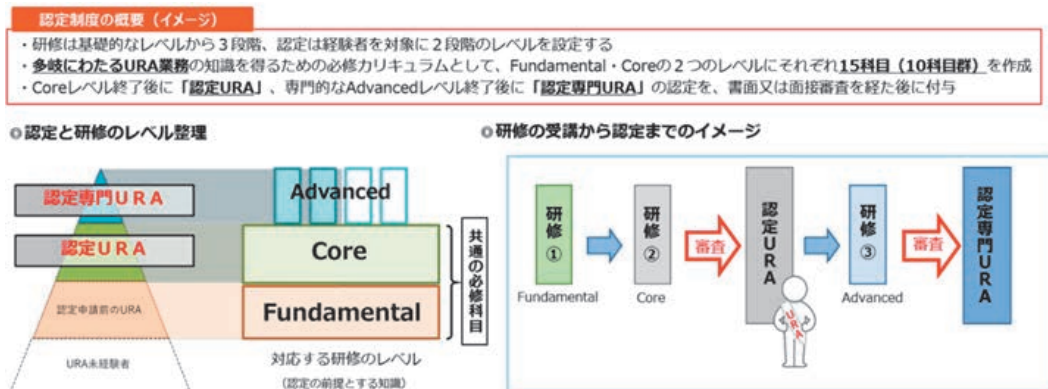
法人化した国立大学ではリーダーの責任と力量が問われる難しい競争の時代となり、医師の養成も大学全体のグローバル人材養成の一環として行われるようになった。その為、医学部の発展の為には、大学全体が発展することが必要であり、反対に医学部及び大学病院の発展が、大学の発展にとっても必要な時代となった。

岡大は、グローバル化牽引型に選ばれ、URA (University Research Administrator) を中心に、学生が主体的に学修し、グローバルに活躍できる実践人として羽ばたく環境・体制づくりを推進している。

**URA (University Research Administrator)**

平成24年 (2012) 9月、全国の大学や研究機関等に先駆けて、岡大では、教員でも事務職員でもない第3

の職種とも言うべき、大学の運営・管理を担うURAを全国公募により設置した。学長直属の、研究担当理事や副学長と行動を共にし、研究面では岡山大学を代表して、産学官各々の組織と、経営的判断の下に、組織対組織で対応する研究系の経営管理者であって、経営陣や研究者らと共に、研究活動の企画や研究成果の活用促進等総合的に管理することが職務の、世界と闘う岡山大学の中核的存在とされている。①研究大学である岡山大学の実現 ②大型プロジェクト研究グランドデザイン構築 ③機関連携型大型プロジェクト研究起動 ④国際レベル大型プロジェクト研究の提案 ⑤URA人材の育成・確保を使命としている。研究者と企業や行政をつなぐ産官学連携推進の専門職である。最近ではURAの質保証とか、認定URA、その上位の認定専門URAの研修制度も始まるようになった。現在岡大では7名だが、神大8名、広大13名、阪大13



名、東大43名、一番多いと言われる京大では48名と有力な各大学で活躍中だそうだ。

### 専門職大学院と専門職大学・専門職短期大学

平成15年（2003）施行の改正学校教育法によって、教育と研究の他に、高度な専門職養成の為に法科大学院、公共政策大学院、会計大学院、教職大学院、経営大学院（MBA Master of Business Administration）、公衆衛生専門職大学院、社会福祉大学院、臨床心理系大学院等の専門職大学院が出来た。これは、研究者を育てるものではなく、高度専門職業人の養成という社会的要望に応える為の大学院であって、研究や論文指導はしないで、様々な職業分野の高度で専門的な職業能力を有する人材養成の為に大学院制度である。

法科大学院を修了すると、新司法試験の受験資格が得られるし、公共政策大学院は、公共部門の直面する課題に対応出来、強い倫理感を持つ高度専門的職業人を養成するものである。

令和元年（2019）11月の朝日新聞経済気象台によると、専門職大学院は当初の目的を達成出来ず、法科大学院は最大74校あったが、36校に半減し、会計大学院も最大18校から12校に減少し、志願者は激減し、残る大学も財政的に厳しいそうだ。文科省の失敗であると断じている。

平成29年（2017）改正学校教育法が可決・成立し、専門職大学及び専門職短期大学が平成31年（2019）4月より開設された。修業年限は4年と2・3年で、卒業すれば学士（専門職）、短期大学士（専門職）を得られる。学位を得るのに必要な単位のうち実習が占める割合を3割から4割と定めており、これらの実習は企業などの現場で行われる。専門職大学は時代の変化に対応しながら、将来的に産業界をリード出来る人を育成する為に、産業界と連携しながら専門的なことを広

く実践的に学ぶ学校として設立された。「2011年に米国の小学校に入学した子供達の65%は、大学卒業後、今は存在していない職業に就くだろう」「米国における仕事の約47%が、今後10年から20年程度で自動化される可能性が高い」等の経済社会の変化に対する米国での予想に、スピーディーに対応出来る質の高い専門職業人養成のための、新たな高等教育機関の制度化で、昭和39年（1964）の短期大学制度導入以来、55年振りの新しい大学制度誕生である。

大学の開設は勿論可能だが、既存の大学・短期大学が、実践的な職業教育の専攻を新たに設けたり、一部の学部や学科を転換させることにより、新たな機関を併設出来るとしている。但し、修業年限6年の医学、歯学、薬学、獣医学はこの過程を置くことは出来ない。

令和3年（2021）5月現在公立2校、私立12校の専門職大学と、公立1、私立2校の専門職短大が開学している。ファッションビジネス学士、情報工学士、アニメ・マンガ学士等の誕生が見込まれている。

### 教授、准教授、助教

平成19年（2007）学校教育法が改正され、4月1日より施行された。従来教授、助教授、講師、助手と呼んでいた大学職員を、教授、准教授、助教の3段階にし、彼らの教育研究の補助を行うことを主な職務とする助手を定め、講師は、従来どおり大学の判断で置くことが出来ることと変更された。こうして大学教員の職階は、教授（professor）、准教授（associate professor）、講師（lecturer, instructor）、助教（assistant professor）、助手（research associate）となった。

准教授に教授を補佐する業務はなく、自身の研究と、講義や研究指導をすることが職務となった。教授のように大学の運営に関わる業務はないが、教室での研究の責任者の役割がある。


講師には従来通り、准教授のそれとほぼ同じ仕事をする常勤講師と、講義の時のみ大学に出務する非常勤講師がある。

非常勤講師は、大学が必要と認めた場合に、教授会の議を経て、医学部長が付与する、臨床教授、臨床准教授、臨床講師など様々な大学独自の称号を持って、学生の指導に当たる学外講師で、教授への道ではない。

助教には大学院博士課程修了者が想定されており、教授や准教授の研究や講義を補佐する義務はなく、自身の研究と学生の講義がその仕事になるが、講義については、特定の専攻分野の授業科目等大学の定めた特定の事項の講義に限られるものとなった。

助手の職務は研究の他に教授や准教授の研究のサ

### 専門職大学・短大と既存の大学・短大との比較

専門職大学・短大		既存の大学・短大
高度な「実践力」と豊かな「創造性」を育てる教育	特 色	学問的色彩の強い教育
4年制、2・3年制	修業年限	4年制、2・3年制
実習重視（卒業単位のおおむね3分の1以上は実習）産業界・地域とも連携	教育内容	理論重視 
4割以上は実務家教員	教 員	研究者教員が中心
学士（専門職）・短期大学士（専門職）	学 位	学士・短期大学士
高卒、社会人、編入生など多様な学生を受け入れ	入学者	高卒中心



ポートで、学生の講義はしない。一講座には教授1人、准教授1人、助教2～3人が基本的なスタッフとなった。

### 優・良・可・不可からGPA (Grade Point Average) 制度へ

GPA (Grade Point Average 成績指標値) とは、米国の高校や大学で一般に実施されている成績評価方法で、文部科学省により現在推奨されている厳格な成績評価方法の1つである。学生が履修した科目の成績を点数化し、その合計点を履修登録した単位数で割り算した、いわゆる1単位あたりの平均点のことをいう。

我が国では、昭和28年(1953)設立の国際基督教大学には、設立時から導入されている。初代学長の湯浅八郎は、前同志社大総長で、終戦の前後をアメリカで暮らした人であったし、初代学務副学長、初代教養学部長もアメリカ人であった関係で、開学当初から用いられていて当然であった。

この制度を導入することにより、学習の到達度を明確にすることができるため、学生の学習意欲を向上させることが目的の一つであり、又教員による学習指導にも活用され、留学や奨学金制度などの学内選抜の指標として利用される。グローバル化の進行に合わせて、2000年頃から採用する大学が増え、文科省によると、導入している日本の大学は平成17年(2005)度には248大学(全体の35%)であったが、平成23年(2011)度に453大学(全体の61%)となっている。

我が国の成績評価は、明治以来、優・良・可(60以上)・不可(59以下)の4段階評価であったが、米国のそれは、A・B・C・D(60以上)・E、又はF(Fail)(59以下)の5段階評価が多いため、80点以上を優としてきた我が国では、90点以上の秀と80～89点の優に分けた。GPAは、A(90以上)、B(80～89)、C(70～79)、D(60～69)、E(60未満)の5段階のGradeに、Aに4、Bに3、Cに2、Dに1、Eに0の点数を与え、取得した単位のGradeの点数の総計を取得した単位数で割ることで求めている。

Gradeとして、A、B、C、D、Fとか、A+、A、B、C、D等様々に呼んでいるが、5段階評価は変わらない。

岡大では、平成20年(2008)度入学生から導入し、平成28年(2016)4月1日から、GPAに各科目の成績をより細かく反映させるため、GPAの算出方法を下記のとおりfunctionalGPAと呼ぶものに改定した。A+であるGradeのうち、100点に4.5、99点に4.4、98点に4.3のポイントを与えるように、0.5ポイント間隔の段階評価にすると、90点3.5、80点2.5、70点1.5、60

点0.5となる。59点以下は0とする。

つまり取得した得点(素点)から55を引いて、10で割るとポイントが出る。これを60点以下であったものを含めた履修単位数で割ると、1単位当たりの平均ポイントが計算できる。このfunctionalGPAに変えることで、素点で計算した成績順位とGPAで出した成績順位が異なるという矛盾が解消できた。日本人としては分かり易くなった。

米国では、GPAの平均は2.4～2.8で、2.9～3.4優秀、3.5以上はかなり優秀とみなされ、0.0～2.3は勉強不足と評価される。卒業のためには通算のGPAが2.0以上が必要とされ、3セメスター(1年半)連続してGPAが2.0未満の学生には、退学勧告がなされるのが一般的となっている。

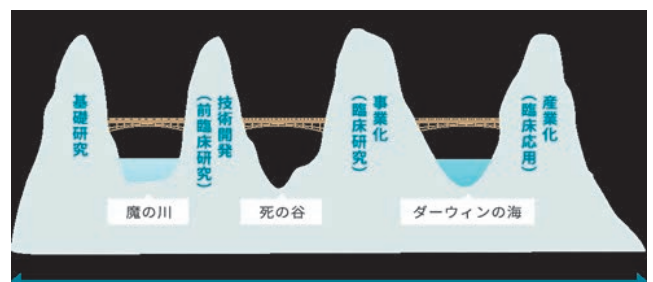
学校や教員によって授業の難易度が違ったり、学びたい科目の選択を単位取得の難易度で選ぶことも起こりやすい。逆に一心に学び、高いGPAを獲得して、大学を3年で卒業することも出来る大学もある。最近では、韓国、シンガポール、台湾、中国等でも導入されているようだ。

### 橋渡し事業 革新的医療技術創出拠点 AMED (Japan Agency for Medical Research and Development)

#### 第一期プログラム (6拠点)

平成19年(2007)3月、実施機関公募による文科省の5年毎の橋渡し事業がスタートした。基礎研究の成果を実際の医療に活用するため、技術開発、事業化、臨床応用の橋渡しをする研究を支援するもので、世界をリードする独創的先端医学を発出し、必要な医療ニーズに応えると共に、医薬品・医療機器等の創出による経済効果や新産業の創出を目指すものである。

平成19年(2007)第一期プログラムの「橋渡し研究支援推進プログラム」が北大(北海道臨床開発機構として、札幌医大、旭川医大を含む)、東北大、東大、京大、阪大、九大の6拠点と、サポート機関として先端医療振興財団(後の神戸医療産業推進機構)が加わってスタートした。文科省は5年間で「橋渡し研究支援拠点」の基礎(人材、設備等)が順調に構築されたと評価し



ている。

**第二期プログラム（9拠点） 革新的医療技術創出拠点15カ所（文科省と厚労省） AMED（経産省参加）**

平成23年（2011）8月の閣議で、この拠点の充実、強化の重要性が取り上げられ、基礎研究の臨床研究・臨床応用への橋渡しを更に加速し、医薬品・医療機器の開発等国民への医療の還元に効率的・効果的に繋ぎ、ライフイノベーションを創出する重要性の為、平成24年（2012）度より名大、慶大、岡大を加えた9拠点と1サポート機関とした、第二期プログラムが始まった。これは、育成能力を強化することで、9拠点における自己収入の確保を促進し、恒久的な橋渡し研究支援拠点を確立させることを目的とした「橋渡し研究加速ネットワークプログラム」である。

平成26年（2014）には、国民が健康な生活及び長寿を享受することのできる社会形成の為に、内閣府に、健康・医療戦略推進本部を設置し、健康・医療戦略の推進に必要な事項を定める、健康・医療戦略推進法が制定された。

**革新的医療技術創出拠点**

第二期の途中である、平成26年（2014）度から、健康・医療戦略推進本部の下、文科省の9つの橋渡し研究支援拠点（旧7帝大、慶大、岡大）と、厚労省の国際水準の臨床研究・治験の実施環境の整備を行う、臨床研究品質確保体制整備事業や医療法に基づく臨床研究中核病院等との一体的な運用により、基礎研究から実用化まで一貫した支援を行う「革新的医療技術創出

拠点」として、我が国発の革新的な医薬品、医療機器等を更に創出する体制づくりを行った。

厚労省関係の参加機関は、日本主導型グローバル臨床研究拠点（北里大、先端医療振興財団）、臨床研究中核病院（北大、千葉大、名大、京大、九大、東北大、群馬大、国立成育医療センター、名古屋医療センター、岡大の10機関）、早期・探究的臨床試験拠点（国立がん研究センター、阪大、国立循環器病研究センター、東大、慶大の5機関）、国立高度専門医療研究センター（NC）（国立がん研究センター、国立循環器病研究センター、国立精神・神経医療研究センター、国立国際医療研究センター、国立成育医療センター、国立長寿医療研究センターの6機関）を合わせた23機関であり、革新的医療技術創出拠点としては、旧7帝大、慶大、岡大、筑波大、千葉大、名古屋医療センター、国立がん研究センター（東病院と中央病院）、国立成育医療センターの15カ所が選定された。

**日本医療研究開発機構（AMED）**

平成25年（2013）より“日本版NIH（National Institutes of Healthアメリカ国立衛生研究所）”の仮称のもとで検討が進められていた新たな独立行政法人「日本医療研究開発機構（AMED Japan Agency for Medical Research and Development）」が、平成27年（2015）4月に設立され、経済産業省が加わって、政府が掲げる「日本再興戦略」の柱として、産学連携によって、我が国の超高齢社会が健康長寿社会である為の3つのLIFE（生命・生活・人生）を支える役割を



担うことになった。再生医療、感染症、がんなど医療分野の基礎から臨床までの研究開発を一貫して推進し、その成果を円滑に実用化につなげるとともに、それら研究開発の環境整備を総合的、効果的に行うことを目的とした統合プロジェクトとして、創薬や医療機器開発における司令塔機能が働くことになった。

### 第三期プログラム（10拠点）AMEDの事業に移管 革新的医療技術創出拠点13機関

平成29年（2017）第三期「橋渡し研究戦略的推進プログラム」の拠点は、全国で旧7帝大、慶応、岡山の9拠点到筑波大学が新たに加わって、10拠点となった。令和3年8月現在、革新的医療技術創出拠点としては全国で北大（代表北大で、札幌医科大、旭川医科大は分担）、東北大、筑波大、国立がん研究センター東病院、千葉大、東大、慶大、国立がんセンター中央病院、名大、京大、阪大、岡大、九大の13機関となっている。

全国の大学の中で、文科省からも厚労省からも拠点として選ばれた大学は、旧7帝大と慶応大学と岡山大学の9大学であり、従来文科省と厚労省の事業として分かれていた事業が、AMEDの事業に移管され、一体化して革新的医療技術創出拠点となった。岡大は中四国で唯一この拠点に選ばれたことになる。第3期の5年間は、拠点以外の機関における橋渡し研究の推進や、拠点の自立化を目指すもので、これ等の拠点を中心に、各地域や大学に於ける系列化が進むのではなかろうか。

令和4年（2022）度から新事業体制として開始する橋渡し研究プログラムは、令和2年（2020）3月閣議決定の健康・医療戦略等に基づき、文科大臣が認定した橋渡し研究支援機関（旧7帝大、筑波大、国立がん研究センター、慶大、岡大）を活用し、アカデミア等の優れた基礎研究の成果を臨床研究・実用化へ効率的に橋渡しするために研究費等の支援を行い、革新的な医薬品・医療機器等の創出を目指すことになっている。

### 国立大学3つのポリシー

平成11年（1999）12月、中教審の「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」の答申において、「各大学、学部、学科は、募集単位毎に例えば、国際的に活躍できる人材を養成するという観点から高度な外国語能力を求める、豊かな教養を持ち社会に貢献する人材を養成するという観点から文化活動やボランティア活動の経験を求めるといったように、受験生に求める能力、適性等を明確に示した上で、リスニング

テストを実施したり、多様な活動に関する自己推薦書を選抜資料として活用するなど、入学者受入方針（AP アドミッションポリシー）を実際の入学者選抜の方法等に反映させることが必要である。」と提言した。これをきっかけに、各大学のAPの明示が広がったものの、行き渡ったものではなかった。大学入試センター研究開発部の調査では、人文系は「言語能力」「取組態度」、社会系は「活動経験」、医歯薬系は「学力」「能力・適性」「目的意識」等のように、大学の求める学生像には専門による違いがある為に、学力、知識のチェックだけでなく、AO（Admission Office）・推薦入試が増加し、面接、志望理由書、小論文、調査書等の評価の比重が増してきている。

平成28年（2016）文科省は、各大学が目指すべき方向性を明確にするために、アドミッションポリシー（AP 入学者受入方針）、カリキュラムポリシー（CP どのように教育するか、教育課程編成・実施の方針）、ディプロマポリシー（DP どんな力をつけて送り出すか、卒業認定・学位授与の方針）の明確化を、平成29年（2017）度から、全国立大学に義務付けることになった。唯、大学入試センター研究開発部の平成16年（2004）の調査では、進路指導を行う高校の教師のAPの認知度は8割を超えているが、生徒は14%以下と低い。AO・推薦入試が現実では中心であるためのようだ。

国立大学がこのように、3ポリシーを明確にすることが義務付けされたことにより、各大学の目指す方向や、学部・学科の再編が加速され、受験生にとっても注意が必要な流れになってきた。

### 国立大学3分類

平成28年（2016）は、国立大学の法人化が始まった平成16年（2004）から12年目にあたり、6年間の第3期目の中期目標期間に入る。文科省は、国立大学が全て「ミニ東大」を目指すのではなく、各々の大学の特色を出し、多様な教育、研究が出来るようにと、国立大学を次の3タイプに機能分類し、重点的な予算配分をすることになった。

- 1 「卓越した教育研究」タイプ：世界のトップ大学と伍して、全学的に卓越した教育研究、社会実装（研究成果を社会に生かす）を推進するというミッションを持つタイプを16大学（旧7帝大、筑波、千葉、東京農大、東京工大、一橋、金沢、神戸、岡山、広島）が選択し、認められた。
- 2 「専門分野の優れた教育研究」タイプ：分野毎の優れた教育研究拠点やネットワークの形成を推進す

るミッションを持つタイプは、15大学（筑波技術、東京医科歯科、東京外語、東京学芸、東京海洋、お茶の水女子、電気通信、奈良女子、九州工業、鹿屋体育、政策研究大学院、総合研究大学院、北陸先端技術大学院、奈良先端技術大学院）が選択し、認められた。

3 「地域貢献」タイプ：地域のニーズに応える人材育成・研究を推進するミッションを持つタイプは、残り55大学となった。

これによって、岡大は全学部が国内だけでなく、世界のトップ大学と伍して闘うタイプのグローバルな大学になるという大きな目指すべき目標を持ち、学長及び補佐する経営陣の力量と、学術的な研究成果は勿論、学生の教育や卒後研修を含めたあらゆる革新的な取り組みの成果が試される大学となった。

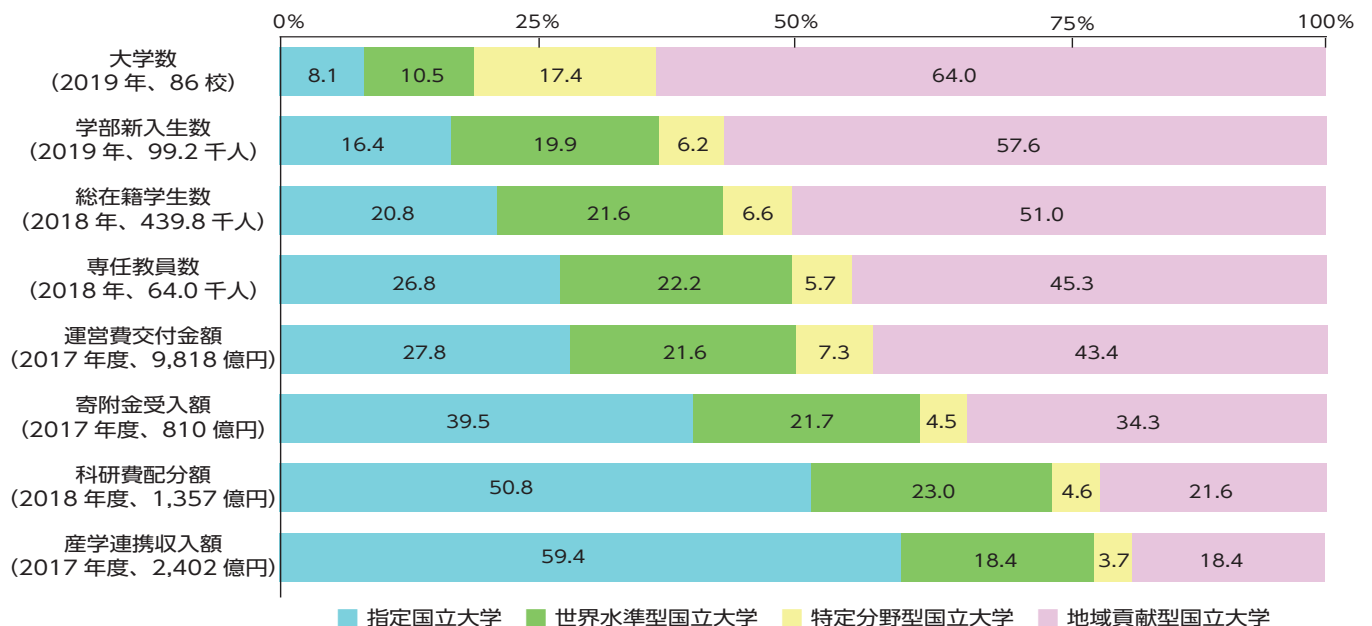
平成28（2016）年度から文部科学省では、科学技術人材育成費補助事業である「卓越研究員事業」を開始した。新たな研究領域に挑戦する40歳まで（医学は43歳以下）の若手の医学、薬学、歯学、獣医学、工学、保健学、文学、史学、経済学等の博士号を持つ研究者を、国が審査し、受け入れ希望の産学官の研究機関に紹介するもので、若手研究者が安定かつ自立して研究を推進できるような環境を、文部科学省管轄の日本学術振興会が、産学官を通じて実現するもので、国からは研究費などの補助がある。トヨタは1450万円の基本給を提示して受け入れを表明し、話題になった。

### 指定国立大学法人制度と国立大学のヒエラルキー

翌平成29年（2017）に改正国立大学法人法（平成28年法律第38号）施行による指定国立大学法人制度ができ、上記国立大学3分類を、① 世界水準型国立大学16校 ② 特定分野型国立大学15校（うち政策研究大学院、総合研究大学院、北陸先端技術大学院、奈良先端技術大学院の4校は大学院大学） ③ 地域貢献型国立大学55校とし、大学からの申請をうけて、「研究力」「社会との連携」「国際協働」の3領域の面から、国立大学法人評価委員会の意見を聴取した上で文科大臣が指定を行い、重点的な予算配分だけでなく、大学運営上の特典を与えるものである。平成29年（2017）6月、東北大、東大、京大の3法人の指定で始まり、令和元年（2019）9月5日時点で、東大、京大、東北大、東京工大、名大、阪大、一橋大の7大学が指定された。図は数の上では1割にもならないのに、有力大学にとっては、指定されることが如何に魅力的であるかを示している。その後、令和2年（2020）10月に、筑波大と東京医歯大の2大学が、令和3年（2021）11月に九大が追加指定され、令和4年（2022）現在、10大学となっている。

筑波大と九大は卓越した教育研究タイプ（世界水準型国立大学）の大学からの指定であったが、東京医歯大は専門分野の優れた教育研究タイプである特定分野型国立大学からの指定であった。医学と歯学を融合した「トータルヘルスケア」を実現する世界的研究拠点の形成計画が主な指定理由だそうだ。

令和元年（2019）の指定国立大学の実験



指定国立大学法人は、指定を受けると、法人に対する規制緩和として、産学連携として子会社を作ったり、外部資金を用いて研究成果を活用したり、人材確保の為に高額報酬・給与の支給が可能となる等思い切った大学運営が出来るようになる。

指定国立大学の100%出資の子会社として、平成30年(2018)設立の東京大学エクステンション(株)や京大オリジナル(株)、令和元(2019)年設立の東北大学ナレッジキャスト(株)、令和2年(2020)東工大設立のTokyo Tech Innovation等があり、有力大学では大学運営も多角的になってきた。

令和4年(2022)2月現在、指定国立大学は10校、世界水準型国立大学17校(指定国立大学10校を含む)、特定分野型国立大学14校(大学院大学4校を含む)、地域貢献型国立大学55校となっており、これが令和の新しい国立大学86校の、文科省が作り上げたヒエラルキーである。地域貢献型は附属病院の有無で二分する動きもある。

令和4年(2022)1月、世界最高水準の研究を目指す「国際卓越研究大学」支援の10兆円規模の大学ファンド制度を設け、1校当たり年数百億円を支援する、国の認定を受けたトップ校の大学を5~7校まで段階的に増やす他に、地方大学支援の「総合振興パッケージ」も作る方針を政府が固めたと報じられた。指定国立大学の上部に一ランク上の階層が出来そうである。

東京医歯大の躍進の最大の原因は、「己を知れば邪心なし」をモットーに、世界に冠たる大学を目指す、6年間で世界大学ランキングを100番台から70番台まで上げたと言われる学長の存在で、「いい人を探る」と、31歳の教授の誕生を決めたり、優秀若手研究者奨励賞を設けたり、全理事と評価担当の特命副学長からなる人事委員会の面接による教授選考を行ったり、失敗したら責任を取ると、強力になった学長権限を使って、「大学の為になる」ことを積極思考で全力を尽くした結果だと言われている。

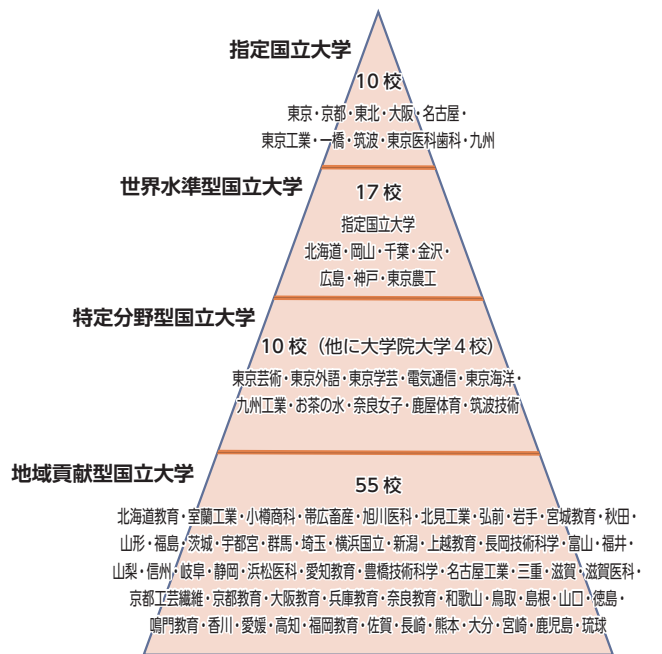
一方では、法人化により強くなった学長権限を巡って、大学内での争いが目に付くようになった。東京医歯大のような大学運営の出来る邪心のない学長は少なく、争いは大学を思う為ではなく、殆どは私利私欲から発しているようで、長い間自身を磨いてきた筈の大学で、頂点に立った時に露呈する自身の姿を鏡に映す時、学長だけでなく、教育者、医師としても失格者なのだ、と認識すらできない人物であったということなのだろう。旭川医科大、北大、東大、京大、筑波大、大分大その他学長を巡る争いが報じられている。表に

出ない争いはさぞ多いことだろう。

法人化までの学長は、教授の代表の感が強く、教学の責任は兎も角、大学経営の責任迄は求められていなかったのに対して、教学、経営共に最終的に決定する権限を持つ法人化後の学長は、特に経営についてのノウハウを一体いつ、どこで、学んだのだろう。権限行使を行う立場になる前に、きちんとした研修が無いのなら、そのことが争いの一因にもなろうし、付け入る部下も出るだろう。学長になる迄に、公衆衛生とか医療経済、医療経営等いくつかの研修を受ける機会が必要なのではなかろうか。

法人化後、学長の問題とは別に、「親方日の丸」の時代には、全く利益を生み出すことの無い分野での研究が、結構行われていた筈だが、それらは一体どうなのかということも、気になる問題である。

世界水準型国立大学は、全てが指定国立大学に指定されることを求められているのではなかろうか。我国を代表する大学として、ブロック毎に旧帝大が設置されたように、ブロック分けにした各地域には、学長のリーダーシップの下で存在感を増し、目指すべき方向性を持ち、特徴ある取り組みをする大学が求められているように思う。北海道、北陸、中四国には現在、指定国立大学はない。これらの地方にはいずれ指定国立大学は出来るだろう。その後、各地の有力大学を中心に国立大学の統合が進むのではなかろうか。



令和4年の国立大学86校のヒエラルキー

## 文理融合学部 女子大学の工学部 データーサイエンス学部の新設

国立大学法人化後、6年毎に策定している中期計画の、第3期中期計画が平成28年（2016）から策定されているが、その中で、平成29年（2017）から文理融合等、従来は存在しなかった学問として、共創学部（九大）、創生学部（新潟大）、都市科学部（横浜国大）、人間科学部（島根大）、総合科学部（広大）等や、データサイエンス学部（滋賀大）、ソーシャル・データサイエンス学部（一橋大）等が出来るなど、大学の生き残り戦略としての工夫がみられる学部が新設されるようになった。

更に奈良女子大では令和4年（2022）に、お茶の水女子大も令和6年（2024）に、国内の女子大で初めての工学部開設が予定されていて、急速な世界の動きに合わせた真摯な大学の生き残り戦略とみられている。背景には教育系の廃止と人文社会系から理工系へ移行を求める文科省の姿勢がある。

社会のグローバル化やICTの急速な進歩により、ビッグデータの活用が不可欠で、ビジネス、政治、医療、教育、行政、都市交通、環境問題等あらゆる面で、数学・統計学を活用したデータ処理能力に加えて、価値創造に活かすためにマネジメント、マーケティング等の人文社会科学の視点が社会で求められ、従来の学問分野で区切られた教育だけでは、社会のリーダーを育てられない時代になっている。文理融合の時代は、我々が長年使用してきた文系とか理系等と大別する区分は通用しない時代ということなのだろう。

国は令和7年（2025）までに、データサイエンスやAIを駆使できる人材を年25万人養成する目標を立てている。高校では平成15年（2003）年度から「情報」が教科として採用され、令和4年（2022）度から、全ての生徒がプログラミングとネットワーク、情報セキュリティの基礎を学び、令和7年（2025）度の共通テストで「情報」が出題されることが、令和3年（2021）夏に決まった。

ビッグデータなどから必要な情報を収集、抽出するプロフェッショナルをデータサイエンティストと呼び、米国では将来性のある職業第1位なのだそう。数理・データサイエンス能力の活用範囲は、いわゆるAI、ロボットやセンシング（センサーを用いて情報を集めること）などの理工学を中心とした分野のみならず、学問領域を超えて、法律、金融・保険、健康・医療、災害対策など社会における様々な分野の発展に大きく寄与するものとして期待されている。我が国でも、企業も大学もその育成の取り組みが始まり、

データサイエンティスト協会も出来ている。政府主導の「Society 5.0」に対応した最先端の大学教育として、この分野が急速に進化しつつあるようだ。

文部科学省は平成28年（2016）に「数理及びデータサイエンスに係る教育強化」の6拠点6大学（北大、東大、滋賀大、京大、阪大、九大）を選定し、拠点校の数理・データサイエンスを中心とした全学的・組織的な教育を行うセンターを整備し、各大学内だけでなく、全国の大学に波及を図るため、全国を6ブロック（北海道・東北、関東・首都圏、中部・東海、近畿、中国・四国、九州・沖縄）に分け、東大を幹事校として数理・データサイエンス教育強化拠点コンソーシアムをつくり、令和元年度（2019）に選定された協力校20大学（北見工業大、東北大、山形大、筑波大、宇都宮大、群馬大、千葉大、お茶の水大、新潟大、長岡技術科学大、静岡大、名大、豊橋技術科学大、神大、島根大、岡大、広大、愛媛大、宮崎大、琉球大）の協力を得て、普及活動を開始した。

令和3年（2021）2月、内閣府・文科省・経産省の3府省が連携して、大学、高等専門学校の正規の課程で学生に、数理・データサイエンス・AIを適切に理解し、活用する基礎的な能力を育成することを目的に体系的な教育を行う、文科省の「数理・データサイエンス・AI教育プログラム（リテラシーレベル）」認定制度が始まった。岡山大学は、第1回目の募集で、令和元年から行っている「文系から理系までの学生を広く対象とする数理・データサイエンス教育プログラム」が認定された。拠点校（滋賀大学）が作成したオンライン教材を活用して、岡山大学全学部の必修科目として、令和3年（2021）度から、本プログラムの対象科目を開講している。

令和3年（2021）に新生の岡大工学部では、4つの系のうち、情報・電気・数理データサイエンス系の数理データサイエンスコースで学ぶことが出来る。

平成30年（2018）12月設立の東京大学エクステンション(株)は、社会人向けのデータサイエンススクールとして、AI・データ活用を東大の教授陣がレクチャーする事業を行っている。

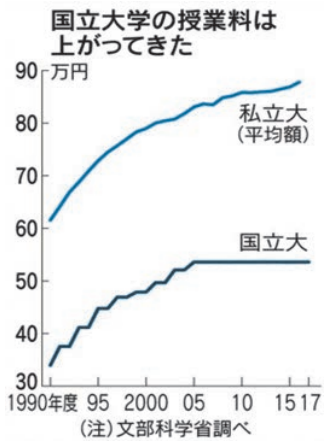
令和3年（2021）8月、データサイエンス専門家の横浜市大教授が、人口377万人、職員4万人、予算3兆円規模の横浜市長に当選し、データサイエンスに基づく市政運営に乗り出し、注目されている。

令和3年（2021）12月の朝日新聞「育てデジタル人材」で、宅配便大手のヤマトや事務用品通販大手のアスクル等では、デジタル人材育成の「自前の学校」を開校していると報じた。

経産省は、2030年までに、最大79万人のデジタル人材が不足すると試算している。

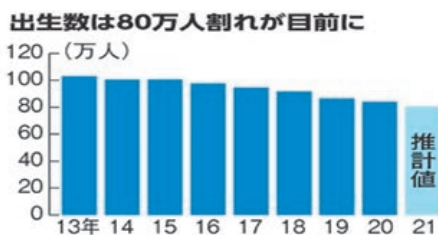
有力国立大学授業料値上げの動き

国立大学の授業料は、法人化に伴い一律1.5万円値上げして53万5800円となって以来、平成16年（2004）3月の文部科学省令第16号の第十条（授業料等の上限額等）に、国立大学法人は、規定する額の2割を超えない範囲内で授業料を定めることが出来る、と規定されているにも拘らず、値上げされることはなかった。しかし、法人化以降初めて、東京工業大学が平成30年（2018）9月に、翌年から授業料を9万9600円値上げして、63万5400円（年額）とすると発表した。世界に伍するという高い目標の達成には引き上げが必要との結論に至ったようだ。その1か月後に東京藝術大学が標準額の2割増しの年額64万2960円とすると発表した。国の交付金が減少傾向の中、学生の留学などグローバル化に対応した人材育成などには経費がかかり、自己収入を増やす必要があると判断したようだ。



次いで令和元年（2019）6月に、千葉大学は、「学部・大学院生の全員留学」などのプラン実現のため、新たな財源の確保が不可欠であるとして、令和2年（2020）の入学者から学生、院生ともに授業料を年額64万2960円に値上げすると発表した。9月には一橋大学が指定国立大学となる為には、グローバル化を更に進めなければならないからと、同じく2割アップを決め、東京医科歯科大学も11月に、令和2年（2020）からの同じ額の値上げを発表した。

いずれも、国の求める高いレベルの大学を目指すには、国からの不安定な補助金や交付金の他に、安定した財源確保が必要との観点からの決定である。予算の70%を占める運営費交付金は、国の財政難を理由に、財務省による削減傾向が続いており、その分を寄付金



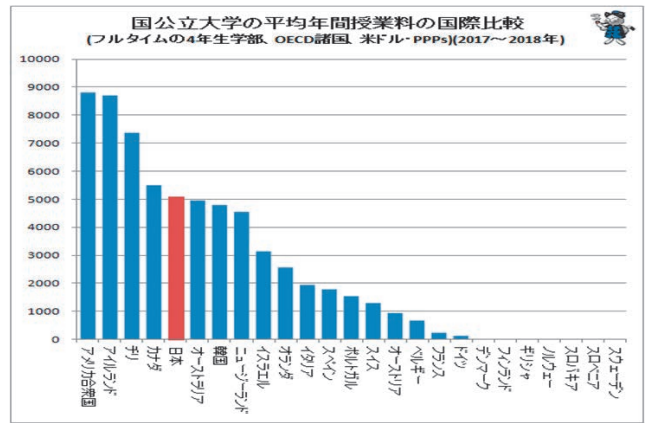
や事業収入など独自財源で穴埋めする工夫が必要となっている。

18歳人口は、平成4年（1992）の205万人から令和22年（2040）には88万人まで減少してくると予想されていた。しかし実際は予想より早く少子化が進んでいるようだ。厚労省は例年12月にその年の出生数の推計値を出すのだが、最近の2年間はコロナの影響が大きいとして発表していない。令和3年（2021）に国内で生まれた日本人の出生数は80万5千人程度と、国と同じ方法で計算した推計値を朝日新聞が報じた。80万人になるのは令和10年（2028）と見込まれていたのに、実際には7年早く少子化が進行していると見られる。

少なくなっていく子供の教育費の無料化が叫ばれている中で、国立大学の学費が値上がりする勢いにあるという矛盾は、有利子の奨学金を受ける学生の増加が著しく増えて、大学生のおよそ3分の1に当たる90万人にもなっていることで目立たなくなっているようだ。

令和2年（2020）9月文科省は、新型コロナウイルスの影響で困窮する学生が増えていることもあって、国立大の授業料を各大学が独自に決める自由化は当面見送ることを決めている。大学への影響の大きな授業料の自由化が近いということだが、世界の大学を見れば、ヨーロッパ特に北欧の無料から、我が国の倍近いアメリカまで様々で、少子化の傾向が止まらない日本の大学にとっては、右に持って行くべきか、左に持って行くべきか大学にとっては悩ましい所だろう。指定国立大学に指定される有名大学や、指定されることを狙える有力大学では、授業料の値上げは、受験生減少の影響は比較的少なく済むのではないかと思われるが、地域貢献型の大学にとっては、経営上大きな問題となりかねない。

留学生の増加対応、人生100年時代の社会人教育の推進、地方創生への貢献、Society 5.0実現に向けた人



材育成の必要等、大学に課せられたものは大きい。今後益々国立大学の財政運営は厳しくなると予想されており、授業料値上げ問題は、小規模大学が、有力な大学の下に統合、再編されるのを後押しする一因になりかねない。

### 1 法人複数大学制（アンブレラ方式）と有力国立大学の統合再編の動き

令和元年（2019）5月に改正国立大学法人法が成立し、国立大学に於ける1法人複数大学制（アンブレラ方式）が可能になった。同年夏には名大と岐阜大が法人統合を果たし、東海国立大学機構が設立され、各大学個別に新体制の下で令和2年（2020）4月の新入生を受け入れた。帯広畜産大学と小樽商科大学、北見工業大学の3大学及び奈良女子大学と奈良教育大学の2大学は、令和4年（2022）4月に大学の運営法人を統合し、北海道国立大学機構と奈良国立大学機構を設立する。静岡大学と浜松医科大学の法人統合は、令和元年（2019）から協議が進められているが、結論は出ていない。

統合問題で、最も衝撃的に受け取られたのは、一橋大、東京工業大、東京医科歯科大、東京外国語大、東京芸術大の5大学統合による第二東京大学構想と言われたものであった。東京芸術大の同意が得られず実現していないが、残り4大学は連携が続いている。令和4年（2022）1月に、東京医歯大が、語学の授業の一部を新学期から東京外大にオンライン方式で委託すると報じられた。遠距離であっても連携が可能で、アンブレラ方式が行き渡るにつれ、今後各大学で広まりそうである。

公立大学でも組織統合が進んでいる。平成31年（2019）4月には大阪市立大学と大阪府立大学が法人統合をする形で公立大学法人大阪が設立され、令和4年（2022）4月には大学が統合されて、大阪公立大学

の名前となって開学し、令和7年（2025）には、大阪環状線大阪城公園駅の近くにキャンパスが出来る予定となっていると報じられている。

令和3年（2021）4月に、公立大学法人名古屋市立大医学部は、名古屋市内の東部、西部両医療センターを付属化し、11月に同市内の緑市民病院と厚生院付属病院も付属化した為、関連する5病院の病床数は、国公立病院としては国内最多の約2150床となった。5病院が連携することで、救急や災害時の医療体制を強化することが出来、高齢者医療の充実や、地域医療を支える幅広い人材の育成も目指すと報じられた。大学病院の多角化、臨床医養成手段、地域医療の要望に応じた地域医療の充実など、法人化後は従来とは異なる大学病院運営が出来そうである。

大学の統合問題について、マスコミで報じられた予想によれば、平成28年（2016）に、「世界と闘う」「優れた専門」「地域貢献」に3類型化された中で、主に地域貢献タイプが統合されるだろうと見られている。山陰の2大学と鳴門教育大学を含む四国の5大学、山口大学を巡って、岡大と広大の間で、かつての六高誘致、或いは終戦後の中国総合大学争奪戦の歴史を繰り返す可能性を感じさせられる状況にある。

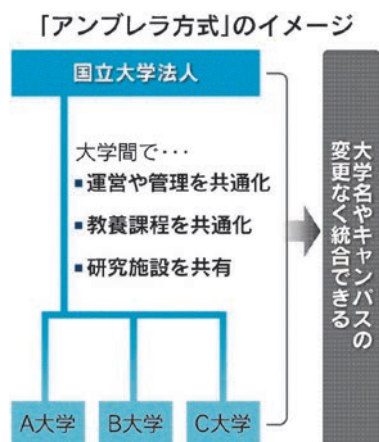
### （3）これからの岡山大学（医学部）の可能性と立ち位置

#### 新型コロナウイルス感染症（COVID-19）対策と道州制検討の提言

令和2年（2020）11月、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）対策に際して、「地方自治体の早期の、独自の対応が奏功した例が見られ、地方分権の重要性が改めて認識された」として、関西経済連合会は道州制の議論を始めるべきであるとの提言を行い、提言書を日本政府や近畿や四国などの12府県市で構成する関西広域連合の構成自治体に送付した。緊急事態宣言を巡って、国と都道府県では方針の食い違いが見られ、テレビを通じて国民全体に、大阪、東京の個別対応よりも、周辺の自治体と一体となった対応が感染拡大防止に重要であるとの認識が広まった。

令和2年（2020）12月、武田良太総務大臣は、閣議後の記者会見で道州制に対する考えを問われ、「一つの改革案として広域の自治体を10前後のブロックに再編する道州制は一つの有力なもの」と発言している。

我が国が持続的な発展を続けるには、東京一極集中を廃して、成長の核が複数存在する「繁栄の多極化」が不可欠で、地域が独自の施策を実施できるような権限・





自主財源の確保を伴う抜本的な地方分権改革が必要であるという立場から、関西経済連合会では、昭和21年(1946)の設立当初から、地方分権改革・道州制の研究を進め、その必要性を訴えてきた。その具現化モデルが平成22年(2010)設立の関西広域連合で、国は外交・防衛など国家的視点が必要な役割のみを担い、権限・財源を地方に移譲する分権型道州制実現を提言し続けている。

道州制

道州制とは、道と州を行政区画として置く地方行政制度で、全国を10前後の州に分け、道州に現在の都道府県より高い行政権を与える構想を指しており、昔から何度か検討されてきている。平成18年(2006)安倍内閣は、初めて道州制担当大臣(佐田 玄一郎3か月で辞任後、渡辺喜美)を設置し、以後道州制ビジョン懇談会を32回開いて検討した後、平成30年(2018)までに道州制に完全移行すべきであるとの中間報告を発表後活動を停止している。

一方で、市町村の存在否定であると、全国町村議会議長会の根強い反対もある。

台湾総督府(明治28年(1895))、樺太庁(明治40年(1907))、朝鮮総督府(明治43年(1910))、南洋庁(大正11年(1922))が次々に出来てみると、国内の統治として、府県制より大きな纏まりの方が能率的で合理的であるとして、昭和2年(1927)に田中 義一内閣の行政制度審議会がまとめた、州庁設置案が名高い。

全国を北海道と、仙台北(青森、岩手、宮城、福島、秋田、山形)、東京州(茨城、栃木、群馬、埼玉、千葉、東京府、神奈川、山梨、長野、新潟)、名古屋州(静岡、愛知、岐阜、三重、富山、石川、福井)、大阪州(滋賀、京都府、大阪府、兵庫、奈良、和歌山、徳島、香川、高知)、広島州(鳥取、島根、岡山、広島、山口、愛媛)、福岡州(沖縄を含む)の7州に分け、最も枢要の地である、札幌、仙台、東京、名古屋、大阪、広島、福岡を州庁所在地とし、州を国の地方行政機関とし、州が地方自治体である府県と市町村を監督し、地方自治体

の長(知事)は公選とする、というものであった。

当時は、市町村は地方自治体であったが、府県は地方自治体であると同時に、国の地方行政機関でもあり、内務省から派遣された知事の下に国の行政機関としての事務も処理していた。この案では、当時の交通状況等を反映して、四国4県を、大阪州(香川、徳島及び高知の3県)と広島州(愛媛県)に分けていた。

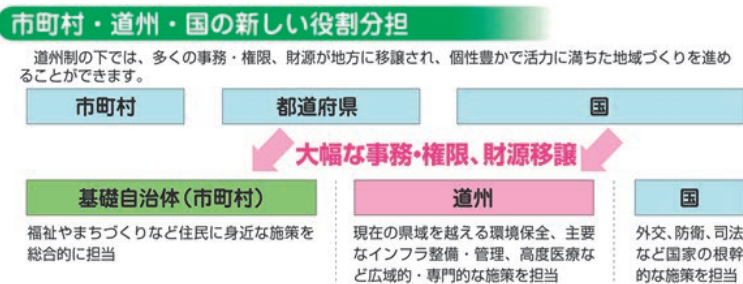
中央各省には現在の地方出先機関にあたる特別地方官庁設置は認められず、所掌する事務に関して府県知事を指揮監督する権限を有していたので、戦前の府県知事は、広域的な地方行政も担当し、軍事・警察、教育、徴税など一切の権限を掌握する国の総合的な地方出先機関とも呼べる存在であった。戦時体制への移行に伴って物資調達・統制経済が強化されると、中央各省はこれに対応する広域地方特別官庁である、出先機関の新設、再編・強化を行うとともに、これまで府県が処理してきた事務を出先機関を通じて直接処理するようになった。

戦後、総司令部の「知事直接公選」の要求は、これ等の根本的転換を求めるものであった。中央各省は、広域的な地方行政の統一性・一貫性の確保の視点からこれに反対し、広域的な総合的行政機関の設置が要望されるようになり、府県の存続、廃止が論じられた。

昭和32年(1957)、第4次地方制度調査会の「地方制度の改革に関する答申」で、全国を7ないし9ブロックに区分した区域に分け、その長は議会の同意を必要とするものの、国が任命する国家公務員である道州制を導入すべきとしている。

その後昭和38年(1963)には、東海3県(愛知、岐阜、三重)と阪奈和3県(大阪、奈良、和歌山)の合併構想もあったが、実現することも無く経過しているものの、政界、経済界には道州制に関する期待が根強く残っている。2000年以降は全国知事会でも検討が始まった。

平成18年(2006)、第28次地方制度調査会が、「道州





制のあり方に関する答申」を公表した。その基本は、国の役割を、本来果たすべきものに重点化し、内政に関しては広く地方自治体が担うことを基本とするというものであった。広域自治体として、都道府県に代えて道又は州を置き、地方自治制度は、道州及び市町村の2層制とするとし、同州の区域を、9、11、13の3案を示している。

- ①9道州案 北海道、東北、北関東信越、南関東、中部、関西、中国・四国、九州、沖縄
- ②11道州案 北海道、東北、北関東、南関東、北陸、東海、関西、中国、四国、九州、沖縄
- ③13道州案 北海道、北東北、南東北、北関東、南関東、北陸、東海、関西、中国、四国、北九州、南九州、沖縄

現在都道府県が実施している事務は大幅に市町村に移譲し、道州は広域事務を担うこととし、道州に議決機関として議会を置き、議員は、道州の住民が直接選挙する。道州の長は、道州の住民が直接選挙するといふもので、昭和2年(1927)に田中 義一内閣でまとめた中央集権的なものではない。

本四連絡橋が3本架かっている令和の現在では、②案に近い中・四国をまとめた10道州案が現実的な案ではなかろうか。

### 三海州

中国・四国が一つの州になる場合、日本海、瀬戸内海、太平洋に面する為、「三海州」と呼ぼうと、中四国地域の広域連携や道州制の導入に関心を持つ有志による、「三海倶楽部」の設立総会が平成20年(2008)12月に岡山市で開かれた。将来の道州制を見据え、広域連携を通じて、中四国の各地域が互いに連携し、それぞれが発展していく関係を創出するため、今後の方向性を幅広く情報発信し、行動の風を起こそうとするものであり、古市大蔵氏(株トミヤコーポレーション

代表取締役社長)と松畑熙一氏(中国学園大学・中国短期大学 学長)が代表世話人に、当時の石井正弘岡山県知事(現在自民党参議院議員、操山、東大法卒、経済産業副大臣兼内閣府副大臣として、岸田内閣が掲げる「デジタル田園都市国家構想」推進と分散型国土形成に取り組んでいる)が顧問に選ばれた。道州制実現に熱心な石井知事の時代は、平成21年(2009)、平成22年(2010)、平成24年(2012)と、道州制シンポジウムや講演会を開催するなどの活動を行っていた。



本稿でも中・四国を合わせて「三海州」と呼ぶことにする。

### 山陰・四国を結ぶ新幹線計画

「三海州」としてまとまるのに重要な役割を果たす手段として、岡山と高知、岡山と松江を結ぶ新幹線の基本計画線がある。我が国経済が急成長している時代の昭和44年(1969)に、新全国総合開発計画の中で、全国新幹線網の一環として示され、昭和48年(1973)に田中角栄の日本列島改造論に依じて、昭和60年(1985)までに完成予定として、基本計画が立てられた。この計画は現在も生きており、この時の計画に基づいて、現在各地の新幹線整備が行われている。

岡山-児島-坂出-高知を結ぶ全長150キロの四国横断新幹線と、松江-米子-岡山の150キロを結ぶ中国横断新幹線の計画は、直後のオイルショック、その



後の長い日本経済の低迷の為に、A図の赤の点線で示すその他の基本計画と共に未だ実現していない。自動車道の発達、人口減少、高齢化の波の影響等により、山陰と四国の新幹線建設は全国的に見ても遅れている。

この三海州を南北に横断する2本の新幹線の他に、三海州には、新大阪－明石・鳴門－徳島－高松－松山－大分の480キロを結ぶ四国新幹線と、新大阪－鳥取－松江－新下関550キロを結ぶ山陰新幹線の建設計画もある。この2本は、人口減少時代を迎え、経済が低迷する現在では実現不可能と見られている。山陰と四国に新幹線を走らせるには、松江と高知を結ぶ線を中心に大勢の外国人を呼び込む魅力ある街づくり以外にはないのではないのか。

四国では、徳島と松山を結んだ線に、高知と岡山を組み合わせた四国新幹線（B図）建設のロビー活動が活発になっているようだ。これに松江－米子－岡山を組み合わせ、三海州としての取り組みをするべきではないだろうか。

瀬戸大橋は新幹線を想定して建設されており、道路用と鉄道用の2階建てとし、鉄道用には在来線2本と新幹線2本の計4本を敷くことが出来る。このルートは、工事をするだけで新幹線を走らせることが出来、費用も安い。

徳島と淡路島を結ぶ大鳴門橋も、車が走っている道路の下に新幹線の線路2本は走らせることが可能な作りになっているが、淡路島と新大阪の間、四国と大分の間、しまなみ海道には新幹線を走らせることは出来ない。従って、三海州を結ぶ鉄道（新幹線）は岡山を通るルートだけしかないと考えてよい。従来四国も山陰もそれぞれ独立に費用対効果などを検討してきたきらいがあって、三海州としてのまとまった動きは少なくともデータが無いようだ。平成24年（2012）に着工して、現在工事中の北陸（金沢・敦賀間）、西九州（武雄温泉・長崎間）、北海道（新函館北斗・札幌間）の整備新幹線の完成予定がそれぞれ令和4年（2022）末、令和4年（2022）末から可能な限り前倒し、令和12年（2030）末となっているので、その後を狙って、岡山



を中心に、四国と山陰が一丸となって、松江、高知間の三海州を結ぶ新幹線整備を国へ陳情すべきではないだろうか。

### 三海州の岡大と広大

従来、政界、財界を中心に、国の権力を地方に分散させることが望ましいという立場から、根強く存在している道州制を、コロナ禍での危機管理の面からも、本気で検討すべきだとの声が上がってきた。文科省の立場からも、国立大学の法人化以来、全国の国立大学の統廃合を進め、全国で国が重点的に支援する大学の数を絞る目的で、指定国立大学制度が始まった。これは道州制実現と同じ方向性にあると言える。近い将来、北海道、北陸、中四国にはいずれ指定国立大学は出来るだろう。岡山は中国地方、中・四国地方のいずれの地域に属するとしても、競合する大学は広大である。道州制を考えた時、中心的な大学の無い州は出来ない筈なので、地域貢献型だけの四国には指定国立大学は生まれないとすれば、大学配置の面からも、経済規模の面からも、中四国は一つの州になるだろう。従って、中四国の他の大学は、現在の状態ではいずれ、令和元年（2019）の改正国立大学法人法（アンブレラ方式）によって、この2大学の傘下に置かれるだろうと予想される。一般的に道州制は、社会資本整備、産業・経済、医療・保健・福祉、農林水産業、雇用・人材育成、環境、行政、地域性などの分野でメリットがあり、行政サービス、歴史・文化、道州間競争等の面ではデメリットが大きくなると考えられている。三海州が実現すれば、新幹線を結ぶ線上の鳥根、鳥取、香川、徳島、高知等の大学は岡山、山口、愛媛の2大学が広大と大きく分かれるのが自然であろうと思う。平成28年（2016）法科大学院を廃止した香川大学法学部では、岡大の法科大学院と連携協定を結ぶ等の動きも報じられた。岡大にとっては、日頃からのこれ等の大学との連携が大切であり、特に鳥取、徳島と近畿の大学との連携には注意が必要だと思う。

### 各県の事情と夢想する三海州と岡大（医学部）の未来

従来、愛媛と広島の結びつきは強く、現在も「しまなみ海道」で結ばれている。愛媛には令和の現在では、広大の関連病院（四国がんセンター、八幡浜総合病院、松山日赤病院、松山市民病院）も出来ている。

下関と北九州市の門司は同じ経済圏と言えるほど結びつきが強いが、道州制を考える場合には、山口と広島との結びつきの方が自然だろう。鳥根は新幹線の関係で岡山と結びつき、米子経由の関係で鳥取も岡山と



結びつき、高知、徳島、香川も岡山との結びつきを望むだろうと思う。

徳島は明治の廃藩置県で、淡路島を切り離され、淡路島は兵庫県になった。その為か、徳島と近畿圏との結びつきは強く、近畿の天気予報には徳島の情報が報じられている。近畿の経済界と密接な関係を築いて、淡路を通り、新大阪への新幹線を望んでいるようでもある。

明治の廃藩置県後に府県の統廃合が行われた際には、兵庫県北部の但馬と鳥取を結ぶ案が出たとき、鳥取と但馬の間は山が険しく往来が不便との理由で、内務郷大久保利通の許可が出なかったことがあるが、本来鳥取は近畿圏とは結びつきにくい面がある。しかし鳥取は岡山や広島と結びつくより、近畿圏との結びつきを望む力が強い。平成22年（2010）誕生の関西経済連合会の、関西広域連合のメンバーに徳島県知事と共に鳥取県知事が加わっている。鳥取ではこの為、中国横断新幹線よりも山陰新幹線を望む力が強いようである。

こういった複雑な事情の中で、高度成長期と違って、人口の減少や過疎化、低迷する経済状況の中、日本列島改造論時代に出来た計画通りの、四国新幹線や山陰新幹線の実現の可能性は極めて薄いと考えられている。高知と岡山或いは、松江と岡山を結んだ場合の経済効果はそれぞれ検討されているが、松江と高知を岡山経由で結んだ場合の経済効果の検討は行われていないようだ。

この三都市を結んで、中間の岡山を中心に、① 医療研究産業都市の建設、② 州内の各大学が得意な専門分野の最先端医療を分担して受け持ち、各地域で得意な先端医療が受けられるシステムの創設、③ 大学の全学部が協力して、ビッグデータを用いた、地球温暖化に伴う気候変動に対応する健康対策センターと、三海州ならではの陸と海の、気候変動に左右されない食糧供給研究センターを造れば、三海州には中国

初めアジア各国から、山陰、高知の港或いは、各県の空港から患者や学生、研究者、企業が集まり、大きな経済効果も生まれるのではないかと夢見ている。三海州がまとまって、松江・高知の横断新幹線を強く陳情することで、松江・高知間の開通が実現し、地域が潤ってくれば、或いは山陰と四国の新幹線整備も可能となるのではないだろうか。リニア新幹線の岡山延長が可能となるほど、学者、患者、インバウンド、企業を増やせたらとも夢見ている。三海州には、山・川・海・島・砂丘・洞窟などの自然、広島原爆ドームその他の歴史的な建物、城、街並み、神社、銀山、各地の温泉など、世界の人々にとって魅力的な観光地も多く、四季それぞれ美しく、各地に美味しい食べ物もあり、四国八十八カ所巡りという独自の伝統もあるし、ウィンタースポーツ、海陸のツーリング等、集客力も大きい筈だ。PR次第で爆発的に観光客も増えるのではないだろうか。

唯、四国、山陰の人々が渴望する新幹線は瀬戸大橋ルート以外は現在実現不可能だといっても、広島との関係を考えると、上手く話を進めないと、三海州として松江・岡山・高知を結ぶ新幹線実現の難しさは残りそうだ。

### 政治的な問題

新総理の地元が広島であることは気にはなるが、岡大と広大のいずれかが覇者となって生き残ろうと争うことなく、東京や近畿と同じように複数の大学がそれぞれの立場で鎬を削ることが望ましいと思う。ただ州都となるのは広島ではなく、縦、横の新幹線の交点が見望ましく、岡山～倉敷辺りが望ましいのではなかろうか。

従来岡山県では、中四国州を支持していたが、平成24年（2012）11月に知事となった伊原木隆太により、中四国州の推進が、県の行動計画案から削除された。令和2年（2020）11月88%という圧倒的多数の票を集め、三期目の当選を果たした彼が、令和6年までの任期中に「三海州」設立推進支持となったとしても、令和3年10月の衆議院選挙の当選者の中、朝日新聞によれば、小さな政府賛成3%、反対63%であったことから、三海州実現には困難を伴いそうではあるが、同じ選挙で地方政党から中央政党に躍進した日本維新の会も、自民党も、公明党も本来道州制導入を目指す党であるため、コロナ対策で道州制見直し機運が大阪を中心に高まったのを契機に、又、三海倶楽部顧問であった石井正弘前岡山県知事が、現政権内で活躍中である機会に、道州制が実現に向けて歩を進めることを期待

したいと思う。

### 終わりに

以上見てきたように、現在の岡山大学は、中四国は勿論、全国的に見ても、我が国を代表する大学の一つとして位置づけられているようである。長い歴史と伝統を有する医学部を中心にした大学として、守られている面はあるとしても、特に法人化以後急速に変化する中にあるのは、優れた学長のリーダーシップと、それをサポートするスタッフの英知と不断の努力無くしては、この立ち位置をキープし続けることは出来ないことだろうと、関係する皆様の健闘を称え、感謝の念を表したいと思う。同窓の多くも同じ思いだろう。今尚大きな変化のうねりの中にある岡山大学が、指定国立大学法人に指定され、更には国際卓越研究大学に選ばれ、山陰と高知を結ぶ新幹線が開通し、多くの内外の人々が行き来し、中国、四国の大学とは、同じ法人の下に協力して、「卓越した教育研究」タイプの大学、スーパーグローバル大学、革新的医療技術創出拠点の一つとして、国内外から多くの学生、研究者、学者、医師、患者、企業が集まる、世界有数のグローバル大学となり、世界の人々の健康に大いに貢献する大学として生き続けることを願って、8回に亘った本稿を終えることにしたい。

平均寿命が未だ50歳にも達しない、昭和10年代半ばにこの世に生を受けて以来、戦争による廃墟の中で育ち、経済大国と言われる豊かな時代を過ごし、誠に平和な美しい国土となった今を生きている。この間に、平均寿命が30年以上伸びるといふ、我が国では2度と経験できないであろう変化の中を生きて来た。戦後の長い平和な時代に、急速に社会が発展している我が国で、医師として育ち、過ごして来たのだと考えた時、誠に良い時代に大学教育を受け、良い時代を医師として過ごし、良い時代を生きているのだと、改めて感謝したくなる。これからも、母校の益々の発展と、世の中の変化を、楽しみながら、出来るだけ長く見守りたいと思っている。

本誌への投稿を勧めてくれた同期の山岡秀樹先生と、投稿前に毎回目を通して頂き、貴重なアドバイスを頂いた40会の坪井修平先生に感謝したいと思う。



## 医学部正門通りの再生フェニックス

### 昭31 小林 敏 成

私は『岡山大学医学部百五十年記念誌』を読んで、歴史というものができあがる過程をまざまざと見た思いがした。

昭和27（1952）年に、私達は岡山大学医学部に入学した。その年の干支が壬辰（みずのえたつ）であることから、同期会を壬辰（じんしん）会とした。太平洋戦争の敗戦後7年で、連合軍の占領が終った年である。それからの4年間、空襲に対する迷彩の黒塗りや木造、バラックの学舎と病棟で学んだ。敗戦という戦後の色が未だ濃く残っていた時代である。

卒業は戦後復興のはじまりで、それまでは診療科毎に別々であった外来診察室を一か所にまとめた、総合外来診察棟（鉄筋5階建て）が落成した昭和31（1956）年であった。

その後の10年間、昭和30年代とはどんな時代であったのか。昭和31年の「経済白書」に、〈もはや戦後ではない〉の一文があるように、戦後の復興をとげた敗戦国日本が、次のステップ世界復帰を願って、努力を重ねた10年であった。

学内では、鉄筋6階建ての中央診療棟が昭和36（1961）年に落成し、中央検査部・中央手術部が配置されて、各科での検査・手術が中央部で行われ、入院患者も診療科毎の収容から、病棟を一か所に集める方式で、鉄筋6階建ての東病棟が昭和40（1965）年に完成している。基礎医学棟は、昭和32（1957）年にコンクリート3階建てのI期工事が終り、第IV期が竣工したのが昭和39（1964）年である。

一方、社会に目を転じてみると、昭和30（1955）年11月、日本政府は南極観測隊派遣を閣議決定。翌昭和31年11月8日、南極観測船「宗谷」が出航、翌年1月29日に上陸「昭和基地」を建設して、国際地球観測に参加し、世界復帰の一步が現実化している。

各家庭に電気冷蔵庫、電気洗濯機、テレビ等が普及し〈消費者は神さま〉の語まで生れて、日常生活は豊かになり、昭和39（1964）年10月に開催された東京オリンピックという、昭和30年代最大の祭典で、私達日本人は世界復帰を実感したのである。

そのような昭和30年代が終った、昭和41（1966）年2月20日、私達壬辰会々員は30歳台の半ばで、それぞれ家庭をもち、医学・医療という仕事にも自信が持てるようになった卒業10周年記念会を、ホテル後楽（表

町商店街、旧上之町西側の通りにあった老舗）で行った。その記念植樹が、医学部正門通りのフェニックスである。

『岡山大学医学部百五十年記念誌』は、1970年に上梓された『岡山大学医学部百年誌』以降の、日本のそして世界の中の50年間の歩みを取り上げられている。フェニックスの植樹4年後で、しっかりと医学部の土地に根付いた以降である。すなわち、私達壬辰会の記念植樹フェニックスは、百五十年記念誌に記載されている輝かしい歴史を、その場に根を張って見てきたのである。

鶴翔会（岡山医学同窓会報）130号、75頁の記事『生れ変わる「フェニックス」』によると、〈平成25年竣工のJunko Fukutake Hall建設の際、支障になるとして老木化したフェニックス撤去が検討されたが、建築家ユニットSANAAから優れた景観を醸していると評価され、フェニックスを生かした設計になった。松井秀樹先生（細胞生理学教授）らのフェニックス再生プロジェクトが、農学部作物開花制御学・後藤丹十郎教授にお願いして、老木フェニックスから直接採取した種子の発芽・育苗をしていただいた。そして創立150周年記念事業の一環として、新しいフェニックスに植え替えることになった〉とある。

私は術後の附属病院再診時に、医学部正門通りへ行ってみた。危険性のある老木フェニックス撤去のあとに、1メートル程の高さに、生き生きと新しい葉を輝やかせて再生フェニックスが並んでいた。

私達壬辰会卒業10周年記念植樹のフェニックスは、再生フェニックスとして医学部の土地で生き続け、これからも医学部の更なる発展の歴史を、見続けることができるのである。

### 附記

フェニックスの再生にご尽力いただいた松井秀樹先生（昭53卒）と農学部作物開花制御学・後藤丹十郎教授、そしてフェニックスを見守っていただいた難波正義先生（昭36卒）に深く感謝します。

## ヒポクラテスの木の植樹と フェニックスの植え替え

### 大学院医歯薬学総合研究科等総務課

会報第126号で、小西池泰三先生が三朝にある蒲原株のヒポクラテスの木の由来について、また、その岡大株(K2)を大塚愛二先生が三朝に赴き、挿し木する枝を持ち帰ったことは、ご寄稿のとおりであるが、逸見緑地様の献身的なご努力により、その枝が発根し、植樹できる大きさまで生育した。

医学部創立150周年記念として相応しい植樹場所を関係者で協議し、旧生化学棟横が最適ということになり、令和3年3月に無事に植樹が完了した。新型コロナウイルス感染症の感染状況を考慮し、植樹式が行えなかったのは残念であるが、以下のプレートを添えた。

#### 医聖ヒポクラテスの木

ギリシャのコス島にプラタナスの巨木があり、その木の下で紀元前4～5世紀、医聖ヒポクラテスが弟子たちに医学を教えたと伝えられています。

この木は、そのヒポクラテスの木のDNAを受け継ぐ由緒あるプラタナスです。

2020年に医学部創立150周年を迎えるにあたり、三朝キャンパスに現存するヒポクラテスの木から挿し木して植樹しました。

医学部創立150周年記念事業  
2021年3月

また、医学部正門から駐車場ゲートまでのエントランス部分のフェニックスは、医学部の象徴的な景観であったが、歪曲して危険でもあったことから、株分けを行い、植え替えを行った。フェニックスの苗木の生育には、農学部の後藤丹十郎教授に多大なる協力をいただいたが、後藤教授には、心より感謝申し上げたい。





# 随 想

## 「山本昌知の臨床作法」を読んで

公益財団法人岡山医学振興会  
岡山大学名誉教授  
昭36 難波正義

表題の雑誌（こころの科学、統合失調症のひろば編集部編、塚本千秋編集協力、日本評論社、2021）が出版され、あらためて、彼のユニークな素晴らしい地域精神医療の実践を知りました。

本書の内容は、山本医師の医療に賛同する医師や、医師以外の医療従事者の方々の執筆記事や対談、患者さんの手記などです。主なものは、「今、なぜ山本昌知先生か/塚本千秋（岡山大学精神科医）」、「人間・山本昌知/箕島豪智（いわくら病院精神科医）」、「ひとひなりとも/高宜良（兵庫県精神保健福祉センター精神科医）」、「山本先生は宇宙人かもしれない/星野概念（精神科医）」、「ともに生きる/田中和芳（向陽台病院精神科医）」、「山本先生から学んだ私の作法/本田政憲（精神保健福祉士）」、「主体性の回復をめざす/相田和弘（映画監督）」、「ゼロに身を置く/胡桃沢伸（劇作家・精神科医）」、「山本昌知という精神科医/村上伸治（川崎医科大学精神科医）」、「山本昌知から学んでいること/和辻健太（川崎医科大学精神科医）」などです。

山本君とは、1961年、岡山大学医学部を卒業した同級生です。いま、彼と毎月一回、コーヒーを飲みながら1時間ほど取り留めも無いことを話しています。その間、彼の携帯電話がたびたび鳴ります。患者さんに彼の番号を教えているのです。不安な時、いつでも彼に相談できる状態は、患者さんに非常に大きな安心感を与えている筈です。携帯電話の番号を精神障害の患者さんに教える医師はほとんどいないと思います。

彼が岡山県精神衛生センターの所長として勤めていたころ、患者さんをできるだけ入院させないで治療していることは聞いていました。本書を読み、彼がなぜこのような治療を始めるようになったかを知りました。医学部を卒業後、就職した精神病院で、閉鎖病棟を開けてくれという患者さんと、開放すれば患者さんの管理ができないという医療側の主張に挟まれて彼は苦勞します。患者さんは「主体的でありたいと思うが、精神科医が剥奪する」と言います。しかし、患者さん

と医療側との話し合いを重ね、開放病棟にしたところ、問題もなく、しかも患者さんの状態も良くなったという経験に基づいています。精神障害の患者さんも、やって良いことと悪いことを判断する力はあるのです。以後、彼は患者さんとの共同作業の医療を続けています。

1997年に、彼は精神保健福祉センター（精神衛生センターの改称）を退職し、「こらーる・岡山診療所」を開所しました。私はその時、コラルは珊瑚(Coral)と理解し、不思議に思ったのですが、後で聞くとコラルは「Choral」で、患者さんとの合唱、共生だと言われ、なるほどと納得しました。彼にぴったりです。私の間抜けさ加減を笑ってしまいました。

丁度、その頃のことだと思います。奥様が認知症で一人にしておけないと飲み会を断ってきました。大変だと思いました。その後、現在まで彼は奥様の世話をしながら患者さんの診療も続けており、彼の人間性に脱帽です。

彼の奥様の世話をされながらの生活が、相田和弘監督のドキュメンタリー映画、「精神」（2008）、「精神0」（2020）に描かれています。「精神0」は、ベルリン映画祭エキュメニカル審査員賞受賞です。私は、この0を理解できなかったのですが、本書の中で山本医師の説明：「命すらなかったら という0から考えたら 命があるんじゃから何か出てくるかもしれん」と解説されていました。分かったような分からないようなことですが、まあ、生きていれば何とかなるのでしょうか。この賞の目的は「精神的、人間的、社会的価値に対して観客の感性を鋭敏にさせる」作品に対してとなっています。

病院から解放されている精神障害の患者さんが安定しているとは限りません。それらの患者さんを、日時を問わず診察し、往診し、時には自宅に泊め、経済的援助もし、そして、患者さんを支える地域住民の啓蒙のために、精力的に活動する彼に私はまったく頭が上がりません。そして、このような友人を持たたことの幸せをしみじみ感じています。

何が、彼をこのような活動に駆り立てているのでしょうか。彼は不可解な人間の探求の面白さに取りつかれているのではないかと思います。そして、挑戦と勇気です。今後の活躍を心から願っています。（2021-9-10）

付記：この書評後、山本医師は2022年度、第80回山陽新聞賞（社会功労賞）を受賞されました。



## 岡山大学医学部 1959-1969年

### 昭40 池田重政

所得倍増、経済大国へと進み始めた1960年代は、日米安全保障条約（安保条約）反対運動に始まり、インターン制度廃止、大学紛争へとつながる、学生にとって激動の10年であった。これは、岡山大学に在籍した1卒業生の追憶である。

#### 1) 安保条約反対運動

安保条約反対運動は、サンフランシスコ講和条約調印と同時の1951年に締結された安保条約が、1960年に改定されたことから始まる。改正された条約は、憲法で軍隊を持つことが出来ない日本の平和、安全を守るとの大義名分のもと、アメリカ軍が日本の軍事施設・区域を自由に使用する権利を保障し、さらに日本にこれらの施設、区域をアメリカに無償で提供する義務を負わせることを明文化した条約であった。条約の改定は日本の再軍備を促すとして、反対する学生を主体とした改定反対のデモが連日のように行われるようになった。1960年6月15日には全日本学生自治会総連合（全学連）のデモ隊が国会に突入した際に、警官隊と衝突、一人の女子学生が死亡し、その死因を警察側は、転倒が原因の圧死と主張、一方の学生側は、機動隊の暴行による死亡と主張し、真っ向から対立したことで運動は頂点に達していった。アメリカの大統領の訪日中止、条約改正後の首相の辞職により、一連の騒動は下火になっていった。

#### 2) インターン闘争

インターン闘争は制度の成立と共に始まった。インターン制度は、戦後の混乱が残る1948年からは医師国家試験受験の必修資格となった1年間の卒後臨床研修制度であった。医師免許のないインターン生は、指導医の指示のもと診療行為を行うことが許されていた。しかし、制度の欠陥は開始当初から指摘されていた。それは、①無資格で行われるインターン生の診療行為の責任の所在が不明であること。②インターン生の身分及び経済的な保障がないこと。③インターンを指導する医師はインターン研修の経験のないことにも関わらず、インターン生の指導ガイドラインがなかったことで、どのような指導をインターン生に対して行うのか明確になっておらず、指導医任せとなっていた。これらの問題点があったにも関わらずスタートした制度

であった。大学病院等の教育医療機関ではインターン生は足手まといになる一方で、民間病院にとっては医師の卵をただ同然で使うことが出来る制度となり、該当するインターン生達にとっては非常に不利益な制度であった。この制度上の欠陥は医学生のみならず、京大法学部生であり、後年映画監督として活躍した大島渚（玉野市出身）によっても指摘された。

1953年には経済的な保障の改善策として、厚生省からインターン生に対して国から食事手当て及び被服手当てとして月額2500円を支払うという案が国会に提出されたが、2億円の予算請求に対して実際計上されたのはわずか700万円であった。10年後の1963年にも予算案5億1千万円に対して、わずか4700万円、翌年には更に少ない2185万円が計上されたのみであった。国が認めた額では当時全国46校からの医学部卒業生の1ヶ月の給与にも満たず、当然のごとく国からのインターン生への直接援助は全く望めなかった。

1954年、全国46大学医学部中39校が出席して「全日本医学生連合」（医学連）が結成された。医学連は、医学生セミナーを開催した。セミナーは外部からの講師を招き、医療制度、医学教育制度、社会保障制度、地域医療等議論する会合であった。医学連が最も重要な課題として位置づけたのはインターン制度であった。岡山大学では、1956年、第3回セミナーを青山英康先生（後の衛生学教授）が委員長として開催している。

1963年は、医学史上それまでにない程にインターン闘争が再燃した年であった。3月には武見太郎日本医師会長がインターン制度廃止の検討を発表、5月には医学教育制度委員会、全国国公立大学医学部長会議、日本学術会議が、それぞれにインターン制度廃止の検討を始めた。全国国公立大学医学部長会議では現行のインターン制度廃止を決議した。全国国立大学病院長会議も廃止、医学教育の整備充実に努める等が決議されたが、残念ながらインターン制度廃止後の医学教育の改善案は提示されていなかった。さらに5月末には医学連もインターン制度反対の決議をした。医師試験審議会からは「大学卒業直後に医師国家試験を行い、合格者に免許を与えるが、さらに一年間・教育病院で実地指導を受けることを義務付ける」との案が答申されたが、研修医の指導に関する明示はなく、国家試験を一年繰り上げただけで何も問題解決にはなっていないと反対運動に火に油を注ぐことになり、この案は立ち消えた。11月には岡山大学主催での2回目の医学連医学生セミナーが同期生小林完治君を委員長として開催された。600名以上の医学生が参加したこのセミナー

は、医学連史上質的な転換期との評価を受けた。医学教育分科会では、当時の本学村上栄医学部長に参加して頂きインターン制度を中心とした話し合いが3日間行われた。私はこのセミナーの司会役を務めたが、事前準備や過熱化する議論をまとめるのが大変だったことを思い出す。セミナーが終了した翌日の医学連臨時大会では、厚生省への抗議として、国立病院でのインターンボイコットが決議された。今もって忘れられないのはセミナーの初日にケネディ大統領の暗殺のニュースが入り、暫しの時間テレビに釘付けになった事である。

私たち1965年の岡山大学卒業生は、インターン制度をボイコットすれば国家試験を受けることが出来ない、妥協案として他の大学と共闘して大学病院以外のインターン病院での研修をボイコットし、大学立てこもりの研修をした。これをインターン制度廃止の第一段階と考える者もいる。岡山大学ではインターン委員会が用意した独自の自主研修プログラムを作成した。例えば、私は専攻予定の科に有利となるとされる内科系へのローテーションを主にしたプログラムを作成した。自主研修プログラムは病院長にも承認されたが、研修が始まって直ぐに医局体制を知っていなかった自分たちの失敗を思い知らされた。自主研修であるのだから「お前たちの自由だ」とばかりに指導者側からは野放しにされ、一部の例外はあったものの各医局から自分たちが期待していたような教育を受けることはできなかった。私達は卒後の1年間を無駄な時間を過ごしたような感覚にとらわれたが、同期生全員が国家試験にパスしたのが唯一の慰めであった。翌1967年には、インターン生のほとんどが医師国家試験をボイコットし、受験者は僅か405人であった。1968年には医師法が改正されインターン制度は廃止となった。当時の私は、十分な卒後臨床研修を受けることが出来なかったと被害者意識が強かったが、一方で、発言力はなかったが、自からは何の改善策も提案できなかったのは、インターン制度の廃止を直接的であれ、間接的であれ手助けしたのではなかったと思っている。

インターン制度廃止、大学紛争後30年以上もの年月が流れ、この間に卒後臨床研修がどの様に変ったのかは知る由もないが、現行の2年間の初期研修制度が始まったのは卒後の臨床研修の必要性が再認識された結果だと思っている。現行の制度は、旧インターン制度と同じ失敗を繰り返すことなく医学教育のさらなる改善と発展をもたらすことを期待したい。最も大切な課題は指導者の質と考えられる。

### 3) 大学紛争

1968年にインターン制度は廃止されたが、インターン制度の代案「登録医制度」、旧態依然の医局体制などに反対する学生運動は継続していた。運動の中心であった東京大学では、次第に過激化した学生が大学の聖域とも言える安田講堂を1968年3月からの11か月間に数度にわたり占拠した。それと前後して紛争の焦点は医学教育、研修だけでなく大学の自治の問題に拡大され全国各地で学生によるストライキ、バリケードによる学内施設の封鎖が行われ、学生と機動隊の衝突も頻発、多くの学生が逮捕された。岡山大学でも、機動隊の学内突入があり、医学部学生の投石による隊員1名が死亡する事故があった。学内施設の封鎖で1969年の入学試験が中止された大学もあった。岡山大学も紛争校であったが、入学試験は学外で実施され、授業は9月にやっと始まったと聞いている。私は紛争中に大学を離れたので、その後大学の自治、教育がどのように変わったのかを知ることは出来なかったが、数人の友人から大きな改善があったとは思えないと聞いた事を記憶している。

医師になった我々を待っていた当時の岡山大学の医局が、不十分なインターン制度に代わる臨床研修を準備していたとは思えなかった。私自身は変化を期待して新設された教室の最初の大学院生となったが、大学院生は医局員ではないと言ってヒンシュクを買ったのか、臨床、当直をしなくてよい研究日は週2日のみであった。幸いに学位を得た後に既定の年月を大学、研究所に勤めると返済不要の奨学金を貸与された。下宿と大学の直線の道をよそ見することなく往復すれば文字通り最低限の生活がやっとできる程度の奨学金であった。無駄な出費を抑えるために、休日にも研究室で時間を費やしたので、3年間で学位論文を書き終え、雑誌に投稿する事ができた。しかし当時は大学紛争の真只中で、学内は学長辞任、教授会もホテルで行われたような有様で、学生の授業もいつ再開されるのかも知れない大学に明るい未来があるようには思えなかった。大学紛争で奨学金も失い、耐乏生活から抜け出すため職探しを考えたが大学院生の身分では、定職に就くことも許されなかった。文部省の目が届かない所であれば大丈夫であろうと考え、国家試験の前に取得していた資格を使って岡山を離れた。航空券は幸いにも受け入れ側が支払ってくれたので、借金が増えることはなかったが、大学院の奨学金免除の恩典が受けられるのは国内の大学のみだったので、全額返金しなければならなかった。学位は、3年後に口頭試問を受けるため一時帰国して授与された。

岡山を離れて最初に習ったのは教育の大切さであった。教育病院で働く臨床医として岡山での経験は、同じ失敗を繰り返さないために役立つものであった。この経験は今でも医学生、研修医の方々と共有出来るのではと思っている。(s40iked@gmail.com)

## 合点のいかぬあれこれ

### 昭40 坪井修平

私は日本人男性の平均寿命に達し、終活もほぼ完了した。

辞世に当たり、NNK (nen-nen-korori) は御免蒙り、PPK (pin-pin-korori) を念願している。

医療界常勤25年、非常勤含み55年、教育界非常勤含み40年、官界10年、訪米他外国50余か国視察／世界遺産巡りで、喜怒哀楽様々な経験を積み、多くの方々にお世話になり「感謝」の二字あるのみである。

PPKを控えて、「思い残すこと」が少なからずあり、解決策は後世に託したい。

#### ① 医療・介護保険の自己負担

・Aさん 亡母の友人、96歳独身女性。複数の腰椎圧迫骨折により2000年以降、入院、転入院を繰り返す。天涯孤独のため知己の私に身元保証人を要請。2015年転倒、大腿骨頸部骨折、手術不能、ほぼ寝たきりとなり、店子の要求により家賃収入が半減して入院費や個室料

金が払えなくなったこともあり、特別養護老人ホームへ入所。所有する築後50年の4階建てビルの1階はレストランに賃貸し、家賃9万円 (←18万円、2~4階はゴミ屋敷)、国民年金月6万円、計1か月15万円の収入。特養介護費40万円のほか自己負担の部屋代、食事代も大幅に減免されて月8万円の支払い。某芸能団体の前岡山県支部長・現顧問で派手な交際費、携帯電話代のほか、テレビで見た高額な健康食品・機器を電話で注文し、自室はそれらの段ボール箱が所狭しと積まれている。誇り高く、スタッフや私の忠告には馬耳東風で固定資産税やビル修理費も滞納。2021年暮れ肺炎で緊急入院。3週間入院、総医療費81万円、自己負担は4万円。ビルの評価額は800万円であるが、医療費や介護費の保険料及び自己負担額の算定に関係なく、経費の大半が保険と税金で賄われた。

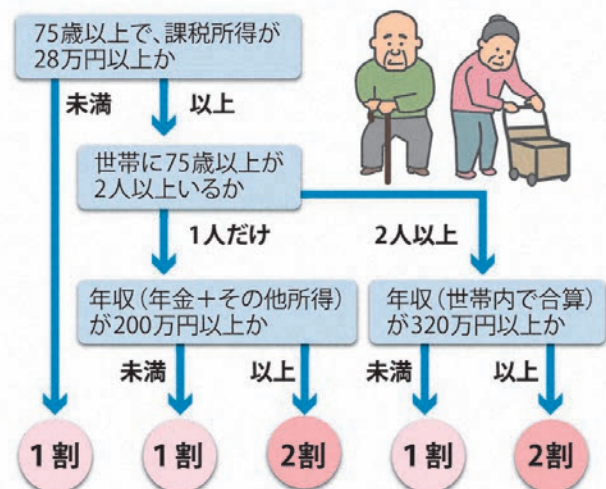
・Bさん 89歳独身、独居女性。2019年6月、起立不能となり、旧職場のOG/OB月例昼食会の1員である私に電話相談があり、脳神経外科病院へ紹介。慢性硬膜下血腫と診断され、手術により回復。入院4日間の総医療費は47万円、自己負担額はその1割の4万7千円で、40万円余は医療保険と税金から補填された。自己負担額算定基準には、保険料同様、隔月38万円の公的年金収入のみで、老後に備えて爪に火を灯すような質素節約に努めて蓄えた巨額の預貯金は無関係であった(図1)。

Bさんは入院に際し、財産管理を遠方で殆ど交流の無かった妹夫婦(C)に依頼。2021年春頃より、「Cに1,500万円盗られた、お金がなくなった、電話もしてくれない、裏切られた、憎い、もう死にたい」と私に涙ながらの悲痛な電話が頻回にあり閉口させられた。Cの背信行為がBさんの認知症と鬱病を発症させたと考え、専門医に紹介の末、福祉施設へ入所の運びとなった。

2021年12月、Bさんは身元保証人の私に会計調査を依頼。貯金通帳とCの家計簿を監査したところ、やはり1,500万円が消えていた…。Bさんは遺言書を認める心境にないため、死後残される6,000万円は、数年間食事等親身にお世話していた隣家の従妹に関係なく、Bさんが「犬畜生！鬼畜！」とまで罵倒したCが相続することになり、誠に不可解な話である。

年収だけでなく、貯金や有価証券、不動産まで視野に入れて、医療費や福祉施設介護費の自己負担額を決める他国の制度を速やかに取り入れるべきである。因みに、2006年、寝たきり、認知症で介護度5の私の母がお世話になった老人保健施設の介護経費は月45万円であったが、(相応の老後の蓄えがあったにも拘わらず、収入は

### 75歳以上の高齢者で医療費窓口負担が2割になる場合の所得判定の考え方



※厚生労働省の資料を基に作成

図1. 高齢者の医療費窓口負担

国民年金のみであったため) 支払額は1割の4万5千円であった。自己負担の食事・個室料10万円は別として、保険と税金から毎月40万円余が補填されていた。

同じ頃、自立していたが軽度の認知症を発症して、ニューヨーク州の高齢者施設に入っていた女婿の祖母の支払いは月75万円であった。少なからぬ亡夫の遺産を相続していた…。

私は、得したような、申し訳ないような、複雑な気持ちだった。少子高齢化が急速に進んでいる現在、医療・介護保険制度の破綻が目前に迫っているのではと、心配でならない。

官僚組織の縦割制の改革とマイナンバー制度の拡大活用を望む所以である。

## ② 国語教育が重要

2021年9月、鳥根県・玉造温泉街の橋の石柱に「…(昭和天皇陛下) 行幸三十週年記念碑」とあった。

2021年12月、東京都・八丈島小学校創立百四十周年記念碑が同じく「…週年」と誤記されていた(図2)。

コロナ禍が下火になり旅に出て、偶々見かけたのであるが、夫々44年と10年が経過しており、極めて重要な記念碑ゆえ、地元の人達も含めて万余の眼に晒されていると思われた。僅か3か月の間に、2か所で誤記記念碑を目撃しており、全国では夥しい数に上るのではと思った。松江市と八丈支庁の沽券に関わるのみならず、子供達が誤って憶える危険性もあり、双方に修復願いの手紙を出したが、今なお無回答である。私は「猫に小判」と諦めた。

しかし、このままでは、同じ漢字圏の韓国や中国の観光客が気づけば嘲笑し、帰国後日本の役人のお粗末ぶりを吹聴するのではないかと心配になった。そこで、週刊新潮2022.1.20.号に「経済力の学力格差を乗り越

える方策は読書」を掲載した編集部に、このような誤記記念碑の全国調査を行い、世に警鐘を鳴らして頂きたい、と手紙を送ったが、梨の礫であった。

かつて、地元の新聞の大きな見出しに手書きで「…を抑制…」の抑の右が「卯」となっており、直ぐ編集部の手紙で知らせた。しかし、2週間後も回答がないため、「来月から貴紙の購読を中止する」と社長宛に脅迫?文を送ったところ、丁重な詫び状が届いた。

新潮社に対しては、今後の週刊新潮の購入を止め、スマホのdマガジンに切り替えることにした…。

私は子供の頃から本好きで、「路傍の石」や「主婦の友」「ヴァン・デ・ヴェルデ」に至るまで家中の本をすべて読んだ。人生のゴール間近の現在も、近くの病院医院の外来診療の手伝い、畑仕事、家事、ジムで筋トレ・水泳のほか、月2、3回図書館に通っている。

「国家の品格」「祖国とは国語」等を著し、月刊「文藝春秋」の巻頭言を毎号執筆している藤原正彦氏の「早期英語教育よりも国語教育や読書が大切」の論調に諸手を挙げて大賛成である。昨今、パソコンやスマホの普及により、とくに若い人たちの読書量が激減しその上に「ゆとり教育」の弊害も加わり、国語力が著しく低下していることを実感した。

私は当初教育学部を目指したほど「学校の先生」に憧れた。3私大常勤教職9年間のほか病院勤務の傍ら非常勤で、40年間、10余の国公立大学、短大、専門学校等の教壇に立ち、1万名余の学生達に「一般臨床医学」「病理学」「臨床栄養学」「公衆衛生学」「医学概論」等の講義を担当した。毎回、前回講義の小テストを行い、質問を募ったが挙手での質問はほぼ皆無のため、小テストの解答用紙の空欄に質問や提言を書くことを求めた。誤字、脱字、意味不明が少なくなく、国語と読書の重要性を再認識した。そこで、期末テストは、事前に古今東西の名作や月刊文藝春秋の話題作を挙げて、「(高下駄)を履かせる思惑もあって)1000文字の読後感想文に100点中20点を献上したが、残念ながら感動させられた学生は100人中数人に過ぎなかった。

アメリカ・デンバーに住む孫娘が小学校1年生の時、授業参観に行ったところ、丁度図書室での読書の授業だった。先生が「日本から珍しいお客さんが来られたので、何でも質問しなさい」と言われた途端、一斉に手が挙がり「富士山は登ったことがありますか? きれいですか?」「新幹線はどれくらい速いのですか?」と次々に質問された。日本の1年生が外人に質問を促された場合、モジモジして俯くばかりではないだろうか? アメリカでは個性を伸ばし、自己主張を鍛える



図2. 玉造温泉ホテル保性館前

八丈島小学校

「ディベイト」の時間もあり、日本は外交下手と言われるのもむべなるかな、とつくづく考えさせられた。

読書の授業の終わりに「2冊ずつ借りて家で読みなさい」と指示があり、さらに感心させられた。

「…周年記念…」は、文科省の国語軽視の表れではないかと、憤りを覚えている。

道路工事中の現場で「除行してください」の看板を見たこともある。

③ ボランティア

阪神淡路大震災発生後「管理職職員は職場に泊まり、被災者支援に全力を挙げるように」と市長命令があり、私も神戸市北保健所のテーブルをベッドにして寝る以外は終日救護活動に従事した。コストパフォーマンスから考えると、3役は別として一般公務員は恵まれ過ぎと感じていたこともあって、市長命令に何の疑問も覚えなかった。災害が発生すると、自治体や自衛隊等公務員が被災者の支援や災害復旧に出動して、マスコミが派手に報道しているが、私は違和感を覚えている。



図3. 全壊家屋11万棟、半壊14万棟



図4. 報告会：ジャンパー姿、蠟燭の灯

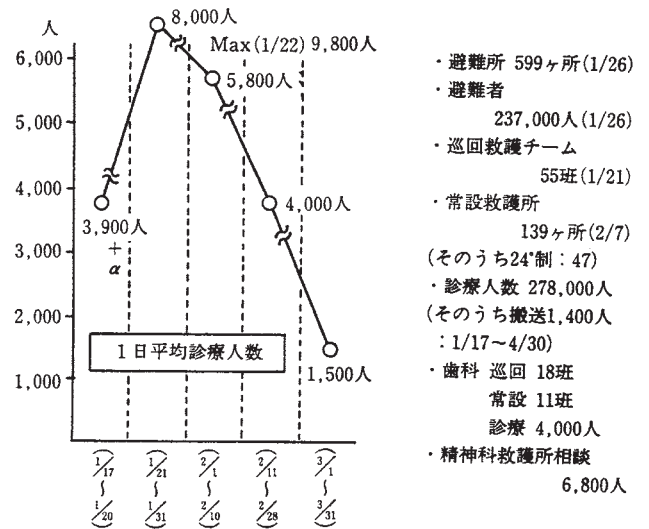


図5. 救護活動

見方を変えると、国や首長の指示があり、給与も支給され、業務範囲内と言える。

他方、単独行動のため目立たないが、災害発生後いち早く支援活動をする無私のボランティアの方々に深い畏敬の念を覚え、マスコミもその活躍ぶりをもって大々的に報道し、賞賛するべきではないかと思っている。

私は、1995年1月17日5時46分、神戸市長田区の自宅で遭遇した阪神・淡路大震災（図3）の被災者、神戸市北保健所救護班、神戸市衛生局対策本部詰を体験した際、県内外から馳せ参じたボランティアの献身的な活動ぶりを目の当たりにした。

ボランティアは延べ180万人に達し、1995年は「ボランティア元年」と呼ばれるようになった。

県内外から医師、看護師等コメディカルスタッフはじめ様々な職種の方々が仕事を中断して手弁当で駆けつけ、救護活動や倒壊家屋からの救出、食物・飲料水・衣料・生活用水の配布、人工透析等の相談窓口の開設が行われ、被災者には有難い限りであった。

当夜、ライフラインの途絶した長田保健所で救護班の報告・連絡・相談会が開かれ、AMDA (Association of Medical Doctors of Asia アジア医師連絡協議会、1984年、本学S47 卒菅波茂先生創設) や日赤、済生会、徳洲会、医師会等のスタッフが当日から活動していたことが分かり、大変驚き、感動した（図4）。他の東灘区、灘区等でもボランティアによって震災直後から救護活動が展開されていた。その後、国の指示による大学や自治体、国公立病院による救護所が各地に設置され、組織的・計画的な救護活動が開始された。医療機関とくに小規模

表1. 災害支援 ボランティアと公的団体

	A.ボランティア	B.自治体、自衛隊の派遣
活動開始	多くは当日から	多くは数週間後
活動期間	多くは2～3日、週末	多くは1週間前後で交代
参加の仕方	散発・不規則的	継続・計画的
参加者の質	職種・技術不定	選抜、事前研修
移動・食事・宿泊	自己完結型	受け入れ側が配慮

診療所の被害は甚大で、神戸市激甚被災6区の診療可能な診療所は、震災10日目の1月26日の時点で、1,059医院中29%と、惨憺たる状況であったため、ボランティア等の救護活動により多数の生命が救われた(図5. 避難所における救護活動. 救急医学 別冊集団災害救急19: 1728～1733, 1995. へるす出版)。「ボランティア」とは、「自発的な意志に基づき他人や社会に貢献する人・行為」を指してボランティア活動と言われており、活動の性格として、「自主性」「社会性」「無償性」等があげられる。

交通手段も宿泊も食事もすべて独力で準備した上、クリニックを休診にして真っ先に駆けつけた院長、年休を利用して避難所の救護活動を行っていた東京の看護師に深く頭の下がる思いであった。当日から活動を開始していたAMDAや日赤、済生会等のチームもすべて自己完結型で、災害医療の経験者が多数派遣されていた(表1. 阪神淡路大震災と地域保健. 公衆衛生研究44: 291～299, 1995)。

#### 4] モンスターペアレンツ

私の小学生、中学生の頃の学芸会や運動会、海水浴は大変楽しい思い出になっている。大学でも運動会があり、俊足の同級生達の活躍に拍手喝采であった(図6)。



図6. 医学部運動会仮装行列 1961年 学I S40年卒クラス

ところが近年、学芸会では「私の子供をお姫様に!」「集合写真は私の子供を前列中央に坐らせて!」運動会では「徒競走はやめて! 鈍足の子供は恥晒しになる!」と保護者のクレームが殺到するという。そのため、学芸会を中止した学校が少なくない。運動会も俊足の子供はゴール前で鈍足の子供を待って一緒にゴールインするとか、個人の表彰はなくチームで順位をつける学校がある由。海水浴も貝掘りや地引網を楽しむ程度で、海に入ることは許されない。私の子供が小学生の頃、友達が木材置き場で遊んでいて、崩れた丸太で圧死した。直ちにPTAと町内会が全町内を探索し、危険箇所を封鎖していた。

社会に出れば、社長…係長…、横綱…序ノ口…、正社員…派遣社員・臨時職員と、差別?されるのが現実であり、家の階段、戸外の溝や用水路、暴走車、無差別殺人等危険に満ち溢れており、子供の頃から差別?に耐え、未然に危険を察知する明敏な知恵、強靱な精神力、体力を養うように教育し、鍛錬するべし、と確信している。

私のアメリカの孫の公立の小・中・高校とも、成績優秀クラスがあり、ハイレベルの授業が行われ、大学では、飛び級で入学する秀才もいた。森鷗外は幼年期から漢籍を学び、2歳も若い年齢で東大医学部を卒業しており、日本のPTA達は、欧米や明治時代の日本に思いを馳せ、1日も早くモンスターペアレンツを卒業して頂きたい。

#### 5] 女性天皇とY染色体

今や、少子化現象は天皇家にも及び、「皇族を増やせ」「女性天皇を認めよ」「万世一系は日本の文化である」と議論百出である。

古くから天皇や大名は男児誕生を喜び、複数の側室を抱えてでも男児を待望した。中国も一人っ子政策時代は、女兒が生まれると里子に出すか、時には誕生後直ぐ窒息死させており、そのため男女比が日本の95に対して105と逆転して結婚できない男性が多く、社会問題になっている。

それにしても、男性固有のY染色体が知られていない時代から何故跡取りは男の子と決められたのだろうか? 不思議でならない。

女性天皇についてY染色体を議論しているのは、産経新聞社グループが目立つ程度で、決定権を持つ政治家は及び腰に見える。これは男尊女卑でも何でもなく、純粹に生物学的問題であり(図7)、世界で万世一系は日本の皇室のみ、とまさに比類のない日本の文化と思われる。政治家が国民に、丁寧に、分かりやすくY

染色体について説明すれば、容易に解決するのでは…。

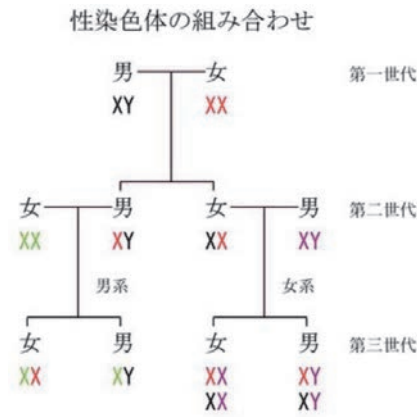


図7. 性染色体

**⑥ 欧米は唯我独尊**

昨今、中国のウイグル自治区でのジェノサイドが問題視され、欧米を中心に北京オリンピックの外交ボイコットが行われた。オリンピックを振り返ってみれば、欧米人に有利になるようにルール変更が繰り返されている。合点のいかない話である。

「欧米人は自分のことを棚に上げて…」 「欧米人は唯我独尊」と言われても反論できないのでは…、と思う。

**・インディアン ジェノサイド**

1976年、グランドキャニオンで、2世のガイド曰く「戦争中、多くの日本人がここコロラドの収容所に入れられた。アメリカは我々白人のものだ。日本人は帰れ！と怒鳴った」「違う！元々インディアンが暮らしていた。お前らこそヨーロッパへ戻れ！と言いついた」と。子供の頃、西部劇で騎兵隊が幌馬車に弓矢や銃で襲いかかるインディアンを銃で迎え撃つ場面を見て、騎兵隊=善、インディアン=悪と信じていた。ガイドの一言は、「目から鱗」であった。

先住民のアメリカインディアン1,000万人の中、950万人が虐殺されたと推定されている（図8）。

これは、ナチスドイツのユダヤ人600万人の虐殺より多い。スターリンの粛清、毛沢東の文化大革命にお



図8. インディアンの女性を襲う兵隊

ける粛清は共に2,000万人と言われ、それに次ぐもの。大規模虐殺レースにおいて史上3位、銅メダルに輝くと言われている。

**・悲惨な黒人奴隷**

16～19世紀までに、アフリカ大陸から拉致された黒人の数は、16世紀には90万人、17世紀には280万人、18世紀には700万人、19世紀には330万人、総計1,400万人。いままでイギリスの奴隷貿易が最も多いと思われていたが、最も多くを輸送していたのはポルトガル船、ブラジル船であった。奴隷の輸入で最も多かったのもブラジルで480万人、次いでイギリス領西インド224万人、スペイン領アメリカ114万人、フランス領西インド109万人、オランダ領西インド44万人と続き、イギリス領北アメリカ即ちアメリカ合衆国は38万人と意外に少ないが、黒人奴隷の再生産が多かったとされている（図9）。



図9. 黒人奴隷は手錠に首枷

**・壊滅したマヤ文明**

スペインが新大陸（？）に植民した15世紀末から16世紀、メキシコで400万人、ペルーでも同じく400万人、1502年から42年までの40年間に2,580万人から2,880万人のインディオが征服戦争の犠牲になったとされているが、当時の人口調査や統計では正確な数字を出すことは不可能で、確たる根拠があるとはいえない。スペイン人によってインディオ社会が徹底的に破壊されたため、征服以前の人口を知るための資料はほとんど残っておらず、その推計は研究者によって大きく異なるからだ。現在では、スペイン人との接触によって天然痘、麻疹、チフス、インフルエンザなど免疫のなかった伝染病が蔓延し、マヤ文明に致命的な打撃を与えたとされている（図10）。



図10. 世界遺産テオティワカン

### ・オリンピック競技のルール改正

オリンピックは欧米人の自己満足の大会とも言われるほどであり、特に日本が過去にメダルラッシュをした競技は日本に不利な判定、ルール変更が行われてきている(図11)。

- 1) 長野五輪で日本ジャンプ陣が大活躍をすると、スキー板の長さの規約を変えて日本人を不利にした(身長+〇〇センチ、背が低いと板が短く不利、逆に背が高いと板も長くして良いので有利)。  
ノルディック複合もジャンプと距離の得点関係で、日本人が得意なジャンプを軽くした。  
2004年のフィギュアの世界選手権で、荒川静香が圧倒的な華麗さで優勝したら、五輪を前に新採点システムに変更し、華麗さとジャンプが得意な日本選手が不利に…。日本人の得意な回転数・アクセル数は加点程度に変更。
- 2) 体操で長年日本が金メダルを独占すると、大技が得意な日本選手封じのために、着地でわずかでも乱れると大減点にルール変更。
- 3) バレーボールでは、アジア人対策の為、ネットの高さを高くし、また、粘る事が得意な日本のメリットを生かさないうえのラリーポイント制を導入。
- 4) 男子水泳では、鈴木大地のバサロスタート泳法の制限。
- 5) 五輪種目から野球、ソフトボール、レスリングを外す。IOC理事会は「人気、国際性、男女の選手の比率などを考慮して、理事会で協議した結果、最終的に投票で決まった」としているが、それならば、ピストル競技を除外してもおかしくはない。

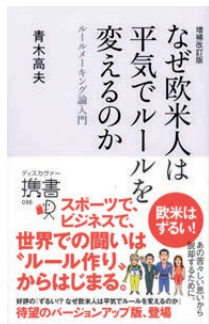


図11. 欧米人はすごい!

ピストル競技は、欧米諸国が有利な競技なので除外候補にすらなっていない。

- 6) 卓球についても、長身の欧米人に合わせて卓球台を高くしようとしたが、これは失敗。

◆欧米人の言う“フェアプレー精神”は今何処？

### ・捕鯨と闘牛

欧米の捕鯨反対運動によって、クジラの尾の身の刺身が食べられなくなって久しい。1853年ペリーが日本に開国を迫ったのは、捕鯨船の拠点を探ったからであり、鯨油はアメリカ産業の柱の1つとされており、700隻もの捕鯨船を保有していた。その後、石油が鯨油にとって代わり、捕鯨産業が衰退していった。そのような歴史がありながら、「クジラを殺すのは可哀そうだ」と日本などの捕鯨漁を厳しく弾劾している。

スペインで闘牛を観たが、大観衆の見守る中で、馬上から、地上から闘牛士達が寄ってたかって牛の背中や首を目がけて槍や剣を突き刺す残酷ショーであった。最初は1人の闘牛士が赤布をひらひらさせながら猛牛に立ち向かい、危険になると仲間が飛んできて助太刀しており、大変アンフェアであり、牛がとても可哀そうであった(図12)。動物愛護団体はカタルーニャ州の闘牛を禁止に追い込んだが、首都マドリードでは「闘牛はスペイン固有の文化」とする声が6割を超え、存続している。イルカ漁も日本の固有の文化と思われるが…。



図12. スペインの国技「闘牛」

### ・核兵器不拡散条約

1970年に発効した核兵器不拡散条約によって、米・英・仏・露・中以外の国が核兵器を保有することは禁止された。しかし、インド、パキスタン、イスラエルは保有し、北朝鮮もあらゆる制裁を振り切って保有国に仲間入りした。イランの核兵器開発に欧米は断固反対しているにもかかわらず、イスラエルには黙認して



おり、ダブルスタンダードの典型例である。  
核保有国が自ら核兵器の廃棄を宣言し、条約通り原子力の平和的利用に傾注すべきである。

・ロシアとウクライナ

ロシアがNATO（北大西洋条約機構）の拡大阻止のために、兄弟国（？）のウクライナに大軍を送って戦争を始め、大半の国々がプーチン大統領を猛烈に非難し、欧米はウクライナに大量の武器を送り、重い経済制裁を課した。

ロシア人は日ソ中立条約を破って、無条件降伏寸前の日本を攻め、58万人もの日本人をシベリアに抑留して重労働の末、6万人を死亡させ、北方四島を強奪し、スポーツの面ではドーピング超大国であり（…1952年ヘルシンキ五輪から1976年モントリオール五輪までの夏季五輪、冬季五輪でメダルを獲得したソ連選手女子5名を含む59名の死亡者の平均寿命は42歳（23歳～57歳）であった…「ドーピング？ 今更」鶴翔会報121:46～48, 2016.）、私は良い印象を抱いていない。

しかし、それでも合点のいかない気持ちをぬぐえない。

ナチスドイツに蹂躪され、2,700万人（ソ連）（独 700万人、日本 300万人、仏 60万人、英 40万人、米 30万人）も犠牲になったロシアの国の安全保障にかける執念が、拡大一方のNATOに想像を絶する恐怖を煽られたのではないかと、東独のドレスデンで暮らしていたプーチンがベルリンの壁の崩壊を目撃、KGB（秘密警察）の駐在員だったため身の危険に晒され、帰国後ソ連邦の解体にも直面し、母国の再興を固く心に誓ったのではないかと、忖度している（図13）。

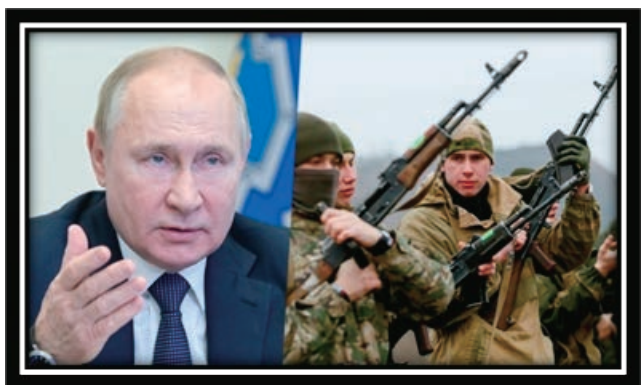


図13. プーチン大統領とウクライナ戦争

ケネディ大統領は1962年、隣国のキューバにソ連が核ミサイル基地を建設中であることを察知して、フルシチョフを相手に核戦争寸前まで強硬姿勢を貫いた。ブッシュ大統領は事実無根の情報からイラクを破壊した…。

若し、カナダがロシアと軍事同盟を結ぼうとすれば、アメリカはどうするだろうか？

裸の王様のプーチン大統領の狂気じみた暴挙は論外であるが、ウクライナやアメリカ、NATOが歴史を振り返り、ロシアの立場に立って考えれば、今回の悲惨な戦争は未然に防げたのではないかと考えている。

⑦ 少子化と主婦業定年制

過日、出生数が84万人と発表された。1948年の270万人の1/3弱であり、日本の総人口は減少の一途であり、国家存亡の危機に瀕している。

その原因として

1. 生涯未婚率  
1985年：男女とも5%弱→  
2020年：男25%、女16%
2. 平均婚姻年齢 1995年：男30歳、女27歳→  
2015年：男33歳、女31歳
3. 最近30年間平均給与が横ばい
4. 男女雇用均等法により、男女格差がなくなり、趣味や仕事を優先
5. 便利な世の中になり独身生活に魅力
6. 子育て不安
7. 共働きの不安

等々色々挙げられているが、これらだけでは合点がいかない。

ある調査では、男性は結婚相手に「家事能力」を強く求めており（女性は相手の収入）、「(育児も含めて) 家事は女の仕事」と決めつける吾々日本男子の身勝手な大きな要因ではないかと、自らも反省している。“男子厨房に入らず”のガラパゴス的訓えを死語にしない限り、少子化対策への明るい展望は開けない、と考えている（図14）。



図14. 男性の家事

・主婦の溜息

私は、共働きの家庭での家事は杓子定規でなく融通性のある夫婦分担制にするべきと考えている。専業主婦の場合でも、夫は将来に備えて多少とも家事を手伝い、定年退職後無職になれば家事分担は当然。

雑誌「婦人公論」の特集で家庭における主婦業に「定年」が必要と回答した主婦が53%、とあった。

- ・まるで夫や子供のお手伝いさん、洗濯物の数のハンパなさは嫌がらせかと思うほど（50歳、主婦）。
- ・共稼ぎなのに家事負担は私が多い（56歳、販売正社員）。

- きれいにしたトイレをすぐ汚され、やってもやってもキリがないように思える(50歳, 主婦)。
- 家事、仕事、性生活、すべて夫に合わせているようでおもしろくない、「ありがとう」の一言があれば頑張れるのに(54歳, 製造パート)。
- 在職中、日中は男性と同等の仕事、帰宅して家事と二人分の仕事をしていると舅に愚痴ったら「女の宿命だ」と言われた(71歳, 無職)。
- 母親業は一生続くけど、主婦業は夫の定年時に卒業でいいと思う(51歳, ガス検針員)。

### •妻と夫の本音

- ①留守中、夫に炊事を任せたとこ、多い方が美味しいだろうとマヨネーズ、ケチャップなど各種調味料を一度に混ぜてしまった。→レシピ本やインターネットで勉強してほしい(47歳, 看)。
- ②折角掃除してくれた翌日、カバンはテーブルの上、靴下、ワイシャツをソファに脱ぎっ放し。洗濯物を取り入れてくれたが座敷に山積み。心中怒り心頭。→「家事を手伝う」のではなく「一緒に家事を担う」気遣いがほしい(45歳, 看)。
- ③「主婦業を辞めるわけにはいきませんが、せめて2、3日休みがほしいです」「出来る限り早く1人になりたい…」(71歳, 元看, 夫 要介護3)。
- ④「それは個人的な見解！今まで死に物狂いで働いて、今になって家事を手伝え!? 冗談でしょう!」(78歳, 元上級公務員、年金生活、ウォーキングとゴルフ三昧、妻 専業主婦)。

※未婚の女性達がこのような実態を知れば、結婚に尻込みするのも無理はないと思われる。

### •黒川伊保子

『妻語を学ぶ』や『定年夫婦のトリセツ』など、人気エッセイの著者である黒川伊保子さんは言う。

「価値観を押し付けず、相手の存在を共に生活する伴侶と認める。難しいけれど老後は特に大切なことだと思う。定年を迎える夫は、余暇ができたことで、新しい趣味を謳歌できるかもしれない。激務の毎日から解放され、本当にやりたかったことを見つめ直すいい機会だ。…では、妻は？」

主婦業には定年など存在しない。朝昼晩とご飯を作り、部屋の掃除をし、ごみ捨てをする。洗濯機をまわし、お風呂に湯を張り、布団を干す。主婦業とは、日々の営みのこと。そこに定年などあるわけがない。そこで考えておきたいのが、定年後の夫婦関係について。

表2. 主婦の恨み言

### 社会への叫び

パパ皿洗う→パパ偉い  
 パパご飯作る→パパ優しい  
 母用事でパパに子供預ける→パパ偉い  
 パパ子供とお出かけ→パパ偉い  
 パパお仕事→パパお疲れ様  
 ママ家事→**当たり前**  
 ママ、子供とお出かけ→**普通過ぎる**  
 ママ仕事→**子供は？**

**私も寝めて元元…**

これを一步間違えれば、熟年離婚にもつながってしまう。定年後の夫婦は一緒にいる時間が多い。今までどおりの夫婦間の役割分担では妻に不満がでるのは明白である(表2)。実際夫婦のどちらかが機嫌が悪いと相手も理屈抜きで気分を害してしまうものである。やはり根底では支え合い、役割分担の見直しが必要になる。夫婦の風通しがよくなることは間違いない。そして互いの行動に干渉せず、束縛せず、またされず、人生100年時代という言葉が一般化されつつある現代、老後は、もはや第二の人生のスタートとも言える。長く人生をともにしてきた夫婦にとっては、新しい日々の幕開けだ」

### •反省

我が身を振り返ってみれば、結婚後、多忙な勤務医生活にかこつけて、帰宅後は座ったままで、家事も育児も妻に任せっ放し…。上記の意見、多くは主婦の愚痴？恨み節？を読み、友人の奥さんの話も聴き、触発され、主婦業に挑戦して3年になる。掃除、洗濯、炊事、ゴミ処理、買い物、裁縫、靴磨き…等々主婦の苦労が身に沁みている。この上に育児が加われば、うつ病になり、自殺念慮に襲われるのも無理はないと、「我が身を抓って人の痛さを知れ」を実感している。

### •耳寄りな話

幸い過日、D医院で共働きの新婚さん(26歳, 事務)から心地好い話を聴いた。「結婚当初から相談する間もなく、若い夫が炊事、洗濯、掃除すべて阿吽の呼吸で協同作業にしてくれている」。E病院のナース(48)「共働きで、結婚当初からさり気なく家事を手伝ってくれ、育児も協力的であり難しく思っている。銀婚式を迎えた現在も変わらず、優しく、私の好きなことを自由にさせてもらっており、感謝している」。どうやら、

小中学校で男女平等、共同参画の教育が充実したお蔭で、現代の20歳～40歳の世代では、共働き、協同家事が当たり前になりつつあるようで、一安心した。

### ・外国

海外の主婦業はどうだろうか。私は40年前中国鞍山の一般家庭に招かれ、勤務医であるご主人が共働きの奥さんの手助けに、フライパンを操っている姿を目の当たりにした。アメリカでは、20年前、Colorado州Denverで暮らしている娘一家とNY州Uticaに在る婿の実家を訪れた際、義父がパンを焼き、食器を並べるなどせっせと専業主婦の義母を手伝っていた。

### ・家事分担

数年前、厚労省が既婚女性6千人の調査から「平日の家事の4時間23分が妻、37分が夫で妻の1/7」と発表し、啞然とした。夫が「半分ぐらい分担している」と言っても“名もなき家事、見えない家事”に気付いていない(表3)。例えば炊事では、残食の保存、生ゴミの処理、シンクタンクの掃除等、ゴミ出しでは、ゴミの分別、ゴミ箱の掃除、新しいゴミ袋の装着等。日本は未だ「男社会」から脱皮出来ておらず、子供の学校教育や大人の啓発活動の充実強化の必要性を痛感している。

表3. 名もなき家事

「名もなき家事」
・トイレトーパーの補充
・靴磨き
・町内やマンション会合へ出席
・新聞雑誌の廃棄
・飲みっ放しのグラスの片付け
・食事の献立
・調味料の補充/交換
・食べ残しの保存

### ・願望

先日、私と同世代のある患者さんが「自分は結婚式で初めて主人の顔を見た」と言われたが、そのような時代の女性は過酷な農作業の傍ら「死ぬまで主婦業」は当たり前のことだと受け止めていた。

女性の大臣や国会議長、知事、社長、ボクサーが大活躍する現在でも、2021年男女平等ランキングの日本は156か国中120位、先進国中最下位であり、吾々日本男子は男尊女卑の考え方を捨て、対等の立場で、女性の目線で「主婦業」を真剣に考えるべき時代にきてい

るのでは、とつくづく考えさせられている。「おーい！お茶！」「おーい！新聞！」が、時には「おーい！お茶ができたよ」「おーい！新聞、持って来たよ」に変わり、その上収入が増え、保育所の待機児童がゼロになり、高等教育無料化が実現すれば、やがて結婚式場や産科・小児科医院に賑わいが戻り、少子化問題も解決に向かうのでは…、と淡い希望を抱いている。

## 目医者のつぶやき「小児診療」

昭60 松尾俊彦

昭和の時代、眼科外来といえば子どもたちで大騒ぎでした。特に学校の長期休暇中などは、外来の廊下が子どもたちで溢れるようなこともありましたが、昔に比べると最近ではめっきり静かになったように思います。それでも、小児眼科の領域で子どもたちの経過を長く診ることが多い私は、子どもたちと接する機会が少なくありません。

「お父さんと一緒に初めて選挙に行った」と誇らしげに教えてくれたのは、新生児の時から診ている患者さん。カルテの年齢は18歳になっていました。なるほど、こちらの白髪も増えるはずです。

そんな一人、今は元気に中学校生活を送っている彼とも、小さい時から長い付き合いです。両眼ぶどう膜炎と診断され、近医の紹介でやってきた当時は4歳8か月でした。若年性特発性関節炎が疑われたため、すぐに小児科の八代将登先生に紹介しました。早期にヒュミラ注射を導入していただき、幸いにも両眼ぶどう膜炎による黄斑浮腫が引き、両眼視力も現在0.6まで出ています。ヒュミラの恩恵を実感した症例でした。この症例は、本人とご家族の文書承諾を得て、八代先生との共著で論文にしております。文末に文献として挙げておりますので、興味を持っていただければ幸いです。論文の別冊は海外勤務が多い彼のお父様にも謹呈し、これまでの経過を思い出しましたとの感想をいただけたことも、ちょっと嬉しい出来事として記憶に残っています。

彼は今も小児科と眼科に通っています。昨年もお母様と一緒に来院されたのですが、診察のとき、1枚のコピーを手渡してくれました。国税庁が毎年、全国の中・高生から募集している「税についての作文」に応募し、令和3年度中学生の広島国税局局長賞に入選したというのです。そこには、彼が病気とどう付き合っ

てきたか、そして彼自身の体験を通した制度の大切さが記してありました。

長い付き合いのうちには、このような嬉しいこともあります。彼とご両親の了解を得て、その受賞作文をご紹介しますと思います。ご高覧ください。

「感謝を伝えるために

僕は毎日、勉強に部活に委員会に活躍している。部活は未経験のバレー部に友人と一緒に入部した。一日一日を大切に過ごしている。

実は僕は元気そうに見えるが若年性特発性関節炎による目の病気だ。そのため両眼弱視で目の教室に小学校のころから通っている。病気は、四才の時に発症した。僕の両親は僕の目の異変に気づき病院へ連れて行ってくれたがその夜泣いていた。

「一生見えなくなるかもしれない。難しい病気だ。近いうちに両眼手術をした方がよい。」と医師から言われたからだった。僕はほとんど見えていなかったが自転車に乗ったり、サッカーをしたり、TVやゲームもして普通の人と変わらぬ生活ができていた。僕は手術の話が聞かされた時は、「今より良う見えるようになるん?」「じゃあ手術がんばるわ。」と笑顔で言っていたそうだ。母は、僕の目がもし見えにくくなった時の為に点字の本を図書館で沢山借りてきた。点字はとても難しく、すらすら読めるようになるまでには何年もかかるそうだ。僕の手術の日、沢山の友人が千羽鶴を送ってくれた。とても心強かった。術後、先生からゲームの許可をもらえたが数日痛くて目が開けられなかった。手術で水晶体を除去したため、分厚いレンズのメガネをかける事になる。眼内レンズは眼内の炎症が強かったので入れることができなかつたと医師から説明された。術後も炎症が抑まらず、今飲んでいる薬だけでは効果がなくなり追加で注射を二週間毎に打つことになった。注射は自分では支払えない程の高額だけど国の税金で助成してもらえると医師から説明があったので安心した。注射が始まってから目の炎症は少しずつ抑えられゆっくりと視力が上がっていった。数年経つが、注射のお陰で不自由なく日常生活が送れていると改めて感じた。その他にも僕が小学校一年から字が見やすいようにと、拡大教科書を特注で文科省に依頼して作ってもらっているのだがこれも税金だ。

医療費の助成金や文部科学省による教科書給与制度などのお陰で、僕は元気な体で学校に通って勉強することが出来ている。税金を毎日働いて納めてくださっている国民の皆様へ感謝したい。また、病気の僕を支えて育ててくれている家族、病院や学校の先生方、多

くの友人達にもこの場を借りてお礼と感謝の気持ちを伝えたい。

僕も将来は働いて税金を納めて皆のために役立つようになりたい。そのためには皆様からいただいた視力をしっかり役立てて、学び多き中学校生活を送りたいと思う。」

参考文献

Toshihiko Matsuo, Masato Yashiro. Long-term control of macular edema with adalimumab after cataract surgery in a Japanese child with juvenile idiopathic arthritis: case report and review of 26 Japanese patients. Journal of Investigative Medicine High Impact Case Reports 2020; 8: 2324709620953283.





岡山大学医学部・岡山大学病院並びに鶴翔会会員に係る新聞記事など（2021.9.1～2022.1.31）

掲載年月日	媒体	見出し			備考
2021/ 9/ 2	山陽新聞	27	大型救急車を導入	人工心肺「エクモ」搭載可能	岡山大病院
2021/ 9/ 3	山陽新聞	26	岡山県政150年 ③ 医の系譜	人材輩出 先進県育む	岡山大医学部
2021/ 9/ 4	山陽新聞	17	分化 大量培養に成功	iPS細胞 → 胚芽間葉系細胞	軟骨再生医療 実用化期待 宝田剛志（岡山大幹細胞生物学）
2021/ 9/ 4	山陽新聞	14	あなたとあなたの大切な人の命を守るために	岡山県民の皆さんへのお願い	岡山新型コロナウイルス対応者会議 構成医療機関 岡大病院、岡山医療センター、済生会総合病院、岡山赤十字病院、岡山市立市民病院、岡山労災病院、川崎医科大学附属病院、川崎総合医療センター、倉敷中央病院、津山中央病院、各病院長
2021/ 9/ 5	山陽新聞	6	健康フェスタ in Okayama	知っておきたい子どもの健康 依存症を克服しよう！	池田正憲（岡山大小児科学）、八代将登（岡大病院小児科）、四方賢一（岡大病院新医療研究開発センター）、森實祐基（岡山大眼科学）、宮本聡（岡大病院新医療研究開発センター）、片山晶博（平16）
2021/ 9/ 6	山陽新聞 MEDICA	11	現場で治療 いち早く	岡山県北の救急医療を支える「ドクターカー」	エリア拡大、常設化目指す 前山博輝（平19）
		12	働き盛りの人への健康講座 PART 3	変形膝関節症に対する治療法	横山裕介（平26院）
		13	尊厳の保障へ向けて	人間の尊厳と骨の健康	原田遼三（平19）
		14	よりよく生きる処方箋	がん患者の就労支援と在宅療養支援	羽井佐 実（昭57）
2021/ 9/ 7	読売新聞	29	新型コロナ第5波 県北部にも拡大	帰省や旅行が原因か	藤田浩二（平19）
2021/ 9/ 7	山陽新聞	30	松岡良明賞贈呈式	乳がん治療尽力	土井原博義（岡山大病院乳腺・内分泌外科）
2021/ 9/10	山陽新聞	27	日本禁煙科学会賞受賞	県内初 長年の禁煙指導啓発評価	清水信義（昭41）
		25	小林県議 公認候補	衆院選 比例中国 党本部に推薦へ	小林孝一郎（平26院）
2021/ 9/14	読売新聞	32	ワクチン後も感染予防を	県クラスター対策班感染管理医師	藤田浩二（平19）
2021/ 9/15	読売新聞	17	病院の実力 頭頸部がん	喫煙や飲酒影響	岡山大病院、倉敷中央、川崎医大
2021/ 9/16	読売新聞	27	モデルナ製ワクチン 岡大第2回目副反応調査	40歳代以下9割発熱	頼藤貴志（疫学・衛生学）
2021/ 9/19	山陽新聞	29	コロナ薬期待 イベルメクチン	岡山大病院が治験	萩谷英大（岡山大病院総合内科・総合診療科）
2021/ 9/21	山陽新聞 MEDICA	33	地域から求められる医療機関へ	大きく進歩した多発性骨髄腫の薬物治療	角南一貴（平3）
2021/ 9/26	山陽新聞	25	山陽新聞を読んで	意義ある東京五輪の検証	松山正春（昭44）
2021/ 9/26	山陽新聞	14	健康フェスタ in Okayama	アンチエイジングを実践しよう いつの間にか骨折？	エイジレスは脳が決め手 骨粗しょう症の内科的治療 骨粗しょう症性椎体骨折の予防と治療 菱川 望（旧教育職員）、松本佳則（岡大病院リウマチ膠原内科）、三澤治夫（岡山大病院整形外科）
2021/ 9/27	山陽新聞	20	モデルナ接種調査 岡大最終報告	2回目 副反応増大 発熱や頭痛 数日で解消	頼藤貴志（疫学・衛生学）

掲載年月日	媒体		見出し		備考	
2021/ 9/28	山陽新聞	23	読書三昧 近刊私の一冊		齋藤信也(岡山大保健学研究科)	
2021/ 9/30	山陽新聞	26	遺伝性肉腫の専門外来	複数診療科が連携、治療	岡山大学病院開設 中田英二(岡山大病院整形外科)	
2021/10/ 4	山陽新聞 MEDICA	11	ロボット手術 標準治療に	岡山済生会病院 執刀医が語る	肺がん、前立腺がん、すい臓がん	奥谷大介(平16院)、日下信行(平13院) 小島 亨(平11院)
			人工関節手術支援ロボット導入	県内初 岡山市市民病院		藤原一夫(平12院)
		12	地域から求められる医療機関へ	【2021年 脊椎・脊髄への旅】	脊椎・脊髄を内側から覗いてみた	竹内一裕(平9院)
			専門病院の力 地域医療を支える	「ふるえ」の治療にFUS		島津洋介(平27院)
14	よりよくいきる処方箋 川崎学園特別講義	第5回 「高血圧と脂質異常症」	「高血圧」 「脂質異常症」	柏原直樹(昭57) 高尾俊弘(昭63院)		
2021/10/ 5	山陽新聞	28	トリアージ施設完成 岡山大学病院 院内感染回避へ	陰圧化診療室 広めの待合室	萩谷英大(岡山大病院総合内科・総合診療科)	
2021/10/ 6	読売新聞	24	岡大病院にトリアージ施設	院内感染リスク下げる	岡山大学病院	
2021/10/14	山陽新聞	26	一日一題	youは何で脳神経外科医に？	伊達 勲(大学院医歯薬総合研究科長)	
2021/10/16	山陽新聞	19	岡山県からのお知らせ	新型コロナウイルスワクチン接種	専門家の先生からのコメント 頼藤貴志(疫学・衛生学)、大塚文男(岡山大総合内科学)	
2021/10/17	山陽新聞	6	健康フェスタ in Okayama	ストップ脳卒中(内科)(外科) 頭痛持ちの対策 脳動脈瘤のお話	出口健太郎(平成18院)、杉生憲志(岡山大脳神経外科)、山下 徹(岡山大脳神経内科)、菱川明人(岡山大脳神経外科)	
2021/10/18	山陽新聞 MEDICA	11	院長に聞く	診療拠点の役割果たす	前田嘉信(岡山大病院長)	
		12	地域から求められる医療機関へ	男性不妊治療	市川孝治(平7院)	
2021/10/18	山陽新聞	20	大動脈疾患に緊急対応	県、7病院でネットワーク構築	ネットワーク構築専門部会長 伊藤 浩(岡山大循環器内科学)	
2021/10/21	山陽新聞	26	一日一題	ジョギングは川と城、一本	伊達 勲(大学院医歯薬総合研究科長)	
2021/10/22	山陽新聞	1	識者 特別寄稿 選択2021 衆院選	感染症の対応組織検討を	頼藤貴志(疫学・衛生学)	
2021/10/22	山陽新聞	31	コロナと認知症学ぶ	介護や治療の留意点	竹之下慎太郎(岡大病院精神科神経科)	
2021/10/25	読売新聞	33	病院の実力 回復期リハビリ	歩行や着替え動作練習	住み慣れた環境で行う コープリハビリテーション病院	
2021/10/25	山陽新聞	20	松岡良明賞 土井原教授に聞く	乳がん患者のQOL向上	専門医育成に尽力 土井原博義(岡山大病院乳腺・内分泌外科)	
2021/10/28	山陽新聞	26	一日一題	いつでもどこでも	伊達 勲(大学院医歯薬総合研究科長)	
2021/10/30	山陽新聞	32	ワクチン効果60才以上で推計	第5波感染1700人抑制か	若い世代に接種訴え 頼藤貴志(疫学・衛生学)	
2021/11/ 3	山陽新聞 岡山大学 医学部創立150周年特集	15	伝統の力を未来の力へ	岡山から「地球の健康実現」		槇野博史(岡山大学長)
		16	臨床 最後のとりで	コロナ・アフター外来 IVRセンター		
		17	研究 不可能を可能に	がんゲノム医療 光免疫療法 活躍する出身者		
		18	教育 未来へつなぐ	臨床実習 徹底した現場主義貫く 診療参加型に発展	AI人材育成 先進的な医療を提供へ	
		19	記念事業 魅力ある教育環境を整備	鹿田会館(旧生化学棟)整備改修 人材育成事業 Floor150開設など		
20・21	記念座談会	地域医療に貢献し世界へ情報発信		豊岡伸一(岡山大学医学部長) 伊達 勲(岡山大学大学院医歯薬学総合研究科長) 前田嘉信(岡山大学病院長) 高倉範尚(岡山大学関連病院長会副会長)		

掲載年月日	媒体		見出し		備考	
2021/11/4	山陽新聞	1	岡山大学医学部 創立150年 祝い式典	世界に健康届ける		
2021/11/4	山陽新聞 MEDICA	11	「救急」から肝胆膵専門へ	天和会松田病院		松田忠和(昭49)
		12	地域から求められる医療機 関へ	超高齢化社会における耳鼻 咽喉科診療		丸中秀格(平29院)
		13	医学で予防する! 予防医 療最前線	女性健診について		鈴木真由美(平17院)
			尊厳の保障にへ向けて	医療と介護の究極の役割		江澤和彦(平9院)
2021/11/5	読売新聞	25	モデルナ接種87%満足	岡大調査「迷っている人判 断材料に」		頼藤貴志(疫学・衛生学)
2021/11/11	山陽新聞	20	一日一題	私、認知症ですか?		伊達 勲(大学院医歯薬総 合研究科長)
2021/11/12	山陽新聞	21	ひふの日	アトピー性皮膚炎	コロナ禍でも継続治療を	白藤宜紀(平11院)
2021/11/17	読売新聞	25	病院の実力 前立腺がんの 治療実績	高い10年生存率		岡山大病院、倉敷中央、川 崎医大総合医療センター
2021/11/18	山陽新聞 MEDICA	17	インスリン発見100年	糖尿病 かつては死の病	研究おおきく進み、長寿へ	四方賢一(岡大病院新医療 研究開発センター)
		18	地域から求められる医療機 関へ	少子化時代の地域小児医療 を守る		清水順也(平15院)
		20	11月12日は「いい皮膚の日」	冬気を付けたい病気とその 対策		野村隼人(岡大病院皮膚科)
2021/11/18	山陽新聞	26	一日一題	人前で話す時は		伊達 勲(大学院医歯薬総 合研究科長)
2021/11/21	読売新聞	29	病院の実力 岡山編 前立 腺がん	悪性度低ければ監視療法		岡山大病院、倉敷中央、川 崎医大総合医療センター
2021/11/25	山陽新聞	22	一日一題	医師の二刀流の医師とは		伊達 勲(大学院医歯薬総 合研究科長)
2021/11/28	山陽新聞	25	山陽新聞を読んで	社説楽しみ 署名入れば		松山正春(昭44)
2021/11/28	山陽新聞	29	献体125人 冥福祈る	岡山大で慰霊祭 学生ら参 列		岡山大学医学部
2021/11/28	読売新聞	27	早期胃がん AIが診断	岡大など システム開発 治療法選択の一助に		川原祥朗(岡山大実践地域 内視鏡学)
2021/11/30	山陽新聞	8	おかやまの進むべき未来へ	岡山から「ありたい未来」 の共育共創	SDGs Project 2022	横野博史(岡山大学長)
2021/12/4	山陽新聞	31	地域医療課題は	実習成果発表 地域医療オ ンラインシンポジウム		岡山大学医学部医学科1年 生
2021/12/6	山陽新聞 MEDICA	14	地域から求められる医療機 関へ	データと経験を活かして地 方で全国レベルの心臓治療 を		畝 大(平13)
		14	高度医療で地域を支える 2021	COVID-19パンデミックに おける地域での役割分担		藤田浩二(平19)
		15	泌尿器科外来より	尿漏れが気になったら泌尿 器科検診を! Part 2		大岩裕子(令2院)
		15	良質な医療で地域に貢献す る	心不全パンデミック?		井久保 卯(昭63)
2021/12/15	読売新聞	17	病院の実力 膵臓がんの治 療実績	化学療法が進歩 治療の幅 広がる		岡山大病院、岡山済生会総 合、倉敷中央、川崎医大
2021/12/17	山陽新聞	32	医療分野 共同研究拠点	岡山大「BIZENラボ」開設	革新的製品開発へ	岡大病院新医療研究開発セ ンター
2021/12/18	読売新聞	27	ワクチン3回目 積極接種 を	県医師会 感染対策徹底求 める		松山正春(昭44)
2021/12/19	読売新聞	25	病院の実力 岡山編 膵臓 がん	手術前にも薬物治療	治療実績	岡山大病院、岡山済生会総 合、倉敷中央、川崎医大、 津山中央、松田
				初期症状出にくい		児島 亨(平11)

掲載年月日	媒体		見出し		備考
2021/12/20	山陽新聞 MEDICA	13	ルーツを語る 倉敷成人病センター	臨床、研究、予防柱に進化	須原銀兵衛（昭38）
		14	地域と共に未来の医療を創る	下肢静脈瘤 血管内治療を受けて元気できれいな足を取り戻そう	松前 大（昭54）
		14	高度医療で地域を支える2021	心電図の画像伝送	前山博輝（平19）
		15	泌尿器科外来より	気になるおしものふくらみ 放置しないで	骨盤臓器脱 小林知子（平20院）
2021/12/20	山陽新聞	16	病院トラブルQ&A	治療を拒否する患者	意思変わればいつでも対応 丸山啓輔（平12院）
2021/12/23	山陽新聞	27	網膜色素変性症の投与	静脈注射 高い効果	松尾俊彦（大学院ヘルスシステム統合科学研究科）
2021/12/24	山陽新聞	29	建物火災 CO微量でも死の危険	空気吸わず素早く屋外に	中尾篤典（岡大病院高度救命センター長）
2021/12/26	読売新聞	21	腎機能の低下が気になる方へ	ご存じですか？ 慢性腎臓病（CKD）	柏原直樹（昭57）
2021/12/27	山陽新聞	23	コロナ患者 みとり模索 岡山県内病院	防護服面会 隔離解除 オンライン	家族の心情に寄り添う 岡山大学病院ほか
2022/ 1/ 3	山陽新聞	17	山陽新聞賞 社会功労	精神科医 元岡山県精神保健福祉センター所長	山本昌知（昭36）
2022/ 1/ 4	読売新聞	23	オミクロン 2人軽症	岡山県内で初の感染確認	
2022/ 1/12	山陽新聞	13	近代岡山の偉人伝	保険の相互会社創設	矢野恒太（名誉会員）
2022/ 1/14	読売新聞	25	オミクロン168人感染 市中初確認	岡山県「レベル2」引き上げ	
2022/ 1/15	山陽新聞	22	コロナ感染者急増 8割がオミクロンの可能性	岡山市保健所長に聞く	松岡宏明（昭60卒）
2022/ 1/17	山陽新聞 MEDICA	16	高度医療で地域を支える2022	withコロナ時代の消化器内視鏡診療	竹中龍太（平6）
		17	泌尿器科外来より	血尿が出たら泌尿器科へ受診を!!	森分貴俊（平27）
		17	良質な医療で地域に貢献する	検診結果放置していませんか？	池田示真子（会員）
2022/ 1/18	読売新聞	18	がん医療進歩のために	第33回SGHがん研究助成金授与式	浅田 騰（岡大病院血液・腫瘍内科）
2022/ 1/20	山陽新聞	27	岡山県コロナ感染最多	若者中心一気に拡大	専門家、対策徹底訴え 頼藤貴志（疫学・衛生学）
2022/ 1/20	山陽新聞	25	コロナ第6波 若者に第2回接種推進を	基本的な対策有効	塚原宏一（岡山大学病院感染制御部）
2022/ 1/20	山陽新聞	7	外科医用アシストスーツ	長時間の手術 上体負担軽減 医師監修	大藤剛宏（平4卒）
2022/ 1/23	読売新聞	23	病院の実力 岡山編 手外科	変性疾患 手術も選択肢	PC長時間操作控えて 橋詰博行（昭52）
2022/ 1/27	山陽新聞	26	県蔓延防止対応決定	営業制限 認証店緩和	知事 細かい対策で効果 頼藤貴志（疫学・衛生学）
2021/ 1/30	山陽新聞	27	山陽新聞を読んで	ワクチンの利益啓発を	松山正春（昭44）
2021/ 1/31	山陽新聞	21	コロナ第6波 子どもの感染拡大	小児科 発熱患者が急増	青木佳之（昭47）

【お断り】媒体に偏りがあり、また、見落としている記事もあるかと思われませんが、何卒ご容赦ください。鶴翔会会員の先生方におかれましては、岡大医学部・岡大病院・鶴翔会会員に関する新聞・雑誌の記事の情報をお寄せいただければ幸いです。



# 教室だより

(令和3年9月～令和4年3月)

## 細胞組織学

COVID-19第六波の影響によりオンライン授業、会議が続いております。教育面では、医学研究インターンシップで10月から3か月間、医学科三年次生の田井君、萬木君、守屋君が当分野にて研究活動を体験しました。11月には細胞組織学特別講義として、佐々木順造名誉教授、金井正美教授（東京医歯大）、近藤洋一教授（大阪医歯大）よりオンライン講義いただきました。12月には発生学特別講義で井関祥子教授（東京医歯大）が来学、年明け1月には、大学院講義にて七田芳則客員教授（立命館大）「光感覚の分子生理学」、研究セミナーにて神田真司准教授（東大大気海洋研）「脳に頼らない脳下垂体自身の光応答によるホルモン調節」に来学いただきました。その後、O株が急速に蔓延し、1月19日の太田訓正教授（九大）発生学講義がオンラインとなりました。研究面では、「昆虫脚再生時の再生芽細胞増殖をToll signallingが促進する」について*Development*誌（板東講師、奥村院生、大内教授）に論文発表し、「188位のアミノ酸が脊椎動物Opm5の光吸収特性を決定する」について*Commun Biol*誌（佐藤助教、大内）に論文発表しました。学会活動としては、日本解剖学会第75回中国・四国支部学術集会以て「小型魚類メダカを用いた網膜色素変性症原因遺伝子*eyes shut homolog*の機能解析」（佐藤）、第44回日本分子生物学会年会以て「NADPH oxidasesによるコオロギ脚再生の制御メカニズム」（板東）、「マウス副腎における*UCP1*発現は寒冷刺激により上昇しない」（藤田、大内）、第127回日本解剖学会総会・全国学術集会以て「*Dkk3 (REIC)* ノックアウトマウス副腎の形態学的解析」（土生田院生）、「*Cysltr1*変異はリポポリサッカリドによるマウス頭蓋冠の骨破壊に影響しない」（藤田）、「Toll受容体と活性酸素による昆虫の器官再生の制御」（板東）、「ヒト脳組織におけるオプシン5局在同定の試み」（大内）について発表しました。（藤田 記）

## 人体構成学

9月から12月、系統解剖実習を対面で行いました。新型コロナウイルスのデルタ株が収まりオミクロン株が拡大するまでの短い期間に、奇跡的に実習が実施できたこととなります。入学当初からweb講義が続いた医学科2年生にとって、対面での実習はとて有意味だったようで、交友関係を深めながら熱心に人体の構造を追求する姿勢が多く見られました。教職員一同、実習を無事に完了できたこと、学生たちが真摯に取り組んだことに大きな安堵と喜びを感じました。

11月27日、岡山大学解剖体慰霊祭がJホールにて、厳かに執り行われました。新型コロナウイルスの影響により今回も規模を縮小して開催し、ご遺族や本学教職員、学生ら約170人が参列し、献

体された方々のご冥福をお祈りしました。秋の解剖学会中四国支部集會、献体実務担当者研修会はweb開催、3月に予定されている第127回日本解剖学会もWeb開催となりました。忘年会、同門新年会も、昨年同様中止となりました。

毎年恒例の医学科3年生のMRIでは、実施期間と人員体制の観点から今年度の受け入れは断念しました。一方、以前MRIで配属された入江恭平医師が産科婦人科学の博士課程大学院生として今秋から当教室へ出向、小阪らと共に臨床応用を見据えた基礎研究を開始しました。「岡山大学科学技術イノベーション創出フェローシップ受給者」に選ばれ、研究に一層邁進する日々を送っています。また2022年4月には、米国癌学会（AACR）にて“Biological and clinical value of OCT4A/SPP1C axis in endometrial and lung adenocarcinoma”と題する発表を行います。

オミクロン株の感染拡大の中、教室員が協力して様々な対策を講じながら、献体業務、教育、研究を止めることなく進めてまいります。（小阪 記）

## 脳神経機構学

教育では、10月-12月までの3ヶ月間、医学研究インターンシップ（教室配属）で3年生4名を迎えました。「農薬ロテノン慢性皮下投与パーキンソン病モデルマウスにおける免疫細胞を含む腸管の細胞環境の変化に関する検討」「パーキンソン病モデルマウスへのタンドスピロン投与によるドパミン神経保護効果」「BADGE曝露によるエストロゲン受容体 $\beta$ を介した突起伸長促進のメカニズムの検討」について熱心に研究に取り組みました。

研究活動では、10月のニュープロバッチ8周年記念講演会（オンライン）で宮崎が「ロチゴチンによるアストロサイトを標的としたドパミン神経保護」について講演しました。メタルバイオサイエンス研究会2021（横浜）で、正井院生が「メタロチオネイン欠損マウスにおける脳梁形成不全」について、宮崎が「アストロサイト-ミクログリア連関を介したロテノン誘発ドパミン神経障害へのメタロチオネインの関与」についてリモートにて発表しました。また、第75回日本解剖学会中国・四国支部学術集會（オンライン）で正井が「メタロチオネイン欠損による脳梁形成不全の増悪」について発表しました。12月には第44回日本分子生物学会年會（オンライン）で細谷助教が「改良型Tet-ONシステムを用いたメダカ網膜桿体特異的な遺伝子発現誘導」について、宮地助教が「メダカDNAトポイソメラーゼII $\beta$ による神経系の遺伝子発現制御」について発表しました。第36回創薬・薬理フォーラム岡山（オンライン）で正井が「メタンフェタミン誘発ドパミン神経細胞毒性に対する抗HMGB1抗体の神経保護効果」について発表しました。1月には第19回神経科学研究会（オンライン）で宮崎が「部位特異的アストロサイト-ミクログリア連関を介したロテノン誘発ドパミン神経障害」について発表しました。また、第47回岡山脳研究セミナー（オンライン）を当研究室が主催し、宮崎が発表しました。医歯薬学総合研究科の脳・神経に関する研究を行っている11教室が一堂に会し、情報共有しました。PDオンラインセミナー in

秋田で浅沼教授が「グリア機能賦活によるドパミン神経保護」についてリモートにて講演しました。

研究活動の詳細および発表論文に関しては、教室のホームページ (<http://www.okayama-u.ac.jp/user/mnb>) をご覧下さい。(宮崎 記)

## 細胞生理学

同窓会の皆様、こんにちは。細胞生理学です。令和3年9月から令和4年3月の近況をご報告いたします。新型コロナウイルス感染症は第6波の渦中にあり、オミクロン株が拡がり、本日(2/3)の全国の新規感染者数は10万人(岡山県1,307人)で、全国殆どで蔓延防止等重点措置が発令され、飲食店では酒提供禁止、20時閉店です。しかし、細胞生理ではスタッフの檜山武史講師、吉川宗一郎助教、藤村篤史助教が、学生と共に、大変熱心に研究に取り組んでいます。また、秘書小野佳子さんが、毎朝、各種調理パンやシフォンケーキ等を作ってきて下さり、とても美味しく頂いています。研究は、神経科学とがん生物学や免疫学等の融合的研究を鋭意進行中です。修士2年の浅賀裕太郎君(脳腫瘍と神経系の連関)、小村彩可さん(ストレスと免疫アレルギーと神経の連関)は就職を決め、論文審査に合格しました。修士1年の藤田悠紀さん(免疫と神経と快刺激)、西條雅貴君(脳腫瘍と神経)、前田夢咲さん(神経性唾液分泌)、博士院生の長尾圭君(免疫と神経)、珊瑚徐さん(Shanshan, POST-ONECUS, 交感神経)と李皓生君(ART 2年、交感神経)、ポスドク前山医師(がんと神経)も実験を連日頑張っています。臨床教室との連携で、呼吸器・乳腺内分泌外科から大谷悠介医師と朱医師(肺がんや乳がん)と神経)、皮膚科から安富陽平医師(メラノーマと神経)と浦上仁志医師(アトピー性皮膚炎と神経)、整形外科から片山晴善医師(がん)と神経)が参加中です。大学院生を送って下さり、豊岡教授、森実教授、尾崎教授に感謝いたします。12月から技術員白神美津穂さんが参画し、貴重な戦力です。医学部3年MRIに、栢野功政君、日野翔太君、味野宏紀君が参加しました。皆さんのおかげで、明るく楽しい雰囲気です。(神谷教授、檜山講師、吉川助教、藤村助教)

(神谷 記)

## システム生理学

当研究室は日本学術振興会科学研究費・基盤Aの研究課題「新規メカニカル負荷装置の開発を通じた次世代メカノメディスンへの挑戦」および防衛装備庁安全保障技術研究推進制度の研究課題「メカニカルストレス負荷システムの開発」を継続して行っています。

当研究室の森松助教が、日本生物物理学会サブグループの主催によるメカノバイオ討論会2021(12月)を開催しました。メカノバイオロジー分野の若手研究者が活発な発表と議論を繰り広げ、当該分野のますますの発展を予感させるイベントとなりました。

学会発表に関しては、新型コロナウイルス感染症の影響によりオンラインでの活動が制限されましたが、以下の学会で参

加・発表を行いました。The 4th international TRP meeting (TRP2021)(9月:片野坂、招待講演)、JGP symposium (calcium signaling and E-C coupling)(11月:片野坂、招待講演)、日本生体医工学会関西支部講演会(12月:高橋、招待講演)、第99回日本生理学会(3月:成瀬、高橋、貝原、梁)。

メンバーに関しては、2021年度大使館推薦国費外国人留学生にRumaisa Kamranを迎えました(10月)。コロナ禍で海外からの入国が困難な状況でしたが、岡山での生活を無事に開始しました。メカノバイオロジーを応用した心臓再生医療研究での活躍が期待されます。(高橋 記)

## 分子医化学

魅力ある教育研究分野をつくるべく教育および各研究テーマに取り組んでいます。

人事関係では、本年度1-2月に修士および博士の学位審査があり、前川明日華さん(修士)、田仲由希恵さん(インプラント再生補綴学:博士)がそれぞれ無事修了しました。10月より博士課程に剣持礼子さんが入学しました。そして、インプラント再生補綴学の博士課程大学院生北川若奈さんが共同研究のため配属されました。また、国費留学生としてベトナム大学ハイフォン医科薬科大学からNGUYEN, Duy Hoangさんが博士課程に入学しました。同大学の医学系からの初めての入学者となります。今後の活躍を期待しています。

学会活動は、引き続きCOVID-19の影響を受けて、国際学会は軒並み延期、国内学会も多くはオンライン開催かハイブリッド開催となり、学会関係者はご苦労が多いと思います。8月に宮崎助教が大藤内分泌医学賞を受賞しました。10月にはオンライン開催となりました第16回結合組織勉強会に米澤、大橋が参加しました。11月には西日本医学生学術フォーラム2021がオンライン開催(主幹校:奈良県立医科大学)となりましたが、岡山大学はサテライト会場を鹿田会館(旧生化学棟)講堂に設けて開催、医学科1名が口頭発表を行いました。大橋はART支援室早瀬さんとサテライト会場運営を行いました。広報に努めたおかげで、医学科生や教員のご参加も多くなりました。フォーラム教員会議で2022年に、大橋がこのフォーラムをお世話させていただくことになりました。本研究科のARTプログラムを活性化することにつながりたいと思います。1月開催の岡山脳研究セミナーに分子医化学は初めて参加させていただき、宮崎助教が発表を行いました。2月には、整形外科の尾崎教授が会長をお務めの第34回日本軟骨代謝学会がオンラインで開催され、大橋は座長を務めました。

教育関係では、新型コロナ感染症によるカリキュラム変更もあり、分子医化学分野は9月から1月まで、基礎病態演習(3年)、医学研究インターンシップ(3年)、分子医化学講義と実習(1年)を担当しました。当初は分子医化学実習を対面で行う予定で準備しましたが、第6波の急速な拡大を受けて急遽オンライン形式となり、Teamsによるライブとビデオを取り混ぜた実習に変更しました。急遽ながらも実施できたのは参加いただいた教員全員の協力のおかげと感謝いたします。また、医学科非常勤講師として京都大学・渡辺亮先生、順天堂大学・洲

崎悦生先生、東京都医学総合研究所・神村圭亮先生、大分大学・佐々木隆子先生にも、オンデマンドでの特別講義のためビデオ収録をお願いしましたがわかりやすい内容の講義で大変好評でした。10月から12月には3年次4名（岩田、垣内、谷、野村）がインターンシップで配属し、3つの研究グループに分かれて研究に従事しました。また、1名（兼城）はイギリス、リーズ大学（Kwok研究室）に2か月派遣されました。それぞれ、コロナ感染症対策を取りながら熱心に取り組んでくれました。11月に宮崎助教が工学院大学で化学応用学特論A「網羅的遺伝子発現解析によるハンチントン病の分子病態解明」の講義を行いました。1月には沖縄科学技術大学院大学・堀哲也先生による大学院特別講義「活動依存的なシナプス小胞動員機構」を拝聴しました。（大橋 記）

## 薬理学

令和3年10月より細野祥之教授の新体制が始まりました。構成員は細野祥之教授、逢坂大樹助教、王登莉助教、非常勤研究員の劉克約、佐藤まどか、花房裕子、院生（博士課程）の進吉彰、喬寒棟、村岡玄哉、事務職員の藤田さやか、矢田真理子の11名です。

【教育】9月初旬、3年生対象の基礎病態演習は昨年同様に全てオンラインで行いましたが、これまでの経験から教員・学生ともあまり不便を感じませんでした。講義と同様、今後もオンラインのメリット（資料共有、録画による復習等）をうまく活用するのの一考かと思えます。続く10月からの3年生MRI研究は、コロナ感染が落ち着いたことから昨年同様対面となりましたが、感染の波は一年を通じて似た周期で動くことを実感しました。細野教授の着任に伴い、今年の研究テーマは情報解析を組み合わせた“遺伝子発現プロファイルを用いた新規がん増悪因子探索”としました。学生自らオープンデータの解析を行い、そこで得られた新規ターゲット遺伝子パスウェイをウェット実験で確かめるという一連の流れが経験できたと思えます。さらに、この実習を通じて経験した、Galaxyというオープンソフトを用いたRNAシークエンスデータの解析プロトコルを学生がまとめてくれたので、薬理学新ホームページにて公開予定です（<https://www.okayamayakuri.com/>）。

【研究】細野教授の専門分野である“網羅的解析、がん、ゼブラフィッシュ”をキーワードに教室一丸となり研究に取り組んでいます。また、異分野融合研究や若手研究者の育成も進めています。早速、令和4年1月から病院薬剤部の白水翔也先生が外部研究員として、医学科2年生の寺島美優さんがNovice-ART生として、それぞれ研究を開始しました。今後はこれまでの薬理学教室の伝統を継承しつつ、情報解析技術の進歩を積極的に取り入れた次世代型創薬研究が我々のミッションと考えています。（逢坂 記）

## 病理学（免疫病理）

10月からの医学研究インターンシップでは、3人の学生が当研究室に配属となり、それぞれの指導教員・スタッフの指導の

下、熱心に研究に取り組んでくれました。コロナ禍にも関わらず、2人をミシガン大学（米国・ミシガン州アナーバー）へ、1人を理化学研究所（埼玉県和光市）に派遣でき、全員が学内外で研究の苦労と面白さを実体感してくれました。学会はオンライン開催が続く中、11月の日本病理学会秋期特別総会是对面形式と後日のオンライン開催として開催し、多くの病理医に現地参加いただきました（会長：吉野正、副会長：松川昭博、柳井広之）。現地参加の良さとオンラインの利便性を考え、今後の学会はハイブリッドで開催されるものと思います。教室人事では10月からミャンマーの留学生2人（HNIN THIDAR TUN、NANG THEE SU PWINT）が博士課程大学院生として新しくメンバーに加わりました。厳しいミャンマー情勢の中、無事に来日できたことをうれしく思います。同じくミャンマー出身のAYE MOH MOH AUNGは、学位取得の上、本年2月より米国MDアンダーソンにポスト・ドクとして異動します。当研究室で学位取得した大倉隆広先生（専門：小児外科）は、3月よりマサチューセッツ総合病院へ基礎研究留学します。

当研究室では、中国からの留学生が6人、ミャンマーからの留学生が3人と国際色豊かです。研究室配属終了後も学部学生が研究に参加しています。メンバーは、毎日とても刺激的な環境で研究や勉学に励んでいます。（加戸 記）

## 病理学（腫瘍病理）

皆さまご存知のように、新型コロナウイルス感染症により1年延期となった150周年記念式典を11月3日にホテルグランヴィアで開催することができました。この事業の実行委員長として吉野は足掛け10年余にわたり活動を行ってまいりました。コロナ仕様で岡山県内の先生方に限ったご出席となったことは残念でしたが、事業としては概ね当初予定し希望していた計画を満足できるレベルで果たすことができ、充足感をもって終止符を打つことができました。これまで種々のご援助等いただいた皆様に深く感謝申し上げます。同日式典終了直後には第67回日本病理学会秋期特別総会関係の理事会等が岡山コンベンションセンターにて開催され、会長として挨拶をいたしました。同11月4日、5日に総会をハイブリッド形式で開催しました。現地参加は450名で、2年ぶりの現地開催ということもあり、2演題以外は現地発表をいただき、非常に活発に討議がなされました。会員は対面式学会を渴望していたということがよくわかりましたし、本来の学会の在り方を思いだす契機となりました。副会長は松川教授、柳井教授にお勤めいただき、挨拶や座長の責務を果たしていただきました。WEB参加者と併せて全体で1153名の参加者があり、これは秋期学会としては記録的な数字となり成功裏に終えることができました。また、本邦で初の開催となった第12回アジア太平洋地区病理学会（APIAP）は完全なWEB開催を選択せざるを得ない状態でしたが、登壇者を含めて約400名の参加がありました。2日間にわたってLIVEのQ&Aセッションがありましたが、時間が足りなくなるほど活発な討議がなされて、海外からも高い評価を得ることができました。2021年には上記の2学会に加えて日本リンパ網内系学会総会を6月に開催し、合計で全国、世界レベルの3学会を岡山

で開催いたしました。同門の皆様、教室関係者、教室員の力を結集することで、いずれもすばらしい学会となりました。この場を借りて深く感謝申し上げます。

3月末に吉野が退官を迎え、教室として一つの区切りを迎えますが、特命教授として研究、教育の両面でご尽力いただく予定です。人事に関しては岡山医療センターの永喜多が家庭の事情で関東地区に異動し、後任として田端が赴任します。岡山赤十字病院の池田が病理部の特任助教となり、入れ替わりで都地が赤十字病院に赴任します。西田が病理診断科の助教に昇進し、柴田が津山中央病院に赴任いたします。また、堀川礼奈が岡山済生会病院で後期研修を開始いたします。2021年10月に表梨華が病理専門医を取得し、12月には池田、永喜多、西田、田端の4名が細胞診専門医試験に合格しました。昨年度は神農陽子、安藤翠、中村聡子、溝淵光一が分子病理専門医を取得しました。また、本年度行われた分子病理専門医試験に柳井広之、佐藤康晴、田中健大、都地友紘、田村麻衣子、小野早和子の6名が合格致しました。11月には池田がIAP日本支部の学術奨励賞を受賞しました。学位取得は2021年9月に西村が、2022年3月に楊光が博士号を取得しました。

コロナ禍の終息にはもう少し時間がかかりそうです。また、しばらくは後任教授不在で、今後の見通しも立てづらい状況です。教室運営には教室員、教室関係者並びに同門の先生方のお力がどうしても必要になりますので、皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。(田中健 記)

## 病原細菌学

医学部教育では、3年次生の「基礎病態演習」を担当し、令和3年9月に骨形成不全症をテーマに課題解決型の遠隔授業を行いました。また、10月～12月には研究室配属実習「医学研究インターンシップ」を行いました。3年次生3名とともに、コロナ禍の中、密を避けつつワンヘルス・アプローチに基づく薬剤耐性研究を行うとともに、研究の意義や重要性を理解させるために、感染症専門医とのセミナーも行いました。それぞれの学生が研究成果をまとめ、オンラインでプレゼンを行いました。

大学院教育では、令和3年9月にI Putu Bayu Mayuraさん(インドネシア共和国からの国費留学生)が新興病原体 *Elizabethkingia anophelis* の病原性についての研究をまとめ、博士の学位を取得し帰国しました。令和4年2月に修士課程の三好諒さんがカルバペネム耐性腸内細菌科のプラスミド解析についての研究をまとめ、修了が決まりました。

研究では、令和3年9月～令和4年3月の間に、12報の原著論文を報告しました。そのうち *Microbiology Spectrum* 誌(IF 7.2)に掲載された研究は、日本臨床微生物学会の創立四半世紀記念研究成果発表奨励賞を頂きました。また、科研費、A-STEP、JST共創の場形成支援プロジェクト、JRA、AMED橋渡し研究、企業との共同研究費、民間助成金などの研究資金を獲得しました。

人事では、令和3年9月に内山淳平先生が高知大学医学部、麻布大学獣医学部を経て准教授に着任しました。内山先生の奥

様も技術補佐員として研究を頑張っています。まずは研究室に溶け込み、岡山大学の教員として学生や大学院生との教育研究・社会貢献・大学運営に貢献していきたいと張り切っています。

(内山 記)

## 病原ウイルス学

教育については、9月より「基礎病態演習」を難波助教が担当し、PBL形式で完全オンラインにより実施しました。臨症的な課題シートを小出しにしながら、チームで病態を分子レベルで理解していき、ミニ講義をするというもので最初は戸惑いながらも充実したチーム演習となりました。小児急性疾患講座の鷺尾准教授からの臨症的なコメントを学生たちが熱心に聴き、質問していたのが印象的でした。10月からは医学研究インターンシップ(MRI)で5名の学生、同時期に保健学科の卒論生2名も加わり、本田教授の直接指導のもとで12月末までの3ヶ月間、7名の学生が実験に取り組みました。

研究については、第5回転移因子学会(8月)、第25回日本神経感染症学会総会・学術集会(10月)、令和三年ともえ会総会(10月)にて本田教授が発表しました。また、第86回日本ウイルス学会学術集会(神戸、ハイブリット開催)にて小川助教と李院生がオンラインで発表し、小川助教がポスター賞を受賞しました。また、小川助教の論文、本田教授の総説、総合内科とのCOVID-19に関する論文が掲載されました。

現在、眼科学講座より金道院生(博士一年)、小児科学講座より宇田院生(同)が研究に参加し、4月からは修士課程の学生3名が入学予定です。

今後ともご指導のほど、宜しく申し上げます。

(難波 記)

## 疫学・衛生学

2021年10月に1名が博士課程に入学し、勉学に励んでいます。また、学部三年生の「医学研究インターンシップ」では5名の学生を受け入れました。学んだ経験が大いに活かされることを期待しています。

パンデミックの影響が続く中、岡山県クラスター対策班(OCIT: Okayama COVID-19 cluster Intervention Team)にご協力いただいている学内外の皆様には深く御礼申し上げます。OCITは、医療機関や福祉施設において集団発生した場合などに、速やかに感染拡大防止対策を講じられるよう編成されたチームです。2021年11月13日にはOCIT活動報告会議を開催しました。岡山県や岡山市、倉敷市関係者始め、OCITのメンバーが参加し、これまでの活動を振り返るとともに、今後の活動に関して活発な議論を行いました。

講座HPでは、新型コロナウイルスワクチンの副反応調査および接種1か月後追跡調査の報告をしています。厚生労働省の研究班でも副反応調査が行われていますが、その対象者は、男性が多く幅広い年代にわたっている自衛隊職員です。私たちの調査対象は男女半々で若年層が多く含まれており、比較的長期の副反応について調査しています。そのほか、講座HPでは「岡

山県内の感染状況・医療提供体制の分析」なども掲載しています。

2021年9月に映画『MINAMATA - ミナマタ -』が公開されました。その原案となった写真集『MINAMATA』に、頼藤教授が「水俣病 医学からの報告と解説」を寄稿しました。どうぞご覧ください。

また、同年10月、11月には、高尾准教授が産業医基礎集中研修会を津島キャンパスにおいて開催しました。毎回、定員を超える申し込みをいただく基礎研修会ですが、岡山大学医師会枠を若干名設けておりますので、ご活用ください。

今後ともご支援いただきますようお願いいたします。

(鈴木 記)

## 公衆衛生学

令和3年9月～令和4年3月の教育活動としては、9月に4年次生を対象とした公衆衛生学の講義・実習、大学院生（博士・修士・MPH）を対象とした臨床研究・予防医学実践論の講義、9-12月に3年次生を対象とした医学研究インターンシップ、1-2月に大学院生（修士・MPH）を対象とした公衆衛生学概論の講義等を行いました。いずれもCOVID-19流行下における実施であったため、一部を除きオンライン中心の講義・実習となりました。

令和3年9月～令和4年3月の研究活動としては、11月開催の血圧管理研究会では絹田助教が、12月開催の日本公衆衛生学会総会とアルコール・薬物依存関連学会合同学術総会では神田教授と久松准教授が、1月開催の日本疫学会学術総会では福田助教と絹田助教が、それぞれ学会発表しました。

現在行われている研究としては、神田教授が研究代表を務める「高校生eスポーツアスリートにおける心身の健康実態の解明」（基盤研究C）、「地域住民における測定値自動送信技術を用いた家庭血圧管理状況と血圧変動要因に関する探索的研究」（オムロンヘルスケア株式会社との共同研究）、地域住民における飲酒状況と家庭血圧の両変動およびその関連要因に関する研究（お酒の科学財団公衆衛生学領域助成）、久松准教授が研究代表を務める「家庭血圧の長期縦断研究からみた血圧変動の共振現象及び無症候性脳血管障害との関連」（基盤研究C）、福田助教が研究代表を務める「地域保健活動はどのように住民の健康に寄与したのか？ - 島根モデルの歴史の変遷を例に」（若手研究）などがあります。

現在、博士課程に4名、修士課程に1名、それぞれ大学院生が所属しており、ますます活発な研究教育活動を続けています。

(久松 記)

## 免疫学

研究面では9月30～10月2日に開催された、第80回日本癌学会学術総会（横浜）で西田がポスター発表を行いました。11月19～20日に開催された第15回日本臨床ストレス応答学会大会（大阪）で西田が口頭発表を行いました。また、12月8～10日に開催された日本免疫学学術集会（奈良）で工藤と徳増が

オンラインによるポスター発表を行いました。

人事面では、前任の中山教授の着任前から長きにわたり勤めてこられました、事務補佐員の水内純子さんが2022年3月31日で契約期間終了により退職いたします。多岐にわたる事務処理をこれまで支えてくださいました。この場を借りて、今後の益々のご活躍をお祈り申し上げます。

教育面では、11月18日の大学院講義に慶應義塾大学の曾我朋義先生をお招きし「がん代謝」という題目でご講演いただきました。旧生化学棟講堂での現地開催とオンライン配信のハイブリッド形式で開催し、COVID-19の感染対策をしながらも、多くの方々に参加していただきました。医学科2年生の1～2月の基礎免疫学は、外部講師の先生方も含め、今年度もオンラインでの講義を行いました。学生達はオンライン授業にも慣れてきているようですが、通学できないことへのストレスを感じる人も少なからずいるようです。来年度の医学科3年生の寄生虫学は5月開講ですが、そのころにはCOVID-19の感染状況が落ち着くことを願うばかりです。

(工藤 記)

## 法医学

法医学実務面では、令和3年の1年間の剖検数は173体となり、一昨年よりも取り扱い数は増加しました。今年に入ってから1月末までの剖検数は18体となっており、昨年よりやや多くなっています。

人事面では2月1日より非常勤研究員であった山崎雪恵が助教となりました。竹居大学院生は4月1日から香川大学医学部法医学の助教として着任予定です。教室内では、第六管区海上保安部の研修生（医学部研究生）として昨年9月1日から、近藤卓さんを受け入れました。研修期間は本年3月末までとなっており、法医解剖補助などに取り組んでいます。また昨年11月には検視官講習（検視官や検視官補になるために警察大学校が行う講習の一環、法医解剖や解剖関連検査等の実地研修）として、岡山県警察からの1名を受け入れました。

学術面では、昨年の6月に開催予定であった第105次日本法医学会学術全国集会是9月に延期となり、大学院生の小林、竹居が発表を行いました。また、10月には第38回日本法医学会学術中四国地方集学会が、現地（出雲）とWebのハイブリッドで開催され、谷口助教、竹居大学院生が発表を行いました。

教育面では、法医学講義は対面授業（一部特別講義はオンライン）で行い、法医学実習は2年続けてのオンラインでの実習となりました。昨年の10月から12月にかけて、医学教育インターンシップの3年生2名を受け入れ、本年1月から7期にわたって6年生の選択制臨床実習で各期2名ずつが実習を行っています。

末筆になりましたが、同窓の先生方のご健勝をお祈り申し上げます。

(山崎 記)

## 分子腫瘍学

今期の人事としては、堺明子助教が3月31日付けで早期退職いたしました。また、保田雪子が今年度で客員研究員を退職す

ることになりました。今後のご活躍を祈念しております。

教育面では、9月の約1ヶ月間、6人の学生グループが、「Fragile X syndrome」をテーマ疾患とした基礎病態演習のオンラインセッションで知識を深め、分かり易い発表にこぎつけることができました。また、10月から12月にかけては、医学研究インターンシップ（MRI）として3名の学生（石原、大下、向井）を受け入れ、大内田守准教授と伊藤佐智夫助教が、研究の基礎を指導しました。実習中、学生たちはそれぞれに実験のリアルに直面し、思ったようにはいかないときの困難と成功時の手応えを感じ取ったようです。この時期に対面での実験指導が可能となったのは、新型コロナデルタ株の第5波が急速に終息し、年初からの第6波オミクロン株が出現するまでのちょうど谷間であったためであり、幸運でした。

なお、昨年度のMRIを契機として医学科4年生の2人（西村、山辻）が研究室に加わり、自主活動として実験や英文論文抄読を熱心におこなっています。自ら希望して研究活動をおこなう姿勢は頼もしく、これからの成長が楽しみです。

（堺、實盛 記）

## 腫瘍微小環境学

2021年4月より新たに腫瘍微小環境学分野としてスタートしてもう1年経ちました。臨床の先生方のサポートもありまして、この1年で大学院生が6名加わり、この場を借りて深く御礼申し上げます。また新年度4月より新たなメンバーも加わり、ますます賑やかになる予定です。

ヒトやマウスの検体、中でも腫瘍微小環境を1細胞レベルで解析するために、16色のフローサイトメトリーを導入しました。また他のラボの先生方とも共同でシングルセルシーケンスの機器10Xや3Dバイオプリンターも導入しています。また、多重免疫染色機器CODEXも使えるようになり、大変ありがたい環境です。さらに、シーケンス含め膨大なデータを解析するにあたって、ラボに高性能PCを揃え、スパコンの契約も行い、データ解析環境も整えつつあります。特に本邦はデータ解析の面で極めて遅れており、データは出たけど解析が追いつかないという理由で論文化が半年以上遅れ、雑誌のランクを下げざるを得なくなった経験を私自身しております、もっと危機意識を持って取り組むべき課題と考えております。

新たにAMEDや民間財団等に複数採択され、複数の企業とも共同研究を開始しました。成果としては、腫瘍微小環境のクロン進展に関するシングルセルシーケンスの論文とがん免疫療法の耐性に関する論文がそれぞれCell RepとJ Immunother Cancerにそれぞれアクセプトされました。また私自身が前のラボで取り組んでいた制御性T細胞と代謝の研究がCancer Cellにアクセプトされ、少し肩の荷が下りた思いです。それらの続きで行っていた研究も複数既に投稿中で、岡山に着任してからの研究もいくつかはデータも揃いつつあり近いうちに投稿予定です。

まだスタートしたてのラボですが、我々の研究に興味がございますら是非お声掛けください（ytogashi@okayama-u.ac.jp）。今後とも皆様の温かいご支援並びにご指導ご鞭撻のほ

ど、どうぞよろしく願い申し上げます。（富樫 記）

## 細胞生物学

[人事]修士課程1年生の吉澤智香子さんが2021年11月から4ヶ月間、フランスのSorbonne大学へ短期留学を行いました。修士2年生の山川敦子さん、米田晴香さんが修士論文発表を行いました。

[受賞、研究資金の獲得状況] 友信奈保子特任助教が日本組織培養学会第93回大会で奨励賞を受賞し、両備てい園記念財団2021年度研究助成と岡山医学振興会2021年度研究助成金に採択されました。また、木下理恵助教と友信奈保子特任助教が岡山大学の令和3年度男女共同参画室助教員支援助成金に採択されました。この他にも、博士課程1年生の合原勇馬さんが岡山大学で新しく創設した博士学生向け研究支援事業である令和3年度OUフェロシップ研究費に採択され、山本健一助教が岡山大学の令和3年度医歯薬学総合研究科教育功労賞を学務課修士学生募集・就職支援推進部会の一員として受賞しました。

新型コロナウイルス変異株の出現等により不自由な生活が続いていますが、皆様も体調をお崩しにならないようどうぞ自愛ください。

今後とも教室員一同よろしく願いいたします。（山本 記）

## 細胞化学

当分野では、Photodynamic therapy (PDT) によるがん治療の基礎研究、ABCトランスポーター発現と細胞機能変化の解析、動脈硬化の発症機序解明と分子イメージング技術（体内診断法）の確立、がんの新規画像診断・治療法（Theranostics）の確立、酸化脂質を中心とするメタボロミクス研究、低酸素により誘導される細胞外マトリックス分解酵素であるADAMTS1に関する研究が、次世代がん医療創生研究事業（AMED）、特別電源所在県科学技術振興事業（岡山県）、科研費などの公的資金によって実施されています。これらの研究については、細胞化学、中性子医療研究センター、産学官連携センターの研究スタッフ、インドネシア留学生（博士課程）、工学部、薬学部などの学内研究者、京都大学の共同研究者が従事しています。

学術関係では、留学生のAbdul Basith Fithroni君とYanshuo Zhang君がオンラインでの審査を経て、修士課程を修了しました。

人事関係では、助教の稲垣純子先生が3月末で退職されました。長年のお勤め、本当にお疲れ様でした。

教育関係では、医学研究インターンシップで、齋君、高橋君、奥村さんが当教室の配属となり、3ヶ月にわたりそれぞれの課題に取り組み、研究の一端を体験してもらいました。1年生対象の生化学では、脂質の講義と実習を担当しました。脂質実習では、初回は対面で実施されましたが、オミクロン株による感染拡大により2回目からオンライン授業となりました。授業の実施体制が急に変更となり、その準備に追われました。新型コロナウイルス感染症が早期に収束に向かうことを願うばかりです。

(小淵 記)

## 消化器・肝臓内科学

新型コロナウイルス感染症は引き続き猛威を振り回し続けており、昨年5月から始まった内科輪番制による新型コロナウイルス感染患者の診療に加え、県内の救急医療の逼迫のため救急患者様の受け入れ要請が激増する中、侵襲的検査処置を行う内科として、感染対策を適切に行ったうえで、安全、安心をスローガンに岡田裕之教授以下、医局員一丸となり診療、研究、教育に従事しています。

スタッフ人事面と致しましては昨年10月に消化管内視鏡診療と総合内科診療の二刀流で活躍した安部真（H20）が広島市立市民病院へ赴任し、後任として山崎辰洋（H19）が助教に就任しました。また本年1月には井口俊博（H18）が半年間の三朝地域医療支援寄付講座での勤務を終了し、消化器内科助教として診療及び研究に復帰しております。

一方、大学院生、医員の人事面では昨年10月大腸内視鏡診療を中心に活躍した大森正泰（H23）が津山中央病院へ赴任となり、入れ替わりに高原政宏（H16）が帰局し、診療及び研究に従事しているほか、平田翔一郎（H27）が津山中央病院から、本年1月より佐藤亮介（H26）が倉敷中央病院より帰局し、病棟医として消化器内科の高みを目指すべく日々研鑽を積んでおります。また9月で病棟医を終了した稲生祥子（H23）、豊澤淳希（H26）は消化管グループに配属となり、診療及び研究に従事しております。

本年3月を持ち、岡田裕之教授は定年退官を迎えられます。平成6年に当時助手として帰局されて以来約30年の長きにわたり教室はもとより岡山大学病院の発展に多大な功績を残されたことは申すまでもなく、大黒柱を失う来年度は教室にとりまして大きな転換期を迎える一年になると存じますが、消化器内科の発展のために医局員全員で精進し、同窓の皆様にご協力いただけるよう努力致しますので、引き続き御指導・御鞭撻の程よろしくお祈り申し上げます。（川野 記）

## 血液・腫瘍・呼吸器内科学

岡山大学同窓の先生方におかれましては、平素から多大なご支援をいただき御礼申し上げます。当教室の現況の報告をさせていただきます。

前田嘉信教授は、2021年4月より岡山大学病院長として、診療、研究、教育のすべての分野で日本をリードする病院を目指して活動を継続しております。「高度な医療をやさしく提供し、優れた医療人材を育て、社会・地域の持続的な健康増進に貢献します」という理念は、コロナ禍の中においても揺ぎなく実践しておりますが、これも各診療科、同窓の先生方と長い時間をかけて築き上げた医療体制のベースがあるからこそ可能となるものであり、深く感謝申し上げます。

教室行事といたしましては、2021年11月27日に同門会総会・開講記念講演会をハイブリッド形式で開催しました。開講記念講演会では、消化器・肝臓内科学の岡田裕之教授より「消化器

内視鏡診療の進歩」というタイトルでご講演を賜りました。コロナ禍の中、会場の人数制限を行い、多くの先生方と直接お会いすることが叶わない中でも、海外留学中の先生とWebで繋がってプレゼンテーションを聞くことができるなど、新たな良い面もございました。

診療においては、引き続き治験、臨床試験、新規治療に積極的に取り組んでおります。これらのアクティビティが評価され、Newsweek誌のWorld's Best Specialized Hospitals 2022においてTop 200 Hospitalsに2年連続で選出されました。これも同窓の先生方をはじめとする多くの先生方によるご尽力の賜物であり、重ねてお礼申し上げます。

教室の実務体制は、医局長 西森久和、外来医長 大橋圭明、病棟医長 肥後寿夫（西8階）・藤原英晃（西3階BCR）、教育医長 浅田騰が担当しております。血液・腫瘍内科の医員は植田裕子、松村彰文、村上裕之、守山喬史、そして2021年12月から松原千哲が加わりました。呼吸器・アレルギー内科の医員は、太田萌子、栗林忠弘、下西惇、田岡征高、西村智香、藤岡佑輔、松浦宏昌です。

最後になりましたが、引き続き「患者さんのために、医学のために、社会のために」教室員一丸となって診療、研究、教育に取り組んで参りますので、何卒ご支援、ご指導の程よろしくお祈り申し上げますと共に、同窓の先生方のご健勝をお祈り申し上げます。（西森 記）

## 腎・免疫・内分泌代謝内科学

和田淳教授は、教育・臨床・研究・学会活動をはじめ、広く精力的に活動を行っております。

当科は、基礎研究、臨床研究問わず、幅広く研究活動を行っています。和田教授が研究代表者である「尿レクチンアレイ解析を用いた腎疾患診断キットの開発」（令和2-4年度AMED難治性疾患実用化研究事業）で体外診断薬の開発を目指しております。また8つのAMED研究の分担研究者として研究を推進しています。

令和3年11月に、中司敦子先生がこれまでの学術研究の成果に対して岡山市文化奨励賞（学術部門）を受賞いたしました。また、松本佳則先生が日本骨代謝学会研究奨励賞、日本骨粗鬆症学会研究奨励賞、中山人間科学振興財団中山賞奨励賞を受賞されました。昨年度もCOVID-19の影響で多くの学会が中止もしくはオンライン開催となりましたが、教室員は大変活発に学会発表を行っており、伊藤慶彦先生・大井祐貴子先生が第22回日本内分泌学会中国支部学術集会若手研究奨励賞：Young Investigator Awardを受賞しました。また、黒岡直子先生が日本糖尿病学会中国四国地方会第59回総会若手研究奨励賞（YIA）を受賞しました。

人事面では、令和4年2月に、福島和彦先生が米国Massachusetts General Hospitalに留学されました。ご活躍を祈念しております。

最後になりましたが、同門の諸先生方の御健康と、益々のご繁栄を心よりお祈り申し上げます。（田邊 記）

## 精神神経病態学

コロナ禍の中、令和3年12月の同門会はハイブリッド形式で行われました。まず、5演題の一般口演を皮切りに、3人の先生方が受賞講演をされました。毎年当教室では、当該年度に優秀な論文を発表し学術的業績を上げた先生にPapers of the year賞を、研究分野で大きな成果を上げた先生に大月賞（研究賞）を、教育に大きく貢献した先生に教育賞を、それぞれ授与しています。今回、岡山県精神科医療センターの矢田勇慈先生がPapers of the year賞を、岡山大学の寺田整司先生が大月賞を、青山病院の横山茂生先生が教育賞をそれぞれ受賞され、各先生方が成果などについて発表されました。特別講演では、岡山大学大学院の塚本千秋先生がプロローグをお務めになり、構築診療所の山本昌知先生が「私の臨床経験から 次世代に伝えたいこと」というテーマで発表されました。山本先生は、青山病院や県立病院などでの実践を経て、「こらーる岡山」を開設するに至った経緯やその思いなどについて熱く話され、聴講者を強く惹きつける印象深いご講演でした。同門会当日は、第5波の収束で感染状況が落ち着いていたこともあり、Web参加65名に対して現地参加が120名と、近年稀に見る盛況でした。これは、各先生方の素晴らしいご発表によるものであることはもちろん、久しぶりの対面交流を求めて参加された方も多く、face to faceによるコミュニケーションの大切さを再認識しました。

最後になりましたが、平成27年から当教室の教授を務められ、個々の多様性を尊重されながら教室内外に強いリーダーシップを発揮してこられた山田了士教授が、令和4年3月をもって退任されます。山田教授におかれましては、この場をお借りして深く感謝申し上げます。本当にありがとうございました。引き続き、諸先生方にご指導いただきながら教室運営をすすめていく所存ですので、どうぞ宜しくお願いいたします。

(井上 記)

## 小児医科学

岡山大学大学院小児医科学教室と岡山大学病院小児科の現況を報告させていただきます。診療では「小児医療センター」を基盤として最重症児への高度医療を提供しています。当センターは小児科、小児外科、小児神経科、小児循環器科、小児血液・腫瘍科、小児歯科、小児麻酔科、小児放射線科、小児心臓血管外科、小児心身医療科が中心になり、院内の多くの診療科・診療部門との横の連携を発展させています。

産科婦人科学の増山教授のご指導のもと「周産母子センター」と連携して、吉本順子、鷲尾洋介が中心になってNICU患者の診療にあたっています。広島県と福山市による寄付講座である「小児急性疾患学講座」では、広島県福山市とその周辺地域の医療保健を池田政憲特任教授、鷲尾洋介、津下充らが支援・強化しています。

馬場健児が医局長、栄徳隆裕が病棟医長、藤井智香子が外来医長、吉本順子が教育医長を務めています。COVID-19の大流行による様々な制約の中で、各医局員が一丸となって任務を果たしています。

研究面では、各診療グループが高いレベルの成果を挙げています。中国四国の連携施設と協力しながら、小児科同門会として1～2週に1報のペースで英文論文が出されています。最近、トップジャーナルに数多くの成果を出せるようになりました。海外留学としては、カナダのThe Hospital for Sick Children（トロント）、スウェーデンのKarolinska Institute（ストックホルム）などで臨床や基礎の研究が行われています。

現在、岡山大学小児科の医局員は、出産や育児などで一時仕事を中断している方も含めて約40名です。当小児科への「入局者」は毎年コンスタントに6～10名（約半数が女性）ですが、こちらの数字は国内有数です。毎年、岡山大学病院プログラムにて小児科専門研修を開始する方は5名前後、岡山大学大学院（小児医療関連）に入学する方、卒業する方はそれぞれ5名前後です。

中国四国の中核的な総合病院の多くは岡山大学病院の連携施設ですが、それらの病院の部長・副部長の小児科医師、それぞれ約20名、約10名が臨床教授、臨床准教授として、当院の豊かな教育環境をさらに充実させてくださっています。

(塚原 記)

## 発達神経病態学

小林勝弘教授以下、秋山倫之准教授（てんかんセンター副センター長、医局長）、秋山麻里助教（教育医長）、柴田敬助教（外来医長）、土屋弘樹助教（病棟医長）の体制で、教室運営を行っております。医局人事に関しては、前回以降特に変化はございません。

診療については、新型コロナウイルス感染症の流行が続いていますが、外来患者数（新患含む）は回復傾向です。ここ数年間の取り組みとして、院内の患者総合支援センターに協力いただき、成人患者の成人診療科への移行（転科・転院）を進めております。入院に関しては、基礎疾患検索、てんかん外科手術の適応検討目的の入院は多く、入院待機患者も多い状況です。同門の先生方には、治療入院も視野にいられたご紹介を是非ともお願いいたく存じます。他診療科との連携体制（小児医療センター、てんかんセンター、結節性硬化症ボード）には大きな変更なく診療を継続しております。また、臨床遺伝子診療科と協力し、小児遺伝外来の体制を整えている最中です。

学会活動は、皆様ご存じのとおりオンライン開催が主体です。この中、2021年10月に開催されたInfantile seizure societyの年次集会で、丸金拓蔵が、Research Awardを受賞しました。また、日本てんかん学会（演者：秋山倫之、柴田敬）、日本臨床神経生理学会（演者：土屋弘樹）、日本てんかん学会中国四国地方会（演者：竹中暁）、中国四国点頭てんかん研究会（演者：禪正和真）で、発表を行いました。また、来年は小林勝弘教授を会長として日本小児神経学会学術集会を開催予定であり、同門の先生方からのご支援を賜りたく存じます。

研究面では、てんかんや神経生理学、代謝物質分析等に関する臨床研究を続けております。11月にコンパクトながら質量分析計を導入し、研究内容の拡大を目指しております。限局性皮質異形成II型による難治てんかんに対する長期継続投与の特定



臨床研究は現在も継続しております。

今後とも同門の諸先生方のご指導・ご鞭撻をよろしくお願ひ申し上げます。(秋山 記)

## 消化器外科学

令和3年9月～令和4年3月の教室だよりをお届けします。

10月3日(日)に、第87回岡山大学医学部第一外科教室開講記念会を完全Web形式にて開催いたしました。特別講演には教室出身の厚生労働省健康局健康課予防接種室 室長補佐の九十九悠太先生に「新型コロナワクチンについて」のテーマでご講演いただき、257名の先生方がオンラインにてご参加下さいました。ご参加いただきました先生方、誠に有難うございました。

令和4年1月23日(日)には、岡山大学関連の消化器外科医が一堂に会する第10回消化器外科フォーラムを、完全Web形式で開催し、多くの先生方にご参加いただきました。皆様からいただきましたご支援・ご協力に厚く御礼申し上げます。

人事面では、10月より吉田龍一が肝・胆・膵外科講師に、藤智和が低侵襲治療センター助教に昇任しました。矢野修也は川崎医科大学へ異動し、病棟勤務を終えた渡邊日向子は高知医療センターへ、高橋利明は松田病院、永久成一は寺田病院、成田周平は渡辺胃腸科外科病院、野木祥平はおおもと病院、三宅英輝は金田病院へ赴任しました。研究を終えた梶原義典は鳥取市立病院、小林照貴は倉敷成人病センター、吉本匡志は広島市立広島市民病院へ赴任し、高橋一剛、橋本将志は病棟勤務となりました。臨床研修を終えた陶守貫人、竹田泰茂、および岡山大学広域外科専門研修プログラム専攻医の籠浦正彬、門脇大輔、中村峻輔、柚木宏介は消化管外科・肝胆膵外科にて日夜奮闘しています。松本 聖、金平典之、八木朝彦、吉田有佑は病棟勤務を終え、大学院生として研究生活に入りました。1月より、谷本光隆が順天堂大学へ国内留学しました。

研究・学会活動では、令和3年10月9日(土)には第20回EGI外科治療研究会を完全Web形式にて開催致しました。特別講演には東京医科歯科大学 消化管外科学分野 教授 絹笠祐介先生に「局所進行直腸癌に対する手術手技」とのテーマでご講演いただきました。当日は160名を超える先生方にご参加いただき盛会に開催することができました。

多忙な藤原俊義教授のもと、教室員一同団結し、臨床・研究・教育にお一層努力していく所存です。今後とも教室の運営にご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げますとともに、同門の先生方のご健勝をご繁栄をお祈りいたします。

(黒田 記)

## 呼吸器・乳腺内分泌外科学

2021年9月からの教室だよりをご報告いたします。第5波の終了からオミクロンによる第6波まで気の抜けない中ではございますが豊岡伸一教授・医学部長のもと一貫して「真摯・利他・向上」の精神を胸に臨床・研究・教育に励んでおります。第5波がちょうど終わったころの11月21日、嚴重な感染症対策を行

いながら同門会をハイブリッド形式で開催いたしました。以前のように、会食を行うことは叶いませんでしたがわずかな時間でも同門の皆様にお会いしお話を伺うことができたことは医局員一同、その後の診療の励みとなっております。臨床面では、2021年は手術数に関して呼吸器外科、乳腺内分泌外科ともコロナ以前の水準に戻りつつあり、また、肺移植も院内の関係診療科・部門のご協力をいただきながら順調に実施しております。

慶事といたしまして、この度平成人准教授が川崎医科大学乳腺甲状腺外科学講座の次期教授に選出され4月1日より就任することが決まりました。また、乳腺・内分泌外科診療とがんゲノム医療をご担当いただいている河内麻里子助教が、同じく4月1日より四国がんセンターに異動となります。その他人事面では岡崎幹生講師が准教授、山本寛齋助教が呼吸器外科講師の任を拝命しております。また、留学していた米国より橋本好平が帰局し、1月から呼吸器外科助教として着任いたしました。これらの若手スタッフで、医局全体を明るく活性化してまいります。また岡山広域外科プログラムの来年度の選考が行われ、26人の新たな外科医が岡山大学の関連病院で外科医として修練を始めることとなりました。温かくご指導賜りますようよろしくお願いいたします。

最後に、この度3月を持ちまして約30年にわたり呼吸器乳腺内分泌外科講座を大黒柱として支えていただいております土井原博義教授が退官を迎えることとなりました。当医局の多くの医師が土井原先生より手術室のみならず、学会や食事会でたくさんのご教授いただきました。今後は同門会長として引き続き後進のご指導を賜るとともに、川崎総合医療センターの特任教授として臨床も続けられます。

以上、ご報告とさせていただきます。今後とも教室の運営にお力添えのお願いとともに同門の先生方のご健勝をお祈り申し上げます。(枝園 記)

## 整形外科

令和3年9月から令和4年3月までの教室だよりをお届けします。

教室の行事としまして、12月2日3日に第32回日本小児整形外科学会学術集會を主催いたしました。岡山コンベンションセンターでの現地開催の予定でしたが、新型コロナウイルス感染拡大のため完全WEB開催となりました。尾崎敏文会長が座長を務め、本学会名誉会員で日本心身障害児協会 島田療育センターの高山真一郎先生による特別講演の他、旭川荘療育・医療センターの赤澤啓史先生による教育研修講演「岡山大学小児整形外科の伝統と継承」がありました。さらに海外からは4名の先生方による招待講演があり、国内だけでなく海外からも多くの先生方の参加を頂き、参加者579名の盛況な会となりました。

また、12月11日に岡山大学整形外科桃整会総会、桃整会学術講演会岡山運動器フォーラムを開催いたしました。大阪大学大学院医学系研究科器官制御外科学(整形外科)の岡田誠司教授による「整形外科医のサイエンス」の特別講演がありました。こちらも昨年同様、集合型WEB形式での講演でしたが、多数の参加がありました。

人事面では専門研修プログラムで4月より半年間研修しておりました篠原康太、安岐涼輔、長谷川翼、横田真二郎、尾上慶尚、小原利輝が10月よりそれぞれの病院に戻り、新たに大元文香、安藤輝彦、徳田貴大、日笠晋太郎、松本 慎、守屋真我が研修に励んでおります。

学術面では令和4年9月に大森敏規、杉生和久、横尾 賢、村岡聡介が学位を取得しました。

最後になりましたが、同門の諸先生方の益々のご健康とご活躍をお祈り申し上げます。(島村 記)

## 皮膚科学

2021年9月から学術面、人事面についてご報告いたします。

9月1日皮膚外科・皮膚感染症講演会にて『皮膚細菌感染症の治療戦略』の題目で山崎が講演しました。

9月12日日本皮膚科学会第232回熊本地方会学術講演会にて『当科における乾癬診療・研究とシムジアの位置付け』の題目で森実が講演しました。

9月16日備後皮膚疾患勉強会にて『当院における乾癬診療2021』の題目で森実が講演しました。

9月16日Lilly Psoriasis Web Conferenceにて『乾癬治療におけるIL17製剤の意義、トルツ使用経験と好適患者像について』の題目で森実が講演しました。

9月18-19日第85回日本皮膚科学会東部支部学術大会にて『薬剤耐性と外用抗菌剤』『進行期メラノーマ診療』の題目で山崎が講演しました。また、『特異疹が緊満性水疱を呈したATLLの1例』の題目で妹尾が発表しました。

10月1日Rising SUN Academy in OKAYAMAにて『乾癬診療update2021～外用療法から生物学的製剤まで～』の題目で森実が講演しました。

10月2日第16回中国研究皮膚科セミナーにて『ストレスの悪性黒色腫に与える影響は副腎を介している』の題目で安富が発表しました。

10月12日World Arthritis Day 特別企画にて『皮膚科医が行うPsA診療』の題目で森実が講演しました。

10月13日かかりつけ医のための皮膚疾患セミナー～乾癬・アトピー性皮膚炎の病態・治療の最前線～にて『アトピー性皮膚炎の病態と治療法』の題目で野村が講演しました。

10月16日滋賀県アトピー性皮膚炎研究会にて『基礎研究の成果から考えるアトピー性皮膚炎診療』の題目で森実が講演しました。

10月23日中国乾癬バイオロジクスセミナーにて『尋常性乾癬の経過中に掌蹠膿疱症、関節症状を合併した症例』の題目で竹崎が発表しました。

10月30-31日日本皮膚科学会西部支部学術大会にて『間葉系悪性腫瘍』の題目で山崎が講演しました。また、浦上、瀧川、廣瀬、佐藤が発表し、佐藤の『進行期に血小板減少を伴った頭部血管肉腫の3例』は優秀演題賞を受賞しました。

11月10日リンヴォックアトピー性皮膚炎適応追加WEB講演会 in 岡山にて『アトピー性皮膚炎治療におけるJAK阻害薬の役割』の題目で森実が講演しました。

11月19日多摩川AD治療研究会にて『基礎研究の成果から考えるアトピー性皮膚炎診療』の題目で森実が講演しました。

人事面では、10月に妹尾が岡山済生会総合病院へ異動。また、2022年2月に山崎 修准教授(平成5年入局)が島根大学医学部皮膚科教授としてご栄転されました。29年間という永きにわたり岡山大学皮膚科学教室を支えて下さった山崎先生に改めて深く感謝申し上げますと共に、今後益々のご活躍とご健勝をお祈り申し上げます。

また、新年度は3名の新入局員(澤井、岡野、横溝)が決定しております。引き続きご指導・ご鞭撻の程、何卒宜しくお願い申し上げます。(平井 記)

## 泌尿器病態学

令和3年9月から令和4年3月までの教室だよりをお送りいたします。

那須保友教授は岡山大学理事(研究担当)・副学長を引き続き務めておりますが、渡邊豊彦准教授が10月より岡山大学学術研究院ヘルスシステム統合科学学域教授に就任いたしました。それに伴い荒木元朗講師・副診療科長が10月より診療科長に、11月より准教授に就任しております。医局長は令和3年7月まで和田講師が務めておりましたが、8月から島根大学医学部泌尿器科学講座の教授に着任したため、8月からは荒木元朗准教授、令和4年1月より枝村康平が就任しております。どうぞよろしくお願い致します。

外来医長は佐古智子助教が継続して務めていますが、病棟医長は令和4年1月より枝村から西村慎吾助教へ交代となりました。

人事面では10月より高本篤助教が福山市民病院へ、竹丸紘史が津山中央病院へ出向になりました。代わりに、ウィーン医科大学へ留学していた片山聡助教と津山中央病院から徳永素子が帰局し鋭意診療にあたっております。令和4年度は8名の新規入局者を予定していますが、開業、退職者もあり、相変わらず関連病院では人手不足が続いております。

学会活動ですが、12/7より開催された第109回日本泌尿器科学会総会は久しぶりの現地開催でしたが、丸山雄樹の発表した「リアルタイムイメージングを用いた腎虚血再灌流後生体マウス腎における好中球動態のタグラフィル投与による変化」が腎不全・腎移植ポスター部門で総会賞を受賞しました。また日本泌尿器科学会(JUA)と米国泌尿器科学会(AUA)の共同事業の一環として実施されるJUA/AUA Resident Programの2022年候補に関戸崇了が選ばれております。COVIDの拡大次第ですが、AUA総会にて特別に企画される教育コース等に参加予定です。

今後とも同窓の先生方におかれましては、御指導ならびに御支援くださいますようお願い申し上げます。(枝村 記)

## 眼科学

眼科医局の近況につきましてご報告をさせていただきます。新型コロナウイルス感染症への対応や、2022年秋からの稼働

を予定している、眼科新外来および外来手術センターの運営へ向けた準備に追われ、医局長としては緊張感のある日々が続いています。

主な学会等の発表や研究会の開催につきましては、2021年10月の第75回日本臨床眼科学会、11月の第60回日本網膜硝子体学会総会では森實教授をはじめ、多くの医局員が発表を行いました。学会や研究会を通じて臨床や研究に関わる有益な情報や新知見が得られたかと存じます。また11月には前年度に開催が叶わなかった、当講座の同門会を開催することができました。オンラインの開催は初めてのことで大きなトラブルなく執り行うことができ安堵しております。

大学病院での診療については、引き続き網膜硝子体、緑内障、斜視、白内障などの手術を必要とする患者様のご紹介をお受けしております。急患の受け入れも行っておりますが、病床の空き状況によっては受け入れが困難な場合もございますのでご一報いただけますと助かります。連絡先は、平日9:00-17:00までは、眼科医局 電話(086)235-7297、平日17:00以降および土日祝日は眼科病棟(西5階)電話(086)235-6708になります。よろしく願いいたします。

最後になりましたが、患者様をご紹介くださる先生方、関連病院や診療所の先生方にはこの場を借りてお礼を申し上げます。引き続きご指導ご鞭撻の程、何卒よろしく願い申し上げます。(塩出 記)

## 耳鼻咽喉・頭頸部外科学

耳鼻咽喉科教室現況をお知らせいたします。

学会関係ではCOVID-19の懸念もありますが、ハイブリット形式で開催され、日本口腔・咽頭科学会、日本頭頸部外科学会などで医局員が現地ならびにWebにて多数の演題発表をいたしました。

人事関係では9月より梶原壮平が福山市民病院へ異動、10月より直井勇人が姫路赤十字病院より帰局いたしました。

臨床面ではCOVID-19感染に際し、細心の注意を払いつつ外来・手術をおこなっております。今後とも同窓の諸先生がたのご支援をよろしくお願い申し上げます。(片岡 記)

## 放射線医学・放射線部

令和3年9月～令和4年3月における当教室の活動と現況についてご報告致します。

令和3年10月1日付けで、放射線医学准教授を務めておりました平木隆夫が教授に就任し、新体制での教室運営がスタートいたしました。平木教授就任にあたっては、同門・関連病院・他教室の先生方から多数の温かいお祝いのお言葉や祝花を頂き、誠にありがとうございました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。教室員一同気持ちを新たに日々の業務に取り組みしており、診療・研究・教育いずれの面においても教室活動は滞りなく順調に行われております。

また、この間の慶事といたしまして、放射線部准教授を務めておりました生口俊浩が、同じく10月1日付けで岡山大学学術

研究院保健学域教授に就任いたしました。

令和3年度の日本医学放射線学会認定専門医試験においては、5名の受験者全員が見事合格し、丸山、福間、松田、川田が放射線科専門医を、宗友が放射線診断専門医を取得いたしました。

令和3年10月には、当教室が当番校を務め第34回中国四国IVR研究会を開催いたしました。新型コロナウイルス感染症拡大の影響により1年延期した上でのWeb開催となりましたが、約170名と多数の参加を頂き盛会となりました。

学術面では、上記の中国四国IVR研究会の他、第34回日本放射線腫瘍学会、第135回日本医学放射線学会中国四国地方会等で教室・関連病院から多数の優れた演題発表がなされました。また、主要学術誌への英語論文発表も順調に積み重なっております。

以上、簡単ではございますが教室の近況をご報告させて頂きました。今年度こそはコロナ禍が収束し、同門・同窓の諸先生方とも直接お目にかかる機会が増えることを願っております。引き続き当教室に温かいご指導ご鞭撻を賜りますよう何卒よろしく願い申し上げます。(松井 記)

## 産科・婦人科学

増山 寿教授をはじめ教職員一同、臨床、研究、教育へと日々励んでおります。昨秋は当科主催の中四国産科婦人科学会をWebにて開催を始め、日本周産期・新生児医学会、日本産科婦人科内視鏡学会などの学会・研究会に教室から多数の演題を発表し、医局員一丸となって中国四国地方の産婦人科医療・医学の充実、発展につとめております。また増山教授は2025年春開催の第77回日本産科婦人科学会の学術集会長に選任され、岡山市で開催いたします。年に1度の産婦人科最大の学会であり、同窓会の先生方の御指導、御支援を賜りながら、しっかり準備を進めてまいります。どうか宜しく願いいたします。

続いて人事の御報告ですが、10月には兵庫がんセンターで勤務されていた長尾昌二先生が周産期医療学講座教授として就任され、福山市民病院の高原悦子が中国中央病院に異動となりました。岡山医療センターの岡本遼太、岩国医療センターの大羽輝、三豊総合病院の兼森雅敏、福山医療センターの白河伸介、福山市民病院の中村一仁が帰局、牛尾友紀と岡山済生会病院の假谷奈生子が聖マリア病院に異動し、長谷川徹先生は総合内科・総合診療科に転科しました。後期研修1年目の小川麻理子が香川労災病院、栗山千晶が福山医療センター、坂田周治郎が香川県立中央病院、澤井雄大が岡山済生会病院、篠崎真里奈が広島市立市民病院、谷岡桃子が岩国医療センター、西田康平が姫路赤十字病院、長谷井稜子が中国中央病院に異動となりました。後期研修2年目広島市立市民病院の大石恵一が福山市民病院、中国中央病院の川口優里香が岡山医療センター、岡山済生会病院の杉原花子が福山医療センター、福山医療センターの中藤光里が三豊総合病院、香川県立中央病院の谷 佳紀が中国中央病院に異動になりました。

なお2月時点の教室内役職は、医局長 中村圭一郎、外来医長 早田 桂、婦人科病棟医長 小川千加子、周産母子センター

産科部門長 衛藤英里子、教育医長 久保光太郎の体制となっております。

産婦人科医不足は本学の関連病院におきましても喫緊の課題で、同門のベテランの先生方には、定年後も嘱託医や非常勤医師という形で現役を続行いただき、厚く御礼申し上げます。2024年「医師の働き方改革」が開始され、「分娩施設の集約化」が必要であることは自明の理ですが、各病院の思惑もあり簡単には進まないことも予想され、行政を巻き込んだ働きかけが不可欠かと思えてやみません。今後とも同窓の先生方の御指導ならびに御支援の程よろしくお願い申し上げます。（中村 記）

## 麻酔・蘇生学・集中治療部・周術期管理センター

麻酔科が担う手術室、ICU診療におきましては、第6波の真っ只中で予測しきれない状況への対応を余儀なくされております。手術室ではこれまで同様にroom 5をコロナ専用とし、全身麻酔症例の術前PCR検査実施のままです。2022年に入りコロナ陽性妊婦の帝王切開術が4件あり、関係部署で振り返りを通して今後活かしていく予定です。東ICU/CCUは重症コロナ患者受け入れ病床として循環器内科、術後重症とのバランスをとりながら、また総4 ICUは術後患者、院内急変、院外からの重症受け入れなどコロナ患者以外の重症患者の診療に当たっています。術後患者のICU入室制限、それに伴うPACU業務と病棟業務へのタスクシフトが問題となり手術件数の制限を余儀なくされています。各診療科の方々にはご不便をおかけしておりますがご協力をお願い致します。

ペインクリニックは再診数を減らしながら、神経ブロックなど大学病院に特徴的な診療に力を入れていっております。

その他、RRS、鎮静管理、手術室外麻酔など院内活動にも積極的に協力させて頂いております。

人事異動としては、2022年4月から賀来隆治講師が三重大学大学院医学系研究科生命医学専攻臨床医学系講座（麻酔科学分野）の教授に就任致しました。教室としては大変喜ばしいことで今後のご活躍を願うばかりです。

関連病院では定年を迎えられる先生方が多く、部長交代に伴い次世代へ移行しつつあります。若手医師のリクルート、教育にも更に力を入れて参ります。

今後とも各診療科の先生方をはじめ、看護師、コメディカルスタッフの皆様のご支援を宜しく申し上げます。

（清水 記）

## 脳神経外科学

感染性コロナウイルス蔓延の複数回のピークを経験しワクチン接種の普及ならびに治療薬開発が行われる中、まだまだ不安定な社会情勢ではありますが我々は脳神経外科医として粛々と日常診療を行っております。

人事関連では、まず新入局者ですが、多田悠馬先生（川崎医科大学附属病院勤務）、高越寛之先生（岡山市立市民病院勤務）が入局されました。異動・昇任につきましては令和3年8月から令和4年1月の間について記します。令和3年8月には小野

田恵介先生が帝京大学医学部附属病院から国際医療福祉大学成田病院勤務、小橋藍子先生が高度救命救急センターより病棟勤務、矢野昭正先生が沖縄県立中部病院退職後、読谷紅いもクリニックを開業しました。令和3年10月には田宮隆先生が香川大学医学部附属病院から香川県厚生農業協同組合連合会勤務、河田幸波先生が岡山旭東病院から大西脳神経外科病院勤務、松田勇輝先生が岡山大学病院から市立三次中央病院勤務、富田祐介先生が米国ノースウェスタン大学から帰国後、広島市立市民病院勤務となりました。令和3年12月には畝田篤仁先生が岡山大学病院から国立がん研究センター研究所脳腫瘍連携研究分野勤務、村井智先生が岡山大学病院から岩国医療センター勤務、富田陽介先生が岡山大学病院から岡山労災病院勤務、河内哲先生、坪井伸成先生、細本翔先生が大学研究室から岡山大学病院勤務となりました。令和4年1月には半田明先生が倉敷中央病院から岡山旭東病院勤務、眞鍋博明先生が交野病院から石川病院勤務となりました。

教室の役職は、医局長は菱川朋人が、外来医長は藤井謙太郎が、病棟医長は平松匡文が、教育医長・教育企画委員は春間純が務めました。

以上、簡単ですが、教室の近況を報告致しました。

末筆となりましたが、同窓の諸先生方の益々の御健康と御活躍をお祈り申し上げます。（菱川 記）

## 総合内科学

大塚文男教授は、引き続き「全人的医療のできる総合内科医の育成と大学院教育の両立」に取り組みます。令和3年度から総務・運営企画担当から企画/広報・SDGs担当の副病院長を拝命し、本院全体の改善・改革や広報活動に尽力しています。

教室の動きです。臨床面では、引き続き長谷川病棟医長・小比賀外来医長を中心に、各診療科や地域医療機関と連携を取りながら診療を進めています。病棟では、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の第5波を乗り越えましたが、令和4年に入るや否や始まった第6波を迎え、診療科一丸となって対応しています。一部、通常診療の制限がかかっていますが、周辺地域から紹介いただく難治例の診療も引き続き精力的に行ってまいります。令和3年1月から始まったポリファーマシー・カンファレンスは、工夫をしながら継続しています。外来は、徳増助教を中心とした「不明熱外来」、植田教授を中心とした「漢方臨床教育センター」、片岡教授を中心とした「女性ヘルスケア外来（内科）」、萩谷による「渡航ワクチン外来」は継続しています。新型コロナウイルス感染症関連として、社会的にも注目されている「コロナ・アフターケア外来」（新型コロナウイルス感染症罹患後の長期後遺症に悩む患者さまを対象とした専門外来）、「ワクチン副反応外来」（新型コロナウイルス感染症に対するワクチン接種後の副反応に悩む人への専門外来【岡山県からの委託】）も継続しています。この間、萩谷が感染症学会指導医・日本渡航医学会認定医療職、大塚文男教授が日本病院総合診療医学会指導医、片岡仁美教授が日本病院総合診療医学会指導医、三好智子准教授が日本病院総合診療医学会指導医、谷山真規子講師が日本心臓リハビリテーション学会指導士、小

比賀美香子講師が日本医学教育学会認定医学教育専門家、日本病院総合診療医学会指導医、長谷川功講師が日本病院総合診療医学会指導医、日本動脈硬化学会指導医、日本高血圧学会指導医、大村大輔助教が日本プライマリ・ケア連合学会家庭医療専門医、庵谷紘美助教が日本救急医学会専門医を取得しました。今後も地域医療現場の先生方・患者さまのニーズに応えるべく、大学病院の特徴と強みを活かした外来診療を発信して参ります。

教育面です。教育医長の谷山講師のもと、教育企画委員の徳増助教を中心に指導を行っています。昨年開講した総合診療医学（医学科4年次生）は今年も盛況で、総合診療領域のニーズの高さを改めて感じました。専門医制度関連では、当科では内科専攻医11名、総合診療専攻医3名が大学病院および連携施設で研修を行っています。

研究面です。リサーチ/ケースレポート・カンファレンスは引き続き定期開催し、大学院生の学位論文取得・英語論文執筆を目標に若手を中心に積極的に活動しています。COVID-19の影響でWEB開催が多かった学会活動ですが、次第に現地開催もされるようになり、第35回日本下垂体研究会学術集会（8月）、Association of Medical Education Europe 2021（8月）、第22回日本内分泌学会中国支部学術集会（9月）、日本哲学プラクティス学会第3回大会（9月）、第32回間脳・下垂体・副腎系研究会（9月）、第23回日本病院総合診療学会学術総会（9月）、第88回内分泌同好会（9月）、第8回日本糖尿病医療学学会（10月）、日本糖尿病学会第59回中国・四国地方会（10月）、第47回日本神経内分泌学会学術集会（10月）、第91回日本感染症学会西日本地方会学術集会（11月）、第64回日本甲状腺学会学術集会（11月）、第125回内科学会中国地方会（11月）、第31回臨床内分泌代謝Update（11月）、Primary Care Research Connect第3回年次集会（12月）、第26回日本生殖内分泌学会学術集会（1月）、第89回岡山内分泌同好会（2月）、第32回日本間脳下垂体腫瘍学会（2月）、第24回日本病院総合診療医学会学術総会（2月）と多くの学会・研究会で学術発表を継続しています。

受賞状況として、コロナ・アフターケア外来が病院長賞「楷の木賞」・SDGs推進表彰 President Award優秀賞を受賞しました。また、徳増一樹助教が第10回キャリアセンターMUSCAT優秀指導医賞を受賞しました。学会賞では、日本下垂体研究会：最優秀発表賞を副島佳晃先生・優秀発表賞を山本紘一郎先生が、日本生殖内分泌学会：若手学術奨励賞を中野靖浩助教が受賞しました。助成金獲得状況としては、萩谷准教授が第21回公益財団法人岡山医学振興会（研究部門）・令和3年度岡山大学次世代研究育成グループの研究費を獲得しています。小比賀講師は第21回公益財団法人岡山医学振興会（教育部門）の研究費を獲得しました。また、救急科のドクターカーのデザインとして、Faceチームに所属する本多寛之助教のデザインが採用されました。

人事面では、長谷川徹医師（10月：産婦人科より）および曾我圭司医師（1月）が医員、山崎辰洋医師が県南西部（笠岡）総合診療医学講座の助教（10月）、庵谷紘美医師が国際診療支援センターの助教に着任（12月）しました。また、大村大輔助教が1月に高齢者総合医療講座（三朝）の助教に異動となりま

した。

最後に海外活動として、西村義人医師は米国ハワイ、原田洸医師は米国ニューヨークにて臨床留学を継続しています。また萩谷はWHOの感染対策専門家派遣の枠組みで、COVID-19対策のために12月よりパプアニューギニアに短期出張しています。

引き続き、各診療科および地域の先生方にご協力頂きながら、地域・社会に貢献できる内科医・総合診療医育成を目指してまいります。今後とも、御指導・御鞭撻の程よろしく願いいたします。（萩谷 記）

## 循環器内科学

伊藤浩教授は臨床・教育・研究および学会活動を精力的に行っており、相変わらず多忙な毎日を過ごしております。

人事ですが、令和3年10月から水野智文・藤本竜平が津山中央病院に赴任致しました。また令和3年10月から江尻健太郎がJohns Hopkins Bloomberg School of Public Health（米国）へ留学致しました。新天地での活躍を期待しております。令和3年9月から上岡がCedars-Sinai Medical Center（米国）より帰局しました。同年10月から西本隆史が津山中央病院より帰局しました。現在病棟や研究を支えています。

学会・研究活動ですが、第25回日本心不全学会が伊藤教授を会長として開催されました。コロナ禍のため完全Webでの開催になりましたが、多くの先生方にご参加いただき感謝申し上げます。コロナ禍のため、各学会の開催方法が変更しておりますが研究活動は変わらず継続しております。日本循環器学会をはじめ欧州心臓病学会など、関連病院含め多数の演題が採択されております。市川啓史が令和3年度岡山県医師会学術賞を受賞しました。第119回日本循環器学会中国地方会で西原大裕がYIAを受賞しました。

最後に教室の実務ですが、医局長に吉田賢司、新病棟医長に高谷陽一、外来医長に三好亨、教育医長に戸田洋伸の体制で執り行っております。今後も、臨床・研究・教育に励み、やりがいのある楽しい医局を目指したいと思っておりますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。（吉田 記）

## 心臓血管外科学

2021年9月から2022年3月の教室の動きをご報告いたします。

2017年に笠原真悟医師が第3代教授に就任し、この8月で4年になりました。連携各科のご協力により、診療実績は毎年増加しております。この場をお借りして各部署様に感謝を申し上げますと存じます。人事面では、奥山倫弘医師が2021年9月よりUniversity of Kentuckyでの研究を終え帰局しました。奥山医師は今後、成人心臓外科・血管外科を専門とし、さらなる活躍が期待されます。また、山内悠輔医師が福山市民病院より、岸良匡医師は岡山赤十字病院から帰局しました。小川達也医師は、外科後期研修3年目のローテーションで大学にきました。これら4人の医師は教室の中でそれぞれ活躍してくれていま

す。

臨床面では、小児及び成人先天性心疾患部門は笠原真悟教授をはじめとして、黒子洋介医師、川畑拓也医師、小林純子医師、小谷恭弘の5名のスタッフで診療を行っています。廣田真規医師と衛藤弘城医師が担当する成人心臓外科領域では、今後も大学病院として経皮的動脈弁移植術（TAVI）などの低侵襲手術や、動脈疾患の緊急手術を積極的に行っていきたいと考えています。特に動脈疾患の県の拠点病院に指定され、24時間365日対応できる体制を取っています。引き続き関係各科の皆様にはご協力のほど、何卒宜しくお申し上げます。

研究面では、以前より行われてきた心臓移植をはじめ、単心室循環に対する補助循環・再生医療、医用工学を用いた新しい人工血管の開発など、6人の大学院生が積極的に活動しています。この3年間は文科省科研費、その他学外からの研究費も継続的に獲得しております。

現在、教室からは6人が海外で活躍しております。甲元拓志医師はMedical College of Wisconsin、本浄修己医師はThe Hospital for Sick Children, Torontoで、また大崎悟医師は、University of Madisonでスタッフとして10年以上にわたり活躍されています。また、石神修大医師はRoyal Children Hospital, Melbourneで、門脇幸子医師、小林泰幸医師はThe Hospital for Sick Children, Torontoで研鑽中であります。

藤井泰宏医師が2021年1月にAMEDに出向して1年が経ちました。本年12月までAMED勤務予定となっております。

2021年11月27日には笠原真悟教授が第119回日本循環器学会中国地方会を主催致しました。心臓リハビリテーション学会との共催や、研修医セッションをメインにしたオンサイト+Web配信など、従来とは異なる様式の学会となりましたが、循環器内科様はじめ関係の皆様のご協力も得て盛会のうちに終わりました。この場を借りてお礼を申し上げます。

今後とも教室の広範囲での活動に御理解と御支援を賜りますようお願い申し上げます。（小谷 記）

## 脳神経内科学

前任の阿部康二教授の退官後も、科長代理山下徹准教授は、引き続き世界へ発信しかつ世界をリードできるような、教育・臨床・研究の各分野での発展を目指して教室員の指導を行い、国内・国際的学術活動において活躍しています。さらに、複数の厚労省班会議の班員としての活動や山陽神経難病ネットワークや山陽脳卒中協議会などの社会的活動において中心的役割を果たしています。今後とも医局員一同、これまでの阿部教授の指導をもとに、それぞれが自ら進運を開拓すべく励む所存です。

人事面に関しては、令和3年4月に助教に就任した福井裕介が、ALSマウスへのMuse細胞移植やAsidan病遺伝子変異マウス作成など、基礎研究を精力的に進めています。松岡千加は広島市民病院、平祐貴は岡山大学病院総合内科において内科専攻医ローテート中です。スタッフ業務については、医局長は森原隆太が、教育医長は中野由美子が、病棟医長は柚木太淳が、外来医長は武本麻美がそれぞれ担当しています。

臨床面では、このコロナ禍にも関わらず病棟診療においては

年間入院患者数400名を超え、様々な神経内科疾患の診療を担当しています。一般外来および専門外来（認知症、脳卒中、パーキンソン、ALS、SCD/MSA、神経免疫疾患、ボトックス治療）のさらなる充実化を目指し、神経内科独自の外来検査を導入し、待ち時間の短縮と効率的な外来診療を目指して努力をしています。特に、患者数の増加が著しい認知症については、外来検査の結果を基に、簡易認知機能検査の開発や治療研究などを基礎研究と並行して推進しています。また、多くの神経難病ALS患者に対してedaravone療法に加え、Muse細胞静脈投与治療の治験を新たに開始するなど新しい治療法開発に積極的に取り組んでいます。このように多様な専門外来の評判を聞いて岡山県外からも多くの患者さんが受診しています。今後もALSや脳梗塞の病態解明や新規治療開発へ向けて更なる臨床研究を継続して行っていく予定です。

研究面では脳虚血グループ、変性疾患/認知症グループ共に多くの論文が出版され、国内・海外での学会発表も活発に行われました。ALSについては、2020年9月に岡山大学神経内科と東北大学の共同研究で、新しい幹細胞であるMuse細胞静注投与することでモデルマウスの治療効果を見出したことを発表し、国内外から注目を集めています。脳卒中については、超音波を用いた新しい脳血栓溶解療法を発表し、これを発展して新規治療法を開発すべく研究中です。今後とも何卒宜しくお申しします。（森原 記）

## 救命救急・災害医学

中尾篤典教授の着任から丸6年が経過しました。昨今のCOVID-19パンデミックの終息も見えず搬送困難となる症例も増加する中で、地域救急医療の最後の砦としての役割を果たすべく、令和3年8月からは病院一丸となって重症例に限らず積極的に救急患者を応需する方針となりました。つきましては、各専門診療科や地域の病院の先生方には初期診療および集中治療管理後の継続診療も含めまして多大なるご協力を賜っています。この場を借りて深謝申し上げます。

臨床面では関係各科と協力しながら重症COVID-19患者、多発外傷、院外心停止、重症小児、重症熱傷などを重点的に診療し、紹介を含め広く患者を受け入れています。また、重症例を数多く診療する中で終末期医療にも力を入れています。脳死とされうる状態と診断した場合には、臓器提供の対象にならない症例を除く全例に看取りの一つの形としての臓器提供のオプション提示を行っており、9月には日本移植学会からBest Donor Action Program Awardとして表彰されました。

行事については准教授の内藤が12月に日本熱傷学会中国四国地方会の大会長を務め、盛大に執り行われました。人事面では湯本が米国での2年間の研究留学を終え帰局しました。

研究面では症例報告から臨床研究に至るまで数多くの英語論文を発表することができ、大学院生の小原は令和3年度の岡山県医師会学術奨励賞を受賞しました。基礎研究も充実しておりフランスとの国際共同研究としてTransplantation誌への掲載も果たしています。また、内藤を中心とした複数の多施設研究も着々と進んでいます。

学生教育の面では、コロナ禍の診療にも向き合いながら、災害医療、救急車同乗実習、シミュレーターを用いたトレーニングなど幅広く救急医学の教育に取り組んでいます。

最後になりましたが、今後とも地域の救急医療の拠点としての役割を果たすべく、御指導・御鞭撻のほど何卒宜しくお願い申し上げます。(湯本哲 記)

## 形成再建外科学

2021年1月までの近況についてご報告いたします。

臨床におきましては2020年度に引き続きCOVID-19の影響により様々な活動が制限される1年でしたが、このような状況下におきましても頭頸部、乳房、四肢・躯幹部の悪性腫瘍切除後の再建治療や先天奇形、リンパ浮腫、ジェンダーなどの専門性の高い領域において安定した医療を提供できるよう精励して参りました。外来診療においては電話診療が軌道に乗りつつあり、今後進んでいくであろうオンライン化の流れに追従できるよう試行錯誤している所在でございます。

人事におきましては林昌伸先生が半年間性同一性障害の治療を学ばれ東北大学へ帰局されました。また、慶應義塾大学病院から国内留学に来られている渡部紫秀先生は引き続きジェンダーの診療に従事される予定です。大学院博士課程に濱田龍正が入学し、AIの研究を開始しました。新入局員につきましては4月より7人の新入局員を迎え入れる予定でございます。

学生教育ではデッサン教室や縫合実習をはじめとし、新たに形成外科についての座学の機会を設けました。学生からのフィードバック体制を整え、より良い学びの機会を提供できるよう取り組んでおります。

研究は軟骨や脂肪組織などの組織工学をベースとした再生医療の研究を続けております。また、獲得した大型研究費を有効活用し光学デバイスを用いた最先端研究を行っていた品岡玲助教が新たなリンパ浮腫の重症度分類についての論文を報告しScientific Reportsにアクセプトされるなど、成果も出つつあります。

2022年は10月に形成外科基礎学術集会を主催する予定であり、無事開催できるよう医局をあげて準備を行っているところでございます。ここ数年取り巻く社会環境が大きく変わってきておりますが、当教室も柔軟に対応できる間口の広い診療科を目指し引き続き研鑽を重ねて参ります。今後ともご指導ご支援のほどよろしくお願いたします。(濱田 記)

## 老年医学

老年医学分野の令和3年8月以降の近況をご報告させていただきます。

研究面では、国立研究開発法人日本原子力研究開発機構(JAEA)および岡山大学大学院保健学研究科との共同で、「極微量ウラン影響効果試験」を平成19(2007)年度から継続しています。本研究は、ラドンの影響効果の実験的検証(岡山大学成果)及び解析評価から得られるラドンの体内動態のメカニズム(JAEA成果)を双方の成果として得ることを目的としてい

ます。令和3(2021)年度、日本放射線影響学会第64回大会、日本原子力学会中国・四国支部第15回研究発表会でその成果を発表いたしました。

教育面では、高齢者の特性を踏まえた医療に関する最新の知識を学習し臨床・研究に生かすことを目的として平成29年度より開講した大学院博士課程選択プログラム「臨床老年医学特論」も5年目を迎えました。学部、大学院での講義を通じて老年医学の教育を行っております。

新型コロナウイルスの感染拡大は、研究、教育、診療に影響をきたしていますが、ITツールなどを駆使しながら、少しでも貢献できるよう努力する所存です。同窓の先生方におかれましては、今後ともご指導・ご鞭撻の程、何卒よろしくお願申し上げます。(光延 記)

## 臨床遺伝子医療学

臨床遺伝子医療学分野の2021年度下半期の活動報告をさせていただきます。

今期、遺伝外来では、小児遺伝外来、周産期遺伝外来を小児神経科、小児科、産婦人科の各専門診療科の皆様のご支援のもと開設しました。アレイCGH法による遺伝学的検査が保険適用検査となり、様々なニーズに遺伝子診療部門として幅広くお応えできる体制作りを進めています。遺伝性大腸癌外来、遺伝性難聴外来では、消化管外科、耳鼻咽喉科の皆様のご支援のもと運営し、長期的視点での遺伝医療の提供へ充実を図っています。遺伝性乳癌卵巣癌症候群(HBOC)診療では、引き続き乳腺・内分泌外科、婦人科、消化器内科、泌尿器科をはじめとする各専門診療科の皆様との連携で実践を重ねています。HBOC診療の一部保険取扱いの状況の改善に向け皆様とともに努力しています。指定難病や特定疾病への病院全体としての取組みに貢献すべく院内各診療科の皆様と連携して活動しています。がんゲノム医療外来とエキスパートパネルでは、院内外から多くのご紹介をいただき継続して実績を重ねています。

研究面では、多機関共同研究の中央西日本遺伝性腫瘍コホート研究の代表施設として研究体制の拡充とともに今期、UMINでの症例登録も開始しました。新たなエビデンスの構築に貢献する所存です。また多施設共同での遺伝性腫瘍エキスパートパネルを定期開催し、各施設で苦慮するケースの共有や相互のレベル向上を図っています。

教育面では、臨床遺伝専門医資格取得を希望される院内外の皆様に、全領域での遺伝医療陪席のご提供が可能となりました。

ゲノム医療のさらなる臨床実装や研究では、職種・診療科・部門横断的な取り組みが必須であり、多くの、広い分野にわたる専門家、多職種の方々の御指導や御協力を頂いております。この場をお借りして、心より御礼申し上げます。引き続き御指導御鞭撻の程、宜しくお願い申し上げます。(山本 記)

## 薬剤部

人事関係では、9月1日付で座間味義人教授・薬剤部長が徳島大学病院薬剤部より着任した。1月1日付で三浦加奈薬剤師

を採用した。一方、12月31日付けで椋田千晶薬剤師、高田文子技術補佐員、1月31日付けで牛尾聡一郎薬剤師、2月15日付けで山野上舞薬剤師、2月28日付けで上嶋仁美薬剤師、3月31日付けで鋒山香苗薬剤師が退職となった。1月31日付退職の牛尾聡一郎薬剤師は2月1日付で特別契約職員助教として採用され、今後は研究活動に専念し、精力的に研究を推進している。

業務関係ではなかなか落ち着きを見せないCOVID-19感染拡大に伴い、部員一同感染防止に努め、適宜対応している。地域連携の推進のため、地域保険薬局薬剤師の研修施設としても認可され、感染防止に注意しながら、学会認定研修2名、当院独自の研修カリキュラムによる1名の保険薬局薬剤師の研修を受け入れ、教育活動も積極的に行っている。

学会活動として、ARO協議会第8回学術集会、第16回日本禁煙科学学会学術総会、第36回日本環境感染症学会総会において業務成果および研究成果の発表を行った。第16回日本禁煙科学学会学術総会では廣江訓子薬剤師が優秀演題賞を受賞した。

学術論文として、2021年は英文原著論文に9報、和文原著4報の研究発表を行った。

教育関係では、薬学部5年次の長期実務実習が再開され、令和3年度第Ⅲ期(8月23日～11月5日)16名(岡山大学薬学部)、第Ⅳ期(11月22日～2月11日)14名(岡山大学9名、神戸学院大学2名、大阪薬科大学1名、神戸薬科大学1名、福山大学1名)を受け入れた。(鍛冶園 記)

## 自然生命科学研究支援センター光・放射線情報解析部門

自然生命科学研究支援センター光・放射線情報解析部門鹿田施設です。まず今期の活動ですが、今年度後期の全学新規教育訓練は11月8-10日と2月16-18日に実施しました。1月27日-2月20日の期間で岡山県にまん延防止等重点措置が発出され、本学の活動制限が強化されたことを受け当施設も来館者の健康確認(問診票)と職員の輪番制在宅勤務を行いました。

施設人事では今田技術職員が第一種放射線取扱主任者の資格を取得しましたので、当施設の放射線取扱主任者(副主任者)として選任させて頂きました。現在は花房准教授(専任主任者)、永松技術職員(副主任者)、今田技術職員(副主任者)の3人の主任者でRI管理を行っています。

さて、今回は当施設の沿革について書かせて頂きます。当施設は1993年に開設された岡山大学アイソトープ総合センターを前身としています。1998年に医学部RI研究センターを統合吸収した後、2003年に他の学内共同利用施設と統合して、自然生命科学研究支援センター光・放射線情報解析部門鹿田施設に改組されました。その後、2011年のおかやまメディカルイノベーションセンター(OMIC)分子イメージング部門の設置により、施設地下1階にサイクロトロン等の共同機器が導入されPET創薬研究を推進しています。さらに、2017年の中性子医療研究センターの設置により、当時の専任教員が移籍し、施設内に居室等を置いてBNCT研究を推進しています。近年、蛍光・化学発光ラベルの発達によりRI利用が全国的に減ってきており、鹿田地区では歯学部RI実験室が廃止されるなど、本学でも施設改廃計画が進んでいます。一方で、前述のPET創薬やBNCT研

究、さらに学外施設での放射線利用増加や、法改正によるRI利用の厳格化に対応するため、鹿田施設は放射線利用の中核施設としてこれからも皆さんのRI実験を支えていく所存です。

(寺東 記)

## 動物資源部門

動物資源部門鹿田施設では、飼育設備として令和3年度、マウス・ラット飼育用の一方向気流式セーフティーラック5台を3階マウス・ラット飼育区域に設置した。また、中型動物(イヌ・ブタ・ヤギ)用の飼育ケージを2台増設し、今後は津島南施設の中型動物飼育区域もあわせて活用することにより、長期飼育や複数頭の同時飼育に対応したいと考えている。施設整備としては、感染実験区域にケージ交換ステーションを設置した。その導入により、令和3年9月に飼育室に設置しケージ交換に使用していた安全キャビネットを実験室に移設することとなり、結果として感染実験区域・BSL2実験室の安全キャビネットが2台になった。ウサギ実験室には新たに手術台や、生体モニター、无影灯等を設置した。1階のサル飼育室は現在ブタの飼育室として運用しており、排気設備に光触媒脱臭装置を設置した。また、令和3年10月から11月にかけて利用者に対し実施したアンケート調査において要望があった、小型遠心機、小型振とう機、およびヘマトクリット管用遠心機をマウス・ラット実験室に整備した。

施設の教育活動では、令和3年12月に初心者向けマウス/ラット実技講習会の定期講習会を開催し、のべ24名の学内研究者の参加があった。また、国立大学法人動物実験施設協議会によるマウス・ラットの実験手技動画資料の制作企画において、令和3年11月に当施設にて撮影を実施した。(平山 記)

## 卒後臨床研修センター 医科研修部門

岡山大学医学部同窓会・鶴翔会の皆様、日頃より大変お世話になっております。2021年4月に入職した36名の新研修医は順調に研修を積み重ね、2年目研修医39名はもうすぐ2年間の研修を修了しようとしています。

10月23・24日には新型コロナウイルス感染対策を講じたうえで指導医講習会を開催し、22名の指導医にご参加いただきました。ご参加の指導医の皆様には、優れた臨床指導医をめざして講義の聴講のみならず活発に議論下さり、誠にありがとうございました。講習会の内容を現場での研修医指導の実践に少しでも役立てていただけますと幸いです。

今年度後半は、2年目のみならず1年目研修医もアカデミック活動に精力的に挑戦しました。8月の日本呼吸器学会中国・四国地方会では中惇太研修医および松本奨一郎研修医(2年目)がそれぞれ「初期研修医優秀演題賞」を、同月の日本下垂体研究会学術集会では副島佳晃研修医が「最優秀発表賞」を、10月の日本神経内分泌学会学術大会では上枝礼佳研修医が「優秀賞」を、11月の日本内科学会中国地方会では長田葉研修医および加藤篤之研修医が「Junior Resident Award」を、同月の日本消化器内視鏡学会中国支部例会では吉田遥研修医(2年目)が「研



修医奨励賞」を受賞しました。また山本幸近研修医（2年目）、中村薫研修医、二神花菜研修医の3名がCase Reportを執筆しました。ご指導いただきました指導医の先生方に厚く御礼を申し上げます。

今後もコロナウイルスのパンデミックによる状況を鑑みながら、オンサイト・オンライン両方式での病院見学に随時対応し、当院プログラムの3つの魅力である「①多数の協力型病院」との連携を通じた「②オーダーメイド研修」並びに当院の特色である「③科学の視点をもつ臨床医の育成」を全国の医学生に周知して参ります。引き続き、ご指導・ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い致します。（佐藤 記）

## 先端循環器治療学講座

先端循環器治療学講座は平成22年4月に開講し、循環器疾患の新しい診断、治療に関連する研究を行うことを目的として開講致しました。この春で12年目を迎え、次の五カ年の延長が決定致しました。スタッフは、森田（教授）、西井（准教授）で、2名と少人数でございますが、循環器内科とともに、研究・臨床に精力的に活動しております。研究では、重症不整脈、心臓突然死、遺伝性不整脈疾患、先天性心疾患に伴う不整脈、心臓植込型デバイスやその遠隔モニタリングに関連した研究を行っています。多施設研究として、岡大関連病院に参加していただき、共同研究やデバイス、不整脈の新たな研究も進めています。デバイス植込症例の増加とともに、日々の解析データが膨大となり、時間を要するようになっており、本学工学部の先生方とも協力し、AIを用いた自動解析の開発を行い、異常をより効率よく見いだす方法について検討を始めました。国内外の学会は、今年はCOVID-19の影響で延期、中止が相次ぎましたが、日本循環器学会、植込みデバイス関連冬期大会などのオンライン学会や研究会などで積極的に発表・討論を行っています。AIによる遠隔モニタリングデータの不整脈判読は2022年の日本循環器学会でFeatured Research Sessionに選出されています（西井）。また様々なデバイスレジストリーによる研究も着実に進んでいます。植込型デバイスの遠隔モニタリングは日常臨床でも活用し、デバイス障害、重症不整脈発生、心不全早期発見に役立て、早めの対処が可能となっています。研究・遠隔診療のデータ解析については循環器内科の川田先生、宮本先生、上岡先生、水野先生、増田先生、西本先生や小児科の栄徳先生など多くの先生方、メディカルスタッフの方々にもご協力頂いており、ここに感謝の意を表させていただきます。今後も臨床研究を進展させ、世界に向けエビデンスの発信を続けていく所存です。COVID-19の流行が早期にコントロールされ、臨床・研究などで多くの方々や直接ディスカッションし、協力できる日が来ることを祈念しております。今後とも、ますますのご指導のほどよろしくお願い申し上げます。（森田 記）

## CKD・CVD地域連携包括医療学講座

本講座は、2011（平成23）年11月に開講したCKD・CVD地域連携・心腎血管病態解析学講座の仕事を引き継ぎ発展させる

目的で、2016（平成28）年11月から3年間の設置、さらに2019（令和1）年11月からもう3年の設置となりました。腎臓専門医と循環器専門医との連携を通じた慢性腎臓病（CKD）重症化や心血管疾患（CVD）合併の予防のための病診連携、県や市など自治体との連携、および一般市民の方への啓発活動、の3本柱を活動目標としております。現在、内田治仁教授（腎臓内科）と吉田賢司講師（循環器内科）より構成されています。

内田は引き続き、NPO法人日本腎臓病協会（JKA）の副幹事長、岡山県生活習慣病対策推進会議CKD・CVD対策専門部委員等を務めております。また厚生労働行政推進調査事業の「腎疾患対策検討会報告書に基づく慢性腎臓病（CKD）に対する地域における診療連携体制構築の推進に資する研究」研究班の研究分担員として、日本全国における今後のCKD対策に努めています。吉田は循環器内科の医局長4年目として多忙を極めております。

岡山県内各地で様々な活動を行う予定でしたが、COVID19のため引き続き自粛あるいは形式を変更して行っています。病診連携におきましては、岡山市CKDネットワーク（OCKD-NET）セミナーを2022年3月にWebと現地のハイブリッド開催となりました。OCKD-NETでは病診連携患者の前向き追跡検討を継続して実施しております。県や市など自治体との連携に関しましては、岡山市、美作市、矢掛町、笠岡市、井原市、新見市、瀬戸内市などとのCKD対策事業を援助しています。

研究活動ですが、臨床研究としてCVD進展リスク因子の解明・重症化予防診療システムの開発を目的とした多施設共同CKD・CVDコホート研究（Kakusyo 3C study）の解析を行い順次報告予定です。基礎研究としまして、内田は腎臓病・血管病の検討を、吉田はヒト心臓内幹細胞から心筋細胞への分化制御機構の解明を、それぞれ継続して実施しております。研究の成果は各学会にて報告しております。

末筆となりましたが、今後とも先生方の御指導、御鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。（内田 記）

## 救急外傷治療学講座

平成26年11月に開講した本講座は、社会医療法人雪の聖母会聖マリア病院を母体とした寄付講座です。聖マリア病院は西日本有数の救急病院であり、内外因・成人小児問わず多くの患者を受け入れ地域医療に貢献しています。

現在、当講座は山田（講師）、山本（助教）の教員2名と少数ではありますが、臨床・教育・研究に勤しんでおります。

臨床では、2名共に高度救命救急センターのスタッフとして、中尾篤典センター長のもと岡山県南東部の最後の砦としてCOVID-19重症例も含めた救急患者の受け入れに努めております。また2022年度稼働を目指し、岡山大学病院ドクターカー運用の準備にも関わっています。山田講師は外傷診療と災害医療の専門性を、また山本助教は小児救急医療と集中治療の専門性を有しており、部署内、院内そして地域の信頼も得られており、いまやなくてはならない存在となっています。

教育では、学生、若手医師、コメディカルや救急救命士の教育にも盛んに取り組んでおり、授業や実習、勉強会を通じて学

内、院内や地域の救急医療の質向上に貢献しています。

研究では、国内外の学会で積極的に発表し、論文数も着々と増えています。医局研究室を活用しながら、山田は水素・細胞を用いた基礎研究を、山本は水素・ラットの小腸を用いた基礎研究をそれぞれ行っており、臨床研究だけでなく基礎研究にも積極的に取り組んでおります。

救急医療、集中治療、外傷診療、災害医療、小児診療と専門性を有した講座として、臨床・教育・研究へ邁進する所存です。皆様、今後とも、何卒御指導御鞭撻宜しく御願ひ申し上げます。

(山田 記)

## 高齢者総合医療講座

2021年3月から2022年2月までの報告をさせていただきます。

人事では、1月から6月まで腎・免疫・内分泌代謝内科学教室より野島一郎医師が、7月から12月まで、消化器・肝臓内科学教室より井口俊博医師がそれぞれ半年間勤務しました。本年1月より総合内科学教室より大村大輔医師が赴任・診療にあたっています。

2021年12月で講座が設立され2期6年間が経過しました。閉鎖となった三朝医療センターの診療の継続を主に、高齢化率の高い鳥取県中部地区でフレイル予防活動などを行ってまいりました。この度講座更新にあたり、今までの経緯・地域の課題を鑑み、今後の方向性を示し、推進していくために寄付講座の名称を「三朝地域医療支援寄付講座」から「高齢者総合医療講座」に変更いたしました。

同門の諸先生方には引き続きご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願ひいたします。

(芦田 記)

## 血液浄化療法人材育成システム開発学講座

本寄付講座は平成28年に開講致しました。腎不全、特に血液透析を主体とする血液浄化療法に関する教育、研究等に力を入れ、慢性腎臓病CKDや腎不全治療に関する研究・教育・臨床に精力的に取り組む、腎不全治療の更なる向上と地域連携による人材育成システムの構築を目的と致しました。

昨年もCOVID-19の影響で多くの学会・研究会・研修会をWeb開催に変更となりました。9月12日に「岡山アクセスWebセミナー2021：アクセスと中枢血管病変（中心静脈病変など）」をオンラインで開催致しました。主として県内の透析関係医師・メディカルスタッフに参加頂き（視聴者87名）、教育講演は櫻間教文先生「手が腫れているのをどう評価しているのか～静脈高血圧症の診断から治療まで～」、特別講演は堀田祐紀先生「透析患者の中心静脈病変に対する血管内治療の現況」をお願いし、アンケートでも大変好評の結果でした。

杉山は1月に「岡山県のCKD対策・透析医療と糖尿病性腎症の腎不全管理」（岡山県糖尿病性腎症重症化予防シンポジウム）、特別講演「慢性腎臓病（CKD）と腎性貧血治療の最新の知見」（高梁医師会学術講演会）、2月に「慢性腎臓病（CKD）と合併症～腎性貧血の新しい治療～」(笠岡医師会学術講演

会)、6月にシンポジウム「腎臓病総合レジストリー（J-RBR/J-KDR）2020年次報告と経過報告」（第64回日本腎臓学会）、7月に「ファブリー腎症の早期診断と治療」（第56回日本小児腎臓病学会ランチョンセミナー）、「慢性腎臓病（CKD）と合併症～腎性貧血の診断と新規治療～」(都窪医師会学術講演会)、10月に「腎代替療法とは？～血液透析・腹膜透析・腎移植とその特徴～」(第2回慢性腎臓病（CKD）オンライン研修会)等の講演を行いました。本年1月には第3回慢性腎臓病（CKD）オンライン研修会を開催致しました。

岡山県CKD・CVD対策専門会議長を務め、県の担当者との毎月の定例協議、令和3年度CKD重症化予防モデル事業（笠岡市・瀬戸内市・津山市・美作市）行政担当者とのWeb会議、10月には岡山県CKD・CVD対策専門会議、役員3者懇談会（岡山県・腎臓病協議会・透析医部会）に出席し、CKD・透析に関する啓発活動やその対策に尽力致しました。「岡山県における透析患者数の分布と推移に関する調査（ODN survey）」では、岡山県医師会透析医部会（草野功会長）、CKD・CVD地域連携包括医療学講座（内田治仁教授）、腎・免疫・内分泌代謝内科学（和田淳教授）と共同で調査・解析を行い、2019年末の現況を発行致しました。2020年末調査の結果は本年度に発行予定です。「岡山県国保ヘルスアップ支援事業（医療費等分析・CKD重症化予防）」を県からの委託で実施しており、4年目に入りました。

研究面では、学振科研費・基盤研究（C）の研究代表者、厚労科研費・難治性疾患政策研究事業（難治性腎疾患、難治性血管炎）およびAMED研究費（腎疾患対策、難治性疾患実用化研究事業）の研究分担者を務めました。

本講座は岡山県医師会透析医部会を主体として、透析関連施設よりご支援を頂いて2期6年間運営を行い、2021年末で設置期間が終了致しました。この間の多大なるご支援に心より深く感謝申し上げます。

高齢化社会に伴い、腎臓病・腎不全治療、血液浄化療法領域の研究、教育、診療の向上や人材育成は今後益々、必要になってくることと思います。

関連病院の先生方には、お力添え頂きましたことを厚く御礼申し上げます。今後とも御指導ならびに御高配を賜りますようお願い申し上げます。

(杉山、田中景 記)

## 運動器外傷学講座

運動器外傷学講座は運動器外傷に関する治療の開発を目的としており、開設7年目を迎えました。現在、運動器外傷に対する治療法の臨床および基礎研究を積極的に行っております。岡山県だけでなく、中四国および全国の外傷治療の促進に取り組んでいます。スタッフは中田英二（講師）、依光正則（講師）の2名で活動中です。

臨床では、救急部と連携し、多発外傷や高エネルギー外傷など重度外傷や、骨盤骨折・寛骨臼骨折、偽関節など、他院で治療に難渋している症例を当院に受け入れ、治療を行っています。基礎研究では、大学院生を指導し、組織機能修復学講座（宝田教授）と連携し、iPS細胞を用いた骨欠損の組織再生などに取

り組んでいます。また、学会活動としては、日本骨折治療学会を中心として多くの学会で積極的に発表を行っています。現在、コロナ拡大の状況下であり、救急対応や学会等の制限も少なからず影響を受けていますが、当講座では状況に応じて精力的に臨床研究・基礎研究に取り組んでおります。

今後とも先生方の御指導・御鞭撻のほどよろしく願い申し上げます。(中田 記)

## 地域救急・災害医療学講座

中尾篤典教授(兼任)のもと、10月より湯本が2年間の米国留学より帰国し講師として着任し、上原助教とともに運営しております。

まだまだCOVID-19パンデミックの終息も見えない中、地域救急医療の最後の砦としての役割を果たすべく、重症症例に限らず、発熱や呼吸困難などを含めた搬送困難となり得る症例を広く積極的に受け入れております。各専門診療科の先生方には、初期診療あるいは集中治療管理後の継続診療も含めまして多大なご協力をいただきこの場を借りて深謝申し上げます。また、スムーズな病床運営のためには、空床確保が必須である中、地域の病院の先生方には全身状態が安定した患者の迅速な受け入れを快諾いただき改めて御礼申し上げます。

臨床面では関係各科と協力しながら重症COVID-19患者の診療、また大学病院に集約しやすい多発外傷、重症頭部外傷、重度の四肢・骨盤骨折などの重症外傷、重症小児症例、院外心停止などを多く診療しております。研究面では外傷、心停止、集中治療に関連する臨床研究、また敗血症に関連する基礎研究に従事し、教育面でも救急隊との定期的な勉強会や院内の心肺蘇生の講義など幅広く取り組んでいます。

今後とも地域社会のセーフティネットとしての地域救急医療を支えるべく邁進していく所存でありますので、御指導・御鞭撻のほど何卒宜しく願い申し上げます。(湯本 記)

## 岡山県南東部(玉野)総合診療医学講座

玉野市と岡山大学総合内科学への連携で開講している講座です。玉野市のご理解のもと開講5年目を迎え、引き続き玉野市を中心とした岡山県南東部における地域医療に多面的な貢献を行うことを目標のひとつとして活動いたしました。

今年度から地方独立行政法人玉野医療センターの一翼として新たに出発した玉野市民病院において、引き続き内科診療を担当いたしました。総合内科医として、離島を含めた地域の病院・医院と連携しつつ診療を行う中で、担当教官の専門である伝統医学(漢方医学)領域、循環器科領域の診療を積極的に行いました。循環器科領域においては、心臓超音波検査の実施など診療内容の充実を図っております。訪問診療にも引き続き参加し、地域医療を実務で支える機会となっております。

同院では内科専門医を目指す専攻医の受け入れが行われており、その指導にも携わりました。また、地域医療体験実習(3年生)を行う学生の受け入れも行われ、当講座の教員が実習指導に加わるとともにその評価も行いました。医療現場を肌で感

じることのできる実習であり、学習意欲の向上につながるなど貴重な経験になったという学生の言葉が多く聞かれます。新型コロナウイルスの影響が続く中、専攻医・研修医の受け入れにご協力いただきました関係者の皆様に深く御礼申し上げます。

岡山大学においては、総合内科・総合診療科での診療を担当いたしました。教育面では総合内科においてこれまで同様に学生の臨床実習を担当いたしました。伝統医学の卒前・卒後教育として定期的に勉強会を開催し、その普及に努力いたしました。また、選択実習において総合内科・総合診療科を選択した学生には、より深く伝統医学に触れられるような実習を行っております。(植田 記)

## 岡山県南西部(笠岡)総合診療医学講座

いつも同窓会の皆様方には大変お世話になっております。当講座の現況につきましてご報告させていただきます。人事に関しましては、2021年11月から前任の安部真助教の退任に伴い、山崎辰洋が助教に昇任して業務にあたっております。安部と同様、消化器内科領域に造詣が深く笠岡市民病院では大腸内視鏡検査にも従事しております。

診療については、当講座医師で健診業務、内視鏡業務、外来業務に従事しております。近隣の医療機関の先生方におかれましては引き続き病病連携、病診連携をおとりいただきますようよろしくお願いいたします。また、現在院長を務めておられる宮阪實先生の御尽力により藤井病院から笠岡市民病院へ応援医師の派遣をいただいております。研修医教育、内視鏡業務の充実にはならない存在となっております。常勤スタッフ、寄付講座医師、藤井病院からの応援医師がワンチームとなり、岡山県南西部地区の医療の下支えをしてみたいと思います。

教育については卒前教育、卒後教育に力を入れています。早期地域医療体験実習(1年生)、地域医療体験実習(3年生)の受け入れと指導を行い、離島医療を含めた当講座ならではの地域医療の学び場を提供しております。また、初期研修医を受け入れ、外来及び入院での研修を積極的に後押ししています。各症例のフィードバックを通じて医療人としての技術と知識の習得のみならず、倫理観の育成にも携わっています。

研究については、総合内科で立案された地域医療現場に即した研究を継続しております。論文化されたテーマもあり、我々も含め笠岡市民病院スタッフのモチベーションの向上につながっており良い循環が出来上がっております。

引き続き岡山大学病院 総合内科と連携しつつ寄付講座を更に盛り上げてまいりたいと思いますので今後ともよろしくお願いいたします。(堀口 記)

## 高齢者救急医療学講座

本講座は2017年11月に開講し、今年で5年目になります。高齢化に伴い顕在化している救急医療の諸問題の研究と市民への教育活動を重ねてまいりました。新型コロナウイルス感染症の影響で、市民公開講座は今年も開催できませんでしたが、我々の研究は「井原市民病院だより」を通して、一般市民にもフィー

ドバックされています。

井原地区では高齢化が進んでおり、特に子育て世代である20代、30代の人口減少が顕著です。こどもや若い世代の成人の方の転入を増やすための市政の取り組みとして、こどもの医療費助成や出産・育児一時金、不妊治療の補助は、他の地域と比べてかなり充実しています。しかし、救急搬送においては、近年小児と若い世代の成人において応需率が低く、病院選定時間の延長傾向が認められました。高齢化が進み医療体制が高齢者主体に適応した結果と考えられます。今後、地域創生を考える上で、大多数を占める高齢者の救急医療を充実させるだけでは不十分で、高齢化社会だからこそ相対的に少ない、小児や若い世代の成人の救急医療の充実が必要だと痛感させられました。

また、従来から啓蒙に力を入れてきたアドバンスケア・プランニング（ACP）ですが、まだ十分に浸透しているとは言えない現状があります。近く急変が想定される高齢者に、どのようにACPの話を持ち出すか、難しい問題もあります。一方で、心肺蘇生を望まない方（DNAR）であることがわかっているにもかかわらず、突然の急変時に家族が救急車をcallしてしまうことも少なくありません。救急隊は患者がDNARであることを伝えられても、救急現場では心肺蘇生をしながら搬送することが決められています。

4年間の研究で様々な課題が明らかになってきました。今後はこれらの課題解決のため、消防局との協力体制の強化と市民・医療スタッフへの啓蒙活動を進めていきたいと思っております。

今後とも、何卒お力添えの程宜しくお願い申し上げます。同窓・同門の諸先生方には引き続き御指導御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。（青景 記）

## 瀬戸内（まるがめ）総合診療医学講座

本講座は、平成31年4月に香川県丸亀市のまるがめ医療センターと総合内科学の連携のもと開講された寄付講座で、開講から3年目が過ぎようとしています。引き続き、外来業務を主とする臨床支援に加えて、入院診療のサポート、院内感染対策活動、ポリファーマシー改善活動を継続的に行っています。研究面では、「瀬戸内マリリエリア」寄付講座群の主力として、風邪症候群における抗菌薬処方状況の実態調査や、曜日が抗菌薬処方に与える影響に関する論文発表をしました。今後も主に感染症・老年医学をテーマとした多施設共同研究を精力的に行っていく所存です。教育面では、内科専門医・総合診療専門医の連携病院として、若手医師の研修施設としてさらに連携を強めていきたいと考えております。人事面には大きな変更はありませんでした。

当講座では、今後もまるがめ医療センターを中心とした中讃地域における地域医療の実践を基盤としながら、臨床教育・地域医療研究を進めていくことで、若手医師が地域医療に従事しながら継続的なキャリアアップ（学位・専門医取得）を実現する体制を構築することを目指して活動してまいります。

（萩谷 記）

## 災害医療マネジメント学講座

本講座は、平成30年7月に鳥取市の寄付により設置され、5年目を迎えました。現在の取り組みとしては、鳥取市、岡山県を中心に活動を行っております。鳥取市災害関連支援活動として市民公開講座をケーブルテレビ局にて収録・公開し、鳥取市民の皆様へ防災の啓発活動やコロナ禍における避難所生活の健康2次被害の防止の講演を行うことができました。また、鳥取市職員を対象にした、コロナ禍における避難所運営マニュアルに沿った、避難所設置運用講習会を行っております。

新型コロナウイルス感染対応においては岡山県より、患者搬送コーディネーターの委嘱を受け、第4波第5波という重症感染者が急増した際に設置された、臨時医療施設である一時療養待機施設（主に酸素投与を行う）の開設準備から運営、撤収までの支援を行いました。さらに、2022年1月中旬より宿泊療養施設における中和抗体投与と施設の開設準備から運営の支援も行っております。また、岡山大学病院の院内防災対策マニュアルの改訂と、院内防災訓練の企画・準備・実施・検証に取り組んでおります。研究面においては、厚生労働省科研費を2件（代表、分担）、科学技術復興機構1件（分担）が採択されました。これらの成果を発信し、学術的にも貢献できたらと考えております。主に研究の柱である、災害時の地域医療BCPに関し、今後は岡山県、岡山県医師会、病院会などの協力をいただきまして、岡山県内の医療機関への研修会などを積極的に行い、岡山県の医療救護や地域における災害対応や各関連機関との連携の普及をしていく予定です。

我々は、中尾博之教授（医師）、渡邊助教（薬剤師）、平山助教（臨床工学技士）という多職種での構成という利点を生かして、多角的に災害医学を学問としての構築に寄与していけたらと考えている所存でございます。

引き続き、ご指導ご支援を賜りますよう、何卒よろしく申し上げます。（渡邊暁 記）

## くらしき総合診療医学教育講座

本講座は、2020年4月に、総合内科学講座と倉敷成人病センターの連携のもと、倉敷エリアにおける地域医療現場での教育・臨床・研究を基盤とし、円滑で持続的な医師・医療人の育成を使命とする寄附講座です。三好智子が准教授として、赤穂宗一郎が助教として、着任しております。

倉敷成人病センターでは、初期研修医・専攻医の教育を担当しており、初期研修医とは一般外来で年間約100症例の指導を行っています。また、上部500件/年、下部200件/年にわたる内視鏡検査での技術指導に加え、抄読会、初期研修医や専攻医・指導医と共に印象に残った症例の情報交換や臨床研究も行っております。

岡山大学病院における教育活動としては、主に総合内科・総合診療科での外来指導・発表指導を行っております。また、医学科では3年生の内科学総論や4年生の臨床実技入門、1～5年生の行動科学Ⅰ～Ⅴの授業を担当しました。指導医養成としては、岡山大学新任教員FD、夏の医療系学部合同FD、卒後臨床

研修指導医養成講習会のファシリテータとして参加し、学外では岡山県医師会臨床研修指導医養成講習会と瀬戸内女性乳腺外科医会主催のリーダーシップセミナーで講演も行いました。更に、3月には、多職種による「コロナ禍における全人的医療～保健・介護・看護・医療それぞれの経験の共有～」を開催し、多くの皆様にご参加頂きました。この場をお借りして、深謝申し上げます。

学術活動としては、三好准教授が医学教育研究（筆頭1編、共著1編）、コロナ禍における医療人の燃え尽きに関する研究（共著2編）、赤穂助教が基礎研究（筆頭1編、共著1編）の誌上発表を行いました。

本講座は、初期研修医および専攻医の育成、多職種連携教育、臨床研究、医学教育研究などを通し、地域医療に貢献していく所存です。今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。（三好 記）

## 周産期医療学講座

本講座は、2021年7月に福山市からの寄付で開設され、福山府中二次保健医療圏及び井笠圏域における周産期及び産婦人科医療に関わる医師の育成、効果的な医療提供体制に関する研究、地域住民への普及・啓発を行うことで、将来に亘り持続可能な周産期および産婦人科医療体制の構築に寄与することを目的とする寄付講座です。産婦人科の衛藤英理子講師と私、長尾昌二の2名が所属しております。

持続可能な周産期医療体制の整備が全国的に求められている中、福山府中二次保健医療圏における産婦人科医師数は全国平均に比して少なく、分娩取り扱い医師数も今後減少する試算が出ています。また、隣接する井笠圏域でも分娩医療機関が少ないことから、ハイリスク妊産婦を圏域内で診療できない状況が発生しております。さらに、同圏域のがん検診受診率は全国平均に比して非常に低く、また、婦人科腫瘍専門医が不在で専門的な医療の提供が十分でない現状が続いています。このような中、周産期母子医療センターを中心とした公的医療機関の分娩機能の充実・効率化による安全・安心に出産できる体制の整備、婦人科腫瘍診療の拡充を通し、圏域における効果的な産婦人科医療体制を構築することが本講座の役目です。また、産婦人科医療提供体制の課題と解決策に係る調査・研究、基幹の病院を実践フィールドとした産婦人科医療を担う医師の育成、産婦人科医療に関する地域住民を対象とした公開講座の実施等に注力して参ります。昨年は、同圏域への診療支援に加え、衛藤講師による妊娠や出産に関する市民講座「11月3日は「いいお産の日」です～安心して出産を迎えるために～」のYouTubeでの配信を行いました。

今年も福山府中二次保健医療圏及び井笠圏域への診療支援、市民講座の開催などを予定しています。引き続き当講座に与えられたミッションの実践を継続して参ります。周産期医療学講座をよろしくお願い致します。（長尾 記）

## 検査部

総合内科大塚文男教授が検査部長を併任しています。本年度は、石倉技師と行司技術補佐員の再雇用期間が終了します。鳥越技師が育休代替要員として長期間勤務してきましたが年度末までとなります。石倉技師の退職に伴う臨床検査技師の補充はありません。行司技術補佐員の後任として野間事務補佐員が採用になりました。業務上については、微生物検査室が休日の微生物検査の充実を図ることを目的として、現行の土曜日に加え日曜日、および祝日においても微生物検査室を稼働することになりました。教育関係では、本学保健学科学生、倉敷芸術科学大学学生、九州保健福祉大学学生の臨地実習を受け入れました。研究・学会活動では、全国学会で6演題Web発表し、地方学会で10演題Web発表しました。資格関係では、11月に中村栄由技師が医療情報技師の資格を取得しました。

検査部は今後も患者サービスに努めてまいりたいと考えています。今後とも検査部をどうぞよろしくお願い申し上げます。

（東影 記）

## 手術部

同窓会の皆様におかれましては益々ご活躍のことと存じます。

令和3年11月29日に第58回全国国立大学病院手術部会議が、徳島大学の主幹により、今回もWeb会議の形式で開催され当院からは増山部長、岩崎副部長、水原師長の3名が参加いたしました。本会議では医師や看護師の働き方改革に関する取り組みや、特定行為研修修了者の活用方法について積極的な意見交換がなされました。後者は術中麻酔管理領域の研修終了者1名、実習中の者2名を抱え、看護師特定行為管理委員会および看護師特定行為実践実務者会議により、特定行為研修修了者の臨床での活動開始について模索中の当院からの提案議題でありました。各施設も同様に手探りの状況で特定行為研修修了者のモチベーションを高め、活躍してもらうため考えや取り組みについてさらなる情報共有と意見交換が必要であると思われました。令和2年度総手術件数は新型コロナウイルス感染症の影響もあり令和元年度より約1000件少ない、8,639件でしたが全国的には変わらず8位の件数でした。令和3年度は新型コロナウイルスの影響を受けながらも手術件数は回復しており、2年前の2019年度並みの件数になる月も増えてきています。また、病院運営の方針により救急車の受け入れに、より積極的に取り組むこととなり緊急手術も増加しております。さらなる手術件数増加に向け、外来手術センターの開設も2022年秋に向けて準備が進められております。しかしながら、新型コロナウイルス感染症第6波の影響は少なくなく、予定手術の変更、中止なども行われております。状況によっては手術室の利用制限なども含めた対応が求められるかもしれません。いずれにせよ、手術が必要な方に遅滞なく安全に手術が行えるようチーム一丸となり取り組んで参ります。

今後とも皆様のご指導、ご協力をよろしくお願い致します。

（岩崎、水原 記）

## 病理診断科・病理部

柳井広之教授のもと、スタッフ4名（都地友紘、西田賢司、田中健大〔病理学（第二／腫瘍病理）〕、田端哲也（第二／腫瘍病理））、医員5名の合計10名で業務にあたっています。

人事ですが、令和4年4月より岡山赤十字病院より池田知佳が入職し、都地が岡山赤十字病院へ、田端が岡山医療センターへ異動しました。

学術・研究面においては、令和3年11月に第67回日本病理学会秋期特別総会を、第二／腫瘍病理の吉野正教授が会長、第一／免疫病理の松川昭博教授と当科の柳井広之教授が副会長として現地開催とWEB開催のハイブリット形式として開催いたしました。副会長を務めた柳井が特別講演も行いました。

教育面においては、当科は直接的に患者に接触しない環境であるため、コロナ禍の現状においても初期研修医、医学科実習生とも通常に近い形での研修・実習を維持しております。

引き続き、ご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。（都地 記）

## 輸 血 部

輸血部では、大塚文男部長以下、医師6名、検査技師4名、看護師1名の体制で、安全な輸血療法と血液製剤の適正使用を目標に業務に取り組んでいます。

医療安全では、昨年改訂を行った輸血拒否患者に対する基本方針に基づき、症例ごとに無輸血治療検討委員会ですら十分に検討し、実施の可否を病院として判断するシステムが稼働しています。月一례ペースと、想像以上に多くの対象症例があることに改めて驚いております。まだ新しいシステムに戸惑われる先生方もいらっしゃると思いますが、是非ご協力のほどお願い申し上げます。

細胞療法関連では、引き続きキメラ抗原受容体T細胞（CAR-T細胞）療法が順調に症例を重ねています。新しいCAR-T製品が導入されるたびに、求められる内容の差異に振り回されがちですが、スタッフ一同協力しながら丁寧に対応し、準備を進めています。今後、他分野でも細胞療法が導入される時期があると思います。そのような場合に、高い専門性をもってサポートできる体制を構築していきたいと考えております。ご指導ご鞭撻のほどお願い申し上げます。（藤井伸 記）

## 血液浄化療法部

血液浄化療法部は、和田 淳部長（腎・免疫・内分泌代謝内科学教授）のもと、スタッフ医師2名（木野村賢、田邊克幸）、医員4名（大西康博、御船朋代、高橋謙作、中島有理）で診療にあたっています。入院中の慢性維持透析患者の透析管理、新規の透析導入、急性腎不全患者の透析管理、難治症例に対する血漿交換等の体外循環治療について、看護師、臨床工学技士と協力して診療に取り組んでおります。

本年度は新型コロナウイルス感染症の影響を大きく受け、血液透析及びアフエリス療法のための血液浄化療法部への受け

入れ件数はかなり減少致しました。透析患者はワクチン接種が比較的早く進んだこともあり、第5波では第4波ほど透析患者での大きな感染がないように見受けられましたが、オミクロン株の流行後の第6波では再び感染者が増加してきており、透析医療に従事されている関連病院の先生方におかれましても予断を許さない状況が続いているものと思われます。当院の血液浄化療法部は陰圧個室を有しておらず、オープンスペースでの難しい対応を迫られておりましたが、感染患者が入院した際の対応がある程度は確立されてきており、非感染の入院患者の血液浄化療法の依頼には特に制限なく従来通りの対応ができるようになってきております。しかしながら、以前と同様に透析患者のご紹介を頂き、当部の受け入れ人数が増加してくるには、おそらく感染症流行の沈静化まで時間を要するものと思っております。今後も当院での血液浄化療法を必要とする患者の受け入れには可能な限り対応していき、安全な治療を提供できるよう取り組んでまいりますので、同門の先生方、関連病院の先生方におかれましては引き続きご支援をお願い申し上げます。（田邊 記）

## 高度救命救急センター

平素より高度救命救急センターに対してご協力くださり、心より御礼申し上げます。

2020年より続いている新型コロナウイルス感染症は医療において今までとは異なる医療をもたらしていると思われまます。救急医療では搬送困難例が2022年初頭より再び問題になってきております。少しでも発熱があれば、患者受け入れが困難となる状況になりつつあります。そのような環境下ですが、各診療科の先生方、並びに病棟の看護師さん、その他医療従事者含めて、一丸となって岡山県の救急医療を支えていただき本当に感謝申し上げます。

高度救命救急センター関連では、岡山大学病院にドクターカーの導入がありました。中四国地方では初めての大型ドクターカーとなっております。車内にECMOなどの機器類も搭載することが可能となっております。ドクターカー導入により病院間の安全な転院搬送が可能となっております。2022年度の本格運用に向けて鋭意、準備しております。今後とも患者様のための医療に対する皆様のご指導・ご協力のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

教育面に関しても、新型コロナウイルス感染症の影響が大きく出ていたかと思われまます。医学生の実習においても、患者さんの横で行う、on the job trainingが難しくなりました。臨床実習において、実際に患者さんと話をし、診察を行い、推論を立てる機会が減っているということは残念な状況にあります。しかし、徐々に臨床実習も再開されており、患者さんのそばで診療をする、考えるという機会も増えております。また、各種講習会に関しても折を見て開催し、少しでも教育・指導の面でも活動できる場を作ればと考えております。

皆様のご協力により、高度救命救急センターは成り立っております。今後とも、高度救命救急センターを何卒よろしくお願い申し上げます。（野島 記）

## 周産母子センター

コロナ禍で全国的に出生数が減少する中、当センターには県内外から多数の症例をご紹介いただいております。

当センターは合併症妊娠や習慣流産・不育症、周産期合併症などのハイリスク妊娠・分娩管理だけでなく、正常妊娠例や生殖補助医療（ART）にも積極的に対応しているのが特色です。分娩時大出血などの産科救急には、高度救命救急センターや麻酔科、放射線科などと協同で母児救命に取り組んでいます。また先天性心疾患に代表される胎児異常症例につきましては、小児循環器科、心臓血管外科、小児外科、脳神経外科、小児麻酔科など関係各科と協同で診療に従事しております。

当センターには産科部門（周産期および生殖内分泌）とNICU（新生児集中治療室）部門があり、増山 寿産科婦人科教授がセンター長、鎌田泰彦が副センター長・准教授、産科婦人科の衛藤英理子が産科部門長、小児科の吉本順子がNICU部門長を務めております。産科部門は、早田 桂講師以下周産期専従医ならびに生殖内分泌専従医を中心に産婦人科専攻医とともに診療にあたっております。NICU部門は、塚原宏一小児医学教授の指導下に、新生児専従医の鷲尾洋介准教授（小児急性疾患学講座）、渡邊宏和、岡村朋香、森本大作、佐藤剛史を中心に運営しております。

現在の病床数は、入院棟4階東病棟に産科（母体）18床、NICU 6床、新生児室12床。4階西病棟に産科（母体）4床がそれぞれ配置されています。NICUが常に満床状態であることは喫緊の課題であり、母体搬送依頼をお受けできないなど、地域の先生方に多大なるご迷惑をお掛けしております。今後の安定した周産期医療の供給のため、NICUおよびGCU（回復期治療室）の拡充準備を引き続き進めて参ります。

地域の周産期医療の中核の一つとして診療にあたるとともに、日本周産期・新生児医学会の母体・胎児専門医の基幹研修施設、新生児専門医の指定研修施設として専門医の育成にも力を注いでおります。同窓の先生方におかれましては、引き続きご支援とご鞭撻の程、宜しくお願い申し上げます。（鎌田 記）

## 腫瘍センター

当センターでは、田端教授と久保の腫瘍内科医2人体制で、COVID-19流行下におきましても患者様が安心・安全にがん治療を行うことができるよう、各部署からのご協力をいただきながら活動しております。

COVID-19流行下におきましても、腫瘍センターでは延べ900人/月以上の患者様の外来化学療法を行っております。特定の曜日に患者様が集中していたこともあり、1日の利用枠の調整をさせていただき、おかげさまで曜日によるばらつきも少なくなり、待ち時間の短縮にもつながっているようです。ご協力、誠にありがとうございます。引き続き、感染対策にも十分留意しながら治療を行っていききたいと思います。

また、当センターでは標準治療が終了となった患者様を対象とした「遺伝子パネル検査による遺伝子プロファイリングに基づく複数の分子標的治療に関する患者申出療養」も担当して

ります。国立がん研究センターが中心となって行っている試験ですが、中国・四国地方では当院が唯一の参加施設であり、遠方から多くの患者様をご紹介いただいております。患者申出療養のみならず、希少がんや治療抵抗性となった患者様のがん遺伝子パネル検査を含めた治療の相談なども引き続きお受けしておりますので、是非ご紹介頂ければ幸いです。

また、当センターでは院内総合がんセンターボードとして、隔月でテーマを決めてレクチャー形式の勉強会を開催しております。以前は集合形式で行っていましたが、COVID-19流行の影響で、現在はオンライン形式に変更しております。他医療機関からの参加も可能ですので、もし興味がございましたら、当院腫瘍センターのホームページからお申込みいただけますので、是非ご参加下さい。

今後も、歯科医師、薬剤師、看護師、歯科衛生士、がん相談事務員など他職種からなるチームでがん患者様やご家族のサポートを行っていききたいと思います。同窓の先生方におかれましては、今後ご支援とご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。（久保 記）

## 臓器移植医療センター

臓器移植医療センターは、岡山大学病院での臓器移植を集中的に管理・運営することを目的として設立され、センター長の前田嘉信病院長のもと、3人の副センター長（八木孝仁、豊岡伸一、杉本誠一郎）の体制で、移植医療を円滑に遂行すべく日々業務を行っております。

コロナ禍のなか、全国の脳死下臓器提供数は徐々に回復してきており、2021年の診療実績は肺移植5例（脳死5例）、肝移植15例（生体10例、脳死5例）、腎移植16例（生体15例、脳死1例）と、2020年より移植件数は増加しました。肺移植では、他施設が使用を見送るような拡大基準ドナー肺を全例で用いましたが、いずれも順調に経過しております。肝移植では、他の移植施設と連携して脳死下肝摘出術を行い、脳死肝移植を増やすことで例年の移植件数を堅持しております。また腎移植を受けた皆様も良好に経過しております。

学術面では、腎移植チームの丸山雄樹が日本泌尿器科学会総会の腎不全・腎移植部門で総会賞を受賞しました（リアルタイムイメージングにより腎虚血再灌流後の好中球動態を捉える研究）。これからも臨床・学術面でより一層上のレベルを目指し、チーム一丸となって尽力したいと存じます。

最近では脳死下臓器提供病院に摘出チームが出張する際も、出張前のPCRの陰性確認が求められるようになっており、コロナ対策の日々が続いております。当院で臓器移植を受けた方のなかにも慢性性にCOVID-19に罹患するケースが出てきており、生涯の免疫抑制療法が必要な移植医療ではnew normalの徹底が求められています。

コロナ禍でも日本屈指の多臓器移植施設として移植医療の発展に貢献できるよう活動して参る所存ですので、引き続きご指導ご鞭撻のほど何卒宜しくお願い申し上げます。（杉本 記）

## 超音波診断センター

超音波診断センターは、今年で11年目を迎えました。

大塚文男センター長（総合内科学教授）、大西秀樹副センター長（消化器内科）、高谷陽一助教（循環器内科）のもと、関係各位のご支援・ご協力により、循環器領域・消化器領域の他にも血管領域（頸部、下肢、末梢血管等）や体表領域（乳腺、甲状腺、関節等）など広範囲にわたる超音波検査を行っております。

診療面においては、コロナウイルスの影響により感染対策として、検査時にスタッフはマスクとゴーグルの着用、患者様はマスクの着用を徹底していただき日々検査を施行しています。

研究面においては、コロナウイルスの影響で各学会がweb開催となっており、9月には日本超音波医学会でオンライン発表を行いました。

教育面では、オンラインにて多くの講演会、研究会を開催し、オンラインでの講習会にもだいぶ慣れてきています。

現在、超音波専門医2名、超音波検査士6名（消化器領域、循環器領域、血管領域、体表臓器領域）が資格を有し検査技術や知識向上に努めています。また、スタッフの産休により新しい力が一人加わりました。腹部超音波は10月に新しいエコー機器も導入され、スタッフ一同やる気に満ちあふれています。

超音波診断の向上に伴い、臨床現場での検査の需要が大変増加しております。患者様のために質の高い検査を行えるようより一層邁進して参ります。（春名 記）

## 低侵襲治療センター

平成23年度岡山県地域医療再生臨時特例交付金によって整備されました低侵襲治療センターは平成24年（2012年）の設立から9年余りが経過しました。センター長の藤原俊義教授のもと、消化管外科、肝・胆・膵外科、泌尿器科の専任、兼任スタッフが当院での低侵襲外科手術の推進とそれを担う若手外科医の人材育成のために活動しています。

下半期の人事では、寺石文則講師が8月より消化管外科副科長となり、消化管外科診療において一層の重責を担っております。10月に菊地覚次助教が消化管外科に移籍となりましたので、代わりに肝・胆・膵外科の診療を担当する藤智和が当センターの助教に加わりました。藤智和助教は前田直見助教と共にそれぞれ肝・胆・膵外科、消化管外科の教育医長として、多忙な診療に加えて学生教育にも情熱を注いでいます。

診療においては、近年急速に普及が進んでいる手術支援ロボット“ダヴィンチ”による手術が、従来から行われている泌尿器科手術、胃、食道、縦郭、肺、子宮の手術に加えて、昨年より直腸癌手術、膵頭十二指腸切除術に拡大しており、保険診療として症例を重ね日常臨床として定着してきています。現在2台ある手術支援ロボットの有効活用を努め、今後一層の手術件数の増加に対応してまいります。

教育では各スタッフが学部学生、大学院生の講義を担当すると共に、関連病院を含めた若手外科医育成のための教育プログラムも複数回Webにて開催しました。今後も情報発信に努め

ていきたいと思っております。引き続き、安全、安心な低侵襲手術の普及に貢献できるよう、臨床、研究、教育に尽力してまいりますので、なお一層のご指導・ご鞭撻を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。（香川 記）

## ジェンダーセンター

人事面では大きな変化はありません。医師も受診者も大分慣れてきましたが、引き続きCOVID-19の影響で流行地域に在住の方の受診そのものが制限されたり、手術が中止、延期になったりする事例が散見されます。

日本精神神経学会のガイドラインに準拠して毎月開催している岡山大学ジェンダークリニック性別適合手術適応判定会議は、引き続きMicrosoft Teamsを使ったWEB会議で行なっています。遠方においても会議に参加できることから、ジェンダークリニック立ち上げを検討している遠方の病院、大学、認定資格取得希望者等の参加も続いており、思わぬ形でジェンダー診療の普及に一役買う結果になっています。

岡山市こころの相談センター所長の太田順一郎先生が委員長を務める日本精神神経学会の性同一性障害に関する委員会にて診断・治療ガイドラインの改訂作業が続いています。近く日本語版が発表されるICD-11では性同一性障害gender identity disorderという疾患名が廃止され、性別不合gender incongruenceと変更されたことに対応することが主な目的ですが、小児に対する心理社会的な対応の追記等が予定されています。当ジェンダーセンターからは難波センター長と松本がワーキンググループのメンバーとして改訂作業にあたっています。その他、岡山大学ジェンダークリニックのメンバーである保健学科の中塚幹也教授、さとうクリニックの佐藤俊樹院長もワーキンググループに参加しています。

受診や手術の実施にあたっては流行地域の方々にはご不自由をおかけする状況が続くと思われませんが、今後も必要な医療を必要な方に届けるべく尽力したいと考えております。

（松本 記）

## 炎症性腸疾患センター

炎症性腸疾患センターは、根治の難しい難病である炎症性腸疾患（IBD）を専門に診療するために消化器内科、消化管外科、小児科、小児外科が中心となって設立されたセンターです。もともと岡山大学病院はIBD黎明期から基幹病院としてIBD診療を続けてきましたが、近年IBD患者が急増していること、様々な合併症を有し、多くの科と看護師・栄養士・薬剤師などコメディカルとの連携が必要な疾患であることから、IBD診療に特化したセンター部門として2016年に設立となりました。現在、IBDセンター長の平岡佐規子、副センター長の近藤喜太（消化管外科兼任）を中心に運営し、岡山市内・県内のみならず、広く中四国のIBD患者の積極的な受け入れに努めております。毎日、専門外来（月曜：平岡（内科）、近藤（外科）、塚原宏一/津下充（小児科）、火曜：安富絵里子（内科）、水曜：野田卓男（小児外科）、井口俊博（内科）、木曜：平岡（内科）、金曜：岡



田裕之（前センター長）/高原政宏（内科）；2022年2月時点）を行う一方で、緊急性の高い症例については救急・時間外で対応しており、難病に苦しむIBD患者の支えになるべく日夜奮闘しております。コロナ禍のため、県をまたいだ患者の移動制限、感染トリージの必要も依然ありますが、初発症例、治療困難症例などのIBD症例だけでなく、診断に至らないIBD類縁腸炎など含め、お困りの患者さんがおられれば、まずはお気軽にご相談ください。また現在、IBD診療の質を担保するため、病状が安定した方は近隣の市中病院、開業医の諸先生方への逆紹介も積極的に行っております。引き続き病病・病診連携についてもよろしく願い致します。最後に、IBD患者さんの「最後の砦」の病院として引き続き努力してまいります、ご高配のほど宜しく願い致します。

（井口 記）

## 運動器疼痛センター

岡山大学病院中央診療施設の運動器疼痛センターとして再スタートさせて頂いてから早くも2年が経過しようとしております。慢性疼痛治療部門では、本年度も厚生労働行政推進調査事業費補助金「慢性疼痛診療システムの均てん化と痛みセンター診療データベースの活用による医療向上を目指す研究」ならびに同補助金「慢性疼痛診療システム普及・人材養成モデル事業」に採択いただき、痛みの診療を実践可能な人材育成、地域における慢性疼痛診療の普及・拡大に取り組みました。岡山大学病院・岡山赤十字病院・川崎医科大学附属病院・光生病院合同Webカンファレンスは岡山大学病院痛みリエゾン外来を受診された患者さんの治療方針について、鉄永副センター長を中心に2021.4-12に9回行いました。今後さらに2022.3までに3回、合計12回を予定しています。痛みセンター多職種連携研修会は、ハイブリッド形式で8回行い、現地参加、Web参加を併せて毎回30名以上、のべ287名の多く医療者のご参加を頂きました。リウマチ性疾患治療部門としましては、厚労省免疫アレルギー疾患政策研究事業において、西田・那須がシステムティック・レビューおよび執筆に関わり「関節リウマチ診療ガイドライン2020」が出版されました。合同カンファレンスは月1回開催し、診断や治療に困った症例につき検討会を行っております。

また、例年通り、岡山大学教養教育科目「痛みの発生メカニズムと医療」の講義を6月19日からWebで開講しました。痛みリエゾン外来に関わるすべての職種の先生方から、オムニバス形式で合計15コマの講義を行いました。引き続き、将来の医療を担う医療系学生を対象に痛みの治療の重要性と診療の実践についての教育を継続して参ります。

鶴翔会の先生方の引き続きのご支援・ご指導のほど、何卒よろしく願い申し上げます。（西田 記）

## 核医学診療室

核医学診療室では5名の診療放射線技師が常駐し、SPECT/CT装置2台、SPECT装置2台にて、核医学検査を行って

す。令和3年8月から令和4年1月の核医学検査件数は約1300件となっています。コロナ禍による検査件数減少は、影響が少なくなってきました。全ての核医学検査に、放射線科診断専門医がレポートを作成しています。

核医学診療室では、その他に放射性同位元素を用いた放射線治療も行っております。令和3年12月より神経内分泌腫瘍を対象としたルテチウムオキソドトロチド（Lu-177）を用いた治療を開始しました。その他、引き続き子宮頸癌などに対するIr-192を用いた高線量率密封線源治療、前立腺癌に対するI-125を用いた低線量率密封小線源治療、甲状腺癌転移巣に対するI-131を用いた放射性ヨード内用療法、去勢抵抗性前立腺がんの骨転移に対するRa-223療法などを継続して行っています。

今後とも臨床各科の皆様方のご指導およびご協力のほどよろしく願い致します。（児島 記）

## 結石治療室

結石治療室では、おもに尿路結石症に対する体外衝撃波結石砕石術を行っています。この治療は尿路結石に対する最も侵襲の低い治療であり、入院せずに無麻酔で施行が可能です。

尿路結石の治療は、近年めざましい進歩を遂げています。特に内視鏡の進歩は著しく、細径化によって多くの症例が経尿道的内視鏡下手術や経皮的腎結石砕石術で対応可能となりました。そのため体外衝撃波結石砕石術は件数として減少傾向にあります。しかしながら、大学病院の性質上、他院での治療困難症例を受け入れることが多く、このような難治症例では複数の治療法を組み合わせる必要があるとされます。体外衝撃波結石砕石術は、以前の簡便な治療という位置づけから、今後は内視鏡手術の補助的役割という位置づけへ変化しつつ、引き続き尿路結石治療の重要な一翼を担い続けるものと考えます。

今後も積極的に体外衝撃波結石砕石術を含め、総合的な結石治療を推進してまいりますので、皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。（荒木 記）

## てんかんセンター

岡山県のてんかん診療拠点である岡山大学病院てんかんセンターでは、伊達勲センター長（脳神経外科）のもと、秋山倫之副センター長（小児神経科）、脳神経外科、小児神経科、精神科神経科、脳神経内科の脳神経系診療科、関連診療科・部・病棟が横断的に連携し、包括的かつ高度なてんかん診療を行っています。

新型コロナウイルス感染症の流行が遷延している影響もあり、外来での脳波などの検査件数は減少したままです。しかし、てんかん発作の鑑別や外科適応の評価などに用いる長時間ビデオ脳波同時記録検査は、感染対策などの安全面に配慮しながら積極的に行っております。難治てんかんに対する外科治療に関しても精力的に行っており、岡山県内のみならず、中国・四国・近畿地方からのご紹介も変わらず多い状況です。てんかん症例

カンファレンス（主に外科症例）は、感染対策をとりつつ、月2回の定期開催を続けております。県内の診療連携としては、月1回の症例検討webカンファレンスを継続しており、参加人数は増加傾向です。

教育・啓発活動に関しては、会場開催での講習会は行えない状況が続いておりますが、2月に看護師、研修医、医学部生を対象としたてんかんの講習会をweb会議により行いました。今年度初めての試みとして、岡山県と総社市にご協力いただき、Purple day（国際てんかん啓発の日）のイベントとして備中国分寺五重塔のライトアップを行いました。また、卓球プロリーグチームである岡山リベッツに依頼し、公式ホームページやSNSでの応援メッセージや動画発信などの啓発活動を行っていただきました。

今後とも同窓の先生方のご指導、ご支援をよろしくお願い申し上げます。  
(秋山 記)



下山 敦士

海外への留学者一覧

令和4年4月1日現在

分野名	氏名	卒年次	留学先	期間
分 子 医 学	植 木 靖 好	平 6	Indiana University, Indianapolis, USA. E-mail: Uekiy@iu.edu	2000. 10～未定
	関 次 男	平 6	Department of Medical Education California University of Science and Medicine (CalMed) School of Medicine, U.S.A. E-mail: SekiT@calmedu.org	1998. 7～未定
	浅 野 恵 一	平30院	Icahn School of Medicine at Mount Sinai, New York, U.S.A.	2018. 4～未定
病 理 学 (免疫病理)	内 野 かおり	令3院	University of Montreal, Canada	2021. 6～2年間
	大 倉 隆 宏	平 21	Massachusetts General Hospital pediatrics, Boston, U.S.A.	2022. 4～2024. 4
消 化 器・ 肝臓内科学	中 川 裕	平 1	Columbia Univeraity in the City of New York, U.S.A.	
	恩 地 正 浩	平 19	Institut für Molekulare Biotechnologie GmbH, Vienna, Austria	2015. 10～未定
血 液・ 腫 瘍・ 呼 吸 器 内 科	梅 村 茂 樹	平 11	Georgetown University, Washington, U.S.A.	2018. 9～
	荻 野 敦 子	平 12	Dana Farber Cancer Institute Lowe Center for Thoracic Oncology, Boston, U.S.A. E-mail:ogino8186@gmail.com	2009. 7～未定
	小 山 幹 子	平 12	Fred Hutchinson Cancer Research Center, Seattle, U.S.A.	
	清 家 圭 介	平 23	University of Michigan Medical School, Ann Arbor, U.S.A.	2020. 1～
	内 山 美 友 紀	平 24	Graduate Institute of International and Developement Studies, Geneva, Switzerland	2020. 9～
	池 川 俊 太 郎	令2院	Dana Farber Cancer Institute, Boston, U.S.A.	2021. 1～
腎・免疫・ 内 分 泌 代 謝 内 科 学	杉 本 光	平 1	Beth Israel Deaconess Medical Center, Boston, U.S.A. E-mail: hikarusugimoto@yahoo.co.jp	1998. 9～未定
	渡 辺 晴 樹	平 19	The Feinstein Institutes for Medical Research, U.S.A.	2020. 9～2023. 8
	三 瀬 広 記	平 20	MD Anderson Cancer Center, Texas, U.S.A.	2019. 6～
	山 村 裕 理 子	平 23	University of Glasgow, U.K.	2019. 1～未定
	林 啓 悟	平 24	Harvard TH Chan School of Public Health, Boston, U.S.A.	2021. 1～未定
	福 島 和 彦	令3院	Massachusetts General Hospital, Boston, U.S.A.	2022. 2～
小 児 医 学 科	栗 田 佳 彦	平 15	The Hospital for Sick Children, Toronto, Canada	2020.10～2022.10(予定)
	石 田 悠 志	平 22	Karolinska Institutet, Sweden	2020.10～2022.10(予定)
消 化 器 外 科 学	加 藤 卓 也	平 19	National Cancer Institute, U.S.A.	2019. 6～2022.10
	金 谷 信 彦	平 22	Brigham and Women's Hospital, Harvard Medical School, Boston, U.S.A.	2019. 2～2022.10
	梶 原 義 典	大学院生	Brigham and Women's Hospital, Harvard Medical School, Boston, U.S.A.	2022. 4～
呼 吸 器・ 乳 腺 内 分 泌 外 科 学	富 山 浩 司	平 12	Univeraity of Rochester, NY, U.S.A.	
	植 村 忠 廣	平 6	Allegheny General Hospital Pennsylvania, U.S.A.	
	目 崎 久 美	平 22	University of Tronto, Tronto General Hospital, Canada	2018. 4～
	難 波 圭	平 22	Memorial Sloan Kettering Cancer Center, U.S.A.	2019. 12～
	三 浦 章 博	平 23	Center for Human Development, U.S.A.	2020. 10～
	山 本 治 慎	平 23	University of Tronto, Canada	2021.4～2023.3(予定)
整 形 学 外 科	岡 崎 勇 樹	平 25	Hospital for special surgery, New York, U.S.A.	2022. 4～2年間
	光 井 洋 介	令1院	Cleveland Clinic, U.S.A.	2021. 6～未定
泌 尿 器 病 態 学	河 田 達 志	大学院生	Medical University of Vienna, Austria	2021. 9～1年間
	佐 野 美 奈 子	大学院生	The Hospital for Sick Children, Sick Kids, Toronto, Canada	
麻 酔 学 蘇 生 学 脳 神 經 外 科 学	金 恭 平	平 22	The University of Alabama, Alabama, U.S.A.	2019. 2～2022.12
	西 村 義 人	平 27	University of Hawaii Internal Medicine, U.S.A.	2020. 9～
総 合 学 内 科	原 田 洸	平 28	Mount Sinai Beth Israel, U.S.A.	2021. 7～
	網 岡 尚 史	平 22	Univeraity of Kentucky, Saha Cardiovascular Research Center, U.S.A.	2021. 5～未定
循 環 器 内 科 学	江 尻 健 太 郎	平31院	Johns Hopkins Bloomberg School of Public Health, U.S.A.	2021. 9～未定
	甲 元 拓 志	平 1	University of Wisconsin Medical School, Wisconsin, U.S.A.	
心 臓 血 管 外 科 学	本 浄 修 己	平17院	The Hospital for Sick Children, University of Toronto, Toronto, Canada	2004. 12～未定
	大 崎 悟	平18院	University of Wisconsin Hospital and Clinics, Madison, U.S.A.	2006. 8～未定
	小 林 泰 幸	平 24	The Hospital for Sick Children, Canada	2021. 7～
	門 脇 幸 子	大学院生	The Hospital for Sick Children, Tronto, Canada	2019. 7～



## ルネッサンス基金募金活動の終了について（お礼とご報告）

鶴翔会会員の皆様へ

平素から、岡山大学医学部・病院及び鶴翔会の活動に、ご理解とご支援を賜り厚くお礼申し上げます。

さて、コロナ禍で1年延期となっておりました岡山大学医学部創立150周年記念式典も、昨年11月3日に無事挙行することができました。これを持ちまして創立150周年記念事業をほぼ達成することができました。これまで会員の皆様には、「岡山大学医学部ルネッサンス基金」を通じて、多大のご支援を賜りました。皆様のご芳志に感謝致しますと共に厚くお礼申し上げます。

これまで、鶴翔会会員の皆様を中心に岡山の経済界、医療界を含め約1,000を超える個人、団体から、6億5千万円を超えるご芳志をお寄せいただきました。

おかげさまで、念願でありました旧生化学講堂の整備改修をはじめ、教職員のアメニティ向上（岡大病院11FフロアのFloor150計画）の整備、また、次代を担う人材育成等教育事業、地域との連携関係事業など、計画しておりました記念事業を進めることができました。

皆様から多額のご芳志をお寄せいただきました「岡山大学医学部ルネッサンス基金」の今後につきまして、現在、約3,000万円の残金をお預かりしております。ついては、この基金を150周年記念事業として執行することを目的に、このたび学内に「ルネッサンス基金管理委員会」を立ち上げ、いくつか未実施の事案等、本委員会で議論し進めていくことといたしました。

これからも、「伝統の力を未来の力に！」を合言葉に、次代のための確固たる礎を築くべく一層の努力をしておりますので、岡山大学医学部・病院に絶大なるご支援ご援助賜りますようお願い申し上げます。末筆ながら、皆様方の益々のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。

令和4年3月吉日

岡山大学医学部長	豊岡 伸一
岡山大学病院長	前田 嘉信
岡山大学大学院医歯薬学総合研究科長	伊達 勲
岡山大学ルネッサンス基金管理委員会委員長	浅沼 幹人

## ご寄付いただきました

次の方より、鶴翔会にご寄付をいただきました。ご厚意に対し深く御礼申し上げます。

河合 智則 先生（昭54院） 15,000円

## 令和4年度 岡山医学会・鶴翔会・岡山大学関連病院長会合同総会について

一昨年以来の新型コロナウイルス感染状況に鑑み、会員の皆様の安全を最優先する観点から、令和4年度岡山医学会・鶴翔会・岡山大学関連病院長会合同総会は、昨年度と同様、次のとおり行うこととしましたので、お知らせします。

### ◎岡山医学会・鶴翔会・岡山大学関連病院長会合同総会

岡山医学会、鶴翔会、岡山大学関連病院長会、一般社団法人鶴翔会の運営に必要な決算報告等は、昨年同様、鶴翔会会報号外として関係資料を郵送し書面によるご協議をお願いいたします。

### ◎岡山医学会主催特別講演会（新任教授講演）は、次のとおり開催いたします。

日 時 令和4年6月4日（土） 14時から

会 場 岡山大学医学部鹿田キャンパス 鹿田会館（旧生化学棟）講堂

※来場者は、学内及び岡山市内在住の鶴翔会会員に限定させていただきます。

（マスクの着用と手指消毒を遵守願います。）

各教授の講演はZoomによりライブ配信いたします。

質問等は、会場のみとします。（オンラインでの質問等をご容赦下さい。）

### 講演プログラム

14：00 開会あいさつ 岡山医学会長（医学部長）

14：00～14：30 大規模医療情報を基盤とするデータサイエンスを活用した臨床薬理学研究

臨床薬理学 座間味義人 教授

14：30～15：00 領域・生物種横断的な創薬研究

薬理学 細野 祥之 教授

15：00 閉会あいさつ 岡山医学会長（医学部長）

### ◎岡山医学会賞各賞授賞式

日 時 令和4年6月4日（土） 15：10から（新任教授講演会終了後）

会 場 岡山大学医学部鹿田キャンパス 鹿田会館（旧生化学棟）講堂

※授賞式の様子はZoomにより新任教授講演終了後、ライブ配信いたします。

なお、岡山医学会賞各賞受賞者については、鶴翔会会報号外及び岡山医学会雑誌の誌上で顕彰させていただきます。

※岡山医学会主催特別講演会（新任教授講演）及び岡山医学会賞各賞授賞式にオンライン参加を希望される会員は、次のURL又はQRコードから、必ず事前登録してください。

URL：<https://bit.ly/3ugMxIk>

パスワード：456#789（すべて半角文字です。）



事前登録の締め切りは、令和4年5月20日（金）です。

**友野印刷（株）から、後日招待メールが届きますので、メールをご確認ください。**

事前登録締め切り後、参加を希望される場合は、鶴翔会事務局までご連絡下さい。

（問い合わせ先）

鶴翔会事務局

〒700-8558 岡山市北区鹿田町2-5-1 岡山大学医学部内

電話：086-235-7060 FAX：086-235-7052

e-mail：dosokai@md.okayama-u.ac.jp

## 会費納入について（お知らせ）

### コンビニエンスストアからの払込みが可能になりました！

全国のコンビニからいつでも払込みいただけます。手数料もかかりません。

鶴翔会では、総会、会報の発行、会員名簿などの同窓会としての一般的な活動だけではなく、医学科学生に関係する大学行事への協賛、3年生授業の医学インターンシップの支援、卒業生への記念助成など医学科の教育研究の支援活動を行っております。こうした活動は会員の皆様からの会費により支えられています。会費納入にご理解ご協力くださいますようお願い申し上げます。

#### ●会費の納入方法

##### 1. 会報に同封の専用払込用紙（払込手数料は鶴翔会負担）

令和4年度からコンビニエンスストアからでも納入できるようになりました。

お近くのコンビニもしくは郵便局から払込みください。

ただし、金額の訂正、通信欄への連絡事項のご記入がある場合はコンビニでは受付できませんので郵便局から払込みください。

\*ゆうちょ銀行は、現金を使った払込みにおいて、2022年1月17日から手数料を新設しており、1件ごとに料金110円が払込人にかかります。

##### 2. 自動引落とし

毎年払い込むのが面倒…というお忙しい先生方に便利です。毎年7月にご指定の口座からお引落しいたします。ご希望の方は手続用紙をお送りいたしますので鶴翔会事務局までご連絡ください。

##### 3. インターネット・モバイルバンキング

ご利用の金融機関でネットバンキングをお申込みされていたら、直接お振込みが可能です。

お振込みの際は会員番号及び氏名を必ず入力してください。

#### 【振込銀行 口座名】

・中国銀行 清輝橋支店（チュウゴクギンコウ セイキバシシテン）

普通預金 1591434

鶴翔会会費口（カクショウカイカイヒグチ）

・ゆうちょ銀行

※ゆうちょ銀行から振込の場合

記号 15410 番号 38020041

鶴翔会会費口（カクショウカイカイヒグチ）

※ゆうちょ銀行以外から振込の場合

店名 五四八（ゴヨンハチ）店番548

普通預金 3802004

鶴翔会会費口（カクショウカイカイヒグチ）

#### ●お得な会費制度もあります

・一時に25年間分の会費75,000円を終身会費としてお納めいただきますと以後の会費請求はございません。振込金額を75,000円に訂正してお振込みください。

・満77歳になられたときはお申し出により会費が免除になります。

#### ●ご質問、お問い合わせは

鶴翔会事務局 電話：086-235-7060 FAX：086-235-7052 e-mail：dosokai@md.okayama-u.ac.jp

令和3年度卒年次別会費納入状況

令和4年2月末現在

卒年次	会員数	請求者数	納入者数	納入率	卒年次	会員数	請求者数	納入者数	納入率	卒年次	会員数	請求者数	納入者数	納入率	
昭16以前	25			-	40	56	44	31	70%	10	105	96	39	41%	
17	2	0	0	-	41	72	60	43	72%	11	96	88	36	41%	
17専	2	0	0	-	42	70	59	34	58%	12	99	93	33	35%	
18	4	1	1	100%	43	78	67	42	63%	13	100	96	26	27%	
18専	5	1	0	0%	44	74	57	34	60%	14	94	76	26	34%	
19	2	0	0	-	45	73	68	40	59%	15	92	73	27	37%	
19専	6	2	0	0%	46	84	72	46	64%	16	98	77	22	29%	
20	5	1	0	0%	47	80	72	47	65%	17	100	76	28	37%	
20専	9	2	2	100%	48	93	87	52	60%	18	98	80	23	29%	
21	5	1	1	100%	49	103	90	61	68%	19	97	78	25	32%	
22	5	2	0	0%	50	74	69	45	65%	20	91	73	26	36%	
23	12	6	2	33%	51	108	99	67	68%	21	104	85	28	33%	
23専	11	4	2	50%	52	101	92	52	57%	22	94	84	26	31%	
24	7	4	1	25%	53	73	65	38	58%	23	107	87	28	32%	
24専	27	14	5	36%	54	119	112	59	53%	24	98	80	24	30%	
25	9	4	0	0%	55	112	106	63	59%	25	95	85	30	35%	
25専	28	15	6	40%	56	107	99	61	62%	26	105	88	23	26%	
26	12	8	5	63%	57	125	114	68	60%	27	105	97	24	25%	
26専	16	8	3	38%	58	113	106	61	58%	28	114	105	18	17%	
27	17	12	7	58%	59	123	118	62	53%	29	120	110	17	15%	
27専	8	5	2	40%	60	112	103	45	44%	30	112	102	22	22%	
28	26	15	5	33%	61	112	104	58	56%	31	122	111	7	6%	
29	21	12	8	67%	62	118	112	64	57%	令2	119	117	4	3%	
30	25	13	8	62%	63	129	123	70	57%	3	110	109	37	34%	
31	33	23	11	48%	平1	107	97	62	64%	学部卒計 6,461 5,615 2,526 45%					
32	34	22	12	55%	2	120	113	55	49%	長期滞納者請求 2,346件 納入者 96件 4%					
33	35	28	17	61%	3	111	97	57	59%	備考. 上記一覧表は本学部卒業者の状況であるが、他大学卒業後本学大学院の修了者及びその他会員の状況は次のとおり。					
34	48	32	17	53%	4	117	106	60	57%						
35	54	43	21	49%	5	109	104	42	40%						
36	47	38	27	71%	6	119	112	54	48%						
37	43	35	19	54%	7	108	93	36	39%	卒年次	会員数	請求者数	納入者数	納入率	
38	54	44	29	66%	8	101	96	39	41%	大学院卒	1,499	990	306	31%	
39	51	43	28	65%	9	97	95	40	42%	その他	1,726	1,540	819	53%	
											合計	9,686	8,145	3,651	45%

注：  
 ① 会費の前納制度として、一時に25年分・75,000円（終身会費）の納入方法の制度もありますので、ご利用ください。（会則第10条附則）  
 ② 会則第10条の規程により、満77歳に達したときは、会員の申し出により会費を免除することができますので、お申し出ください。

## 令和3年度 Student Doctor認定式

令和3年12月24日（金）午後1時30分から、岡山大学医学部医学科 Student Doctor 認定式がJunko Fukutake ホールにおいて執り行われました。学生代表にStudent Doctor認定書が授与され、先輩から激励のエールとアドバイスが送られました。



## 令和3年度 岡山大学医学部医学科 学位記授与式

令和4年3月25日（金）、岡山大学学位記授与式が岡山県総合グラウンド体育館（ジップアリーナ岡山）で執り行われました。

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、出席者は卒業生、修了生及び学内関係者に限定し、また午前、午後の2部制とし医学部は午前の部で行われました。

同日午後、鹿田キャンパスJ-Hallにて関係教授の見守る中、医学部医学科の学位記授与式が挙行されました。式では卒業生一人一人の名前が読み上げられた後、卒業生総代に学位記が授与され、新型コロナ禍の下で最終学年を過ごした頼もしい122名の医学生が学舎から新しい第一歩を踏み出しました。

卒業生の皆様におかれましては、これからのご活躍を心よりお祈り申し上げます。





## 第116回 医師国家試験の結果

### 全国（国公立）の合格状況

		出願者数	受験者数	合格者数	合格率
全 国 計	新卒	9,473	9,232	8,774	95.0
	全体	10,353	10,061	9,222	91.6
(参考：第115回)	新卒	9,359	9,159	8,649	94.4
	全体	10,160	9,910	9,058	91.4

### 中国・四国地区国立大学における合格状況

大 学 名	合 格 率 (%)	順 位			備 考
		中四国 (9校中)	全国立 (43校中)	全国 (81校中)	
鳥取大学	85.6	9 (9)	43 (43)	79 (78)	
島根大学	91.5	4 (7)	25 (39)	50 (67)	
<b>岡山大学</b>	<b>90.0</b>	<b>7 (4)</b>	<b>32 (20)</b>	<b>62 (42)</b>	
広島大学	90.3	6 (8)	31 (42)	60 (75)	
山口大学	92.0	3 (3)	22 (19)	45 (37)	
徳島大学	92.2	1 (2)	20 (17)	42 (34)	
香川大学	90.8	5 (1)	30 (16)	56 (31)	
愛媛大学	92.2	2 (6)	21 (35)	43 (60)	
高知大学	87.0	8 (5)	42 (32)	77 (57)	

※ ( ) 内は、昨年度の順位を表す。

### 岡山大学の医師国家試験年度別合格状況

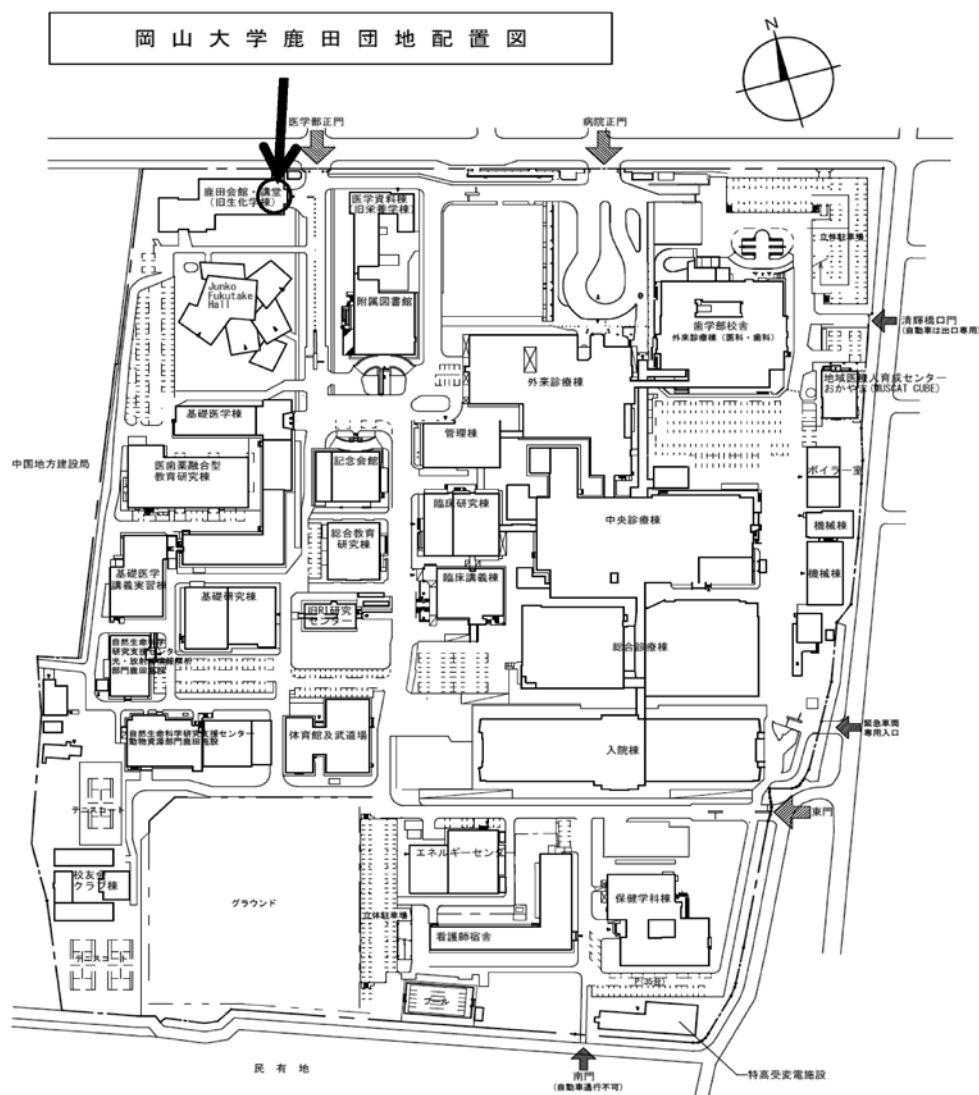
試験年月	新卒者	既卒者	受験者	新 卒 者 率		既 卒 者 率		計		順 位		備 考
				新 合 格	率	合 格	率			国 立	全 国	
16.3	98	5	103	89/98	90.8	5/5	100.0	94/103	91.3	20/43	29/80	
17.2	102	10	112	98/102	96.1	7/10	70.0	105/112	93.8	12/43	20/80	
18.2	98	7	105	93/98	94.9	4/7	57.1	97/105	92.4	15/43	30/80	
19.2	98	8	106	93/98	94.9	4/8	50.0	97/106	91.5	21/43	30/80	
20.2	92	8	100	87/92	94.6	5/8	62.5	92/100	92.0	22/43	36/80	
21.2	104	7	110	98/103	95.1	2/7	28.6	100/110	90.9	28/43	51/80	(新卒者1名は未受験)
22.2	94	12	103	87/93	93.5	6/10	60.0	93/103	90.3	24/43	44/80	(新卒者1名は未受験)
23.2	107	10	116	94/106	88.7	5/10	50.0	99/116	85.3	39/43	68/80	(新卒者1名は未受験)
24.2	98	20	116	95/98	96.9	12/18	66.7	107/116	92.2	15/43	33/80	
25.2	95	10	103	90/95	94.7	6/8	75.0	96/103	93.2	8/43	23/80	
26.2	105	8	113	97/105	92.4	5/8	62.5	102/113	90.3	25/43	46/80	
27.2	105	12	117	101/105	96.2	6/12	50.0	107/117	91.5	26/43	46/80	
28.2	115	10	125	109/115	94.8	6/10	60.0	115/125	92.0	18/43	38/80	
29.2	120	8	128	113/120	94.2	6/8	75.0	119/128	93.0	14/43	21/80	
30.2	112	12	124	110/112	98.2	5/10	50.0	115/122	94.3	6/43	19/80	
31.2	122	7	129	117/122	94.3	2/7	28.6	117/122	90.7	23/43	44/80	
2.2	119	13	132	111/119	93.3	6/12	50.0	117/131	89.3	39/43	70/80	
3.2	110	13	123	108/110	98.2	6/13	46.2	114/123	92.7	20/43	41/80	
4.2	122	8	130	115/122	94.2	2/8	25.0	117/130	90.0	32/43	62/81	

## 事務局からのお知らせ

- 令和4年4月から同窓会費をコンビニエンスストアから払込みが可能になりました。  
全国どこからでもいつでも手数料なしでお支払いいただけます。  
宛名台紙裏面に添付の払込取扱票をご利用ください。
- 令和4年4月より鶴翔会ホームページがリニューアルいたしました。  
鶴翔会URL：[kakushoukai.oumed.okayama-u.ac.jp](http://kakushoukai.oumed.okayama-u.ac.jp)をぜひご覧ください。  
今回のリニューアルでは、同窓会報のバックナンバー（過去5年間分）が閲覧いただけるようになりました。また、登録情報変更のお届けフォームも新設いたしましたので、ご住所やご勤務先等の変更がありましたら、ご利用いただき新情報をお知らせください。  
会員の皆様に、より見やすく親しんでいただけるよう努めてまいりますので、ご活用くださいますようお願いいたします。

## 鶴翔会事務局移転のお知らせ

令和3年12月13日（月）より鶴翔会事務局は下記図の場所、鹿田会館（旧生化学棟1階）へ移転しました。  
住所、電話番号は従前のとおりです。



## (公財) 岡山医学振興会より 「つなぐもの」

代表理事  
(昭和54年卒、名誉教授)  
**山田 雅夫**

令和4(2022)年も、やはりまた新型コロナウイルス感染症を抱えたままのスタートとなりました。今年の干支の壬寅は、そのような中でも新しい動きが見えることを予感させます。岡山医学振興会では、例年、岡山医療フォーラムにおいて市民対象の公開講座を開催しております。一昨年、昨年と新型コロナウイルス感染症まん延防止のため中止しておりましたが、今年は3月12日(土曜日)にハイブリッド方式で実施いたしましたことを報告いたします。2年越しのテーマは、「すい臓がん」とし、本学の消化器・肝臓内科学/光学医療診療部の加藤博也先生と、消化器外科学の吉田龍一先生に講師をお願いいたしました。

さて、岡山大学医学部創立150周年記念事業では、昨年11月3日に記念式典を挙行し、1870-2020年の150年から、次の50/100年に向けて本格的に新たなスタートを切ったといえます。私は、当時の大塚愛二医学部長・研究科長を座長とする150周年記念誌の編纂ワーキンググループ(WG)の一員として関わらせていただきました。この機会に、記念誌がどのように編纂されたのか、纏めておきたいと思えます。

岡山大学医学部創立150周年記念事業本体は、ご承知の通り平成22(2010)年140周年を起点として10年ルネッサンス計画として取り組まれました。記念誌編纂については、折り返しの平成27(2015)年に、鶴翔会の事務室に、当時の妹尾鶴翔会事務局長、事務からは山形総務課総括主査、教員は就任初年度の大塚学部長、私が集まり、引き継ぐべき百年史を前に、記念誌編纂について意見交換をしました。決めたことは、150周年記念誌では主に100年から150年の50年間について記載すること、岡山大学全体で10年毎に編纂している岡山大学史作成の資料をうまく利活用する工夫をしようというあたりまでで、その後2年間は具体的な活動はありませんでした。

平成29年の秋になり、ちょうど岡山大学史(70年史)の編纂作業を病院は伊達教授(現研究科長)、学部・研究科と医歯薬保の調整は私が中心となり進めており、各講座・医局10年の歩みの執筆依頼をする時期になっていました。そこで、例えば10年の教室の歩み

をまとめたら、その勢いでさらに40年分週り50年の教室の歩みを取りまとめるといった具合に、岡山大学史(70年史)と150周年記念誌の編纂を連動させて行うこと、そのため平成30年夏の岡山大学史(70年史)執筆完了後ただちに150周年記念誌の編纂WGを本格的に立ち上げること、令和2(2020)年秋に予定されていた記念式典で出席者に配布できるように刊行することを決めて、編纂WGの立ち上げまでに、編纂WG座長の学部長、伊達教授、鶴翔会と総務課の方々と、基本設計を定めるなど下準備を進めることになりました。

まず百年史と医科大学20年史等のPDF化を進め、先行して百年史と同じ形式(縦書を横書きに変更するも)で、昭和44年までを扱った百年史と戦後部分を大幅に重複させて詳しい年表を作成しました。これにより、戦災からの復興、戦後の大きな学制改革、一連の大学紛争など、百年史では未だ進行形であった事項についても、振り返ることができました。

さらに、基本設計は三部構成とし、第1部は百年史が取り扱った「医学部」のその後100年から150年を網羅的に記載して「医学部」の正史としての役目を果たし、第2部では「教室・講座・医局」の歩みを、第3部ではより広い発想で150年を記念する内容と150/200年の展望につながる内容をWGで検討しながら進めることとし、第1部については、先行して参考となる資料等を集めておくことにいたしました。また、第1部の百年史が取り扱った「医学部」は、その後の発展で組織としては大きく医学部、研究科、病院に分けて記載するにしても、百年史が取り扱った「医学部」の一体感を大切にしたい構成を工夫したいと考えました。

その後、平成30年秋からは、150周年記念誌の編纂WGがほぼ月1回のペースで開始され、第3部では、大塚編纂WG、吉野150周年記念事業実行委員長、浅沼学部長(当時)ほかWGの皆様の企画を盛り込んで順調に編纂が進みました。また記述の曖昧な部分については、鹿田や津島の事務部の古い文書を丁寧に確認いただいたのは総務課杉田主査でした。また、昭和39(1964)年に復活した岡山医学同窓会報(鶴翔会だより)も編纂の強力な助けとなりました。令和元年に予定された記念式典は新型コロナウイルス感染症の影響を考慮して延期されましたが、150周年記念誌のほうは予定通り満150歳の令和2(2020)年に刊行されました。

巻頭言をいただいた榎野学長らの学年が昭和50(1975)年卒業、題字を揮毫いただいた平松名誉教授らの学年が昭和52(1977)年卒業であることを考えれば、学生の時を含めても母校の歴史を紡ぐスパンとして50年はギリギリの頑張り所だったかな、それを少

し後輩の私共WGがお手伝いできて本当に良かったと思っています。そして、どなたが書いても新型コロナウイルス感染症で始まる、次の50年を紡ぐのは、ちょうど今春鹿田に入学する学年の方かもしれません。

岡山医学振興会では、このような大きな流れのなかで、医学・医療を支えて下さっている先輩の諸先生から、今から教育・研究を進めようとしている後輩の方々への支援のお手伝いをさせていただいております。欧米のAnnual Givingの方式にならい、この度も是非ご寄付のご支援をお願い申し上げます。



庭のブルーベリー 2007年

井上 一

岡山大学病院医科系診療科別役付職員一覧

病院長（兼研究（医科）担当） 前田 嘉信  
 副病院長〔総務運営担当〕 森実 真  
 同〔企画・SDGs担当〕 大塚 文男  
 同〔診療（医科）・防災担当〕 増山 寿  
 同〔教育（医科）担当〕 伊野 英男  
 同〔医療安全管理担当〕 塚原 宏一

令和4年4月1日現在

診療領域	診療科	科 長	副 科 長	医 局 長	外来医長	病棟医長	教育医長
内 科	総合内科・総合診療科	大塚 文男	花山 宜久	萩谷 英大	小比賀 美賀子	長谷川 功	谷山 真規子
	消化器内科		平岡 佐規子	川野 誠司	堤 康一郎	衣笠 秀明	井口 俊博
	血液・腫瘍内科	前田 嘉信	松岡 賢市	市原 英基	浅田 騰	藤原 英晃	横本 剛
	呼吸器・アレルギー内科	木浦 勝行	松岡 賢市	市原 英基	浅田 騰	肥後 寿夫	横本 剛
	腎臓・糖尿病・内分泌内科	和田 淳	江口 潤	田邊 克幸	松本 佳則	辻 憲二	喜多村 真治
	リウマチ・膠原病内科	和田 淳	松本 佳則	田邊 克幸	松本 佳則	辻 憲二	喜多村 真治
	循環器内科	伊藤 浩	中村 一文	赤木 達	三好 亨	赤木 達	戸田 洋伸
	脳神経内科		山下 徹	森原 隆太	武本 麻美	柚木 太淳	森原 隆太
感染症内科	草野 展周						
外 科	消化管外科	藤原 俊義	寺石 文則	黒田 新士	重安 邦俊	菊地 覚次	前田 直見
	肝・胆・膵外科	八木 孝仁	榎田 祐三	黒田 新士	高木 弘誠	高木 弘誠	藤 智和
	呼吸器外科	豊岡 伸一	杉本 誠一郎	枝園 忠彦	岡崎 幹生	山本 寛斉	三好 健太郎
	乳腺・内分泌外科	枝園 忠彦	岩谷 胤生	枝園 忠彦	高橋 侑子	岩谷 胤生	高橋 侑子
	泌尿器科	荒木 元朗		枝村 康平	小林 知子	西村 慎吾	岩田 健宏
	心臓血管外科	笠原 真悟		小谷 恭弘	廣田 真規	川畑 拓也	小林 純子
	小児外科	野田 卓男			尾山 貴徳	尾山 貴徳	尾山 貴徳
	小児心臓血管外科	笠原 真悟					
感覚・皮膚・運動機能科	整形外科	尾崎 敏文	西田 圭一郎	雑賀 建多	藤原 智洋	鉄 永智紀	齋藤 太一
	形成外科	木股 敬裕	難波 祐三郎	渡邊 敏之	難波 祐三郎	松本 洋	妹尾 貴矢
	皮膚科	森実 真	川上 佳夫	三宅 智子	横山 恵美	野村 隼人	梶田 藍
	眼科	森実 祐基		塩出 雄亮	藤原 美幸	細川 海音	濱崎 一郎
	耳鼻咽喉科	安藤 瑞生	假谷 伸	菅谷 明子	檜垣 貴哉	牧野 琢丸	前田 幸英
脳・神経・精神科	精神科神経科		寺田 整司	井上 真一郎	岡久 祐子	竹之下 慎太郎	藤原 雅樹
	脳神経外科	伊達 勲	安原 隆雄	藤井 謙太郎	平松 匡文	石田 穰治	春間 純
	麻酔科蘇生科	森松 博史		清水 一好		金澤 伴幸	谷 真規子
小児・産科・女性科	小児科	塚原 宏一	岡田 あゆみ	馬場 健児	藤井 智香子	馬場 健児	吉本 順子
	小児循環器科	塚原 宏一					
	小児神経科	小林 勝弘	秋山 倫之	秋山 倫之	柴田 敬	土屋 弘樹	秋山 麻里
	小児血液・腫瘍科	塚原 宏一					
	小児麻酔科	岩崎 達雄					
	小児放射線科	松井 裕輔					
	小児心身医療科	岡田 あゆみ					
産科婦人科	増山 寿	中村 圭一郎	中村 圭一郎	早田 桂	小川 千加子	久保 光太郎	
放射線科	平木 隆夫		松井 裕輔	児島 克英	吉尾 浩太郎	宇賀 麻由	
救命救急科	中尾 篤典	内藤 宏道	内藤 宏道	塚原 紘平	湯本 哲也	小崎 吉訓	
病理診断科	柳井 広之		西田 賢司			西田 賢司	
緩和支援医療科	田端 雅弘	片山 英樹					
臨床遺伝子診療科	平沢 晃	山本 英喜	山本 英喜	山本 英喜		山本 英喜	

## 鶴翔会会報 投稿内規

項目	字数(程度)	内容
ご挨拶	800	(学内) 学長・学部長・病院長就任、定年退任、教授就任 (学外) 学長・教授就任、関係機関の長就任等
謹弔		名誉教授・名誉会長・会員などご逝去のとき
医学部(病院)の動き		医学部・附属病院の変革、新設部門などについて
会員の近況		受賞・表彰、近況報告等
学会・研究会だより		学会・研究会等報告、開催通知
支部だより	1600	各支部の支部総会報告
同期会だより	1600	同期会報告、開催通知
関連病院だより		岡山大学関連病院長会 新規入会病院紹介
学生だより	1600	西医体報告、解剖実習体験記等
海外だより	2000	海外留学、在住時の体験記や海外旅行記等
歴史の広場		岡山大学医学部にまつわる歴史について
随想	1600	
会員のこえ		会員の意見・感想等
教室だより	800	医学部・大学院・病院診療施設の現況報告
岡山より		事務局より報告事項
編集後記		会報担当幹事又は事務局が担当
挿絵		

1. 字数はあくまで目安です。
2. 4月号のメ切は1月末、10月号のメ切は7月末です。
3. 上記以外の内容であっても受け付けております。ただし、特定の個人への誹謗中傷等、掲載に相応しくないとと思われるものについては、編集委員会において審議後、掲載をお断りする場合があります。
4. 原稿、挿絵はデータ(word、JPEG等)にて下記メールアドレスまでお送りいただければ幸甚ですが、紙原稿やお写真を下記宛てご郵送いただいても結構です。  
※メールにてお送りくださった場合、必ず当方より原稿受領及び御礼の返信をさせていただきます。当方からの返信がない場合は、メールが正しく届いていない可能性がありますので、お問い合わせ願います。

原稿送付先・連絡先

鶴翔会

〒700-8558 岡山市北区鹿田町2-5-1

TEL: 086-235-7060 FAX: 086-235-7052

E-mail: dosokai@md.okayama-u.ac.jp

## 編 集 後 記

会報132号をお届けします。

2021年の10月から年末にかけてはほとんど日本では感染者が出なくなっていた新型コロナウイルスですが、オミクロン株の勢いはすさまじく、2022年を迎えた途端、第6波によって国内の多くの都道府県でまん延防止等重点措置が発令される事態となりました。岡山県もその中の一つで、この編集後記を書いている2022年2月末もその状況は変わっておりません。岡山大学病院でも手術自体や術後のICU使用症例に制限がかかるなど大きな影響を受けています。

2021年夏の東京オリンピック・パラリンピックの約半年後、2022年冬の北京オリンピック・パラリンピックが開幕。東京と同様、北京でもコロナ対策のためバブル方式がとられ、観客は大会関係者に限られました。人間の力の限界に挑む世界のトップアスリートの姿に皆さんも胸を熱くされたことでしょう。

2021年11月3日、1年延期となっていた医学部創立150周年記念式典がホテルグランヴィア岡山で開催されました。出席者を岡山県内の方に限らせていただきましたが、多数のご出席を賜り、盛会となりました。またオンラインでweb配信し、多くの方が視聴してく

ださいました。ご出席ならびにご視聴くださった皆様に深く感謝申し上げます。本号は医学部創立150周年記念号となっております。当日の発表内容と写真に加えまして、150周年を迎えて多くのご寄稿をいただきましたので、本号に掲載いたしました。ご寄稿ありがとうございました。

腫瘍病理学 吉野 正教授、消化器・肝臓内科学 岡田裕之教授、精神神経病態学 山田了士教授、乳腺・内分泌外科 土井原博義教授が2022年3月末で定年退職されました。ご挨拶を掲載しております。長年にわたり医学部の教育・研究・管理運営に多大なご貢献を賜り、誠にありがとうございました。退職後の先生方のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。

4月には医学部卒業生が前期臨床研修を各病院でスタートさせます。コロナ禍にもかかわらず、今年の卒業生の臨床実習はわずかな期間を除いて実際の臨床現場で行うことができました。有意義な臨床研修となりますよう、先生方のご指導を何卒よろしくお願い申し上げます。

(伊達 勲)

発 行 鶴翔会（岡山医学同窓会）  
 会報幹事 伊達 勲  
 鶴翔会会報編集委員 前田嘉信、  
 大橋俊孝、森實祐基、木浦勝行、  
 伊達 勲、頼藤貴志、豊岡伸一、  
 山田了士、森実 真、柳井広之、  
 久保俊英（岡山医療センター）、  
 武内恵太（医学科6年生）、  
 吉野明日香（医学科6年生）  
 〒700-8558 岡山市北区鹿田町2-5-1  
 電 話 (086) 235-7060・7061  
 F A X (086) 235-7052  
 E-mail : dosokai@md.okayama-u.ac.jp  
 http://kakushoukai.oumed.okayama-u.ac.jp

印 刷 友野印刷株式会社  
 電 話 (086) 255-1101  
 F A X (086) 253-2965

乱丁・落丁はお取りかえします。





## 鶴翔会会員向けサービスのご案内

### ○ 岡山大学勤務医師責任賠償保険サービス

鶴翔会では会員の方々を対象に、(株)損害保険ジャパンの団体勤務医師賠償責任保険を取り扱っています。  
鶴翔会ホームページにパンフレットを掲載していますのでご覧ください。

#### 特徴・メリット

- 個人で保険に加入するより、断然保険料がお得（20%も割安）
- 会員の先生であれば勤務先に関係なく利用できます
- 期間中に、勤務先を異動しても保険は有効
- 契約は1年更新

※加入を希望される場合は、必要書類をお送りしますので、鶴翔会事務局までご連絡ください。

鶴翔会事務局 TEL：086-235-7060 FAX：086-235-7052  
e-mail：dosokai@md.okayama-u.ac.jp

鶴翔会では、三井住友トラスト・カード(株)と提携して



三井住友トラストVISAゴールドカードをご案内しております。



通常年会費  
11,000円(税込)のところ

**初年度年会費無料!**

2年目以降も前年度のご利用金額が10万円以上で

**年会費無料!**

前年度のご利用金額が10万円未満でも

年会費 **2,750円** (税込)

**今なら! 最大 20,000円 相当 ポイントプレゼント**

2022年8月31日ご入会まで

キャンペーンの詳細は下記のURLにてご確認ください。

オンライン申込み専用URL <https://www.smtcard.jp/lp/gold-sp.html>

オンライン

★団体コード入力欄には **【72190】** を半角英数字でご入力ください。



弊社公式サイト(<https://www.smtcard.jp/>)などからのお申込みは、上記年会費特典が適用になりませんのでご注意ください。

※学生の方は紙の申込書にてお申込みください(下記ご参照ください)

紙のお申込書の請求・お問い合わせは、下記の三井住友トラスト・カード株式会社まで

電話

**0120-370-070**

受付時間:9:00~17:00  
(土・日・祝日・12/30~1/3を除く)

メール

**Moushikomi@smtcard.jp**



ご請求の際は、右記①~⑤の内容をお伝えください。

- ①郵便番号 ②ご住所 ③お名前(メールの場合:よみがなもお願いします)
- ④お電話番号 ⑤所属団体名:鶴翔会(団体コード **S72190**)

個人情報の取扱いに関する同意文言:私は申込書請求のために提供する個人情報を貴社が次の目的達成のために利用することに同意します。  
[弊社は「個人情報の保護に関する法律」に基づき適正な保護を講じたうえで、管理・利用させていただきます。なお、個人情報の利用目的およびその範囲については、入会申込書送付先にVISAカード入会申込書を送付することに限定します。]

※入会審査の結果、ご希望に添えない場合もございますのでご了承ください。

2022\_6218

## 裏表紙の写真

Junko Fukutake Hall と 鹿田会館 (旧生化学棟)



# 鶴翔会

岡山医学同窓会報